

茨城県教育財団文化財調査報告第121集

(仮称)葛城地区土地区画整理事業
地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

神 田 遺 跡

平成9年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第121集

(仮称)葛城地区土地区画整理事業
地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

じん でん
神 田 遺 跡

平成9年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団



神田遺跡遠景



神田遺跡全景



第 14 A 号竖穴住居跡（烧失家屋）



第 14 A 号竖穴住居跡遺物出土狀況

序

茨城県は、世界の科学技術をリードし、世界に貢献する研究学園都市としてさらなる発展を期待されているつくば市において、国際交流の拠点としての国際都市にふさわしい町づくりを進めております。

新しい町づくりに欠かせない新しい鉄道である常磐新線の整備は、つくばと東京圏を直結し、人・物・情報の交流を盛んにするだけではなく、地域活性化の大きな力になります。そこで、平成6年7月に県、市、地権者代表の三者協議が合意し、新線開発と沿線開発を一体的に進める土地区画整理事業が進められております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県と常磐新線沿線地域の土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査事業について委託契約を結び、平成7年4月から翌年3月まで神田遺跡の発掘調査を実施いたしました。この調査によって貴重な遺構、遺物が確認され、つくば市の歴史を解明する上に多大の成果をあげることができました。

本書は、神田遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が、研究の資料としてはもとより、郷土史の理解を深めると共に、教育、文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である茨城県からいただいた多大なる御協力に対し心から御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力をいただいたことに、衷心より感謝の意を表します。

平成9年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 橋 本 昌

例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成7年4月から平成8年3月まで発掘調査を実施した茨城県つくば市莉間字神田981番地に所在する神田遺跡（ひんがし）の発掘調査報告書である。
- 2 神田遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	橋 本 昌	平成7年4月～	
副 理 事 長	小 林 秀 之	平成6年4月～平成8年3月	
	中 島 弘 光	平成7年4月～	
	齋 藤 佳 郎	平成8年4月～	
常 務 理 事	一 木 邦 彦	平成7年4月～平成8年3月	
	梅 澤 秀 夫	平成8年4月～	
事 務 局 長	齋 藤 紀 彦	平成7年4月～平成8年3月	
	小 林 隆 郎	平成8年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長	安 藏 幸 重	平成5年4月～平成8年3月	
	沼 田 文 夫	平成8年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	水 飼 敏 夫	平成4年4月～平成8年3月
		小 糖 弘 明	平成8年4月～
	課 長 代 理	根 本 達 夫	平成7年4月～
	係 長	清 水 薫	平成8年4月～
		主 任 調 査 員	海 老 澤 稔
経 理 課	課 長	小 幡 弘 明	平成5年4月～平成8年3月
		河 崎 孝 典	平成8年4月～
	主 査	鈴 木 三 郎	平成7年4月～平成8年3月
		田 所 多 佳 男	平成8年4月～
	課 長 代 理	大 高 春 夫	平成7年4月～
	主 任	小 池 孝	平成7年4月～
	主 事	軍 司 浩 作	平成5年4月～平成8年3月
柳 澤 松 雄		平成8年4月～	
調 査 二 課	課 長	阿 久 津 久	平成7年4月～平成8年3月
	調 査 第 一 班 長	後 藤 哲 也	平成7年4月～
	主 任 調 査 員	吉 原 作 平	平成7年4月～平成8年3月 調査
	主 任 調 査 員	仙 波 亨	平成7年4月～平成7年9月 調査
	副 主 任 調 査 員	成 島 一 也	平成7年10月～平成8年3月 調査
整 理 課	課 長	山 本 静 男	平成7年4月～
	首 席 調 査 員	川 井 正 一	平成8年4月～
	副 主 任 調 査 員	成 島 一 也	平成8年4月～平成9年3月 整理・執筆・編集

- 3 本書で使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、陶磁器の年代と生産地については愛知県陶磁資料館の仲野泰裕氏、須恵器の年代と生産地については静岡県湖西市教育委員会の後藤建一氏に御指導を戴いた。
- 5 本書の引用資料の掲載に関し、つくば市の根本寛氏、中島耕太郎氏、中根正明氏の御配慮を戴いた。
- 6 炭化材の樹種同定業務はバリノ・サーヴェイ株式会社へ委託した。
- 7 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。
- 8 遺跡の概略

ふりがな	(かじょう) かつらぎうちち(か)せりじょうちないまいぞうふんかざいちじょうさほう(かし)							
書名	(仮称) 葛城地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書							
副書名	神田遺跡							
巻次	I							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第121集							
著者名	成島 一也							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 ☎029-225-6587							
発行日	1997(平成9)年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所取遺跡	所在地							
ひん 神田遺跡	茨城県つくば市青間 字神田981番地ほか	082201-85	36度 4分 41秒	140度 5分 46秒	19950401 ~ 19960331	19,173㎡	(仮称) 葛城地区土地区画整理事業に伴う事前調査	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
神田遺跡	集落跡	旧石器			ナイフ形石器、尖頭器、スクレイパー、剥片		古墳時代から平安時代の集落跡、中世城郭跡の関連施設、中世から近世の葛城等の複合遺跡である。	
			縄文			縄文土器、石鏃、磨石、石斧		
			弥生			弥生土器		
	古墳	奈良・平安	竪穴住居跡	17軒	土師器、磁石、土玉、ガラス玉			
			竪穴住居跡	59軒	土師器、須恵器、磁石、新鉢車、土玉、刀子、火打ち燧、鉄鏃、種子炭化物			
	中世城郭施設	中世	竪立柱建物跡	8棟 3条	土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁石			
			墓域	中・近世	地下式墳	4基		土師器、須恵器、土師質土器、陶器、磁器、磁石、結繩車、鉄釘、鉄製品、古銭、礫
	井戸	1基						
	方形竪穴状遺構	2基						
	火葬施設	1基						
土坑	230基							
不明			溝	11条				
			竪立柱建物跡	6棟	土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、置き籠、陶器、磁器、かんざし、鉄製品、銅製品、鉄滓、火縄銃の弾、古銭、礫			
			井戸	3基				
			土坑	115基				
			溝	9条				
			道路状遺構	1条				
			不明遺構	1基				

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を原点とし、X軸＝＋8,680m、Y軸＝＋23,640mの交点を基準点(B3a1)とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C……、西から東へ1、2、3……とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c……j、西から東へ1、2、3……0とし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。(第1図)

2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

- 遺構 住居跡-S I 獨立柱建物跡-S B 溝、堀-S D 井戸、大形竪穴状遺構-S E
 道路状遺構-S F 地下式壕、方形竪穴状遺構、火葬施設、土坑-S K 不明遺構-S X
 遺物 土器-陶磁器-P 土製品-D P 石製品-Q 金属製品-古銭-M 拓本土器-T P 人骨-B
 土層 攪乱-K

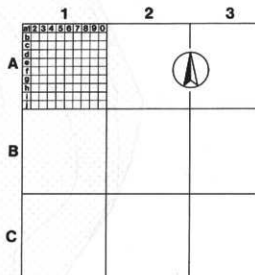
3 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。



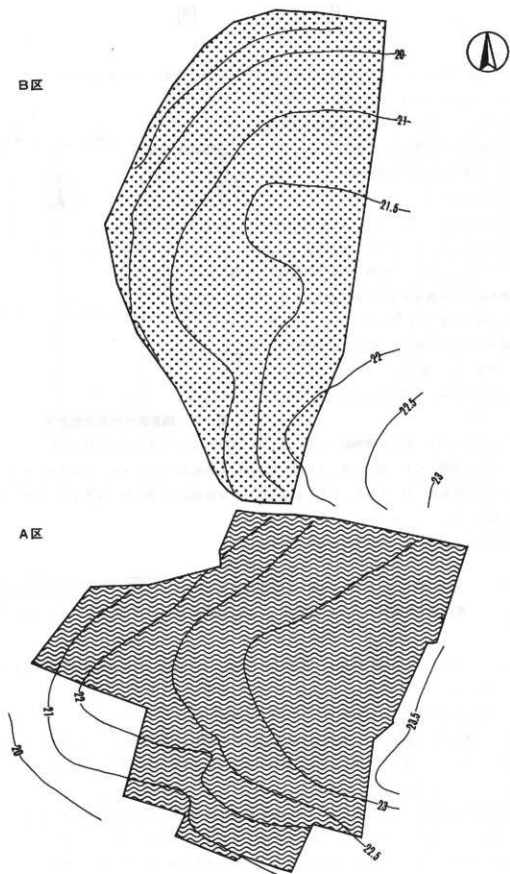
4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

5 遺構・遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、次のとおりである。

- (1) 遺跡の全体図は縮尺400分の1、竪穴住居跡、土坑、不明遺構は原則的に60分の1に縮尺して、掲載した。
- (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々にS=1/〇と表示した。
- (3) 「主軸方向」は長軸(径)方向とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E、N-10°-W)。なお、[]を付したものは推定である。
- (4) 土器の計測値は、A-口径、B-器高、C-底径、D-高台(脚)径、E-高台(脚)高、F-つまみ径、G-つまみ高とし、単位はcmである。なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。
- (5) 遺物観察表の備考の欄は、土器の残存率、実測番号(P)、出土位置及び必要と思われる事項を記した。



第1図 調査区呼称方法概念図



第 2 图 神田遺跡調査区劃圖

目 次

序	
例 言	
凡 例	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 神田遺跡	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	9
1 竪穴住居跡	9
2 掘立柱建物跡	187
3 地下式墳	205
4 井戸	209
5 大形竪穴状遺構	212
6 土坑	216
(1) 楕円形で墓塚と考えられる土坑	216
(2) 円形で墓塚と考えられる土坑	220
(3) 方形竪穴状遺構	231
(4) 火葬施設	233
(5) 方形土坑	233
(6) 粘土採掘坑、粘土貯蔵土坑	240
(7) その他の土坑	244
7 溝	254
8 堀	256
9 道路状遺構	257
10 不明遺構	259
11 遺構外出土遺物	259
神田遺跡遺構一覧表	273
第4節 まとめ	287
付 章 神田遺跡から出土した炭化材の樹種	294
写真図版	

插图目次

第1图 调查区呼称方法概念图	第36图 第14B号住居跡遺物出土位置图
第2图 神田遺跡調查区剖面	第37图 第14B号住居跡出土遺物実測图(1)
第3图 周辺遺跡位置图	第38图 第14B号住居跡出土遺物実測图(2)
第4图 調查A区基本土層图	第39图 第15号住居跡実測图
第5图 調查B区基本土層图	第40图 第15号住居跡出土遺物実測图
第6图 第1号住居跡実測图	第41图 第16号住居跡実測图
第7图 第1号住居跡出土遺物実測图	第42图 第16号住居跡出土遺物実測图
第8图 第2号住居跡実測图	第43图 第17号住居跡実測图
第9图 第3号住居跡実測图	第44图 第18号住居跡実測图
第10图 第3号住居跡出土遺物実測图	第45图 第18号住居跡出土遺物実測图
第11图 第4号住居跡実測图	第46图 第19号住居跡実測图
第12图 第4号住居跡出土遺物実測图	第47图 第19号住居跡出土遺物実測图
第13图 第5号住居跡実測图	第48图 第20号住居跡実測图
第14图 第5号住居跡出土遺物実測图	第49图 第20号住居跡出土遺物実測图
第15图 第6号住居跡実測图	第50图 第21号住居跡実測图
第16图 第6号住居跡出土遺物実測图	第51图 第21号住居跡出土遺物実測图
第17图 第7号住居跡実測图	第52图 第23号住居跡実測图
第18图 第7号住居跡出土遺物実測图	第53图 第23号住居跡実測图
第19图 第8号住居跡実測图	第54图 第23号住居跡出土遺物実測图
第20图 第8号住居跡出土遺物実測图	第55图 第24号住居跡実測图
第21图 第9号住居跡実測图	第56图 第25号住居跡実測图
第22图 第9号住居跡出土遺物実測图(1)	第57图 第25号住居跡出土遺物実測图
第23图 第9号住居跡出土遺物実測图(2)	第58图 第26号住居跡実測图
第24图 第10号住居跡実測图	第59图 第26号住居跡出土遺物実測图
第25图 第10号住居跡出土遺物実測图	第60图 第27号住居跡実測图
第26图 第11号住居跡実測图	第61图 第27号住居跡出土遺物実測图
第27图 第11号住居跡出土遺物実測图	第62图 第28号住居跡実測图
第28图 第12号住居跡実測图	第63图 第28号住居跡出土遺物実測图
第29图 第12号住居跡出土遺物実測图	第64图 第29号住居跡実測图
第30图 第13号住居跡実測图	第65图 第29号住居跡出土遺物実測图
第31图 第14A号住居跡実測图	第66图 第30号住居跡実測图
第32图 第14A号住居跡遺物出土位置图	第67图 第30号住居跡出土遺物実測图
第33图 第14A号住居跡出土遺物実測图(1)	第68图 第31号住居跡実測图
第34图 第14A号住居跡出土遺物実測图(2)	第69图 第31号住居跡出土遺物実測图
第35图 第14B号住居跡実測图	第70图 第32号住居跡実測图

第71图	第32号住居跡出土遺物実測図	91	第109图	第51号住居跡実測図	138
第72图	第33号住居跡実測図	93	第110图	第51号住居跡出土遺物実測図	139
第73图	第33号住居跡出土遺物実測図	93	第111图	第52号住居跡実測図	141
第74图	第34号住居跡実測図	95	第112图	第52号住居跡出土遺物実測図	142
第75图	第34号住居跡出土遺物実測図	96	第113图	第53号住居跡出土遺物実測図	143
第76图	第35号住居跡実測図	97	第114图	第53号住居跡実測図	144
第77图	第35号住居跡竈実測図	98	第115图	第54号住居跡実測図	144
第78图	第35号住居跡出土遺物実測図	99	第116图	第54号住居跡出土遺物実測図	145
第79图	第36号住居跡実測図	100	第117图	第55号住居跡実測図	146
第80图	第36号住居跡出土遺物実測図	101	第118图	第55号住居跡出土遺物実測図	147
第81图	第37号住居跡実測図	102	第119图	第56号住居跡実測図	148
第82图	第37号住居跡出土遺物実測図	103	第120图	第56号住居跡出土遺物実測図	149
第83图	第38号住居跡実測図	104	第121图	第57号住居跡実測図	151
第84图	第38号住居跡出土遺物実測図	105	第122图	第57号住居跡出土遺物実測図	151
第85图	第39A、B号住居跡実測図	106	第123图	第58号住居跡実測図	153
第86图	第39A、B号住居跡出土遺物実測図	107	第124图	第58号住居跡出土遺物実測図	154
第87图	第40号住居跡実測図	110	第125图	第59号住居跡実測図	155
第88图	第40号住居跡出土遺物実測図	111	第126图	第59号住居跡出土遺物実測図	156
第89图	第41号住居跡実測図	112	第127图	第60号住居跡実測図	157
第90图	第41号住居跡出土遺物実測図	113	第128图	第60号住居跡出土遺物実測図	158
第91图	第42号住居跡実測図	115	第129图	第61号住居跡実測図	159
第92图	第42号住居跡出土遺物実測図	116	第130图	第61号住居跡出土遺物実測図	159
第93图	第43号住居跡実測図	118	第131图	第62号住居跡実測図	160
第94图	第43号住居跡出土遺物実測図	119	第132图	第62号住居跡出土遺物実測図	160
第95图	第44号住居跡実測図	120	第133图	第63号住居跡実測図	162
第96图	第44号住居跡出土遺物実測図	121	第134图	第63号住居跡出土遺物実測図	163
第97图	第45号住居跡実測図	122	第135图	第64号住居跡実測図	164
第98图	第45号住居跡出土遺物実測図	123	第136图	第64号住居跡出土遺物実測図	164
第99图	第46号住居跡実測図	124	第137图	第65号住居跡実測図	166
第100图	第46号住居跡出土遺物実測図	125	第138图	第65号住居跡出土遺物実測図	167
第101图	第47号住居跡実測図	126	第139图	第66号住居跡実測図	168
第102图	第47号住居跡出土遺物実測図	127	第140图	第67号住居跡実測図	169
第103图	第48号住居跡実測図	129	第141图	第67号住居跡出土遺物実測図	170
第104图	第48号住居跡出土遺物実測図	131	第142图	第68号住居跡実測図	171
第105图	第49号住居跡実測図	133	第143图	第68号住居跡出土遺物実測図	172
第106图	第49号住居跡出土遺物実測図	134	第144图	第69号住居跡実測図	174
第107图	第50号住居跡実測図	136	第145图	第69号住居跡出土遺物実測図(1)	175
第108图	第50号住居跡出土遺物実測図	136	第146图	第69号住居跡出土遺物実測図(2)	176

第147図	第70号住居跡実測図	178	第183図	楕円形で墓塚と考えられる 土坑実測図(2)	218
第148図	第70号住居跡出土遺物実測図	179	第184図	楕円形で墓塚と考えられる 土坑出土遺物実測図	219
第149図	第71号住居跡実測図	180	第185図	円形で墓塚と考えられる 土坑実測図(1)	222
第150図	第71号住居跡出土遺物実測図	181	第186図	円形で墓塚と考えられる 土坑実測図(2)	223
第151図	第72号住居跡実測図	182	第187図	円形で墓塚と考えられる 土坑実測図(3)	224
第152図	第73号住居跡実測図	182	第188図	円形で墓塚と考えられる 土坑実測図(4)	225
第153図	第73号住居跡出土遺物実測図	183	第189図	円形で墓塚と考えられる 土坑実測図(5)	226
第154図	第75号住居跡実測図	184	第190図	円形で墓塚と考えられる 土坑実測図(6)	227
第155図	第75号住居跡出土遺物実測図	185	第191図	円形で墓塚と考えられる 土坑出土遺物実測図	227
第156図	第77号住居跡実測図	186	第192図	第1, 2号方形竪穴状遺構実測図	232
第157図	第77号住居跡出土遺物実測図	187	第193図	第1号火葬施設実測図	233
第158図	第1号孤立柱建物跡実測図	188	第194図	方形土坑実測図(1)	236
第159図	第2, 3号孤立柱建物跡実測図	189	第195図	方形土坑実測図(2)	237
第160図	第4号孤立柱建物跡実測図	191	第196図	方形土坑実測図(3)	238
第161図	第5号孤立柱建物跡実測図	192	第197図	方形土坑出土遺物実測図	240
第162図	第5号孤立柱建物跡出土遺物実測図	193	第198図	粘土探掘坑, 粘土貯蔵土坑実測図	242
第163図	第6号孤立柱建物跡実測図	194	第199図	粘土探掘坑, 粘土貯蔵土坑 出土遺物実測図	243
第164図	第7号孤立柱建物跡実測図	195	第200図	その他の土坑実測図(1)	245
第165図	第8号孤立柱建物跡実測図	197	第201図	その他の土坑実測図(2)	246
第166図	第9号孤立柱建物跡実測図	199	第202図	その他の土坑実測図(3)	247
第167図	第9号孤立柱建物跡出土遺物実測図	200	第203図	その他の土坑実測図(4)	248
第168図	第10号孤立柱建物跡実測図	200	第204図	その他の土坑実測図(5)	249
第169図	第11号孤立柱建物跡実測図	201	第205図	その他の土坑出土遺物実測図	253
第170図	第12号孤立柱建物跡実測図	203	第206図	溝土層断面図	254
第171図	第13号孤立柱建物跡実測図	204	第207図	堀土層断面図	256
第172図	第14号孤立柱建物跡実測図	205	第208図	第1号道路状遺構土層断面図	257
第173図	第1号地下式横実測図	206	第209図	溝, 堀, 道路状遺構出土遺物実測図	258
第174図	第2号地下式横実測図	207	第210図	第1号不明遺構土層断面図	259
第175図	第3号地下式横実測図	208			
第176図	第4号地下式横実測図	208			
第177図	第4号地下式横出土遺物実測図	209			
第178図	第3号井戸出土遺物実測図	210			
第179図	第1, 2, 3, 4号井戸実測図	211			
第180図	第1, 2号大形竪穴状遺構実測図	213			
第181図	第1, 2号大形竪穴状遺構 出土遺物実測図	215			
第182図	楕円形で墓塚と考えられる 土坑実測図(1)	217			

第211図 遺構外出土遺物実測図(1)	260	第220図 古銭拓影図	272
第212図 遺構外出土遺物実測図(2)	261	第221図 時期別住居跡配置図(1)	291
第213図 遺構外出土遺物実測図(3)	262	第222図 時期別住居跡配置図(2)	292
第214図 遺構外出土遺物実測図(4)	263	第223図 「常陸国筑波郡酒丸村面野井村与 新治郡苟間村并同郡平塚村三方 野論且筑波郡高田村酒丸村訴訟 裁許之條々」の判決絵図	293
第215図 遺構外出土遺物実測図(5)	264	付図 神田遺跡全体図	
第216図 遺構外出土遺物実測図(6)	265		
第217図 遺構外出土遺物実測図(7)	265		
第218図 遺構外出土遺物実測図(8)	266		
第219図 遺構外出土遺物実測図(9)	267		

表 目 次

表1 周辺遺跡一覧表	5	表10 方形竪穴状遺構一覧表	280
表2 古銭一覧表	272	表11 火葬施設一覧表	280
表3 住居跡一覧表	273	表12 方形土坑一覧表	280
表4 掘立柱建物跡一覧表	275	表13 粘土探掘坑、粘土貯蔵土坑一覧表	282
表5 地下式墳一覧表	275	表14 その他の土坑一覧表	282
表6 井戸一覧表	275	表15 溝一覧表	285
表7 大形竪穴状遺構一覧表	276	表16 堀一覧表	286
表8 楕円形で墓壇と 考えられる土坑一覧表	276	表17 道路状遺構一覧表	286
表9 円形で墓壇と 考えられる土坑一覧表	276		

写 真 図 版 目 次

P L 1 調査A, B区全景	P L 9 第14B号住居跡, 第14B号住居跡遺物出土状 況, 第15号住居跡
P L 2 調査A, B区遺構確認状況, 第1号住居跡	P L 10 第16, 17, 18号住居跡
P L 3 第3号住居跡, 第3号住居跡竈遺物出土状況, 第4号住居跡	P L 11 第19, 20, 21号住居跡
P L 4 第4号住居跡遺物出土状況, 第5, 6号住居 跡	P L 12 第23, 25, 26号住居跡
P L 5 第7, 8, 9号住居跡	P L 13 第27, 28, 29, 73号住居跡
P L 6 第9号住居跡遺物出土状況, 第10, 11号住居 跡	P L 14 第30号住居跡, 第30号住居跡竈遺物出土状況, 第31号住居跡
P L 7 第12号住居跡, 第12号住居跡遺物出土状況, 第13号住居跡	P L 15 第32, 33, 34号住居跡
P L 8 第14A号住居跡, 第14A号住居跡遺物出土状 況	P L 16 第35, 36, 37号住居跡
	P L 17 第38, 39A, 39B, 40号住居跡
	P L 18 第41, 42, 43号住居跡

- PL19 第44, 45, 46号住居跡
- PL20 第46号住居跡竈遺物出土状況, 第47号住居跡, 第47号住居跡遺物出土状況
- PL21 第48号住居跡, 第48号住居跡遺物出土状況, 第49号住居跡
- PL22 第50, 51, 52号住居跡
- PL23 第53, 54, 55号住居跡
- PL24 第56, 57, 58号住居跡
- PL25 第59, 60, 61号住居跡
- PL26 第62, 63, 64号住居跡
- PL27 第65, 66, 67号住居跡
- PL28 第68, 69号住居跡, 第69号住居跡遺物出土状況
- PL29 第70号住居跡, 第70号住居跡竈遺物出土状況, 第71号住居跡
- PL30 第72, 75, 77号住居跡
- PL31 第1~7号獨立柱建物跡, 第8号獨立柱建物跡P₁~P₈, 第8号獨立柱建物跡P₁
- PL32 第9号獨立柱建物跡, 第9号獨立柱建物跡P₃, P₄, 第10~14号獨立柱建物跡
- PL33 第1号地下式墳, 第1号地下式墳土層断面, 第3, 4号地下式墳, 第4号地下式墳土層断面, 第1, 3, 4号井戸
- PL34 第1, 2号大形竪穴状遺構, 第2号大形竪穴状遺構遺物出土状況, 第1, 11, 17B, 37号土坑, 第37号土坑遺物出土状況
- PL35 第60号土坑土層断面, 第60号土坑遺物出土状況, 第9, 10, 17E, 17G, 20, 52, 100A, 100B, 229, 165, 173, 193, 226, 261, 282号土坑
- PL36 第143, 148, 156, 241A, 241B, 251~254, 272, 247号土坑, 第1, 2号方形竪穴状遺構, 第1号火葬施設, 第44, 88, 101A, 101B, 215号土坑
- PL37 第124号土坑遺物出土状況, 第320~348, 139(粘土採掘坑), 186(粘土貯藏土坑), 306(粘土採掘坑), 15, 73, 264号土坑
- PL38 第1号溝, 第1号堀, 第1号堀土層断面, 第2, 3号堀, 第1号道路状遺構, 第1号不明遺構
- PL39 第1, 3, 4号住居跡出土遺物
- PL40 第4~8号住居跡出土遺物
- PL41 第7~9号住居跡出土遺物
- PL42 第9号住居跡出土遺物
- PL43 第10~12, 14A号住居跡出土遺物(1)
- PL44 第10~12, 14A号住居跡出土遺物(2)
- PL45 第14A, 14B号住居跡出土遺物
- PL46 第14A~16号住居跡出土遺物
- PL47 第14B, 18, 20, 23号住居跡出土遺物
- PL48 第21, 23, 26~29号住居跡出土遺物
- PL49 第27, 29~32号住居跡出土遺物
- PL50 第31~33, 35号住居跡出土遺物
- PL51 第31, 34, 36~41号住居跡出土遺物
- PL52 第41~47号住居跡出土遺物
- PL53 第47~49号住居跡出土遺物
- PL54 第49~55号住居跡出土遺物
- PL55 第51, 55~59号住居跡出土遺物
- PL56 第60~63, 65, 67号住居跡出土遺物
- PL57 第67~69号住居跡出土遺物
- PL58 第69~71, 75号住居跡出土遺物
- PL59 第73, 77号住居跡, 第5号獨立柱建物跡, 第4号地下式墳, 第1, 2号大形竪穴状遺構, 第60, 175号土坑出土遺物
- PL60 第3, 44, 60, 81, 88, 124, 134, 139, 173, 247号土坑出土遺物
- PL61 第134, 139, 276, 290, 306号土坑, 第1~3号堀, 第1号道路状遺構出土遺物
- PL62 遺構外出土遺物(P)
- PL63 出土石器(Q), 出土石製品(Q)
- PL64 出土石製品(Q), 出土土製品(DP)
- PL65 出土土製品(DP), 出土金屬製品(M), ガラス
- PL66 遺構外出土遺物(縄文土器TP, 弥生土器TP), 古銭

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

茨城県では、世界に開かれた国際交流の中心、世界の科学技術をリードする研究開発の拠点として、21世紀の新しい町づくりをつくば市において進めている。その一環として取り組んでいるのが、西暦2005年開業をめざした常磐新線の建設とそれに伴う沿線開発である。

当遺跡のある葛城地区については、平成6年8月18日、茨城県知事が茨城県教育委員会あてに、常磐新線沿線地域の土地区画整理事業地域内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これに対して茨城県教育委員会は平成6年9月19日から27日にかけて現地踏査を行い、埋蔵文化財の存在を確認した。平成7年3月8日、茨城県教育委員会から茨城県知事あてに、常磐新線沿線地域の土地区画整理事業地域内に神田遺跡(葛城)が存在する旨回答した。同日、茨城県知事から茨城県教育委員会あてに、葛城特定土地区画整理事業に係わる神田遺跡(19,173㎡)の取り扱いについて協議があり、文化財保護の立場から再三協議を行った。その結果、平成7年3月9日、茨城県教育委員会から茨城県知事あてに、神田遺跡を記録保存とする旨回答があった。

同日、茨城県教育委員会は、茨城県知事に埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。そこで、茨城県から財団法人茨城県教育財団に神田遺跡の発掘調査の依頼があり、発掘調査について協議を行った結果、茨城県と神田遺跡の埋蔵文化財発掘調査の委託契約を結び、平成7年4月1日から発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

神田遺跡の発掘調査を平成7年4月1日から平成8年3月31日までの1年間にわたって実施した。以下、調査経過について、その概要を記述する。

- 4月 発掘調査を開始するための諸準備を行う。12日に調査区内青作部分の調査を行う。13日に現場事務所及び事務所倉庫の設置を行う。14日に事務所の仮設トイレの設置を行う。18日に補助員募集のための説明会をつくば市第一圏民センターで行う。19日に調査器材の搬入、茨城県県南都市建設事務所との打ち合せを行う。26日に茨城県つくば都市整備局、県南都市建設事務所、及び地権者と境界杭の確認を行う。27日につくば市役所道路課と道路許可証についての打ち合せを行う。28日につくば都市整備局第二用地事務所、及び地権者と、搬入れ式の打ち合せを行う。
- 5月 2日につくば都市整備局用地課、県南都市建設事務所調査課、及び地権者と、補助員駐車場と休憩所についての打ち合せを行う。同日、つくば市教育委員会学務課と葛城小学校児童の通学路についての打ち合せを行う。11日に発掘調査の円滑な推進と安全を祈願して、搬入れ式を挙行した。12日に現場倉庫の設置、15日に現場トイレの設置を行う。18日に補助員を投入して試掘グリッドを設定した。19日に補助員休憩所の設置を行う。調査区を調査A区と調査B区に分け(第2図)、22日から表掘と調査A区の試掘を開始し、31日から調査B区の試掘を開始した。
- 6月 7日に調査A区の西側から人力による表土除去及び遺構確認作業を行う。調査A区西側からは縄文土

器片を中心に遺物が出土する。天候不順のために、作業が9日間中止となる。

- 7月 3日、調査A区の重機による表土除去を開始し、引き続き遺構確認作業を行う。19日に調査A区の遺構確認作業が終了し、竪穴住居跡11軒、土坑8基、溝11条を確認したが、ゴミ捨て場と思われる攪乱が中央部に広がっていることも確認された。また、調査B区南側から重機による表土除去を開始し、同時に遺構確認作業を実施した。28日、調査A区の遺構調査を開始した。31日から茨城県建設技術公社による基本杭打ちを行った（8月8日まで）。
- 8月 4日、調査B区の表土除去と遺構確認作業が終了し、竪穴住居跡72軒、土坑250基、掘立柱建物跡10棟を確認した。7日から調査B区のグリッド設定に入った。11日、整備課、新線課との打ち合せを行った。調査A区では竪穴住居跡9軒の遺構調査を終了した。
- 9月 引き続き調査A区の遺構調査を行った。31日、竪穴住居跡7軒、井戸2基、土坑78基、溝8条、堀3条、道路状遺構1条の調査を終了し、調査A区の遺構調査をほぼ完了した。
- 10月 2日から調査B区の遺構調査に入り、南側から調査を開始した。覆土が浅く、土壌が粘土質であることから、調査に困難を極めたが、31日までに竪穴住居跡19軒、井戸1基、土坑28基、不明遺構1基の調査を終了した。
- 11月 引き続き調査B区の調査を行い、竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡3棟、土坑94基、井戸3基、溝5条の調査を終了した。降雨が少なく、乾きやすい土壌のため、堅くなった粘土を掘ることが非常に困難であった。
- 12月 引き続き調査B区の調査を行い、竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡5棟、土坑111基、溝6条の調査を終了した。
- 1月 継続して調査B区の遺構調査を行い、竪穴住居跡19軒、掘立柱建物跡2棟、土坑21基の調査を終了した。季節風の影響で砂埃が舞い上がることが多く、補助員の健康管理だけでなく、遺構の安全対策に苦慮することが多かった。
- 2月 9日に竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡4棟、土坑22基、溝1条の遺構調査を終了し、調査B区の調査を終了した。10日から、調査A区の旧石器を集中的に採集した地点の調査を行うと同時に、図面の点検を始める。28日、委託者への報告会をつけば三現場合同で行う。29日に遺跡全景を撮影するとともに、午後から報道関係者への公開を行った。
- 3月 1日には遺構調査を終了した。3日に現地説明会を開催し、遺構、遺物を一般に公開した。7日に航空写真撮影を実施した。11日から補足調査として竪穴住居跡の竈の調査を実施し、並行して安全対策のために、埋め戻し作業を行った。埋め戻しは、調査A区を重機によって行い、調査B区を人力によって行った。19日に事務所並びに休憩所等の整理を行い、現地調査を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

神田遺跡は、茨城県つくば市荻間字神田981番地ほかに所在し、常磐自動車道・桜土浦インターチェンジの西北西約6.2kmの地点に位置している。

遺跡の所在するつくば市は、茨城県の南西部に位置し、北は真壁郡明野町、同郡真壁町、新治郡八郷町に、東は新治郡新治村、土浦市に、南は牛久市、稲敷郡基崎町、筑波郡伊奈町、同郡谷和原村に、西は水海道市、結城郡石下町、同郡千代川村、下妻市に接している。

つくば市は、昭和62年11月に、筑波郡谷田部町、同郡豊里町、同郡大穂町、新治郡桜村が合併し誕生したが、その後、昭和63年1月には筑波郡筑波町が編入された。市域は、東西が約14km、南北が約25km、面積は約259.5km²であり、人口155,864人（平成7年9月1日現在）を擁している。なお、当遺跡は旧谷田部町に属していた。この地域は昔から自然に恵まれ、産業の中心も主に農業であったが、昭和40年代以降「研究学園都市」として、国際的な研究機関の中心としての大きな発展を遂げ、現在も常磐新線や周辺地域の開発と整備が進められ、首都圏との結びつきはますます強くなっている。

つくば市は、市の南東端から東方約5kmには霞ヶ浦が、北端には筑波山がそびえており、この地域一帯は水郷筑波国定公園に指定されている。風光明媚な場所として知られている。地形的には、北東部に筑波山塊の南西端が接し、その山塊の端を西茨城県岩瀬町高峯南麓の鏡が池を水源とする桜川が、南下して霞ヶ浦へと注いでいる。また、市の西端を栃木県那須郡那須町を水源とする小貝川がほぼ南下し、利根川に合流して太平洋へと流入する。この両河川に挟まれた平坦な台地は、筑波・稲敷台地と呼ばれている。

神田遺跡は、つくば市の中央部や南側に位置し、つくば市立葛城小学校から北西に約500m離れた、東谷田川の支流である蓮沼川の左岸の、支谷を望む標高19.5～23.5mの台地上に立地している。今回調査した調査A区は台地の東側から南側斜面部、調査B区は北側から西側斜面部にあたる。

筑波・稲敷台地は、千葉県北部から茨城県南部に広がる常総台地の一部であるが、地質的には、新生代第四期洪積世に作られた地層が見られる。下層は沓ヶ崎層と呼ばれる砂層・砂礫層が主体をなし、その上に板橋層または常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層（0.3～0.5m）、その上に関東ローム層（0.5～2.5m）が堆積し、最上部は腐植土層となっている。特に、関東ローム層全体から見ると、新期ロームに属し、武蔵野ローム、立川ローム、宝木ローム、田原ロームなどが堆積しており、軽石層の分布をみると、富士・箱根火山群の活動に由来するものと考えられる。

当遺跡周辺の土地利用の現状は、主として宅地、畑地、一部の平地林となっており、蓮沼川流域の沖積低地は水田として利用されている。遺跡の現況は芝や麦作の畑地であった。

参考文献

- ・大山年次、蜂須紀夫 「茨城県 地学のガイド」 1977年
- ・蜂須紀夫、大森昌衛 「茨城の地質をめぐって」 1979年9月

第2節 歴史的環境

つくば市には、縄文時代から近世にかけての遺跡が数多く存在している。桜川、小貝川をはじめとした河川に挟まれた台地上は、古代から人々が生活を営む場としては絶好の舞台となってきたようである。ここでは、神田遺跡周辺の主な遺跡（第3図）について、すでに確認されている遺跡をもとに、時代を追って述べることにする。また、調査が行われていない遺跡については、時期を特定していない。

神田遺跡の所在する葛城地区周辺（つくば市旧谷田部地区北東部から隣接地域にかけて）では、西側の西谷田川、東谷田川、その支流である連沼川、東側の花室川、桜川などの流域に、数多くの遺跡が確認されている。ここ葛城地区でも昔から土器片や石鏃が出土することが伝えられている。

旧石器時代の遺跡はまだ確認されていないが、旧大穂町の^{おほほの}前野遺跡、^{まのの}大砂遺跡からは尖頭器が、旧豊里町の^{とよりの}大境遺跡からは尖頭器、ナイフ形石器などが、旧桜村の^{さくらむら}柴崎遺跡〈7〉と旧筑波町の^{つくば}中台遺跡からはナイフ形石器などが、新治村の^{しんじ}高岡根遺跡から尖頭器が採集されている。いずれも表採や表土中から出土した資料であり、今後の調査が待たれる。

縄文時代になると、各河川流域で遺跡の存在が確認されている。花室川、桜川流域には、^{ついでついで}台坪才十郎遺跡（中期）〈3〉、^{あきあき}大山遺跡（早期）〈4〉、^{てんじん}天神遺跡（中期）〈6〉、^{さしづ}柴崎遺跡（早期～前期、後期）などが確認されている。また、西谷田川と東谷田川流域では、旧豊里地区に^{おほりの}大境遺跡（前期～中期）、^{かしの}八ヶ代遺跡（中期）〈14〉、^{さか}酒丸遺跡（中期）〈15〉などが、また、旧谷田部地区においては^{ふじた}福田遺跡（中期～後期）〈24〉、^{いのかい}台成井遺跡（中期）〈25〉、^{おの}小野川上流の^{おの}小野崎遺跡（早期、中期）〈30〉などが確認されているが、掘削した遺跡やまだ学術調査が行われていない遺跡も多い。

弥生時代の遺跡は、確認されている遺跡が少ないのが現状である。桜川左岸の中台遺跡において後期後半の竪穴住居跡が確認され、花室川左岸の^{いしづ}西坪遺跡〈10〉や西谷田川左岸の^{たかね}高山遺跡などで弥生土器の甕が出土している。

この地域で一番数多く確認されているのが、古墳時代の遺跡である。花室川、桜川流域では、^{たまき}玉取古墳群〈2〉、^{たけ}大山遺跡、^{あまの}天神塚古墳〈5〉、^{あまの}天神遺跡、^{あまの}柴崎遺跡、^{あまの}西坪遺跡、^{あまの}倉掛遺跡〈13〉などがある。次に西谷田川と東谷田川流域では、旧谷田部地区が特に多く、古墳約300基が確認されており、^{たかね}高野古墳群〈16〉、^{たかね}高田遺跡〈17〉、^{あまの}関の台古墳群〈18〉、^{あまの}鳥名熊の山古墳群〈19〉、^{あまの}熊の山遺跡〈20〉、^{あまの}栗師遺跡〈21〉、^{あまの}水堀遺跡〈22〉、^{あまの}柳橋遺跡〈23〉、^{あまの}六十目遺跡〈26〉、^{あまの}刈間遺跡〈27〉、^{あまの}刈間古墳〈28〉などがある。これらの遺跡の古墳は、ほとんどが小円墳を中心に構成されている。

奈良・平安時代になると、律令制度の確立に伴い、葛城地区は河内郡菅田郷に所属するようになり、のち12世紀後半にかけて、大井庄、続いて田中庄と呼ばれることになる。この時代の遺跡としては、確認されているものも少ないが、花室川と桜川流域の^{こゑ}柴崎遺跡、^{こゑ}九重庵寺跡〈9〉、^{うへ}上ノ室条里遺跡、東谷田川流域の^{あまの}熊の山遺跡、^{あまの}栗師遺跡などがあげられる。また、手代木地区において、奈良時代の古瓦（葺瓦）が出土しており、今後の調査研究が待たれるところである。

中世の遺跡としては、ほとんどが城館跡になる。鎌倉幕府の成立後、小田氏の支配下となった近隣一帯には、多くの城が築かれた。方穂氏の^{あまの}方穂城跡〈1〉、沼尻氏の^{あまの}金田城跡〈8〉、大津氏の^{あまの}花室城跡〈11〉、吉原氏の^{あまの}上ノ室城跡〈12〉、平井手氏の^{あまの}面野井城跡、荒井氏の^{あまの}小野崎城跡〈29〉などが確認されている。特に注目したいのは、当遺跡の隣に位置していたとされる、野中瀬氏の^{あまの}刈間城跡である。野中瀬氏は古河公方の旗本柳樂豊前守の妹婿であり、小田氏の忠臣として活躍したが、天承2年(1574)、小田氏滅亡の時、小田父子を追って最後

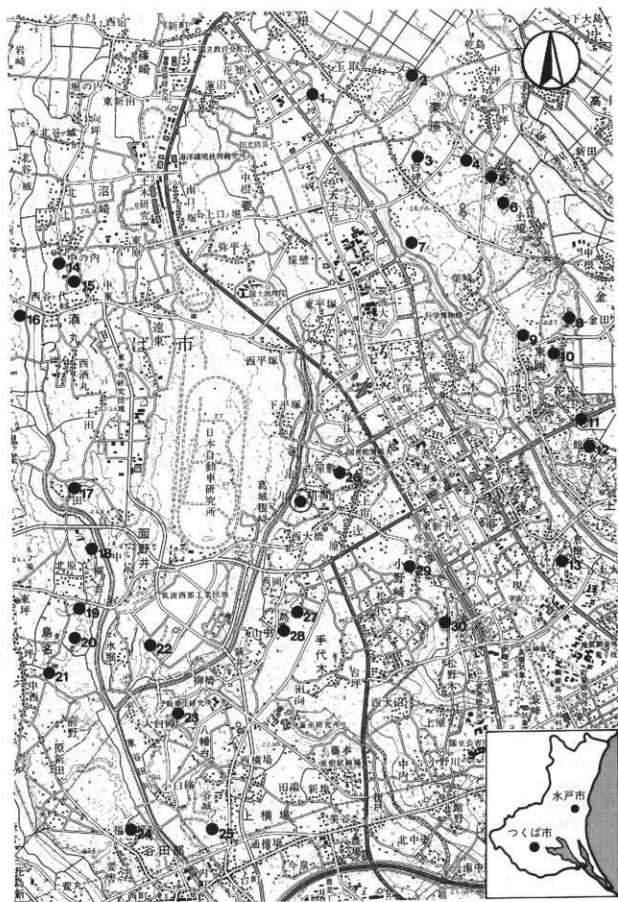
を逃げた。期間城はその後に廃城となり、今でも土塁と思われる跡が残っている。当遺跡の調査でも城に関連していると思われる掘立柱建物跡と堀が確認された。

参考文献

- ・茨城県教育庁文化課 「茨城県遺跡地図」 茨城県教育委員会 1990年3月
- ・城泉堂 『筑波郡郷土史 全(復刻版)』 賢美閣 1979年12月
- ・谷田部の歴史編さん委員会 「谷田部の歴史」 谷田部町教育委員会 1975年9月
- ・大野慎 『葛城の郷土史』 常総史談会 1977年3月
- ・桜村史編さん委員会 「桜村史 上巻」 桜村教育委員会 1982年3月
- ・大穂町史編纂委員会 「大穂町史」 つくば市大穂地区教育事務所 1989年3月
- ・豊里町史編纂委員会 「豊里の歴史」 豊里町 1985年3月
- ・中山信名 『新編常陸国誌』 横書房 1978年12月
- ・茨城県教育財団 「研究学園都市計画手子生工業団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書 大境遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告第34集』 1986年3月
- ・茨城県教育財団 「研究学園都市計画大砂工業団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書 大久保A遺跡大久保B遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告第37集』 1986年3月
- ・茨城県教育財団 「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(IV) 柴崎遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告第93集』 1994年9月
- ・茨城県教育財団 「(仮称)北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書 中台遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告第102集』 1995年12月

表1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	県遺跡番号	時代					番号	遺跡名	県遺跡番号	時代					
			旧	縄	弥	古	奈良				中	近	旧	縄	弥	古
●	神田遺跡	5841	○	○	○	○	○	16	高野古墳群	2142				○		
1	方穂故城	5866					○	17	高田遺跡	2920				○		
2	玉取古墳群	2163				○		18	関の台古墳群	2112				○		
3	台坪才十郎遺跡	2876		○				19	島名熊の山古墳群	2120				○		
4	大山遺跡	2877		○		○		20	熊の山遺跡	214				○	○	○
5	天神塚古墳	2088				○		21	薬師遺跡	2105				○		○
6	天神遺跡	2878		○				22	水堀遺跡	5838				○		
7	柴崎遺跡	2897	○	○		○	○	23	柳橋遺跡	5839				○		
8	金田城跡	2891					○	24	福田遺跡	2099		○				
9	九重廃寺跡	2890					○	25	台成井遺跡	2910		○				
10	西坪遺跡	2085			○	○		26	六十目遺跡	5842				○		
11	花室城跡	2893					○	27	荊間遺跡	2917						
12	上ノ室城跡	2892						○	28	荊間古墳	2922				○	
13	倉掛遺跡	2886				○		29	小野崎館跡	2913						○
14	八ヶ代遺跡	2938		○		○		30	小野崎遺跡	2918		○		○		
15	酒丸遺跡	2939		○												



第3図 周辺遺跡位置図(5万分の1)

第3章 神田遺跡

第1節 遺跡の概要

神田遺跡は、つくば市の中央部や南、連沼川左岸の標高19.5~23.5mの台地上に位置している。調査区は、南北に約275m、東西に約140m、面積19,173㎡である。現況は畑地である。調査区の中央を市道が通り、北側の調査B区と南側の調査A区に分けられている。

今回の調査によって、竪穴住居跡76軒、掘立柱建物跡14棟、地下式墳4基、井戸4基、大形竪穴状遺構2基、方形竪穴状遺構2基、火葬施設1基、土坑346基、溝20条、堀3条、道路状遺構1条、不明遺構1基を確認した。このうち古墳時代の遺構は竪穴住居跡17軒で、特に、古墳時代前・中期の竪穴住居跡8軒は調査A区に確認され、ほとんどが北西部に炬を付設した焼失家屋であった。また、古墳時代後期の竪穴住居跡9軒は調査B区の南部に集中している。奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡59軒が確認され、ほとんどが竈を持って、調査B区に構築されている。土坑は中世以降のものが多く確認され、特に、調査A区の北部では溝に区画されて墓域を形成しているほか、調査B区では円形の土坑群としっかりした箱堀りのような長方形の土坑群が確認された。また、堀はしっかりとした薬研堀で、竊間城との関連が考えられる。掘立柱建物跡は14棟が住居跡と混在しながら調査B区で確認された。遺物が少なく、時代の特定が難しいが、奈良・平安時代以降と考えられる。この内の数棟は竊間城の施設の可能性もある。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)に103箱出土している。遺物の大部分は古墳時代から平安時代にかけての土師器、須恵器である。その他の遺物としては、ナイフ形石器、尖頭器、スクレイパー、剥片、縄文土器、石鏃、磨石、石斧、弥生土器、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、礫石、紡錘車、ガラス玉、土玉、支脚、鉄鏃、刀子、火打ち鏃、かんざし、火縄銃の弾、古銭等が出土している。

第2節 基本層序

調査区内にテストピットを掘り、基本土層の観察を行った。テストピットは調査A区、調査B区の2か所に設定した。

調査A区の基本層序は以下の通りである。(第4図)

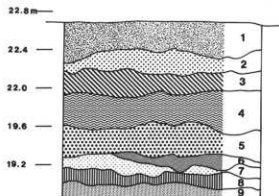
第1層は、28~40cmの厚さの耕作土層で、褐色をしている。

第2層は、6~28cmの厚さで、褐色をしたソフトローム層である。

第3層は、18~30cmの厚さで、ハードローム大・中ブロックを多量に含む、暗褐色をしたブラックバンド層である。

第4層は、30~46cmの厚さで、明褐色をしたハードローム層である。

第5層は、22~24cmの厚さで、暗褐色をした第2ブラ



第4図 調査A区基本土層図

ックバンド層である。

第6層は、2～20cmの厚さで、赤色粘土を含む、褐色をしたハードローム層である。

第7層は、2～20cmの厚さで、砂混じりの赤褐色をした粘土層である。

第8層は、6～28cmの厚さで、暗褐色をした粘土層である。

第9層は、8～26cmの厚さで、灰色粘土と赤色粘土を少量含む、黄褐色の粘土層である。

次に、調査B区の基本層序は以下の通りである。(第5図)

第1層は、32cm前後の厚さで、炭化材と黄褐色の粘土を多量に含み、硬く締まった、にぶい褐色をしたハードローム層である。

第2層は、20～30cmの厚さで、にぶい黄褐色をした粘土層である。

第3層は、14～20cmの厚さで、赤色粘土を中量含む、黄褐色をした粘土層である。

第4層は、10～14cmの厚さで、鉄分混じりの、黄褐色をした粘土層である。

第5層は、20～34cmの厚さで、にぶい黄褐色をした粘土層である。

第6層は、12～22cmの厚さで、砂混じりの、灰白色粘土層である。

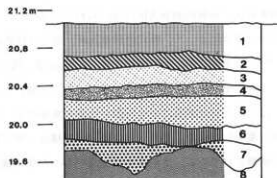
第7層は、1～36cmの厚さで、砂を多量に含む、灰色粘土層である。

第8層は、4～36cmの厚さの砂層である。

以上のように、当遺跡では調査A区と調査B区では基本土層に大きな違いが認められる。これは地殻変動などにより台地が隆起したためと考えられるが、調査A区と調査B区の比較対比から、調査A区の第8層と調査B区の第2層が同一層であると推測される。

なお、当遺跡の遺構は、調査A区では、第2層の上面で確認され、竪穴住居跡は第2層から第4層にかけて掘り込まれ、土坑や堀、地下式構は第2層から第8層にかけて掘り込まれている。

調査B区では第1層の上面で確認され、竪穴住居跡は、中央から北側のものはほとんどが第1層から第3層にかけて掘り込まれ、南側のものは第1層を掘り込んでいる。また一部の土坑は第1層から第6層にかけて掘り込まれているが、その他の遺構はほとんどが第1層から第4層にかけて掘り込まれている。



第5図 調査B区基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

本跡の竪穴住居跡は、古墳時代から平安時代に至るもので、重複や建て替えの住居も含み、調査A区、B区を併せて76軒を検出した。以下、検出された竪穴住居跡の特徴や出土遺物について記載する。

第1号住居跡（第6図）

位置 調査A区南西部、F2g₀区。

重複関係 本跡は第2号住居跡と重複している。本跡の南東部が、第2号住居跡の北西部を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸5.11m、短軸5.00mの隅丸方形である。

主軸方向 N-9°-E

壁 壁高は40~60cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、南壁付近から甕手前まで硬く踏み固められている。竈の西側に、長軸120cm、短軸95cm、深さ18cmの不定形の掘り込みと、竈の東側に、長径140cm、短径70cm、深さ24cmの不整楕円形の掘り込みが見られる。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。

規模は、煙道部から焚口部まで176cm、最大幅135cm、壁外への掘り込みは23cmである。火床部は床面を12cmほど掘り窪めており、火熱を受けて赤変し、硬化している。煙道部は外傾し、立ち上がる。

竈土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、砂中量	9 暗赤褐色	焼土粒子少量、砂多量
2 褐色	焼土粒子少量、砂多量	10 暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、砂中量
3 暗赤褐色	焼土粒子少量、砂中量	11 褐色	焼土粒子中量、砂多量
4 暗赤褐色	焼土粒子多量、砂中量	12 褐色	炭化粒子少量、砂多量
5 暗褐色	焼土粒子少量、砂中量	13 暗赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化粒子・砂少量
6 暗褐色	炭化粒子少量、砂中量	14 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・炭化小ブロック・砂少量
7 暗赤褐色	焼土粒子・砂中量	15 褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂少量
8 暗赤褐色	焼土粒子多量、砂中量	16 暗赤褐色	焼土小ブロック少量

ピット 5か所（P₁~P₅）。P₁~P₄は径45~50cmの円形、いずれも深さ44~57cmで主柱穴である。P₅は長径79cm、短径43cmの楕円形、深さ25cmで、出入口施設に伴うピットである。

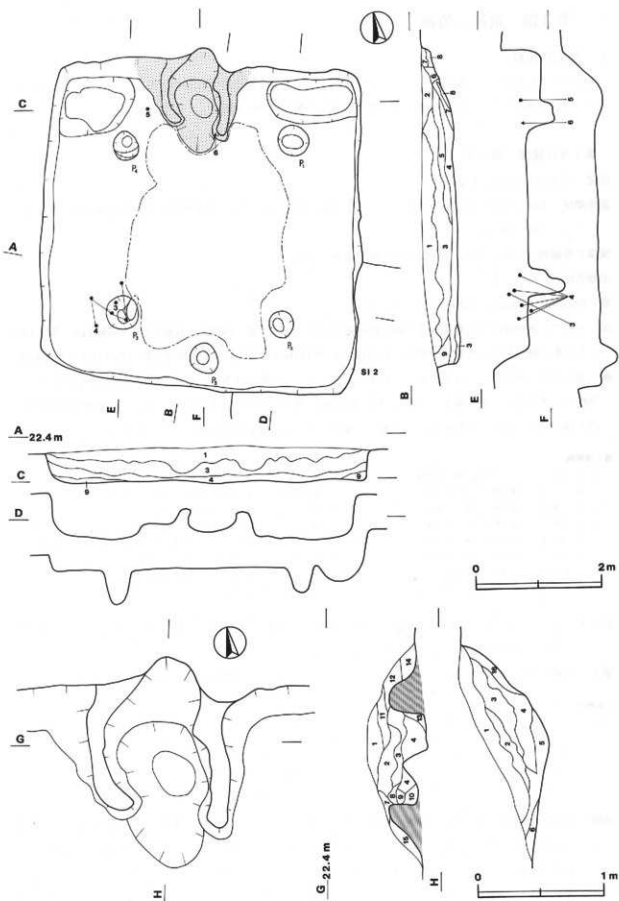
覆土 9層からなり、不自然な堆積の状況がみられることから、人為堆積と思われる。

土層解説

1 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量	6 暗褐色	炭化粒子少量、砂中量
2 暗褐色	ローム中ブロック少量	7 暗褐色	ローム小ブロック少量、砂微量
3 暗褐色	ローム粒子少量	8 褐色	粘土粒子少量、砂中量
4 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	9 暗褐色	炭化粒子少量
5 暗褐色	ローム小ブロック少量		

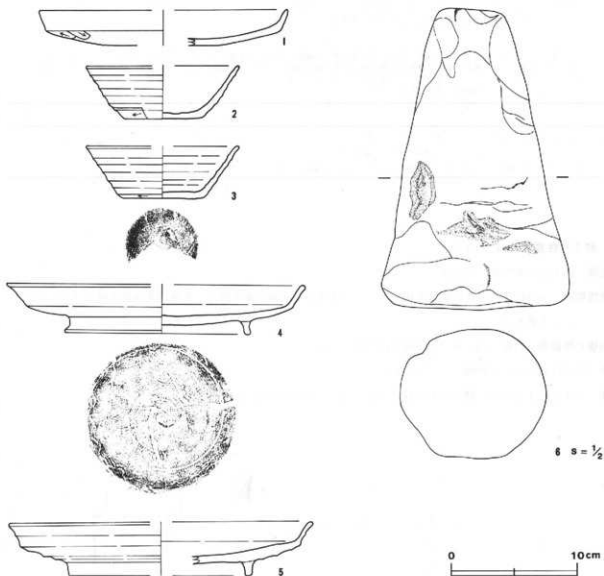
遺物 土師器片308点、須恵器片131点、支脚1点が出土している。ほとんどの遺物が南壁寄りに集中している。

1の土師器環が東壁寄りの覆土中から、2の須恵器環が南壁寄りの覆土中から、3の須恵器環が南西コーナー一部の覆土中層から、4の須恵器盤が覆土下層から、5の須恵器盤が竈西側の覆土下層から、6の支脚が竈東側の覆土下層からそれぞれ出土している。1の土師器環は時期的な違いがあるので、流れ込んだものと思われる。



第6图 第1号住居跡实测图

所見 竈脇の掘り込みは、焼土粒子、炭化粒子および炭化材が堆積していることから、竈の灰を捨てた可能性がある。時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代の9世紀中葉と考えられる。



第7図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7図 1	坏 土器 器	A [19.8] B (2.9)	底部から口縁部破片。丸底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、中位に絞を持つ。口縁部は直線的に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ開り。内面ナデ。	スコリア 砂粒 ふい粉色 普通	20% P 1 腹土中
2	坏 土器 器	A [12.2] B 4.2 C 6.2	底部から口縁部破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面クロコナデ。外面下位へラ開り。底部手持ちへラ開り。	長石 雲母 砂粒 内面褐色 外面黒色 普通	55% P 2 外面スス付着 内面剥離 腹土中

3	環 頭 器	A[12.2] B 4.2 C 6.2	底部から口縁部破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転へラ切り後、ナデ。	石英 雲母 砂粒 にふい色色 普通	45% P 3 覆土中層
4	盤 頭 器	A[23.8] B 3.9 D 14.8 E 1.1	口縁部一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、中位に稜を持つ。口縁部は直線的に立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転へラ削り、高台部貼り付け、ロクロナデ。	石英 雲母 砂粒 褐色色 普通	80% P 4 覆土下層
5	盤 頭 器	A[24.2] B 4.3 D[14.6] E 1.1	底部から口縁部の破片。高台部は直線的に開く。体部は内彎気味に立ち上がり、中位と上位に稜を持つ。口縁部はわずかに外反して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転へラ削り、高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 砂粒 灰黄色 良好	10% P 5 覆土下層

図版番号	器種	計測値			出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)		
6	支脚	15.9	9.7	1030	覆土下層	DP1 100%

第2号住居跡 (第8図)

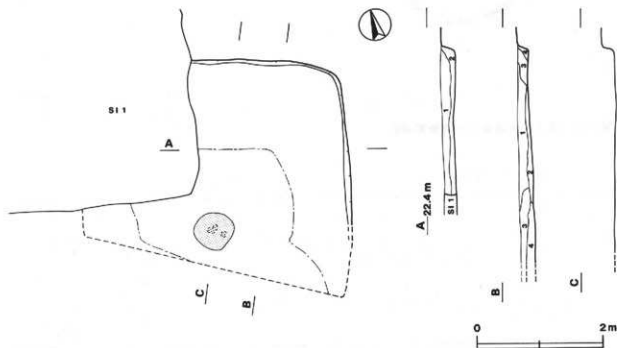
位置 調査A区南西部, F3h1区。

重複関係 本跡は第1号住居跡と重複している。第1号住居跡の南東部が、本跡の北西部を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸(3.45)mで、平面形は不明である。

壁 壁高は約20cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、中央が硬く踏み固められている。また、中央から南半分を擾乱されている。



第8図 第2号住居跡実測図

炉 中央に位置して。長径65cm、短径55cmの楕円形で、2cmほど掘り窪められた地床炉である。炉床の一部だけが火熱を受けて赤変している。

覆土 4層からなり、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------|--------|--------------|
| 1 褐 色 | ローム粒子少量 | 3 暗 褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 褐 色 | ローム小ブロック少量 | 4 暗 褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 |

遺物 土師器片18点、須恵器片1点で、土師器甕の体部が16点ほど出土している。

所見 中央から南部を攪乱されているため、遺物の残りが少ない。時期は不明であるが、遺物に刷毛目が施されていることや遺構の形態から、古墳時代前期と考えられる。

第3号住居跡(第9図)

位置 調査A区中央部、F3f2区。

規模と平面形 長軸3.65m、短軸3.55mの方形である。

主軸方向 N-9°-E

壁 壁高は16~30cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、南壁から竈にかけて硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。

規模は、煙道部から焚口部まで125cm、最大幅127cm、壁外への掘り込みは40cmである。火床部は床面を10cmほど掘り窪めており、火熱を受けて赤変しているが、あまり硬化していない。煙道部は外傾し、緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------|---------|------------------|
| 1 灰 褐色 | 焼土粒子少量、砂中量 | 4 暗 赤褐色 | 焼土粒子少量、砂中量 |
| 2 暗 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、砂中量 | 5 褐 色 | ローム粒子・砂中量、炭化粒子少量 |
| 3 灰 褐色 | 焼土粒子・砂中量 | | |

ビット 5か所(P₁~P₅)。P₁は径20cmの円形、P₂は長径35cm、短径19cmの楕円形で、いずれも深さは30cmほどの主柱穴である。P₃は長径22cm、短径19cmの楕円形、P₄とP₅は径20cmの円形で、いずれも深さ16~25cmで、性格は不明である。

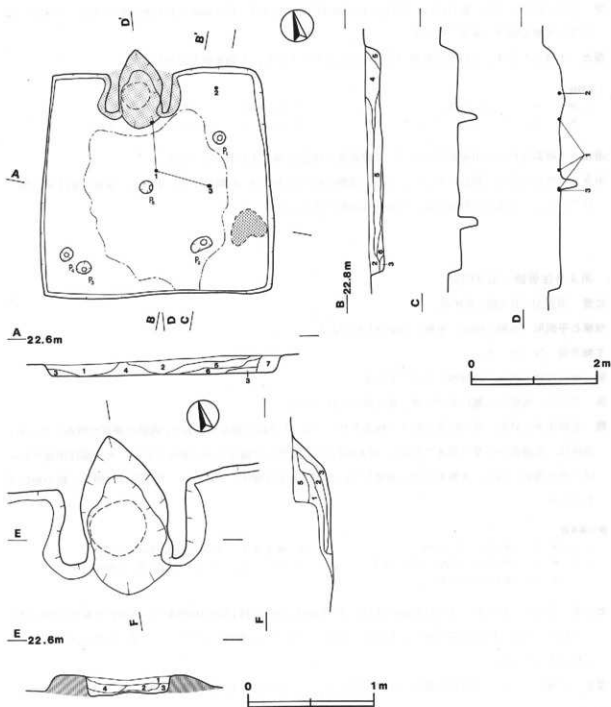
覆土 7層からなり、不自然な堆積の状況がみられることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------|--------|-------------|
| 1 暗 褐色 | ローム粒子少量 | 5 褐 色 | ローム小ブロック少量 |
| 2 暗 褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 6 暗 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 暗 褐色 | ローム小ブロック少量 | 7 暗 褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 暗 褐色 | ローム小ブロック・炭化粒子少量 | | |

遺物 土師器片95点、須恵器片11点が出土している。1の須恵器環が竈手前と中央の床面直上から、2の須恵器環が北東コーナー一部の覆土下層から、3の須恵器環が中央の床面直上からそれぞれ出土している。

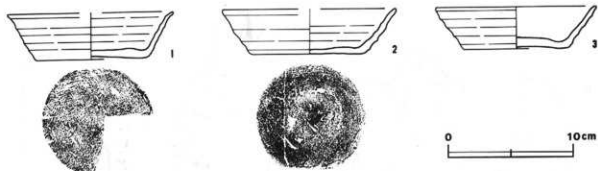
所見 竈の火床部の状況から、短期間しか使用されなかった住居跡と考えられる。時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代の8世紀中葉と考えられる。



第9図 第3号住居跡実測図

第3号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第10区 1	須恵器	A [13.3]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部手持ちへラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	60% P 8 床面直上
		B 3.8				
		C 8.8				
2	須恵器	A [13.8]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部手持ちへラ削り。	雲母 スコリア 砂粒 にふい黄褐色 普通	60% P 7 覆土下層
		B 3.6				
		C 9.6				



第10図 第3号住居跡出土遺物実測図

3	環 須 壺 器	A 13.0 B 3.4 C 8.2	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部ナデ。	長石 雲母 砂粒 スコリア 黄褐色 普通	90% P 6 内面二次焼成 外面スス付着 床面直上
---	------------------	--------------------------	---------------------------------------	-----------------------	-------------------------------	-------------------------------------

第4号住居跡 (第11図)

位置 調査A区南部, G3ds区。

規模と平面形 長軸4.90m, 短軸4.72mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-12°-E

壁 壁高は30~55cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、竈の手前、東壁、ならびに西壁寄りが、硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部の一部、煙道部と両側の袖部が残存している。

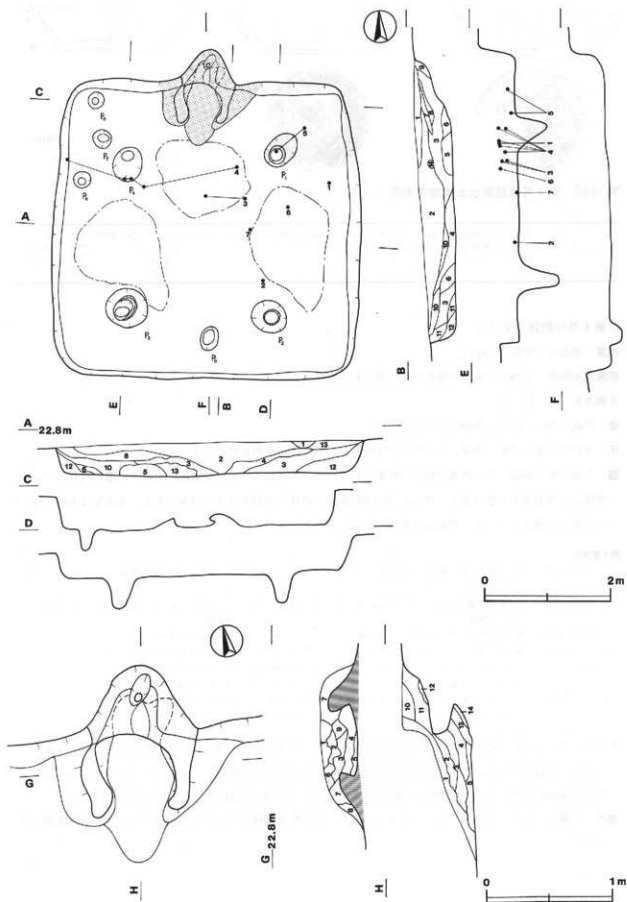
規模は、煙道部から焚口部まで151cm, 最大幅136cm, 壁外への掘り込みは51cmである。火床部は火熱を受けて赤変し、硬化している。煙道部は外傾し、急に立ち上がる。

遺土層解説

1 灰褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 粘土小・中ブロック多量	7 ぶい褐色	ローム粒子・粘土粒子多量, ローム小ブロック中量
2 ぶい褐色	焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量, 粘土中ブロック多量	8 褐色	ローム粒子・粘土粒子多量, ローム小・中ブロック少量
3 明赤褐色	焼土粒子多量, 焼土小・中ブロック中量	9 暗褐色	焼土粒子・砂少量
4 ぶい赤褐色	焼土小・中ブロック・炭化粒子中量	10 暗褐色	ローム粒子少量, 砂中量
5 暗赤褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロック多量	11 黒褐色	ローム粒子少量, 砂中量
6 ぶい褐色	ローム粒子・粘土粒子多量, 焼土粒子・焼土小ブロック中量	12 暗褐色	焼土粒子少量, 砂中量
		13 暗赤褐色	焼土中ブロック多量, 砂中量
		14 暗赤褐色	焼土大ブロック少量

ピット 8か所 (P₁~P₈)。P₁~P₄は長径55~68cm, 短径42~60cmの楕円形で、いずれも深さ48~63cmの支柱穴である。P₅は長径38cm, 短径30cmの楕円形で、深さ20cmの出入口施設に伴うピットである。P₆は長径30cm, 短径26cmの楕円形, P₇とP₈は径15~30cmの円形で、いずれも深さは34~49cmで、性格は不明である。

覆土 14層からなり、ロームブロックを多く含有し、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。



第11图 第4号住居跡実測图

土層解説

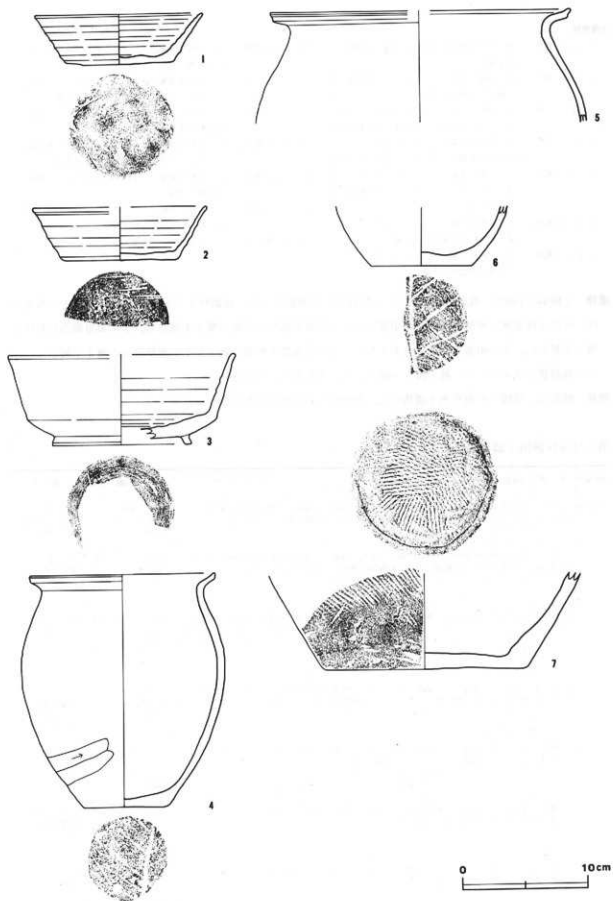
1	によい褐色	ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子・砂中量	8	によい褐色	ローム粒子多量、ハードローム小ブロック・炭化粒子少量
2	によい褐色	ローム粒子多量、ローム大ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量	9	によい褐色	ローム粒子多量、ソフトローム中ブロック中量、ハードローム小ブロック・炭化粒子少量
3	褐色	ローム粒子・ソフトローム大ブロック多量、ハードローム中ブロック中量、炭化粒子少量	10	によい褐色	ローム粒子多量、ハードローム中ブロック中量、炭化粒子少量
4	によい褐色	ローム粒子多量、ハードローム大ブロック・炭化粒子少量、ソフトローム中ブロック中量	11	によい褐色	ローム粒子多量、ハードローム中ブロック中量、ソフトローム中ブロック・炭化粒子少量
5	によい褐色	ローム粒子多量、ソフトローム中ブロック中量、ハードローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	12	によい褐色	ローム粒子多量、ソフトローム中ブロック中量、炭化粒子少量
6	によい褐色	ローム粒子多量、ソフトローム中ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量	13	によい褐色	ローム粒子多量、ハードローム小・中ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
7	によい褐色	ローム粒子多量、ハードローム中・大ブロック中量、炭化粒子少量	14	灰褐色	ローム大ブロック多量

遺物 土師器片168点、須恵器片40点、および混入した陶器片2点、磁器片1点が出土している。1の須恵器環、6の土師器甕が東壁寄りの覆土中層から、2の須恵器環が中央の覆土下層から、3の須恵器高台付環が覆土中層から、7の須恵器甕が床面直上から、4の土師器小形甕が甕手前から西壁寄りの覆土中層から、5の土師器甕が北東コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、遺物の形態や出土遺物から、奈良時代の8世紀中葉と考えられる。

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(mm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 1	須恵器 環	A 13.4	体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナテ。底部手持ちへり。	雲母 砂粒 灰黄色 良好	75% P9 外周スス付着 覆土中層
		B 13-14 C 8.8				
2	須恵器 環	A[13.8]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナテ。底部手持ちへり。	長石 石英 砂粒 褐灰色 良好	40% P10 覆土下層
		B 4.3 C 8.8				
3	高台付環 須恵器	A[18.2]	底部から口縁部の破片。高台部は短く、直線的に開く。体部は内彎気味に立ち上がり、下位に縁を持つ。口縁部は直線的に立ち上がり、端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナテ。体部下位面へり。底部回転へり。高台部貼り付け、ロクロナテ。	長石 雲母 砂粒 灰黄色 良好	40% P11 覆土中層
		B 7.3				
		D 11.0				
		E 0.8				
4	小形甕 土師器	A14-E6	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナテ。体部内・外面ナテ、外面下位へり。	長石 雲母 砂粒 明赤褐色 普通	40% P12 内面剝離 底部木漆痕 覆土中層
		B 18.5 C 6.5				
5	甕 土師器	A[23.8] B(8.9)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反して、端部はつまみ上げられ、締付工具による凹線を遺らす。	口縁部、体部内・外面横ナテ。	石英 雲母 砂粒 スコリア によい褐色 普通	10% P13 覆土下層
		B(4.8) C 8.0				
6	甕 土師器	B(4.8) C 8.0	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	体部内・外面ナテ。	長石 石英 砂粒 スコリア によい赤褐色 普通	10% P406 底部木漆痕 覆土中層
		B(7.6) C 15.8				
7	須恵器 環	B(7.6) C 15.8	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	体部外面平行叩き。下位へり。底部外面へり。内面平行叩き。	長石 石英 雲母 砂粒 によい黄色 普通	10% P14 床面直上
		B(7.6) C 15.8				



第12图 第4号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡 (第13図)

位置 調査A区南部, G4a2区。

重複関係 本跡は第2号堀と重複している。第2号堀が、本跡の北部を掘り込んでいることから、本跡が古い。
規模と平面形 長軸6.60m, 短軸6.30mの隅丸方形である。

主軸方向 N-38'-W

壁 壁高は55~65cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、南壁寄りの出入口施設付近は硬く踏み固められている。

炉 2か所。第1炉は北西壁寄りに位置し、長径103cm, 短径75cmの楕円形で、5cmほど掘り窪められた地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変し、硬く締まっている。

第1炉土層解説

- | | | | |
|---------|----------------------------|--------|------------------------|
| 1 暗赤褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量 | 3 暗赤褐色 | 焼土粒子多量, 焼土小ブロック・炭化粒子中量 |
| 2 極暗赤褐色 | 焼土粒子・焼土小・中ブロック多量 | 4 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子多量, 焼土小ブロック中量 |

第2炉は南西壁寄りに位置し、長径76cm, 短径60cmの楕円形で、4cmほど掘り窪められた地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変し、硬く締まっている。ローム粒子, 焼土粒子, 焼土小ブロックを少量含む, 暗赤褐色土が堆積している。

ピット 7か所 (P₁~P₇)。P₁は長径40cm, 短径30cmの楕円形, P₂~P₄は径12~17cmの円形で、いずれも深さ54~70cmの支柱穴である。P₅は径36cmの円形, 深さ36cmで、出入口施設に伴うピットである。P₆は長径37cm, 短径33cmの楕円形, 深さ14cm, P₇は径60cmの円形, 深さ24cmで、ともに性格は不明である。

覆土 15層からなり、ロームブロックを多く含有し、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

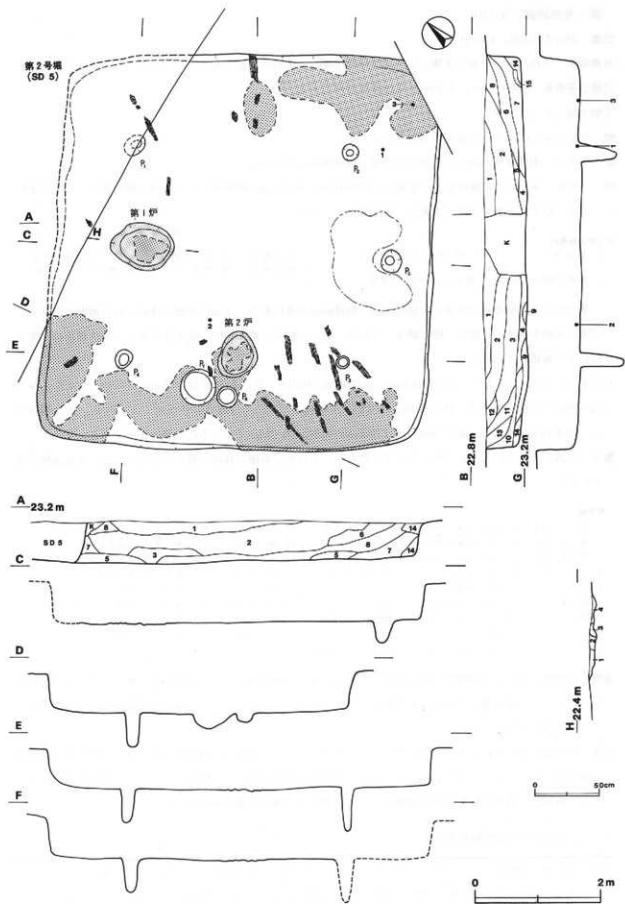
- | | | | |
|-------|---------------------------|---------|---------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子多量, ソフトローム中ブロック中量 | 9 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子多量, 黒色土中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子少量 | 10 褐色 | ローム粒子多量, 暗褐色土中量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子少量 | 11 暗褐色 | ローム粒子・ソフトローム中ブロック少量 |
| 4 褐色 | ローム粒子中量, ハードローム小ブロック少量 | 12 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 5 褐色 | ローム粒子多量 | 13 褐色 | ローム中ブロック中量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック少量 | 14 明褐色 | ローム中ブロック中量, ハードローム小ブロック少量 |
| 7 褐色 | ソフトローム小・中ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量 | 15 よい褐色 | ローム大ブロック多量 |
| 8 褐色 | ローム粒子多量, ソフトローム小・中ブロック中量 | | |

遺物 土師器片294点, 須恵器片78点が出土している。1の土師器高坏, 3の土師器甕が東コーナー部の床面直上から、2の土師器甕が中央の覆土下層からそれぞれ出土している。2の土師器甕は時代的な違いがあることから、流れ込みと思われる。

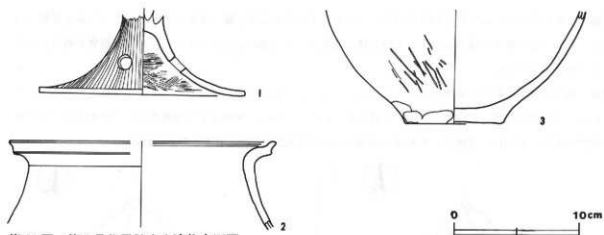
所見 中央部は攪乱され、東コーナー部がエリア外であったが、北東壁と南西壁付近に多くの焼土塊と炭化材が確認されたことから、焼失家屋と考えられ、人為的に埋め戻された可能性がある。炉の使用順序は不明である。時期は、遺構の形態や出土遺物から、古墳時代の5世紀中葉と考えられる。

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第14図 1	高坏 土師器	D 16.8 E (6.8) 孔径1.2	脚部の破片。脚部から底部にかけ、ラップ状に開く。3孔を有する。	脚部, 裾部外面へラ磨き, 内面刷毛目整形。裾部積ナブ。	長石 砂粒 によい黄色 青濁	50% P16 床面直上



第13图 第5号住居跡実測図



第14図 第5号住居跡出土遺物実測図

第14図 2	甕 土師器	A [21.2] B (6.7)	体部から口縁部の破片。体部は内彎 気味に立ち上がる。口縁部は外反し て、中に稜を持つ。端部はつまみ 上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外 面ナデ。	石英 雲母 砂粒 スコリア にふい赤褐色 普通	5% P17 覆土下層
3	甕 土師器	B (9.0) C 7.8	底部から体部の破片。平底。体部は 内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ナデ。外面下位へラナ デ、へラ削り。底部ナデ。	長石 砂粒 外面暗赤褐色 内面赤褐色 普通	10% P18 内面二次焼成 床面直上

第6号住居跡 (第15図)

位置 調査A区中央部, F3c4区。

規模と平面形 長軸3.30m, 短軸3.02mの長方形である。

主軸方向 N-4°-E

壁 壁高は40~48cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、中央が硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部の一部は崩落しているが、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで125cm, 最大幅140cm, 壁外への掘り込みは55cmである。火床部は床面を4cmほど掘り窪めており、火熱を受けて赤変し、少し硬化している。特に、西側の袖部の内側が赤変し、硬く締まっている。煙道部は外傾し、階段状に立ち上がる。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|-------------|--------|------------------------------|
| 1 暗褐色 | 炭化粒子少量, 砂中量 | 5 明赤褐色 | 焼土中ブロック多量 |
| 2 灰褐色 | 焼土粒子少量, 砂中量 | 6 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・炭化小ブロック少量, 粘土小ブロック中量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子少量, 砂中量 | | |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子多量, 砂中量 | | |

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁, P₂, ならびにP₃は長径11~27cm, 短径9~17cmの楕円形, P₄とP₅は径19~21cmの円形で、いずれも深さ13~21cmで、性格は不明である。

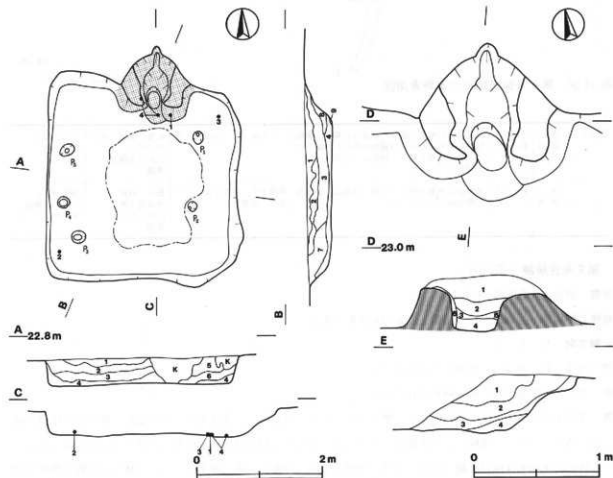
竈土 9層からなり、炭化粒子の推積状況などから、人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量, 砂中量 |
| 2 暗褐色 | 炭化粒子少量 | 7 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 8 暗褐色 | 焼土粒子・粘土粒子少量 |
| 4 褐色 | ローム中ブロック少量 | 9 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量, 砂中量 |
| 5 暗褐色 | 炭化粒子少量 | | |

遺物 土師器片63点, 須恵器片43点が出土している。1の須恵器環が竈の東側の袖部から, 2の須恵器盤が南西コーナー一部の覆土下層から, 3の土師器甕が北東コーナー一部の床面直上から, 4の須恵器甕が竈内からそれぞれ出土している。

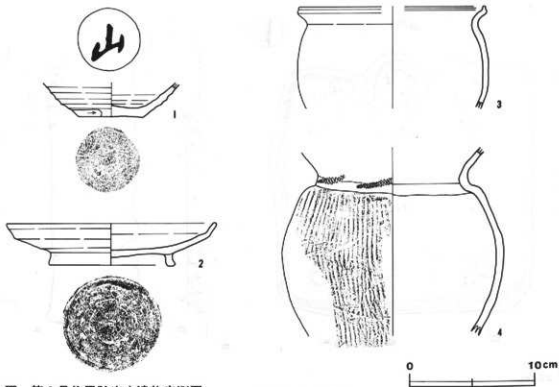
所見 竈内や袖部の脇から遺物が出土していることから, それらは竈の補強材として使用されていたと考えられる。1の墨書土器は, 内側に「山」と書かれていることから, 実用品より祭祀用として使用されていた可能性がある。時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 平安時代の9世紀中葉と考えられる。



第15図 第6号住居跡実測図

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 1	環 須恵器	B(2.6) C 5.2	底部から体部の破片。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。外面下位へラ削り。底部手持ちへラ削り。	長石 石英 霏母 砂粒 に濃い黄褐色 普通	60% P19 底部内面墨書 「山」 袖部内
2	盤 須恵器	A 16.6 B 3.4 D 10.0 E 1.0	高台部, 体部, 口縁部一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がり, 下位と上位に接を持つ。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。底部回転へラ削り。高台部貼り付け, ロクロナデ。	長石 石英 砂粒 黄灰色 普通	75% P20 覆土下層
3	甕 土師器	A[14.8] B(8.1)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して, 中位に接を持つ。底部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。	長石 石英 霏母 砂粒 に濃い褐色 普通	10% P21 床面直上



第16図 第6号住居跡出土遺物実測図

4	壺 須恵器	B(14.9)	体部から頸部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。頸部は「く」の字状に屈曲する。	胴部内・外面ロクロナデ。体部外面平行叩き、内面ナデ。	長石 雪母 砂粒 灰色 普通	15% P22 霜内
---	----------	---------	---	----------------------------	-------------------	---------------

第7号住居跡 (第17図)

位置 調査A区中央部, E31a区。

規模と平面形 長軸4.15m, 短軸4.11mの隅丸方形である。

主軸方向 N-18°-E

壁 壁高は23~33cmで、外傾して立ち上がる。

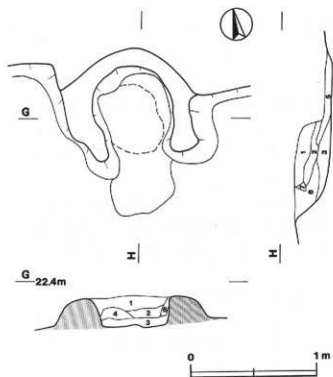
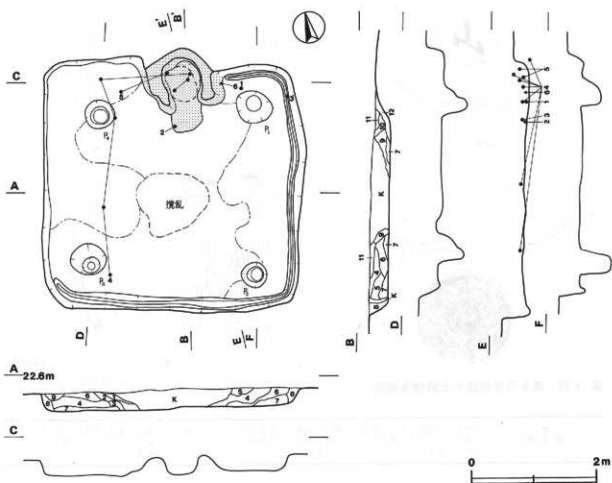
壁溝 竈の西側と西壁を除いて、半周している。上幅10~20cm, 下幅3~10cm, 深さ4~10cmで、断面形はU字状である。

床 やや凹凸で、中央は攪乱を受けているが、竈手前からP₁~P₂にかけて、南壁付近まで硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しているが、両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで134cm, 最大幅130cm, 壁外への掘り込みは20cmである。火床部は床面を4cmほど掘り窪めており、火熱を受けて赤変し、硬化している。煙道部は外傾し、緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

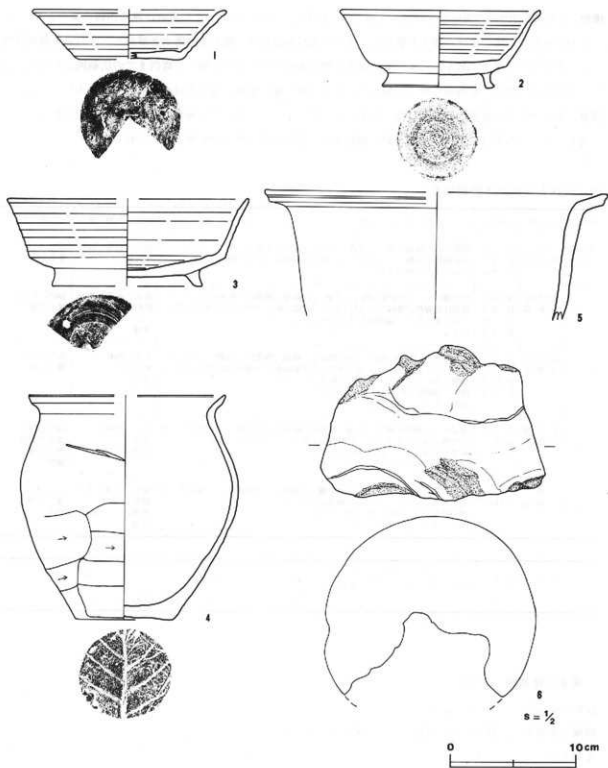
- | | | | |
|--------|-------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子少量, 砂中量 | 5 暗褐色 | 焼土粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・砂中量 | 6 褐色 | ローム中ブロック多量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土中ブロック多量 | 7 赤褐色 | 焼土大ブロック多量 |
| 4 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量 | 8 暗褐色 | 焼土粒子少量, 炭化粒子多量 |



土層解読

- | | | |
|----|-----|-----------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子少量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子・炭化大ブロック中量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子・炭化粒子中量 |
| 4 | 明褐色 | 焼土粒子多量, ソフトローム小ブロック少量 |
| 5 | 明褐色 | ローム粒子・ソフトローム中ブロック中量 |
| 6 | 明褐色 | ローム粒子中量, ハードローム中ブロック少量 |
| 7 | 明褐色 | ローム粒子・ハードローム中ブロック中量 |
| 8 | 明褐色 | ローム小・中ブロック多量 |
| 9 | 褐色 | ローム粒子・ソフトローム小ブロック中量 |
| 10 | 褐色 | ローム粒子中量 |
| 11 | 明褐色 | 焼土粒子中量 |
| 12 | 明褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子中量 |

第17図 第7号住居跡実測図



第18図 第7号住居跡出土遺物実測図

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁は長径60cm、短径50cmの楕円形で、深さ31cm、P₂~P₄は径40~55cmの円形で、深さ40~48cmの主柱穴である。

覆土 12層からなり、ロームブロックを多く含有し、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

遺物 土師器片108点, 須恵器片71点, 支脚2点が出土している。ほとんどの遺物は竈の西側に集中している。

1の須恵器が竈の東側の覆土下層から, 2の須恵器高台付環が竈手前の覆土下層から, 3の須恵器高台付環が東壁寄りの覆土下層から, 4の土師器小形甕が南壁寄りの覆土下層から竈内までの広範囲にわたり, 5の土師器甕が竈内と竈西側の覆土下層から, 6の支脚が竈の東側の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 竈内の中央や袖部の脇から遺物が出土していることから, それらは竈の補強材として使用されていたと考えられる。時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 平安時代の9世紀前葉と考えられる。

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 1	環 須恵器	A[15.6] B 4.0 C[8.1]	底部から口縁部の破片。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、ヘラ削り。	長石 石英 砂粒 褐灰色 良好	55% P23 覆土下層
2	高台付環 須恵器	A 16.0 B 6.2 D 9.0 E 1.3	高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、下位に稜を持つ。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 におい橙色 普通	100% P24 覆土下層
3	高台付環 須恵器	A[14.4] B 7.0 D[12.0] E 1.4	高台部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、下位に稜を持つ。口縁部は直線的に立ち上がり、端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 砂粒 黄灰色 良好	25% P25 覆土下層
4	小形甕 土師器	A[15.6] B 17.9 C 7.5	底部から口縁部の破片。平底。体部は直線的に立ち上がる。口縁部はわずかに外反して、中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。外面中位ヘラ削り。	長石 砂粒 橙色 普通	60% P26 底部木炭或 覆土下層 竈内
5	甕 土師器	A[27.2] B(10.1)	体部から口縁部の破片。体部は直線的に外傾して立ち上がる。口縁部は強く外反して、中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	5% P27 覆土下層 竈内

図版番号	器種	計測値			出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)		
6	支脚	(8.2)	(11.9)	(520)	覆土下層	D P 2 30%

第8号住居跡 (第19図)

位置 調査A区中央部, E3g区。

規模と平面形 長軸4.65m, 短軸4.40mの隅丸長方形である。

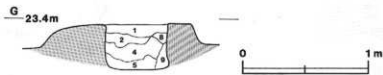
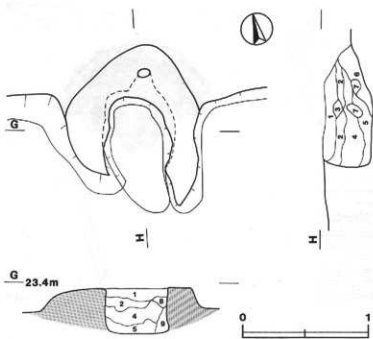
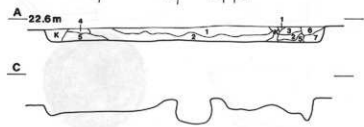
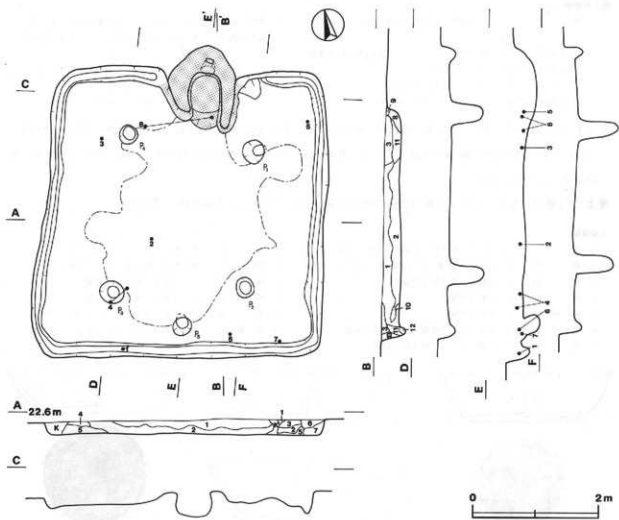
主軸方向 N-13°-E

壁 壁高は14~26cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅15~30cm, 下幅4~15cm, 深さ6~17cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、中央が硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部の一部は崩落しており、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで130cm, 最大幅125cm, 壁外への掘り込みは35cmである。火床部は床面を17cmほど掘り窪めており、火熱を受けて赤変しているが、あまり硬化していない。煙道部は内傾し、急に立ち上がる。



第19图 第8号住居跡実測图

覆土層解説

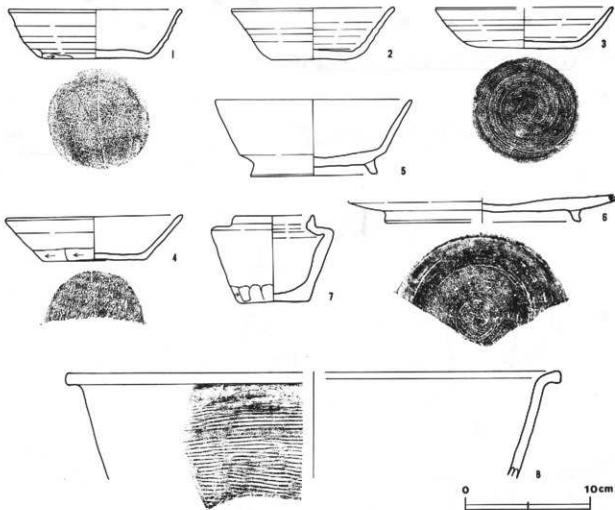
1 褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量	6 琥珀赤褐色	焼土小・中ブロック多量, 炭化粒子中量
2 明赤褐色	ローム粒子・焼土中・大ブロック中量, 焼土粒子多量	7 琥珀赤褐色	焼土粒子・焼土小・中ブロック多量, 炭化粒子中量
3 明赤褐色	焼土大ブロック中量	8 明褐色	ハードローム小ブロック少量, 焼土小ブロック多量, 焼土粒子中量
4 赤褐色	焼土大ブロック多量, 砂中量	9 明褐色	焼土粒子・焼土小・中ブロック多量
5 明赤褐色	焼土中・大ブロック多量, 砂少量		

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁とP₄は径30~38cmの円形, P₂とP₃は長径32~41cm, 短径28~37cmの楕円形で, いずれも深さ50~60cmの主柱穴である。P₅は長径30cm, 短径27cmの楕円形で, 深さ30cmの出入口施設に伴うピットである。

覆土 13層からなり, ブロック状の堆積の状況が見られることから, 人為堆積と思われる。

土層解説

1 褐色	ローム粒子・焼土粒子多量, 炭化粒子少量	8 褐色	焼土粒子・焼土小ブロック少量
2 褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量	9 明褐色	焼土粒子・焼土小ブロック少量
3 褐色	ローム粒子・焼土粒子中量	10 褐色	ローム粒子・焼土粒子中量
4 褐色	ローム粒子少量	11 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子中量
5 明褐色	ローム粒子中量	12 褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
6 褐色	ローム中ブロック中量, ローム粒子少量	13 明褐色	ローム粒子・ローム小・中ブロック多量
7 褐色	ローム中ブロック・焼土粒子中量		



第20図 第8号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片 293 点, 須恵器片 191 点が出土している。1 と 4 の須恵器坏, 6 の須恵器盤が南壁寄りの覆土下層から, 2 の須恵器坏が中央の覆土下層から, 3 の須恵器坏が西壁寄りの覆土下層から, 5 の須恵器高台付坏が東壁寄りの覆土下層から, 7 の須恵器短頸壺が南東コーナー部の床面直上から, 8 の須恵器鉢が竈内と竈西側の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 竈の火床部の状況から, 短期間しか使用されなかった住居跡と考えられる。時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 奈良時代の 8 世紀後葉と考えられる。

第 8 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(mm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第20図 1	坏 須恵器	A 13.9 B 3.9 C 8.6	体部, 口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。底部はわずかに外反する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部外面下位へラ削り。底部手持ちへラ削り。	長石 雲母 砂粒 黄灰色 普通	90% P28 覆土下層
2	坏 須恵器	A 13.1 B 4.2 C 6.4	体部, 口縁部一部欠損。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。底部はわずかに外反する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。底部手持ちへラ削り。	長石 雲母 砂粒 灰白色 普通	70% P29 覆土下層
3	坏 須恵器	A [4.0] B 1.3-1.5 C 8.2	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。底部回転へラ削り。	長石 砂粒 灰色 良好	60% P30 覆土下層
4	坏 須恵器	A 13.8 B 3.5 C 8.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて, 直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。底部外面下位へラ削り。底部手持ちへラ削り。	長石 石英 砂粒 よい黄褐色 普通	50% P31 覆土下層
5	高台付坏 須恵器	A 15.6 B 6.2 D 10.2 E 1.1	体部, 口縁部一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。底部回転へラ削り。高台部貼り付け, ロクロナデ。	スコリア 砂粒 よい黄褐色 普通	80% P32 覆土下層
6	盤 須恵器	B (2.1) D [15.6] E 1.0	高台部から体部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転へラ削り。高台部貼り付け, ロクロナデ。	長石 雲母 砂粒 黄灰色 普通	40% P33 覆土下層
7	短頸壺 須恵器	A 6.3 B 7.0 C 5.6	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。上位で最大径を有し, 強く内彎する。口縁部は直立する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。底部外面下位へラ削り。底部手持ちへラ削り。	長石 砂粒 よい褐色 良好	100% P34 床面直上
8	鉢 須恵器	A [39.6] B (8.5)	体部から口縁部の破片。体部は直線的に外傾して立ち上がる。口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面平行叩き, 内面ナデ。	長石 雲母 砂粒 外面黄褐色 内面よい黄褐色 普通	5% P35 竈内 覆土下層

第 9 号住居跡 (第 21 図)

位置 調査A区北部, E3gs区。

重複関係 本跡は第 5 号溝と重複している。第 5 号溝が, 本跡の北壁から東壁中央にかけて掘り込んでいると考えられることから, 本跡が古い。

規模と平面形 長軸 4.50 m, 短軸 4.50 m の隅丸方形である。

主軸方向 N-10°-W

壁 壁高は 25~30 cm で, 外傾して立ち上がる。

床 平坦で, 中央が硬く踏み固められている。

炉 炉は北壁寄りに位置し, 長径 88 cm, 短径 69 cm の楕円形で, 2 cm ほど掘り窪められた地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変し, 硬く締まっている。

ピット 4 か所 (P₁~P₄)。P₁とP₂は径 40~64 cm の円形, P₃は長径 48 cm, 短径 39 cm の楕円形で, いずれも深

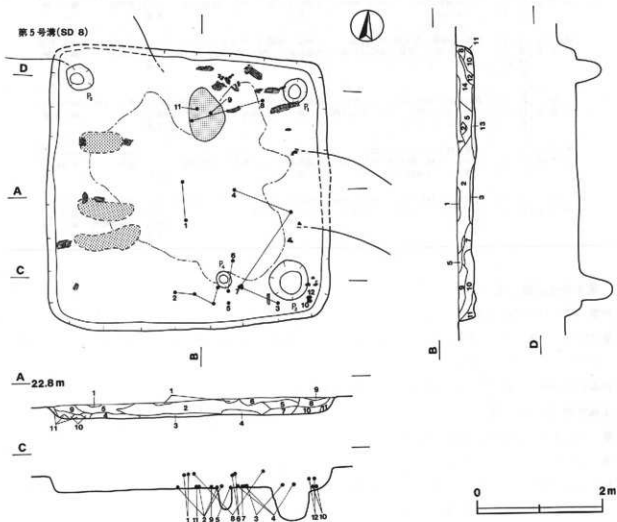
さ 40~55 cmの支柱穴である。P₁は長径 26 cm, 短径 23 cmの楕円形, 深さ 35 cmで, 性格は不明である。

覆土 14層からなり, ロームブロックを多く含有し, 不自然な堆積の状況が見られることから, 人為堆積と思われる。

土層解説

1 暗褐色	ソフトローム中ブロック中量	8 褐色	ローム粒子多量, ソフトローム中ブロック少量
2 極暗褐色	ソフトローム中ブロック中量, 焼土粒子少量	9 明褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子中量
3 極暗褐色	ローム粒子中量	10 明褐色	ソフト・ハードローム小・中ブロック中量
4 暗褐色	ソフトローム小・中ブロック・黒色土中量	11 明褐色	ソフトローム中ブロック少量
5 暗褐色	黒色土中量	12 褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子・焼土小ブロック中量
6 褐色	ローム粒子・暗褐色土中量	13 暗褐色	ソフトローム中ブロック・焼土粒子中量
7 褐色	ローム粒子少量, 暗褐色土中量	14 褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子中量

遺物 土師器片 100 点, 須恵器片 13 点, および混入した縄文土器片 3 点が出土している。1 の須恵器環が中央の覆土上層から, 2 と 5 の土師器高環が南壁寄りの床面直上から, 3 と 7 の土師器高環が覆土下層から, 6 の土師器高環が覆土上層から, 4 の土師器高環が中央と東壁寄りの覆土下層から, 8 の土師器壺が炉内と付近の覆土上層から, 9 と 11 の土師器甕が炉内から, 10 の土師器甕が南東コーナー部の覆土下層から, 12 の土師器甕が覆土中層からそれぞれ出土している。1 の須恵器環は時期的な違いがあることから, 流れ込みと考えられる。

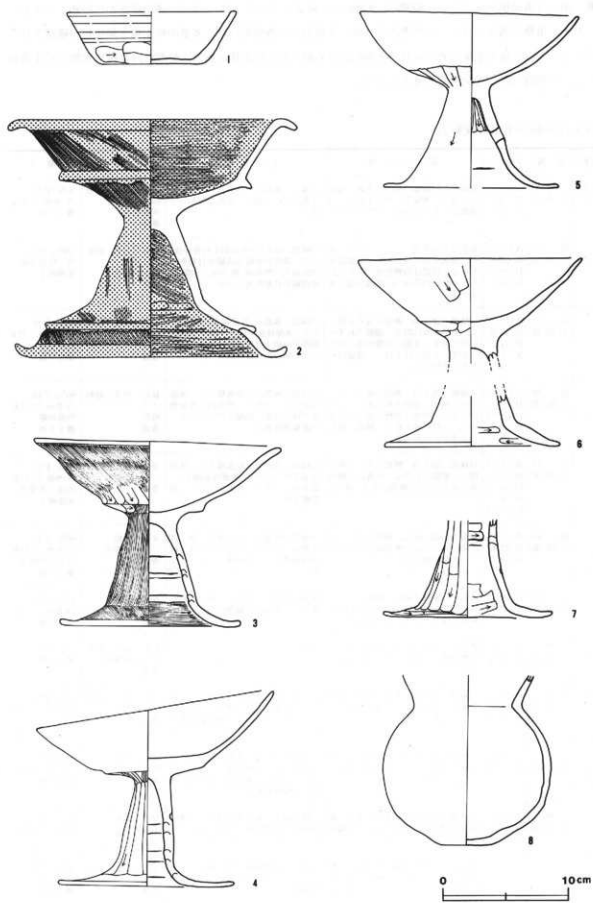


第 21 図 第 9 号住居跡実測図

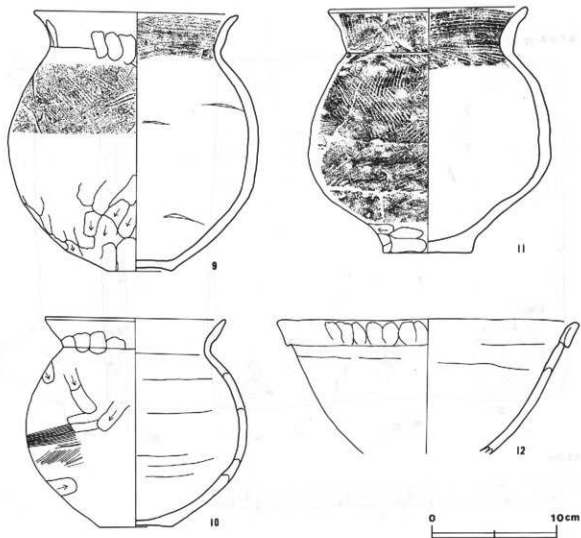
所見 第5号溝が掘り込んでいる範囲は、土層からは確認できなかった。しかし、溝の深さが住居跡より浅かったため、遺物の残りが良かったと考えられる。東壁沿いと西壁沿いに、多量の焼土塊と炭化材が確認されていることから、焼失家屋と考えられ、人為的に埋め戻された可能性がある。時期は、遺構の形態や出土遺物から、古墳時代の5世紀前葉と考えられる。

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第22図 1	環須恵器	A[13.4] B 4.2 C 8.0	底部から口縁部の破片。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。口縁部はわずかに外反して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。外面下位へラ削り。底部手持ちへラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰青褐色 普通	55% P36 内・外面スス付着 覆土上層
2	高土師器 坏	A9.6-11.9 B 23.9 D 20.0 E 10.1	脚部は丸みを持って、ラッパ状に開く。裾部低位に段を持ち、端部は反り返る。環部は内彎気味に立ち上がり、下位に段を持つ。端部は強く外反する。	口縁部、体部内・外面刷毛目整形後、ナデ。脚部外面縦方向刷毛目整形後、内面刷毛目整形後、横方向へラ削り。裾部刷毛目整形後、ナデ。	長石 石英 砂粒 スコリア ぶいり 褐色 普通	100% P38 内・外面赤彩 床面直上
3	高土師器 坏	A 19.7 B 15.0 D 14.2 E 8.2	口縁部一部欠損。脚部は丸みを持って、ラッパ状に開く。端部でわずかに反り返る。環部は内彎気味に立ち上がり、下位に段を持つ。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面刷毛目整形後、ナデ。体部外面下位へラ削り。脚部、裾部外面刷毛目整形後、ナデ。内面ナデ。脚部内面輪積成有り。	長石 石英 雲母 砂粒 褐色 普通	95% P39 内・外面スス付着 内面輪積 覆土上層
4	高土師器 坏	A17.5-19.5 B17-19.5 D14.1-14.4 E 8.8	口縁部一部欠損。脚部は細く、ラッパ状に開く。端部で反り返り、平坦に広がる。環部は内彎気味に立ち上がり、下位に段を持つ。脚部に穿孔しようとした痕有り。	口縁部、体部内・外面横ナデ。体部外面下位へラ削り。脚部内・外面横ナデ後、外面一部縦方向へラナデ。内面輪積成有り。	長石 石英 砂粒 スコリア 褐色 普通	90% P40 内・外面スス付着 内面輪積 覆土上層
5	高土師器 坏	A17.4-17.4 B17.4-17.4 D[14.0] E 8.2 孔径 1.0	口縁部一部欠損。脚部はラッパ状に開く。裾部で広がる。環部は内彎気味に立ち上がる。脚部に孔1つ有り。	口縁部、体部内・外面横ナデ。体部外面下位へラ削り。脚部外面横ナデ、縦方向へラナデ。内面へラナデ。端部横ナデ。	長石 砂粒 ぶいり 赤褐色 普通	90% P41 内・外面スス付着 内面二次焼成 床面直上
6	高土師器 坏	A 17.8 B (12.6) D 14.3	裾部と環部の破片。裾部はラッパ状に開く。環部は内彎気味に立ち上がり、下位に段を持つ。	口縁部、体部内・外面横ナデ後、体部外面へラナデ、下位へラ削り。裾部外面横ナデ。内面横ナデ後、へラ削り。	長石 砂粒 ぶいり 赤褐色 普通	80% P42 内・外面スス付着 内面二次焼成 覆土上層
7	高土師器 坏	D 13.4 E (7.8)	脚部から環部の破片。脚部はラッパ状に開く。端部はわずかに外反する。脚部に穿孔しようとした痕有り。	脚部、裾部内・外面へラ削り。端部横ナデ。脚部内面輪積成有り。	長石 砂粒 褐色 普通	45% P43 内・外面スス付着 覆土上層
8	壺土師器	B (13.6) C 3.8	底部から頸部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。頸部は外反する。	体部内・外面ナデ。	長石 石英 砂粒 ぶいり 赤褐色 普通	45% P44 覆土上層
第23図 9	壺土師器	A 16.3 B15.5-16.5 C 5.0	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部、体部外面刷毛目整形後、横ナデ。外面下位へラ削り。内面へラナデ。底部へラ削り。頸部指環成有り。	長石 石英 砂粒 ぶいり 褐色 普通	95% P45 内・外面スス付着 内面
10	壺土師器	A 14.4 B14.1-14.9 C 5.6	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面刷毛目整形後、へラ削り。底部へラ削り。頸部外面指環成。体部内面輪積成有り。	長石 砂粒 褐色 普通	95% P46 外面スス付着 覆土下層
11	壺土師器	A 15.6 B15.5-17.0 C 7.0	口縁部一部欠損。突出した平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部刷毛目整形後、横ナデ。体部外面刷毛目整形後、ナデ。下位へラ削り。内面ナデ。底部へラ削り。	長石 砂粒 明赤褐色 普通	85% P47 外面スス付着
12	壺土師器	A 23.4 B (10.7)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反して立ち上がる。折り返し口縁。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。口縁部外面指環成。体部内面輪積成有り。	長石 石英 砂粒 ぶいり 赤褐色 普通	50% P37 内面輪積 覆土中層



第 22 图 第 9 号住居跡出土遺物実測図(1)



第23図 第9号住居跡出土遺物実測図(2)

第10号住居跡 (第24図)

位置 調査A区中央部, E4m区。

重複関係 本跡は第5号溝と重複している。第5号溝が、本跡の西コーナー部を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸5.54m, 短軸5.43mの隅丸方形である。

主軸方向 N-48'-W

壁 壁高は32~38cmで、外傾して立ち上がる。

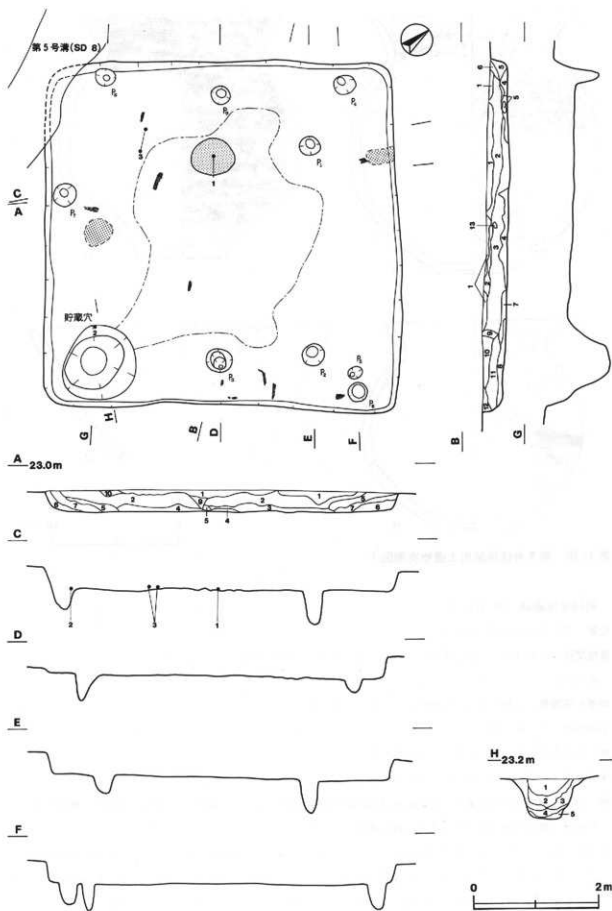
床 平坦で、中央が硬く踏み固められている。

炉 炉は北西壁寄りに位置し、長径66cm, 短径56cmの楕円形で、ほとんど掘り込みのない地床炉と推定される。

炉床は一部が火熱を受けて赤変し、硬く締まっている。

ビット 9か所 (P₁~P₉)。P₁とP₂は径30~37cmの円形で、深さ28~54cmの主柱穴である。P₃は長径42cm, 短径37cmの楕円形で、深さ44cmの出入口施設に伴うビットである。P₄, P₅, P₇, およびP₈は長径25~40cm, 短径19~35cmの楕円形, P₆とP₉は径29~32cmの円形で、いずれも深さ21~41cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南コーナー部に付設されている。長径125cm, 短径111cmの不整楕円形で、深さ63cmである。断面形は



第24图 第10号住居跡実測图

∟状である。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | 焼土小ブロック多量、炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 5 黒褐色 | ローム小ブロック多量 |
| 3 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量 | | |

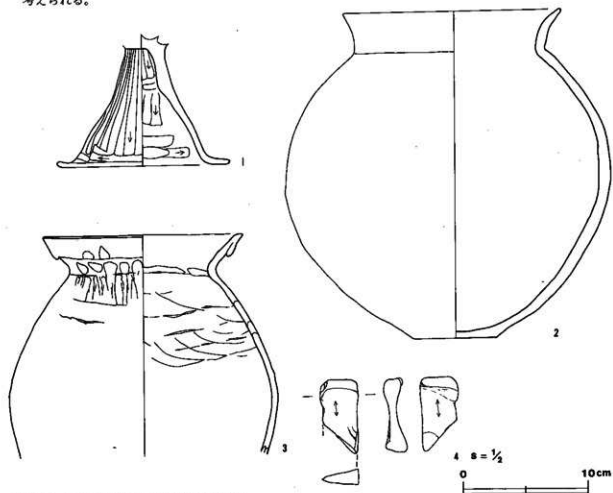
覆土 13層からなり、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|--------|-----------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子多量、ローム中ブロック中量 | 8 暗褐色 | ローム小・中ブロック多量、褐色土中量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量 | 9 暗褐色 | ローム小ブロック多量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子中量 | 10 褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子多量 |
| 4 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子中量 | 11 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小・中ブロック多量 |
| 5 褐色 | ローム小・中ブロック多量 | 12 暗褐色 | ローム小・中ブロック多量 |
| 6 褐色 | ローム粒子多量、暗褐色土中量 | 13 灰褐色 | ローム大ブロック少量 |
| 7 褐色 | ローム粒子多量 | | |

遺物 土師器片156点、須恵器片13点、砥石1点が出土している。1の土師器高環が炉内から、2の土師器甕が貯蔵穴内から、3の土師器壺が西コーナー一部の覆土下層から、4の砥石が南東壁寄りの覆土中からそれぞれ出土している。

所見 北東壁と南西壁付近に焼土塊が、南東壁付近に炭化材が多く確認されていることから、焼失家屋と考えられ、人為的に埋め戻された可能性がある。時期は、遺構の形態や出土遺物から、古墳時代の5世紀前葉と考えられる。



第25図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第25図 1	高土師器	B(10.6) D 13.6	胴部から腹部の破片。胴部は中位が太く、腹部はラッパ状に開く。底部はわずかに外反する。	胴部内・外面ヘラナデ。腹部内・外面横ナデ。	長石 砂粒 にふい赤褐色 普通	45% P48 炉内
2	甕土師器	A 17.2 B 15.3-16.1 C 6.7	体部、口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部ヘラナデ。	長石 石英 砂粒 明赤褐色 普通	75% P49 外面スス付着 貯蔵穴内
3	壺土師器	A 15.8 B(17.7)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。折り返し口縁。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラナデ。体部外面ナデ。内面ヘラナデ。輪轆痕有り。頸部外面指頭痕有り。	長石 石英 砂粒 にふい褐色 普通	45% P50 覆土下層

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
4	磁石	(3.9)	(2.0)	(1.1)	(7)	凝灰岩	覆土中	Q1

第11号住居跡 (第26図)

位置 調査A区中央部、F3as区。

重複関係 本跡は第1号堀と重複している。第1号堀が、本跡の中央部を東壁から西壁にかけて掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸6.94m、短軸6.92mの方形である。

主軸方向 N-20°-W

壁 壁高は33cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、特に硬く踏み固められている部分はない。

炉 第1号堀に掘り込まれているため、炉の北半分は失われている。炉は西壁寄りに位置し、径50cmの円形で、4cmほどの掘り窪められた地床炉と推定される。炉床は一部が火熱を受けて赤変し、硬く締まっている。

ピット 4か所 (P₁-P₄)。P₁-P₃は径36~40cmの円形で、深さ66~79cmの主柱穴である。P₄は長径50cm、短径41cmの楕円形で、深さ18cmの出入口施設に伴うピットである。

貯蔵穴 東コーナー部に付設されている。長径97cm、短径80cmの不整楕円形で、深さ48cmである。断面形はU状である。

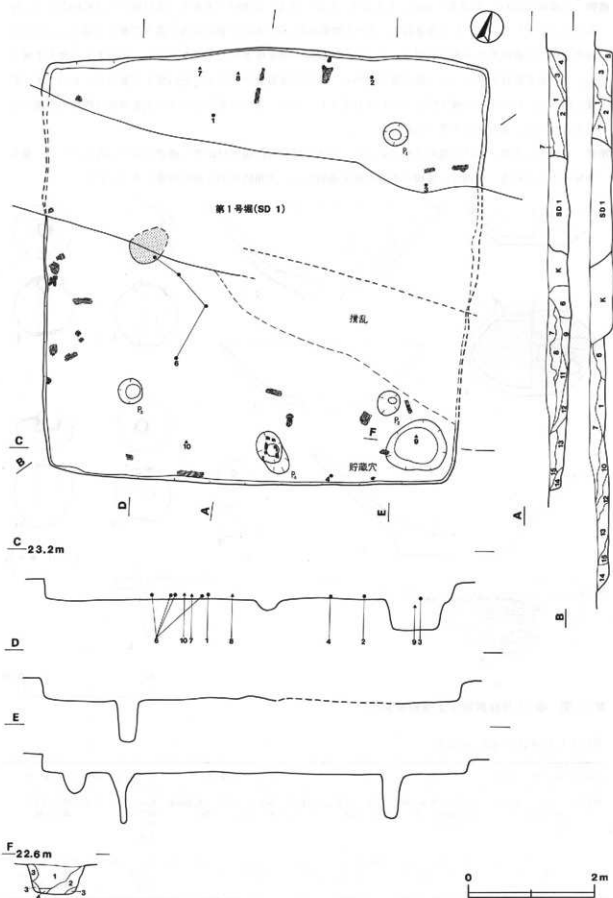
貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|------|----------------------|-------|----------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子多量、ローム小・中ブロック中量 | 3 褐色 | ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子多量、ローム中ブロック中量 | 4 暗褐色 | 焼土小ブロック中量 |

覆土 15層からなり、ブロック状の推積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

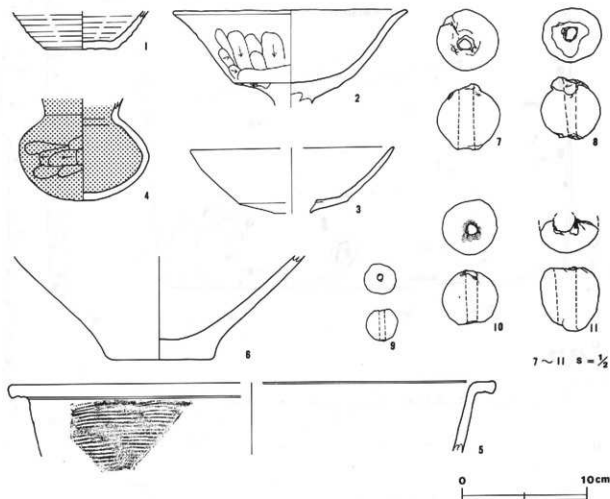
- | | | | |
|-------|---------------------------|--------|---------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・褐色土中量 | 9 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土小ブロック少量、褐色土多量 |
| 2 褐色 | ソフトローム小・中ブロック多量、炭化小ブロック少量 | 10 暗褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・褐色土多量 |
| 3 明褐色 | 炭化粒子・炭化小ブロック中量 | 11 褐色 | ローム粒子多量、炭化粒子少量 |
| 4 明褐色 | 焼土小・中ブロック・炭化小ブロック中量 | 12 暗褐色 | ローム粒子多量 |
| 5 褐色 | ローム粒子多量、炭化粒子中量 | 13 褐色 | 炭化中ブロック・暗褐色土多量 |
| 6 暗褐色 | ローム小・中ブロック少量、褐色土中量 | 14 明褐色 | 炭化粒子中量 |
| 7 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック・焼土粒子中量 | 15 褐色 | ローム小ブロック・炭化粒子中量、炭化小ブロック少量 |
| 8 暗褐色 | ローム粒子多量、焼土小ブロック少量、褐色土多量 | | |



第26图 第11号住居跡実測图

遺物 土師器片254点、須恵器片45点、土玉5点、および混入した瀬戸・美濃系のみ目鉢片を含む陶器9点、磁器1点が出土している。1の須恵器環、2の土師器高環、7、8の土玉が北西壁寄りの覆土下層から、3の土師器高環が北東壁寄りの覆土下層から、4の土師器甕が南東壁寄りの床面直上から、10の土玉が覆土下層から、5の須恵器鉢が北コーナー部の覆土中から、6の土師器甕が炉内と中央の覆土下層から、9の土玉が野藏穴内から、11の土玉が覆土中からそれぞれ出土している。1の須恵器環と5の須恵器鉢は時期的な違いがあることから、流れ込みと考えられる。

所見 東壁から中央にかけて攪乱されているが、四方の壁付近に炭化材が多く確認されていることから、焼失家屋と考えられる。時期は、遺構の形態や出土遺物から、古墳時代の5世紀中葉と考えられる。



第27図 第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第27図 1	環 須恵器	B(3.0) C 5.7	底部から体部の破片。平底。体部から口縁部にかけ、直線的に外傾して立ち上がる。	体部内・外面クロナテ。底部回転ヘラ切り後、手持ちへう削り。	長石 石英 雲母 砂粒 褐灰色 普通	40% P51 覆土下層
2	高環 土師器	A 18.7 B(7.8)	環部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナテ。体部内・外面ナテ、外面下位へう削り。	長石 石英 砂粒 赤褐色 普通	40% P54 内面二次焼成 覆土下層

3	高土器 環器	A [16.4] B (5.2)	環部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナズ。体部内・外面ナズ。	長石 石英 雲母 砂粒 明赤褐色 普通	10% P55 内面二次焼成 覆土下層
4	埴土器 器	B (8.1) C 15-3.3	底部から口縁部の破片。丸底。体部はそろはん玉状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。	体部外面上位ナズ。中位へう削り。内面ナズ。底部へう削り。	長石 石英 砂粒 赤褐色 普通	70% P56 内・外面赤影 床面直上
5	鉢 須臾器	A [39.6] B (5.7)	体部。口縁部一部欠損。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナズ。体部外面平行叩き。内面ナズ。	雲母 砂粒 灰黄色 普通	5% P53 覆土中
6	甕 土器	B (8.3) C 8.4	底部から体部の破片。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	体部内・外面ナズ。底部へう削り。	長石 石英 砂粒 明赤褐色 普通	10% P57 炉内 覆土下層

図版番号	器種	計測値					出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
7	土玉	3.5	3.3	3.5	0.8-0.9	29	覆土下層	DP 3 100%
8	土玉	3.2	3.1	3.2	0.6-0.7	25	覆土下層	DP 4 100%
9	土玉	1.7	1.7	1.7	0.3	4	貯蔵穴内	DP 6 100%
10	土玉	2.8	2.9	2.8	0.5-0.6	21	覆土下層	DP 5 100%
11	土玉	3.4	(3.1)	3.4	[1.0]	(16)	覆土中	DP 7 50%

第12号住居跡 (第28図)

位置 調査A区中央部、E4j区。

重複関係 本跡は、第17F号土坑ならびに第1号堀と重複している。第17F号土坑が本跡の北東壁を、第1号堀が本跡の南コーナー部を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸6.50m、短軸6.40mの方形である。

主軸方向 N-32°-W

壁 壁高は28-38cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、全面が硬く踏み固められている。

炉 炉は北西壁寄りに位置し、長径83cm、短径70cmの楕円形で、5cmほど掘り窪められた地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変し、硬く締まっている。

炉土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 5か所 (P₁-P₅)。P₁とP₂は径34cmの円形、P₃とP₄は長径34-40cm、短径28-32cmの楕円形で、いずれも深さ119-123cmの支柱穴である。P₅は長径32cm、短径26cmの楕円形、深さ84cmであり、性格は不明である。

貯蔵穴 南コーナー部に付設され、規模は、長径 [91] cm、短径 [60] cmの楕円形と推定される。第1号堀に掘り込まれているが、残った部分から焼土塊、炭化材、土器片2点が出土している。

覆土 24層からなり、ブロック状の堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------|--------|------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 6 黒色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック少量 | 7 黒褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック多量 | 8 黒色 | ローム粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子中量 | 9 暗褐色 | ローム中ブロック少量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子・炭化小ブロック少量 | 10 暗褐色 | ローム大ブロック中量 |

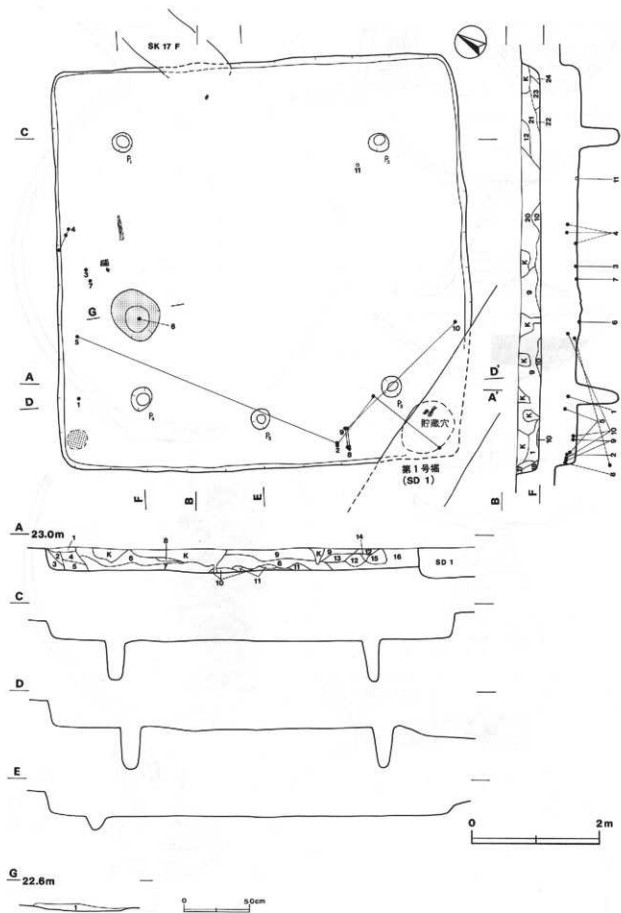
11 黒褐色	ローム粒子・ローム小ブロック少量	18 暗褐色	ローム小ブロック多量
12 黒褐色	ローム粒子微量	19 暗褐色	ローム粒子少量
13 暗褐色	ローム大ブロック少量	20 黒色	ローム粒子・炭化粒子少量
14 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	21 極暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
15 黒褐色	焼土粒子少量	22 暗褐色	ローム粒子中量
16 黒褐色	ローム小ブロック少量	23 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
17 極暗褐色	ローム小ブロック少量	24 暗褐色	ローム小ブロック中量

遺物 土師器片139点, 須恵器片9点, ガラス玉1点が出土している。特に, 土師器の高坏は35点が出土している。ほとんどの遺物は北西壁寄りと南コーナー部に集中している。1の土師器碗が西コーナー部の覆土中層から, 2の土師器高坏, 9の土師器壺, 8ならびに10の土師器甕が南コーナー部の覆土中層から, 3の土師器高坏が北西壁寄りの覆土下層から, 4の土師器高坏が覆土中層から, 5の土師器高坏が南コーナー部の覆土中層から, 6の土師器高坏が炉内から, 7の土師器増が炉付近の覆土下層から, 11のガラス玉が覆土中からそれぞれ出土している。

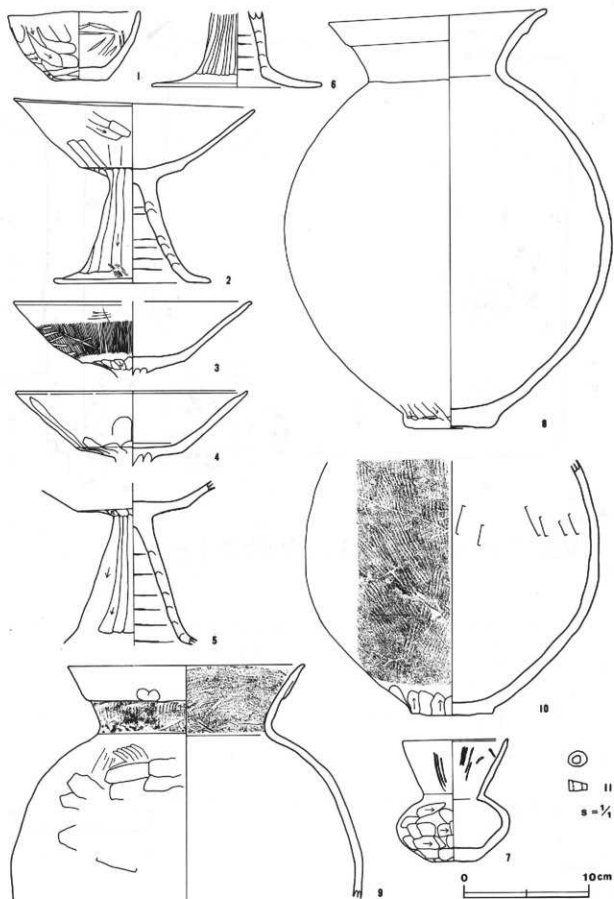
所見 北西壁付近に, 炭化材と焼土塊が確認できることから, 焼失家屋と考えられ, 人為的に埋め戻された可能性がある。時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 古墳時代の5世紀前葉から中葉と考えられる。

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第29図 1	土師器 碗	A 16-11 B 11-11 C 4-11	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ, 内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ, 体部外面縦方向へラナデ, 下位へラ削り, 内面ナデ後, ヘラ磨き。底部へラ削り。	長石 石英 砂粒 におい褐色 普通	95% P58 覆土中層
2	高土師器 高坏	A 19.2 B 11-11 D 12.2 E 8.1	胴部, 裾部一部欠損。胴部はラップ状に開く。裾部は平坦に広がる。坏部は下位に線をもち, 直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ, 体部外面ナデ後, ヘラナデ。内面横ナデ, 胴部外面へラナデ, 下位刷毛目整形, 内面横線有り。裾部外面横ナデ。	長石 石英 砂粒 明赤褐色 普通	60% P59 覆土中層
3	高土師器 高坏	A [18.8] B (6.1)	坏部の破片, 坏部は下位に線をもち, 直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ, 体部外面刷毛目整形後, ヘラナデ, 下位へラ削り, 内面ナデ。	長石 石英 砂粒 におい赤褐色 普通	40% P60 覆土下層
4	高土師器 高坏	A 18.5 B (6.0)	坏部の破片, 坏部は下位に線をもち, 直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ, 体部外面へラナデ, 下位へラ削り, 内面ナデ。	長石 スコリア 砂粒 におい赤褐色 普通	30% P61 覆土中層
5	高土師器 高坏	B (13.0) E (10.3)	裾部から坏部の破片。胴部はラップ状に開く。坏部は下位に線をもち, 直線的に外傾して立ち上がる。	体部外面ナデ, 下位へラ削り。胴部外面縦方向へラナデ。内面横ナデ, 輪横線有り。	長石 スコリア 砂粒 におい赤褐色 普通	60% P62 内面刷毛 覆土中層
6	高土師器 高坏	D 13.6 E (6.0)	胴部から裾部の破片。胴部はラップ状に開く。増部でおずかに外反する。	胴部外面へラナデ, 内面横線有り。裾部内・外面横ナデ。	長石 雲母 砂粒 灰褐色 普通	40% P63 炉内
7	土師器 増	A 8.4 B 9.7 C 3.8	口縁部一部欠損。平底。体部はそれほどん玉状を呈し, 口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ後, ヘラ磨き。体部外面ナデ, 下位へラナデ, 内面ナデ。底部へラ削り。	長石 石英 砂粒 赤褐色 普通	95% P64 覆土下層
8	土師器 壺	A 17.3 B 11-11 C 6.9	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がる。折り返し口縁。	口縁部内・外面横ナデ, 体部内・外面ナデ, 外面下位へラナデ。底部へラ削り。	長石 石英 砂粒 スコリア におい褐色 普通	70% P65 覆土中層
9	土師器 壺	A 18.8 B (18.7)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がる。折り返し口縁。	口縁部内・外面刷毛目整形後, ナデ, 体部外面刷毛目整形後, ヘラ削り。内面ナデ。口縁部指頭横線有り。	長石 石英 砂粒 スコリア におい黄褐色 普通	40% P66 覆土中層
10	土師器 甕	B (20.3) C 6.5	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面刷毛目整形後, ナデ, 下位へラ削り。内面へラナデ。底部へラ削り。	長石 石英 砂粒 におい黄褐色 普通	30% P67 覆土中層



第 28 图 第 12 号住居跡実測图



第29图 第12号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値					出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
第29図 11	ガラス玉	0.3	0.5	0.3	0.2	0.5	覆土中	ガラス1

第13号住居跡 (第30図)

位置 調査A区東部, E4h0区。

規模と平面形 長軸3.17m, 短軸3.10mの隅丸方形である。

主軸方向 N-8°-E

壁 壁高は29~35cmで, 外傾して立ち上がる。

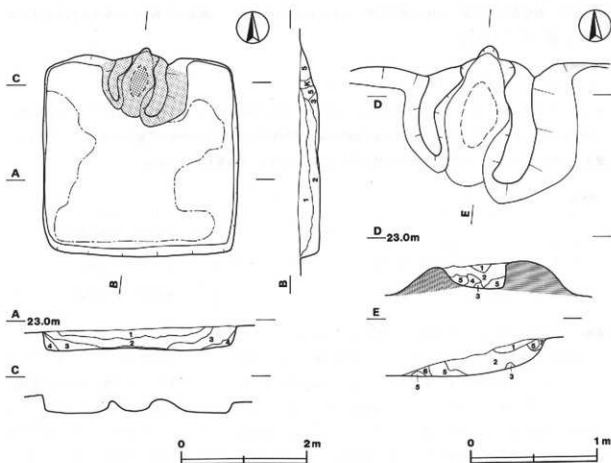
床 平坦で, 東壁と西壁の一部周辺を除き, 硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 両側の袖部が残存している。

規模は, 煙道部から焚口部まで110cm, 最大幅138cm, 壁外への掘り込みは14cmである。火床部は, 火熱を受けて赤変し, 硬化している。東側の袖部は西側の袖部に比べて, 厚く粘土で作られている。煙道部は外傾し, 緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|--------|-------------------------------|
| 1 褐色 | 焼土粒子中量, 粘土粒子少量 | 5 濃い褐色 | 粘土粒子・砂多量, 粘土小ブロック中量 |
| 2 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子中量, 炭化小ブロック少量 | 6 褐色 | ローム小ブロック中量, 粘土粒子少量 |
| 3 赤褐色 | 焼土中ブロック中量 | 7 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量, ソフトローム小ブロック・砂少量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土小ブロック中量 | | |



第30図 第13号住居跡実測図

覆土 5層からなり、自然堆積と思われる。

土層解説

1 褐色	ローム小ブロック少量	4 褐色	ローム中ブロック少量
2 暗褐色	ローム中ブロック多量	5 暗褐色	ローム粒子多量
3 暗褐色	ローム小ブロック少量		

遺物 土師器片6点、須恵器片4点が出土している。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良から平安時代の8~9世紀と考えられる。

第14A号住居跡(第31,32図)

位置 調査A区南部、F4区。

重複関係 本跡は第11号溝と重複している。第11号溝が、本跡の東コーナー部を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸5.38m、短軸4.90mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-50°-W

壁 壁高は27cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 第11号溝に掘り込まれた東コーナー部と、擾乱を受けている北西壁と南西壁の一部は確認できないが、ほぼ全周していると推定される。上幅 [10~18] cm、下幅 [4~10] cm、深さ [4~6] cmで、断面形はU字状と推定される。

床 平坦で、中央が硬く踏み固められている。

炉 炉は北西壁寄りに位置し、径58cmの円形で、8cmほど掘り窪められた地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変し、硬く締まっている。

炉土層解説

- 1 明赤褐色 焼土中ブロック多量

ピット 4か所(P₁~P₄)。P₁とP₂は長径34cm、短径28~30cmの楕円形、P₃は径33cmの円形で、いずれも深さ50~60cmの主柱穴である。P₄は長径65cm、短径53cmの楕円形で、深さ30cmの出入口施設に伴うピットである。

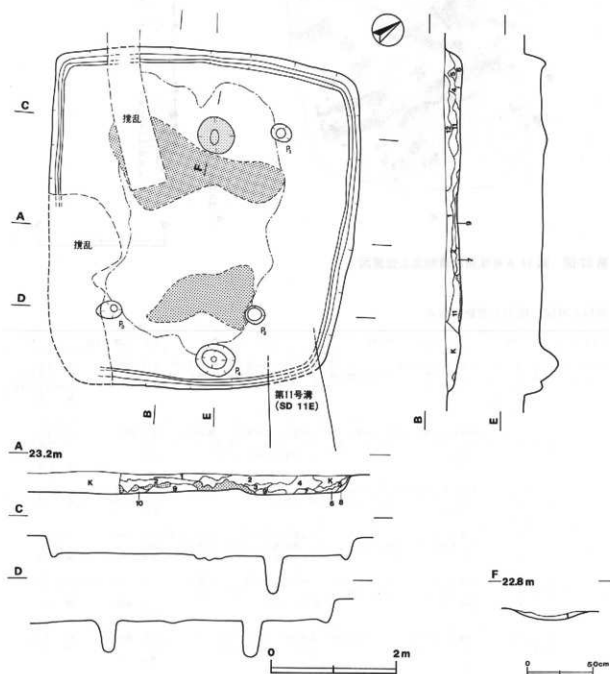
覆土 12層からなり、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

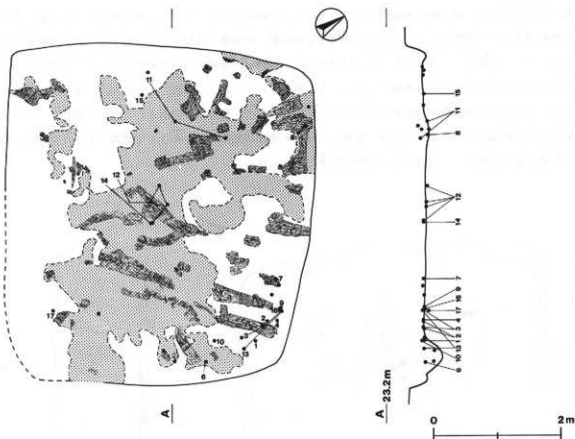
1 暗褐色	ローム粒子少量	7 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子少量
2 褐色	ハードローム大ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量	8 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量
3 黒褐色	ローム粒子少量	9 暗褐色	ローム中ブロック多量
4 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	10 黒褐色	炭化大ブロック多量
5 暗赤褐色	ローム中ブロック多量	11 褐色	ローム大ブロック多量
6 暗褐色	焼土粒子少量	12 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片190点、須恵器片9点、磨石1点、鉄滓3点、および混入した弥生土器片3点、瀬戸・美濃系の陶器片1点が出土している。ほとんどの遺物は東コーナー部付近と、炉周辺に集中している。1, 2, ならびに3の土師器高坏, 4, 6, ならびに7の土師器壺, 9, 10, ならびに13の土師器甕, 16の土師器瓶が東コーナー部の覆土下層から, 5の土師器壺が覆土中から, 14の土師器甕が中央の覆土下層から, 12の土師器甕が床面直上から, 8の土師器小形甕が北コーナー部の床面直上から, 11の土師器甕が炉付近の覆土下層から, 15の土師器甕が北西壁寄りの覆土下層から, 17の磨石が南コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 住居跡全体に、焼土塊と炭化材が広がっているのが確認できることから、焼失家屋と考えられ、人為的に埋め戻された可能性がある。炭化材の樹種同定の結果、住居跡の柱材はコナラ属クヌギ節ブナ科のものを主に、ハンノキ属カバノキ科のものを、屋根材にはイネ科タケ亜科のものを使用していることがわかった。これは茨城県の県南部から県西部にかけて、多く使用されていたといわれている柱材、屋根材と一致する。また、出土した土師器甕は南関東系の土器形式を持つもので、覆土中から出土した弥生土器片の一つが南関東系の壺の胴部であることから、他の地域との交流や関連が密接であったことが推測される。時期は、遺構の形態や出土遺物から、古墳時代の4世紀前葉と考えられる。



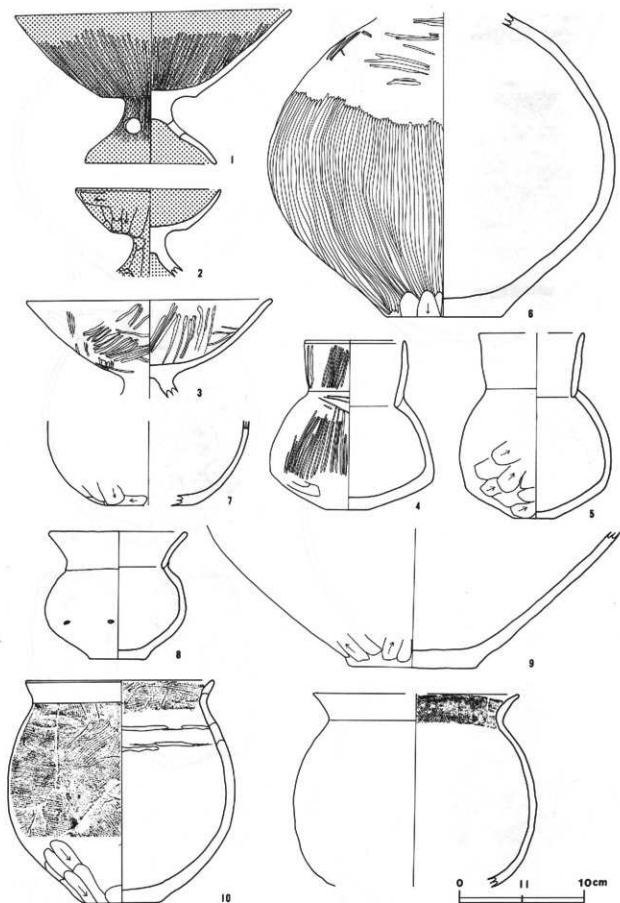
第31図 第14A号住居跡実測図



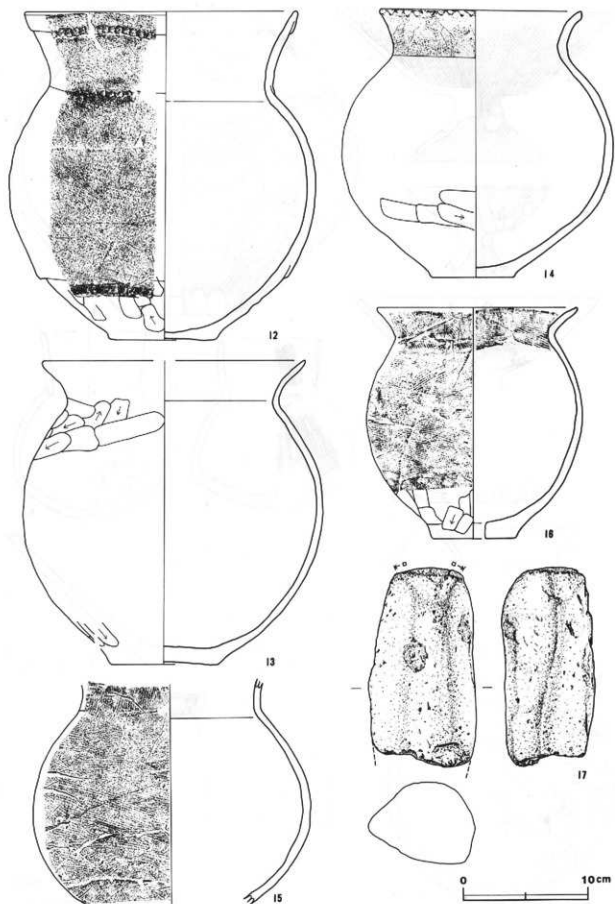
第32図 第14A号住居跡遺物出土位置図

第14A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第33図 1	高土師器	環 A 11.5-12.1 B 11.7-11.4 D 11.2-11.1 E 4.5 孔径 1.3	胴部一部欠損。胴部はラッパ状に開き、3孔を有する。環部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面へラ磨き。胴部外面へラ磨き、内面ナデ。	長石 砂粒 赤褐色 普通	95% P 68 内・外面赤彩 内・外面スス付着 覆土下層
2	高土師器	環 A 11.5 B (7.0)	胴部から口縁部の破片。胴部はラッパ状に開き、4孔を有する。環部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラナデ、内面ナデ。底部外面へラ磨り。胴部外面縦方向へラナデ。	長石 砂粒 赤褐色 普通	85% P 69 内・外面赤彩 内・外面スス付着 覆土下層
3	高土師器	環 A 19.5 B (7.8)	胴部から口縁部の破片。環部は内彎気味に立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面へラ磨き。	長石 石英 砂粒 にぶい赤褐色 普通	65% P 70 覆土下層
4	壺土師器	壺 A 7.9 B 13.5 C 3.3	口縁部一部欠損。平底。体部はそろばん玉状を呈し、口縁部は垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。外面へラ磨き。体部外面へラ磨き、外面下位へラナデ。底部へラ磨り。	長石 砂粒 褐色 普通	90% P 71 ひきこ糸 覆土下層
5	壺土師器	壺 A [8.4] B 14.8 C 3.2	口縁部一部欠損。平底。体部はそろばん玉状を呈し、口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラナデ。下位へラ磨り。内面ナデ。底部へラ磨り。	長石 石英 砂粒 スコリア にぶい黄褐色 普通	75% P 72 ひきこ糸 覆土中
6	壺土師器	壺 B (24.2) C 9.1	口縁部一部欠損。平底。体部は球形状を呈している。	体部外面へラ磨き、下位へラナデ。内面ナデ。底部へラ磨り後、ナデ。	長石 砂粒 褐色 普通	80% P 73 覆土下層
7	壺土師器	壺 B (6.7) C [6.8]	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。体部の最大径を有するところで、上部と切り離されている。	体部外面ナデ、下位へラ磨り。内面ナデ。底部へラ磨り。切断部磨り。	長石 砂粒 外面褐色 内面にぶい褐色 普通	30% P 75 覆土下層



第33图 第14 A号住居跡出土遺物実測図(1)



第34图 第14A号住居跡出土遺物実測図(2)

第33図	小形甕 土師器	A 10.7 B 10.2 C 4.4	体部、口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面横ナデ。外面下部部横有り。底部ナデ。	スコリア 砂粒 よいい橙色 普通	70% P80 覆土直上
9	甕 土師器	B (11.1) C 10.2	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。体部下位で上部と切り離されている。	体部外面ナデ、下位へう陥り。底部ナデ。切断部有り。	長石 石英 砂粒 スコリア 橙色 普通	30% P74 覆土下層
10	甕 土師器	A 15.0 B 17.1-17.5 C 5.3	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反して立ち上がる。	口縁部内・外面、体部外面刷毛目整形後、ナデ。体部外面下位へう陥り。体部内面へうナデ。輪軸横有り。底部へう陥り。	長石 砂粒 橙色 普通	85% P76 外面スス付着 覆土下層
11	甕 土師器	A [16.2] B (15.4)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部外面横ナデ。内面刷毛目整形後、ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	40% P82 覆土下層
第34図	甕 土師器	A 21.2 B 21.1-21.1 C 8.0	体部、口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、下位に壁を折つ。口縁部は外反する。折り返し口縁。体部下位の壁と口縁直下に肩目を押しつけたような突起が流る。	口縁部内・外面刷毛目整形後、ナデ。体部外面刷毛目整形後、ナデ。下位へう陥り。内面ナデ。底部ナデ。	長石 砂粒 スコリア よいい橙色 普通	75% P78 外面スス付着 南関東系 灰土直上
13	甕 土師器	A [20.9] B 24.3 C 8.6	体部、口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。体部外面へうナデ後、ナデ。内面ナデ。底部へう陥り後、ナデ。	長石 砂粒 スコリア よいい橙色 普通	60% P81 内・外面スス付着 覆土下層
14	甕 土師器	A 16.0 B 17.1-17.5 C 6.6	体部、口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反して立ち上がる。口唇部に筋目が流る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面刷毛目整形後、ナデ。下位へう陥り。内面ナデ。底部へう陥り後、ナデ。	長石 砂粒 スコリア 橙色 普通	80% P77 内・外面スス付着 南関東系 覆土下層
15	甕 土師器	B (17.7)	体部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面刷毛目整形後、ナデ。内面ナデ。	長石 砂粒 スコリア 橙色 普通	40% P83 覆土下層
16	甕 土師器	A 16.0 B 18.5 C 6.4	体部、口縁部一部欠損。平底。単孔式。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面刷毛目整形後、ナデ。体部外面刷毛目整形後、ナデ。下位へう陥り。内面ナデ。底部へう陥り。	長石 砂粒 スコリア 橙色 普通	70% P79 覆土下層

図版番号	器種	計 測 値				石質	出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
17	磨石	(10.5)	(5.7)	(5.0)	(383)	安山岩	覆土下層	Q2

第14B号住居跡 (第35,36図)

位置 調査A区東部、F4de区。

重複関係 本跡は第7号溝と重複している。第7号溝が、本跡の北東部を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸 [5.73] m、短軸5.63mの方形と推定される。

主軸方向 N-33°-W

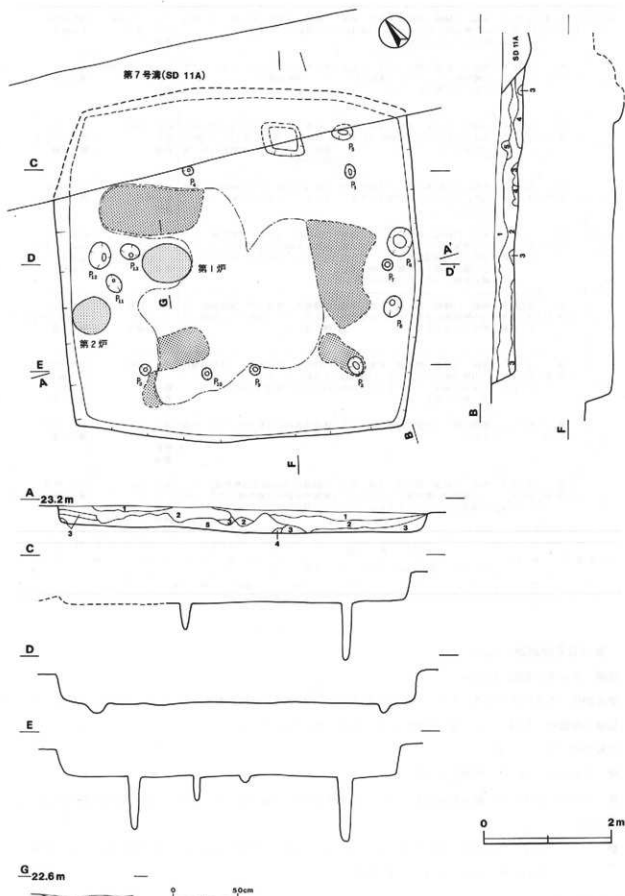
壁 壁高は40~50cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、中央が硬く踏み固められている。北東壁付近に、軸 [50] cmの方形で、深さ17cmの掘り込みが検出されている。

炉 2か所。第1炉は北西壁寄りに位置し、長径80cm、短径63cmの楕円形で、6cmほど掘り窪められた地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変し、硬く締まっている。

第1炉土層解説

1 赤褐色 焼土粒子多量。焼土小ブロック中量



第35图 第14 B号住居跡実測图

第2炉は北西壁沿いに位置し、径61cmの円形で、ほとんど掘り込みのない地床である。炉床は火熱を受けて赤変し、硬く締まっている。

ピット 13か所 (P₁~P₁₃)。P₁とP₂は長径12~14cm、短径8~12cmの楕円形、P₃は径9cmの円形で、いずれも深さ86~100cmの支柱穴である。P₄、P₇は径9cmの円形、P₁₂は径20cmの円形、P₅、P₆、P₈~P₁₁、ならびにP₁₃は長径9~24cm、短径8~20cmの楕円形で、いずれも深さ11~45cmで、性格は不明である。

覆土 5層からなり、ロームブロックを多く含有し、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

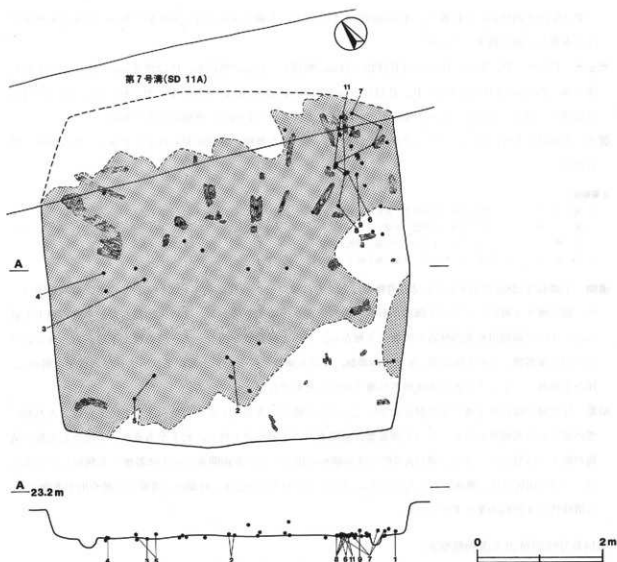
1 褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量	小ブロック少量
2 褐色	ローム粒子多量、暗褐色土中量	5 明褐色 ソフトローム小・中・大ブロック・焼土粒子・
3 暗褐色	ソフトローム小・中ブロック少量、褐色土中量	焼土小ブロック多量
4 明褐色	ソフトローム大ブロック多量、焼土粒子・焼土	

遺物 土師器片128点が出土している。遺物のほとんどは東コーナー部に集中している。1の土師器碗が南コーナー部の覆土下層から、2の土師器小形碗が南西壁寄りの覆土下層から、3の土師器器台が中央の覆土下層から、4の土師器器台が北西壁寄りの覆土下層から、5の土師器甕が西コーナー部の覆土下層から、6ならびに8の土師器甕、7の土師器壺、9の土師器瓶、11の土師器ミニチュア土器が東コーナー部の覆土下層から、10の土師器ミニチュア土器が南東壁寄り覆土中からそれぞれ出土している。

所見 住居跡全体に焼土塊と炭化材が広がっているのが確認できることから、焼失家屋と考えられ、人為的に埋め戻された可能性がある。5の土師器甕は南関東系の土器形式を持ち、胎土が当遺跡から出土した他の遺物の胎土とは異なる。また、第14A号壁穴住居跡から出土している南関東系の土師器甕とも類似しているもので、二つの住居には、関連のある人々が住んでいたことがうかがえる。時期は、遺構の形態や出土遺物から、古墳時代の4世紀中葉と考えられる。

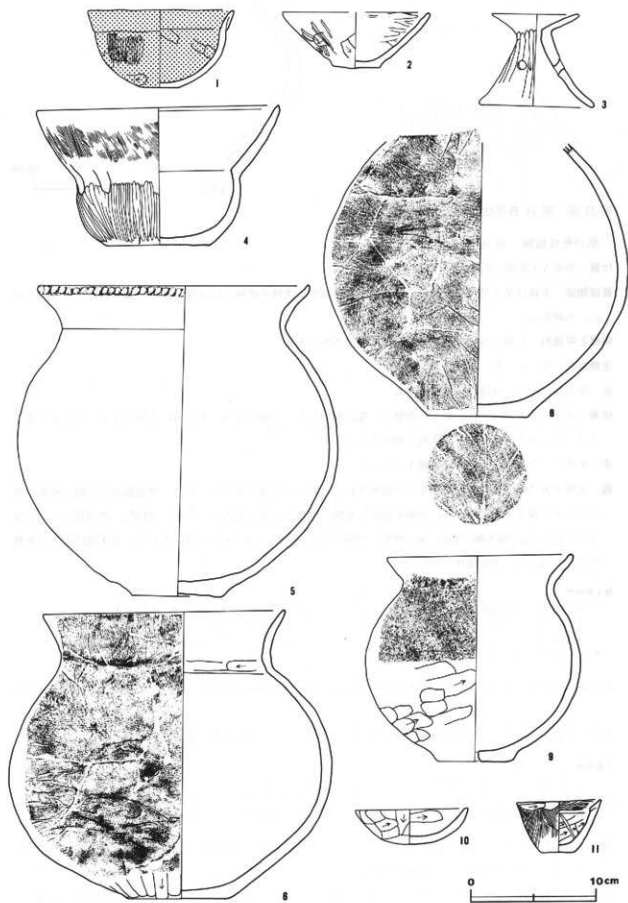
第14B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(mm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第37図 1	碗 土師器	A 11.5 B 6.2 C 3.0	体部、口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がる。折り返し口縁。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ磨き後、中位へラナデ。内面へラナデ。底部へラ削り。	長石 石英 砂粒 外面によい黄褐色 内面明赤褐色 普通	90% P84 内・外面赤彩 覆土下層
2	小形碗 土師器	A [11.6] B 4.5 C 3.9	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面中位へラ磨き、へラナデ。内面へラ磨き。底部へラ削り。	長石 石英 砂粒 暗灰黄色 普通	50% P85 内・外面スチ層 覆土下層
3	器台 土師器	A 7.0 B 7.5 D 4.0 E 6.0 孔径:7-9.5	器受部一部欠損。脚部はフック状に開く。4孔を有す。器受部は直線的に外傾して立ち上がる。中心部は穿孔されている。	器受部内・外面横ナデ。脚部外面へラナデ。内面ナデ。	スコリア 砂粒 明褐色 普通	80% P86 覆土下層
4	甕 土師器	A 19.3 B 11.1 C 8.3	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部外面刷毛目整形後、ナデ。内面横ナデ。体部外面上位へラナデ、中位へラ磨き。内面横ナデ。底部へラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 によい赤褐色 良好	80% P87 覆土下層
5	壺 土師器	A 21.9 B 14-25.0 C 7.1	体部、口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、端部はつまみ上げられている。口唇部に割れが走る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部へラ削り。	長石 砂粒 スコリア 褐色 普通	90% P88 底部外面割離 南関東系 覆土下層

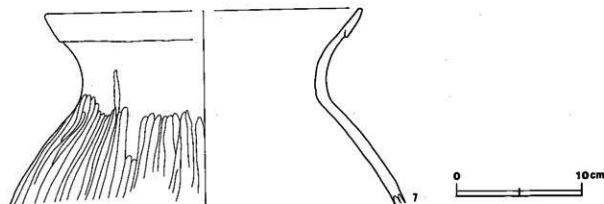


第36図 第14B号住居跡遺物出土位置図

6	壺 土器器	A 24.2 B 24.6-25.1 C 8.0	体部、口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内面横ナデ、一部ヘラナデ、口縁部外面、体部外面刷毛目整形。下位ヘラ削り、体部内面ナデ。底部ヘラ削り後、ナデ。	長石 砂粒 スコリア 黒褐色 普通	90% P89 覆土下層
第38図 7	壺 土器器	A [25.0] B (15.5)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がる。折り返し口縁。	口縁部内・外面横ナデ、体部外面ヘラ削き後、ナデ。内面ナデ。	バミス スコリア 砂粒 にふい橙色 普通	20% P90 覆土下層
第37図 8	壺 土器器	B (21.8) C 8.0	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面刷毛目整形後、ナデ。内面ナデ。底部ナデ。	長石 砂粒 褐色 普通	80% P91 底部木炭灰 覆土下層
9	瓶 土器器	A 14.7 B 16.2-16.5 C 6.1 孔径0.8	体部、口縁部一部欠損。平底。半孔式。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ、体部外面刷毛目整形後、ナデとヘラナデ。内面ナデ。底部ヘラ削り。	長石 石英 砂粒 スコリア にふい橙色 普通	95% P92 覆土下層
10	コップ 土器器	A 9.0 B 15-18	体部、口縁部一部欠損。丸みを持った平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ヘラナデ。底部ナデ。	長石 石英 砂粒 スコリア にふい黄褐色 普通	70% P93 覆土中
11	コップ 土器器	A 7.0 B 1.7-4.3 C 2.6	体部、口縁部一部欠損。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。端部は、内側に折り返される。	口縁部、体部内・外面刷毛目整形後、ヘラ削り。底部ナデ。	長石 砂粒 にふい黄褐色 普通	70% P94 覆土下層



第37图 第14号住居跡出土遺物実測図(1)



第38図 第14日号住居跡出土遺物実測図(2)

第15号住居跡 (第39図)

位置 調査A区南部, F36区。

重複関係 本跡は第3号堀と重複している。第3号堀が, 本跡を西壁から南壁にかけて掘り込んでいることから, 本跡が古い。

規模と平面形 長軸5.20m, 短軸5.04mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-8°-E

壁 壁高は55cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁, 南東コーナー, および西壁の一部に検出した。上幅は [20~30] cm, 下幅は [2~16] cm, 深さ [3~8] cmで; 断面形はU字状と推定される。

床 平坦で, 全面が粘土質で硬く締まっている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 煙道部から東側の袖部の半分にかけて攪乱を受けており, 西側の袖部と東側の袖部の一部が残存している。規模は, 煙道部から焚口部まで [152] cm, 最大幅 [153] cm, 壁外への掘り込みは [19] cmであると推定される。火床部はあまり火熱を受けておらず, 赤変硬化していない。

竈土層解説

- | | |
|------------------------|---------------------|
| 1 灰褐色 灰白色粘土少量 | 5 暗褐色 焼土粒子少量, 褐色土中量 |
| 2 黒褐色 砂少量 | 6 灰褐色 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 灰黄褐色 砂・灰白色粘土多量 | 7 暗褐色 灰白色粘土中量, 砂多量 |
| 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, 砂多量 | |

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁~P₄は長径50~62cm, 短径38~58cmの楕円形で, いずれも深さ43~69cmの支柱穴である。

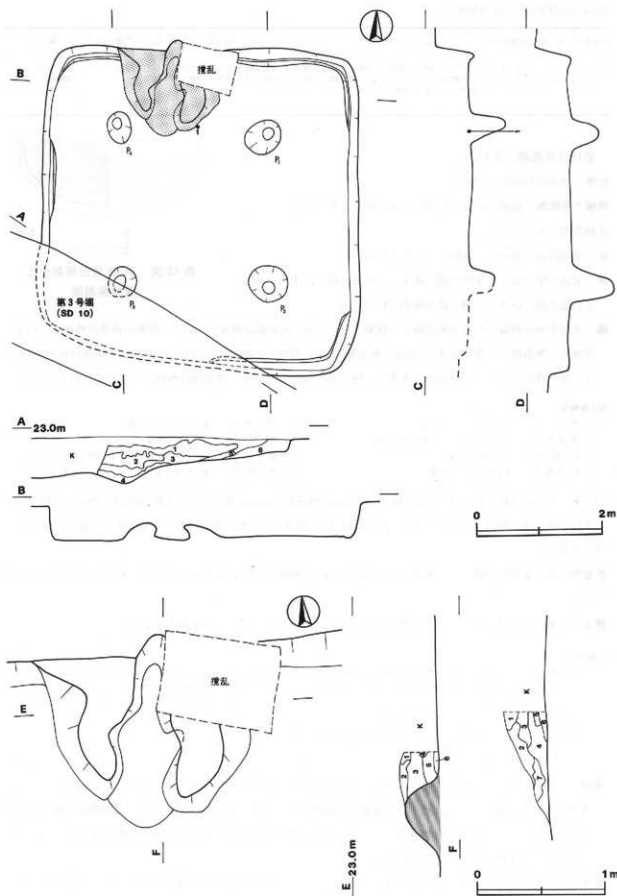
覆土 6層からなり, 不自然な堆積の状況が見られることから, 人為堆積と思われる。

土層解説

- | | |
|---------------|------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量 | 4 黒褐色 ローム小ブロック少量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量 | 5 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子多量 | 6 暗褐色 ローム小ブロック少量 |

遺物 土師器片74点, 須恵器片7点, および混入した土師質土器の焙烙鍋片1点, 常滑など陶器片3点が出土している。1の土師器片が竈の東側の床面直上からそれぞれ出土している。

所見 竈の右上部を攪乱されており, 不明な点が多かった。竈の火床部の状況から, 短期間しか使用されなかった住居と考えられる。時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 古墳時代の6世紀後葉と考えられる。



第39图 第15号位居跡実測图

第15号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 1	坏 土器 器	A[14.2] B 5.0	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内湾気味に立ち上がり、上位に壁を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。底部へラ削り。	長石 砂粒 スコリア 黒褐色 青濁	40% P95 内面黒色粘裡 床面直上

第16号住居跡 (第41図)

位置 調査B区南部, C3h7区。

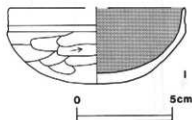
規模と平面形 長軸5.45m, 短軸5.38mの隅丸方形である。

主軸方向 N-5'-E

壁 壁高は10~20cmで、外傾して立ち上がる。

床 全面が粘土質で、平坦で硬く締まっている。特に、出入口施設から甕手前にかけて、硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで150cm, 最大幅124cm, 壁外への掘り込みは12cmである。火床部は床面を10cmほど掘り窪めており、火熱を受け赤変し、煉瓦状に硬化している。煙道部は外傾し、緩やかに立ち上がる。



第40図 第15号住居跡出土遺物実測図

甕土層解説

1 黒褐色	ローム小ブロック少量	5 暗赤褐色	焼土小ブロック少量
2 暗赤褐色	ローム中ブロック・焼土粒子少量	6 黒褐色	ローム粒子少量
3 暗褐色	ローム粒子中量	7 暗赤褐色	焼土小・中ブロック中量, 硬く締まっている
4 暗赤褐色	焼土中ブロック中量	8 暗褐色	焼土粒子少量, 焼土小ブロック中量

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁とP₄は長径64~73cm, 短径55~64cmの楕円形, P₂とP₃は径59~70cmの円形で、いずれも深さ50~79cmの主柱穴である。P₅は長径51cm, 短径44cmの楕円形で、深さ27cmの出入口施設に伴うピットである。

貯蔵穴 竈の東側に位置する。長径71cm, 短径42cmの不整楕円形で、深さ40cmである。断面形はU字状をしている。

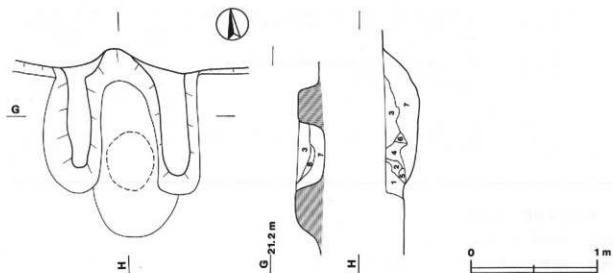
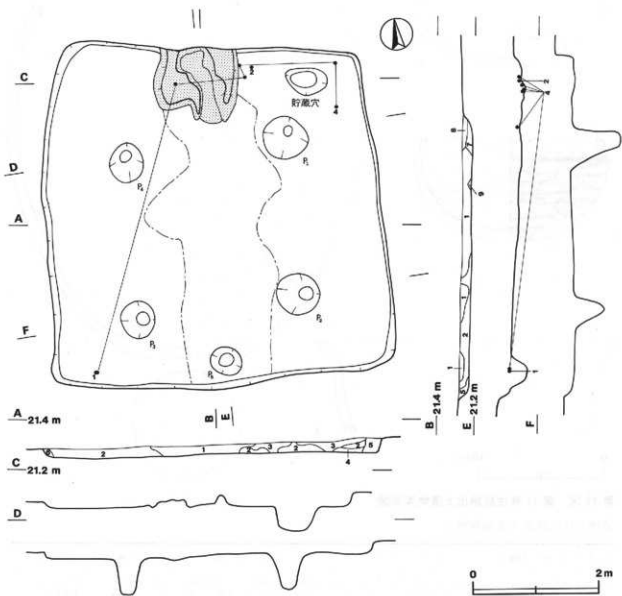
覆土 9層からなり、ブロック状の堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

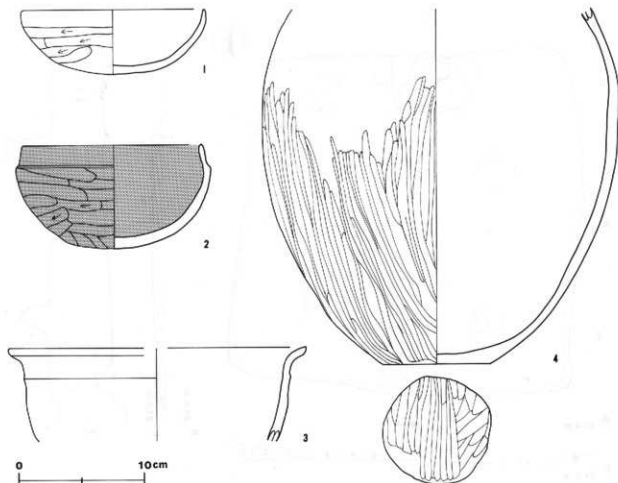
1 暗褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子中量, 炭化粒子少量	6 暗褐色	ローム小ブロック中量, 褐色土少量
2 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子中量, 炭化粒子少量, 褐色土中量	7 黒褐色	焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子中量
3 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子少量	8 暗褐色	焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量, 砂中量
4 黒褐色	焼土粒子・焼土小ブロック中量, 炭化粒子少量	9 灰褐色	ローム大ブロック中量
5 暗褐色	焼土粒子少量		

遺物 土師器片94点, 須恵器片8点, および混入した瀬戸・美濃系の陶器片2点が出土している。ほとんどの遺物は竈周辺に集中している。1の土師器片が南西コーナー部の床面直上から, 2の土師器碗が竈の東側の床面直上から, 3の土師器瓶が竈内から, 4の土師器甕が竈の西側の袖部内, 竈の東側の床面直上, ならびに南壁寄りの床面直上からそれぞれ出土している。

所見 竈の袖部の中や袖部の脇から遺物が出土していることから, それらは竈の補強材として使用されていたと考えられる。時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 古墳時代の6世紀後葉と考えられる。



第41图 第16号住居跡実測图



第42図 第16号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物観察表

図説番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第42図 1	坏 土器	A 14.8 B 5.1	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎 気味に立ち上がり、上位に稜を持つ。 口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ テテ。内面横ナデ。底部へテテ。	長石 砂粒 スコリア にふい・褐色 普通	95% P97 床面直上
2	碗 土器	A 14.5 B 8.1	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎 気味に立ち上がり、上位に稜を持つ。 口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ テテ。内面横ナデ。底部へテテ。	長石 雲母 砂粒 褐灰色 普通	85% P98 内・外面黒色処理 床面直上
3	瓶 土器	A[24.0] B(7.4)	体部から口縁部の破片。体部は外傾 して立ち上がり、上位に稜を持つ。 口縁部は外反して、肩部はつまみ上 げられている。	口縁部。体部内・外面横ナデ。	長石 雲母 砂粒 スコリア 外面にふい・褐色 内面明赤褐色 普通	10% P99 窠内
4	甕 土器	B(28.3) C 8.5	底部から体部の破片。平底。体部は 内彎気味に立ち上がる。	体部。底部内・外面へテテ磨き後、ナ デ。	長石 石英 雲母 砂粒 赤色 普通	40% P100 内・外面スス付着 輪部内 床面直上

第17号住居跡 (第43図)

位置 調査B区南部, D3d区。

規模と平面形 長軸3.58 m, 短軸3.50 mの方形である。

主軸方向 N-8'-E

壁 壁高は4~20cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 各コーナー部付近を除き、ほぼ全周している。上幅20~25cm、下幅5~8cm、深さ6~10cmで、断面形はU字状である。

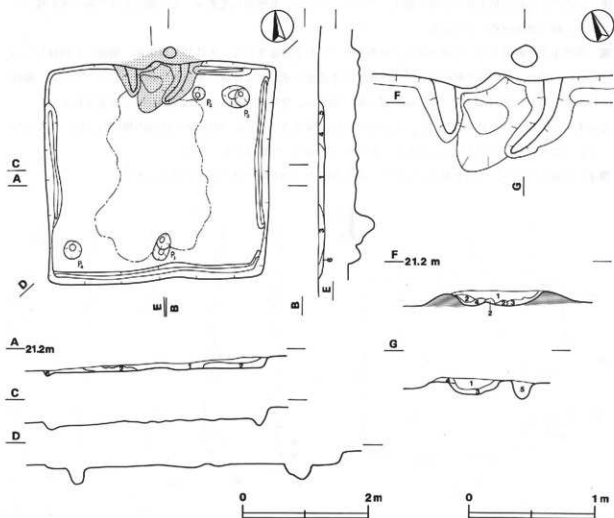
床 凹凸で、全面が粘土質で、硬く締まっている。特に、出入口施設から電手前にかけて、硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、煙道部と両側の袖部が残存している。火床部中央に袖部状になった粘土が確認されている。規模は、煙道部から焚口部まで110cm、最大幅114cm、壁外への掘り込みは5cmである。火床部は床面を8cmほど掘り窪めており、火熱を受けわずかに赤変しているが、あまり硬化していない。煙道部は外傾し、急に立ち上がる。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|--------------------|------|------------------|
| 1 極暗赤褐色 | 焼土粒子・焼土中ブロック多量 | 4 褐色 | 焼土粒子少量、焼土中ブロック多量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック多量 | 5 褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック中量 |
| 3 褐色 | ハードローム中ブロック・焼土粒子少量 | | |

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁は長径45cm、短径25cmの楕円形で、深さ34cmの出入口施設に伴うピットである。P₂とP₄は径20~30cmの円形、P₃は長径45cm、短径35cmの楕円形で、いずれも深さ27cmで、性格は不明である。



第43図 第17号住居跡実測図

覆土 6層からなり、ロームブロック、焼土ブロックの推積している状況から、人為堆積と思われる。

土層解説

1	暗褐色	焼土粒子・焼土小ブロック少量	5	褐色	ソフトローム中ブロック中量、焼土粒子多量、
2	褐色	ソフトローム小・中ブロック中量			焼土小ブロック中量
3	暗褐色	ローム粒子中量	6	褐色	ソフトローム中・大ブロック少量
4	褐色	ソフトローム中ブロック・焼土小ブロック中量			

遺物 土師器片 54点、須恵器片 18点、および混入した陶器片 1点、縄文土器片 1点が出土している。覆土が浅かったことから、遺物が少なく、ほとんどが細片である。

所見 竈の火床部の状況から、竈は作り替えられた可能性があると思われる。時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代の8世紀と考えられる。

第18号住居跡 (第44図)

位置 調査B区南部、D 3dr区。

規模と平面形 長軸 3.25 m、短軸 [2.96] mの長方形と推定される。

主軸方向 N-8°-E

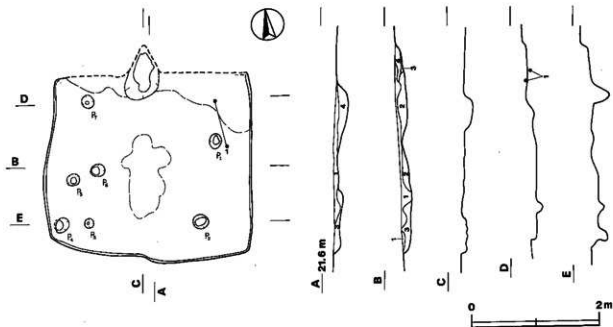
壁 壁高は4~12 cmで、外傾して立ち上がる。

床 凹凸で、全面が粘土質で、硬く締まっている。中央と、北壁から北東コーナー部にかけて貼り床が残っており、硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されていたと推定される。天井部、煙道部、袖部とも残存していないが、袖部と思われる粘土跡と、火床部から煙道部と思われる位置に焼土塊が確認できることから、規模は、煙道部から突口部まで [80] cm、最大幅 [55] cm、壁外への掘り込みは [45] cmと推定される。

ピット 7か所 (P₁~P₇)。P₁、P₂、P₄ならびにP₆は長径20~26 cm、短径18~21 cmの楕円形、P₃、P₅ならびにP₇は径14~21 cmの円形で、いずれも深さ8~22 cmで、性格は不明である。

覆土 4層からなり、人為堆積と思われる。第2層~第4層が貼り床の部分と考えられる。



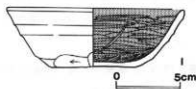
第44図 第18号住居跡実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量 | 4 褐色 | ハードローム中・大ブロック中量、焼土小・中ブロック少量 |
| 2 褐色 | ハード・ソフトローム中ブロック多量 | | |
| 3 褐色 | ハード・ソフトローム大ブロック多量 | | |

遺物 土師器片 48点、須恵器片 15点、および混入した陶器片1点、磁器片1点が出土している。1の土師器片が東壁寄りの床面直上から出土している。

所見 覆土が浅かったため、表土除去時に削られてしまい、貼り床面が露出していたものと思われる。時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代の9世紀後葉と考えられる。



第45図 第18号住居跡出土遺物実測図

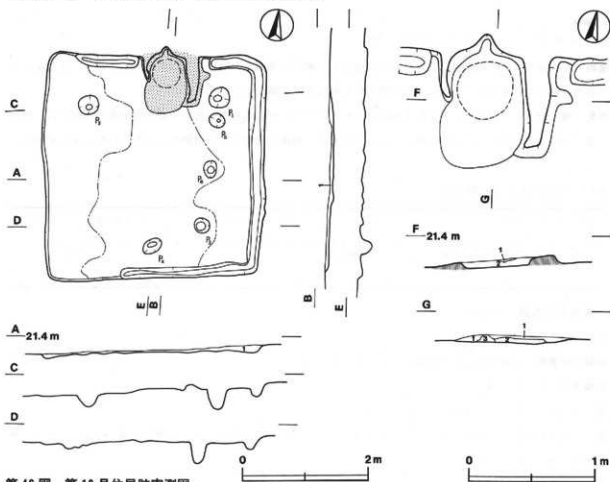
第18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 1	土師器 環	A 14.1 B 14.1-1.8 C 6.8	体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、内側気味に立ち上がる。	口縁部、体部外面ロクロナデ後、下位へテ磨り。内面へテ磨き。底部手持ちへテ磨り。	長石 砂粒 スコリア 藍色 普通	80% P101 内面黒色処理 床面直上

第19号住居跡 (第46図)

位置 調査B区南部, D3c7区。

規模と平面形 長軸 3.55 m, 短軸 3.54 m の方形である。



第46図 第19号住居跡実測図

主軸方向 N-1°-E

壁 壁高は1-9cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁から東壁を経て、南壁にかけ半周している。上幅15-27cm、下幅3-16cm、深さ6-10cmで、断面形はU字状である。

床 凹凸で、南壁から竈の手前にかけて、硬く踏み固められている。貼り床が施されており、全面が粘土質で、硬く締まっている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、西側の袖部は破壊されており、煙道部と東側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで107cm、最大幅93cm、壁外への掘り込みは15cmである。火床部は床面を4cmほど掘り盛めており、火熱を受け変質し、わずかに硬化している。煙道部は外傾し、緩やかに立ち上がる。



第47図 第19号住居跡出土遺物実測図

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子・焼土中ブロック少量
 2 暗赤褐色 焼土粒子・焼土小・中ブロック少量
 3 暗褐色 焼土粒子少量

ピット 6か所 (P₁-P₆)。P₁とP₂は長径27-36cm、短径22-32cmの楕円形、P₃は径32cmの円形で、いずれも深さ21-35cmの主柱穴である。P₄は長径33cm、短径22cmの楕円形で、深さ18cmの出入口施設に伴うピットである。P₅とP₆は長径27cm、短径21cmの楕円形で、いずれも深さ23cmで、性格は不明である。

覆土 単層で、自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量

遺物 土師器片24点、須恵器片3点、および混入した瀬戸・美濃系の陶器片1点が出土している。ほとんどの遺物は竈の中に集中している。1の土師器片が東壁寄りの覆土中から出土している。

所見 覆土が浅かったため、表土除去時に削られてしまい、壁の残存率が悪い。竈の火床部の状況から、短期間しか使用されなかった住居と考えられる。時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代の8世紀後葉と考えられる。

第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第47図 1	土師器 環	A[16.6] B(3.0)	体部から口縁部の破片。体部は直線的に外傾して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナズ。	長石 石英 雲母 砂粒 散在 普通	5% P102 覆土中

第20号住居跡 (第48図)

位置 調査B区南部、D3a6区。

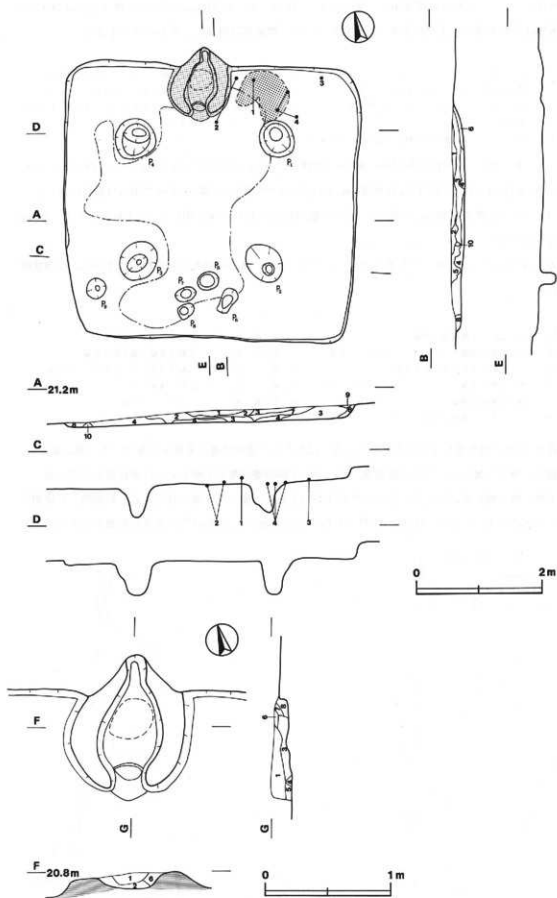
規模と平面形 長軸4.63m、短軸4.37mの長方形である。

主軸方向 N-23°-E

壁 壁高は8-24cmで、外傾して立ち上がる。

床 全面が粘土質で、平坦で硬く締まっている。特に、出入口施設付近から、北西壁、竈の手前にかけて、硬く踏み固められている。

竈 北東壁中央に、細かい白色砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、煙道部と両側



第48图 第20号住居跡実測図

の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで116cm、最大幅110cm、壁外への掘り込みは26cmである。火床部は火熱を受けわずかに赤変し、硬化している。煙道部は外傾し、垂直に立ち上がる。

覆土層解説

1 灰 褐色	粘土多量	5 暗赤褐色	焼土粒子・焼土中ブロック中量、砂多量
2 暗赤褐色	焼土小・中ブロック・粘土中ブロック中量	7 灰 褐色	焼土粒子・粘土粒子・砂多量
3 暗赤褐色	焼土大ブロック・粘土小ブロック・砂多量	8 灰 褐色	焼土粒子多量、焼土中ブロック中量、粘土粒子・砂多量
4 暗褐色	焼土粒子・砂中量		
5 ぶい褐色	焼土小ブロック少量、粘土粒子・小ブロック多量		

ピット 9か所 (P₁~P₉)。P₁~P₃は長径60~67cm、短径53~56cmの楕円形、P₄は径63cmの円形で、いずれも深さ48~56cmの主柱穴である。P₅は長径33cm、短径28cmの楕円形で、深さ28cmの出入口施設に伴うピットである。P₆~P₈は長径27~40cm、短径17~20cmの楕円形、P₉は径32cmの円形で、いずれも深さ12~20cmで、性格は不明である。

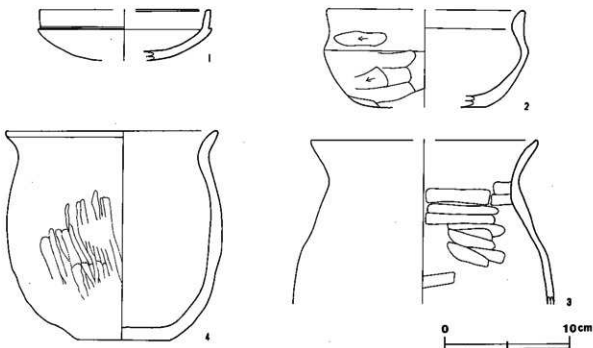
覆土 10層からなり、ロームブロックを多く含有し、ブロック状の堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

1 黒 褐色	ローム粒子・暗褐色土中量	6 暗 褐色	ローム粒子・焼土粒子中量
2 黒 褐色	ローム粒子中量・ソフトローム小ブロック少量	7 暗 褐色	ローム粒子多量、焼土粒子少量
3 暗 褐色	ローム粒子多量、焼土粒子少量	8 暗 褐色	ローム粒子多量、ローム中ブロック中量
4 褐色	ローム粒子多量、ソフトローム小・中ブロック中量、暗褐色土少量	9 褐色	ローム粒子多量
5 暗 褐色	ローム粒子・褐色土中量	10 灰 褐色	ローム大ブロック少量

遺物 土師器片78点、須恵器片1点が出土している。ほとんどの遺物が竈の東側から東コーナー部に集中し、1の土師器坏が覆土上層から、2の土師器碗、3、4の土師器甕が覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 竈の東側に焼土塊が確認されているが、性格は不明である。竈の火床部の状況から、短期間しか使用されなかった住居跡と考えられる。時期は、遺構の形態や出土遺物から、古墳時代の6世紀前葉と考えられる。



第49図 第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第49図 1	坏 土師器	A[13.7] B(4.0)	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、上位に發を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。底部ナデ。	長石 雲母 砂粒 橙色 普通	40% P103 覆土上層
2	甗 土師器	A[15.8] B: 7.8 C[9.4]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、頸部はわずかに「く」の字状に屈曲する。頸部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横ナデ、ヘラ削り。内面ナデ。底部手持ちヘラ削り。	長石 雲母 砂粒 スコリア にぶい橙色 普通	50% P104 内・外面スチ付着 覆土下層
3	甗 土師器	A[18.0] B(13.0)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反している。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 灰黄褐色 普通	15% P105 覆土下層
4	甗 土師器	A 16.9 B 11.5-11.4 C 7.3	底部、体部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がり、中位に發を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ、外面中位ヘラ磨き。底部ヘラ削り。	石英 雲母 砂粒 にぶい赤色 普通	85% P106 内・外面スチ付着 覆土下層

第21号住居跡 (第50図)

位置 調査B区南部, D3as区。

規模と平面形 長軸 3.90 m, 短軸 3.62 m の長方形である。

主軸方向 N-12°-E

壁 壁高は 8~18 cm で、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅 10~28 cm, 下幅 4~18 cm, 深さ 2~12 cm で、断面形は U 字状である。

床 全面が粘土質で、平坦で硬く踏み固められている。甗の東側に長径 52 cm, 短径 35 cm の不整楕円形で、深さ 22 cm の掘り込みと、さらに西壁寄りに、長径 85 cm, 短径 55 cm の楕円形で、深さ 20 cm の掘り込みが検出されている。それぞれ焼土粒子、焼土ブロックが多量に堆積している。

■ 北壁中央に、砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで 105 cm, 最大幅 105 cm, 壁外への掘り込みは 37 cm である。火床部は床面を 6 cm ほど掘り窪めている。西側の袖部のみが、火熱を受け赤変し、硬化している。煙道部は外傾し、緩やかに立ち上がる。

甗土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------|-------|---------------------|
| 1 赤褐色 | 焼土粒子多量, 焼土小ブロック少量 | 5 赤褐色 | 焼土粒子中量, 焼土中ブロック多量 |
| 2 赤褐色 | 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量 | 6 赤褐色 | 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・砂少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 焼土小・中ブロック多量 | 7 褐色 | 粘土大ブロック・砂多量 |
| 4 褐色 | 焼土粒子多量, 焼土小ブロック少量 | | |

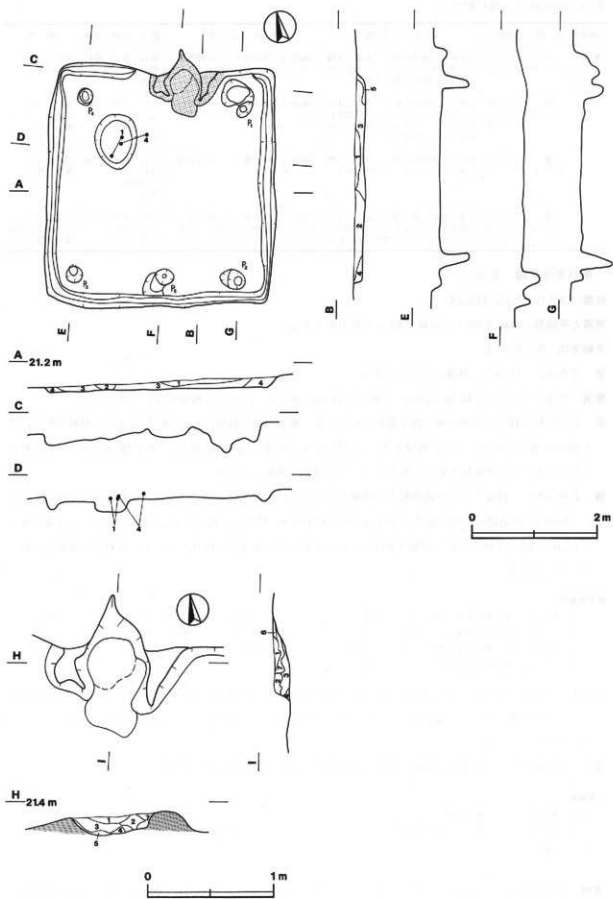
ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁, P₂ならびにP₄は長径 29~35 cm, 短径 19~30 cm の楕円形, P₃は径 27 cm の円形で、いずれも深さ 30~56 cm の支柱穴である。P₅は長径 30 cm, 短径 25 cm の楕円形で、深さ 29 cm の出入口施設に伴うピットである。

覆土 5層からなり、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | | 炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 4 灰褐色 | ローム小ブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土小ブロック | 5 暗褐色 | ローム小ブロック・焼土小ブロック少量 |

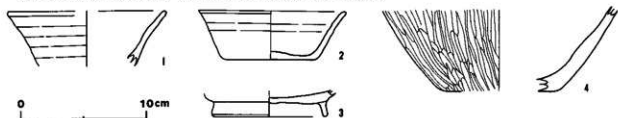
遺物 土師器片 40 点, 須恵器片 12 点が出土している。ほとんどの遺物が中央に集中し、1 の須恵器坏が掘り込みの上面から、2 の須恵器杯、3 の須恵器高台付杯が覆土中から、4 の土師器甗が覆土上層からそれぞれ



第 50 图 第 21 号住居跡実測图

出土している。

所見 竈の東側と西壁寄りに見られる掘り込みは、不要な灰や焼土を捨てるためのものと考えられる。時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代の8世紀後半と考えられる。



第51図 第21号住居跡出土遺物実測図

第21号住居跡出土遺物観察表

図面番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第51図 1	坏 須恵器	A [12.6] B (4.4)	体部から口縁部の破片。体部は直線的に外傾して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部。体部内・外面ロクロナデ。	長石 雲母 砂粒 に濃い赤褐色 普通	10% P107 掘り込み内
2	坏 須恵器	A 11.9 B 3.9 C 7.4	底部から口縁部の破片。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部。体部内・外面ロクロナデ。底部回転へう磨り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰白色 底部に濃い黄褐色 普通	70% P108 覆土中
3	高台付坏 須恵器	B (2.1) D 9.0 E 1.1	高台部から底部の破片。高台部は直線的に開く。平底。	底部回転へう磨り。高台部貼り付け。ロクロナデ。	長石 砂粒 に濃い黄褐色 普通	15% P109 覆土中
4	埴 土器	B (6.4) C [9.2]	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面へう磨き。底部ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 に濃い褐色 普通	10% P110 覆土上層

第23号住居跡 (第52図)

位置 調査B区南部、C3ha区。

重複関係 本跡は、第104、172、228号土坑と重複している。第172、228号土坑が、本跡の南壁を掘り込んでいることから、本跡が古い。第104号土坑との新旧関係は不明である。

規模と平面形 長軸7.10m、短軸6.50mの長方形である。

主軸方向 N-1°-E

壁 壁高は1~15cmで、外傾して立ち上がる。

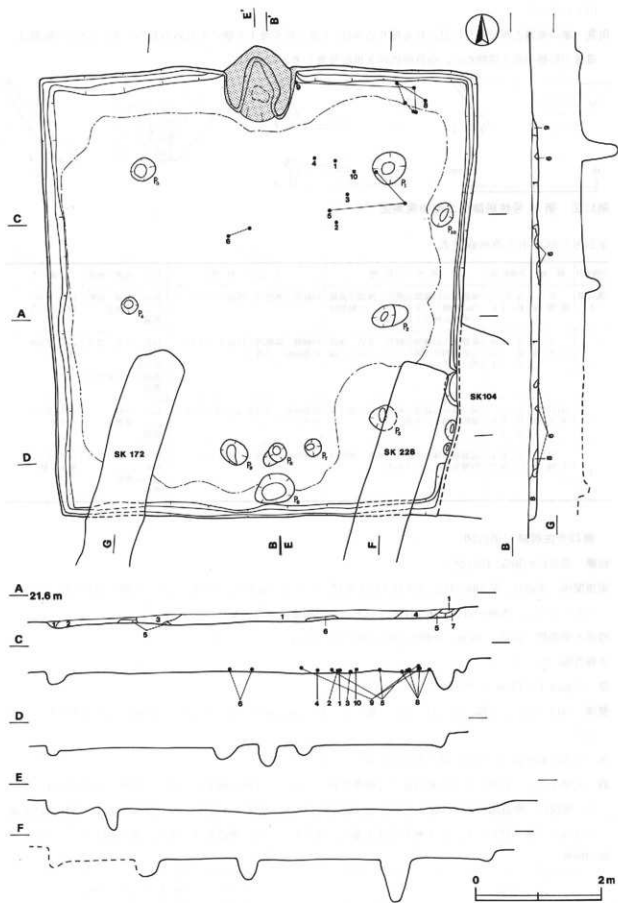
壁溝 ほぼ全周し、上幅 [12~31] cm、下幅 [2~19] cm、深さ [2~20] cmで、断面形はU字状と推定される。

床 全面が粘土質で、平坦で硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に、砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで120cm、最大幅111cm、壁外への掘り込みは30cmである。火床部は床面を5cmほど掘り窪めており、火熱を受け赤変し、硬化している。煙道部は外傾し、緩やかに立ち上がる。

壁土層解説

1 極暗褐色	ソフトローム小ブロック・焼土餃子・焼土小ブロック 中量	4 暗赤褐色	焼土餃子・焼土小・中ブロック中量
2 極暗褐色	ソフトローム小ブロック・焼土餃子中量	5 暗赤褐色	焼土餃子・炭化粒子中量
3 赤褐色	焼土餃子・焼土小・中・大ブロック多量、褐色土中量	6 暗褐色	焼土餃子少量



第 52 图 第 23 号住居跡実測图

ピット 10か所 (P₁~P₁₀)。P₁は径55cmの円形で、深さ68cm、P₂、P₃、ならびにP₅は長径41~50cm、短径35~41cmの楕円形で、いずれも深さ27~59cm、P₄は径27cmの円形で、深さ24cmの主柱穴である。P₇とP₈は径27~30cmの円形で、いずれも深さ15~35cm、P₆とP₉は長径44~66cm、短径34~46cmの楕円形で、いずれも深さ11~24cmの出入口施設に伴うピットである。P₁₀は長径43cm、短径34cmの楕円形で、深さ32cmで、性格は不明である。

覆土 9層からなり、ロームブロックを多く含有し、ブロック状の堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

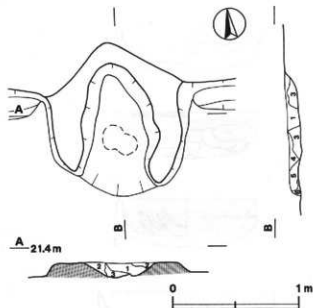
- | | | | |
|-------|------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム中ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック少量 | 7 灰褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック少量 | 8 灰褐色 | ローム粒子・ローム中ブロック・焼土粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 9 黒褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック少量 |
| 5 褐色 | ローム中ブロック中量 | | |

遺物 土師器片304点、須恵器片54点、磨石1点、および混入した瀬戸・美濃系の陶器片4点、瀬戸系などの磁器片2点である。覆土が浅く、遺物はほとんど細片である。1、4の土師器環、10の磨石が東壁寄りの覆土下層から、2、3、5の土師器環が東壁寄りの床面直上から、6の土師器碗が中央の覆土下層から、7の土師器碗が東壁寄りの覆土中から、8の土師器甕が北壁寄りの床面直上から、9の土師器甕が北東コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。

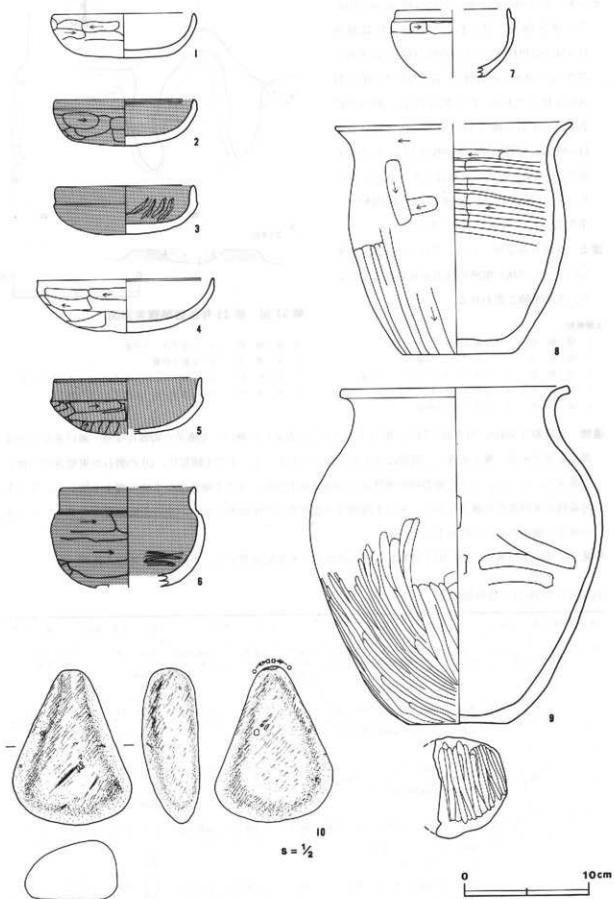
所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、古墳時代の6世紀後葉から7世紀前葉と考えられる。

第23号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第54図 1	土師器 環	A 11.4 B 3.5	口縁部一部欠損。丸底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面横ナデ。底部外面ナデ、内面へラ磨き。	雲母 砂粒 スコリア 明赤褐色 普通	95% P111 覆土下層
2	土師器 環	A 11.2 B 3.7	体部、口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、上位に不明瞭な稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面横ナデ。底部外面へラナデ、内面ナデ。	雲母 砂粒 スコリア 明赤褐色 普通	90% P112 内・外面黒色焼埋 床面直上
3	土師器 環	A 10.9 B 3.9	体部、口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、上位に稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部外面へラナデ、内面へラ磨き。	雲母 砂粒 スコリア 明赤褐色 普通	90% P113 内・外面黒色焼埋 床面直上
4	土師器 環	A 14.0 B 4.3	体部、口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、上位に不明瞭な稜を持つ。口縁部は直立してわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面横ナデ。底部ナデ。	灰石 雲母 砂粒 スコリア 赤褐色 普通	80% P114 覆土下層
5	土師器 環	A 12.6 B (4.4)	底部から口縁部一部欠損。体部は内彎気味に立ち上がり、中位に稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面横ナデ。底部手持ちへラ削り。	灰石 雲母 砂粒 灰褐色 普通	70% P115 内・外面黒色焼埋 床面直上



第53図 第23号住居跡遺実測図



第 54 图 第 23 号住居跡出土遺物実測図

第54図 6	瓶 土師器	A [10.6] B (8.0)	底部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がり、上位に壁を2か所持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面横ナデ、下位へラ磨き。	長石 雲母 砂粒 スコリア 褐色 普通	30% P116 内・外面黒色処理 覆土下層
7	碗 土師器	A [9.0] B 4.5 C [5.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、上位に壁を持つ。口縁部はやや内傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。体部外面上位へラ削り。底部手持ちへラ削り。	砂粒 灰黄褐色 普通	25% P117 覆土中
8	甕 土師器	A [19.0] B 18.2 C 9.0	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がり、中位に壁を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ後。外面上位へラ削り、中位から下位へラ磨き。内面上位へラナデ。底部ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 にぶい黄褐色 普通	55% P118 床面直上
9	甕 土師器	A 18.0 B 26.9 C 7.8	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がり、中位に壁を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ後、中位から下位へラ磨き。内面ナデ後、へラナデ。底部へラ磨き。	長石 石英 雲母 砂粒 明赤褐色 普通	40% P119 覆土下層

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
10	磨石	8.2	6.2	3	192	安山岩	覆土下層	Q3 100%

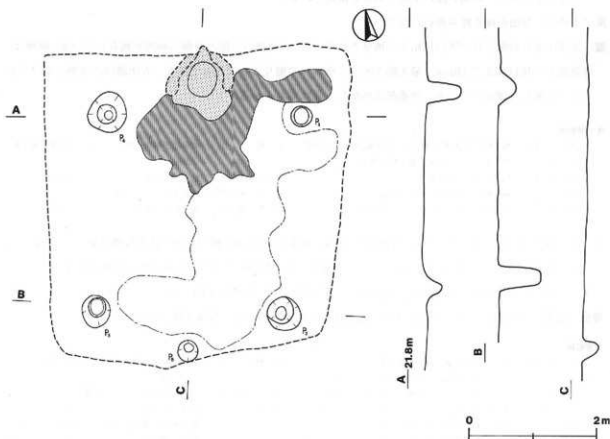
第24号住居跡 (第55図)

位置 調査B区南部, C4j区。

規模と平面形 長軸 [4.75] m, 短軸 [4.65] mの方形と推定される。

主軸方向 N-13°-E

壁 覆土が浅く、床面の下の粘土が一部露出しており、壁は確認できなかった。



第55図 第24号住居跡実測図

床 平坦であると推定される。中央に床面が残存しており、硬く踏み固められている。甕手前から中央にかけて、白色粘土が広がっている。

竈 北壁中央に構築されていたと推定される。火床部の焼土ブロックと思われるものと、袖部の粘土跡が残存しており、規模は、煙道部から焚口部まで [110] cm, 最大幅 [105] cm, 壁外への張り込みは [5] cm と推定される。

ビット 5か所 (P₁~P₅)。P₁, P₂, P₄は径31~60 cmの円形, P₃は長径50 cm, 短径32 cmの楕円形で、いずれも深さ24~68 cmの主柱穴である。P₅は径30 cmの円形で、深さ21 cmの出入口施設に伴うビットである。

遺物 土師器片8点, 須恵器片1点, および混入した土師質土器の内耳鍋片1点が出土している。

所見 覆土が浅かったために、表土除去の際に床面まで削られてしまい、貼り床面のみが残存していた。時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代から平安時代と考えられる。

第25号住居跡 (第56図)

位置 調査B区南東部, C4e区。

重複関係 本跡は、第219~222号土坑までと重複している。それぞれの土坑が、本跡の東壁, 南壁, 北西コーナー一部の4か所を張り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.70 m, 短軸3.40 mの方形である。

主軸方向 N-15°-E

壁 壁高は24~28 cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 東壁の中央から、南壁を経て、西壁の中央付近まで半周し、上幅 [13~21] cm, 下幅 [2~7] cm, 深さ [2~4] cmで、断面形はU字状であると推定される。

床 平坦で、全面が硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰白色粘土で構築されている。天井部の一部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで110 cm, 最大幅148 cm, 壁外への張り込みは6 cmである。火床部は、火熱を受けてわずかに赤変し、硬化している。煙道部は外傾し、急に立ち上がる。

竈土層解説

1 黒色	焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量, 粘土粒子多量	6 褐色	焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量, 粘土粒子多量
2 黒色	焼土小ブロック少量, 粘土粒子多量	7 暗赤褐色	焼土粒子・焼土小・中ブロック少量
3 灰褐色	粘土大ブロック多量	8 赤褐色	焼土中ブロック多量
4 褐色	粘土粒子・粘土小ブロック中量	9 黒褐色	焼土粒子・焼土小・中ブロック中量
5 暗褐色	粘土粒子・粘土小・中ブロック多量		

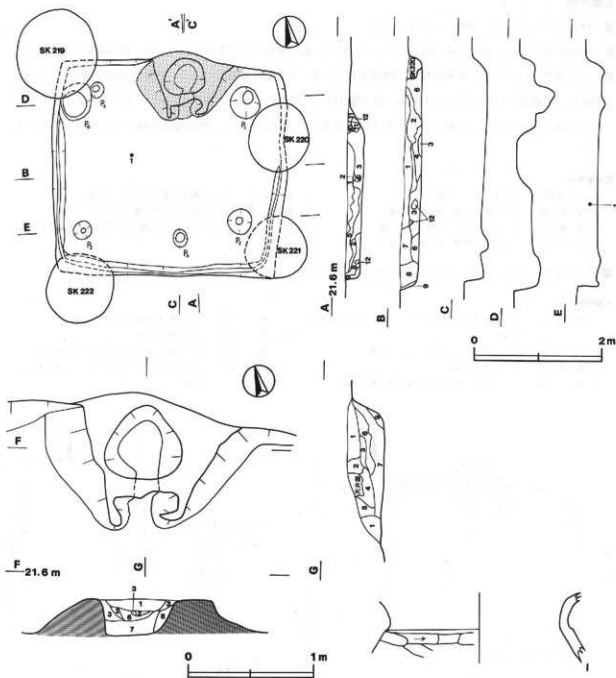
ビット 6か所 (P₁~P₆)。P₁~P₄は長径24~48 cm, 短径20~47 cmの楕円形または不整楕円形で、いずれも深さ6~13 cmの主柱穴である。P₅は長径30 cm, 短径22 cmの楕円形で、深さ11 cmの出入口施設に伴うビットである。P₆は長径55 cm, 短径48 cmの楕円形で、深さ12 cmで、性格は不明である。

覆土 12層からなり、ブロック状の堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子少量	8 褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子中量, 粘土小ブロック少量
2 褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子中量	9 明褐色	ローム小・中ブロック中量
3 暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子中量	10 褐色	焼土粒子・焼土小ブロック少量
4 褐色	粘土粒子・粘土小ブロック少量	11 褐色	焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂中量
5 褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子少量		
6 褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・粘土小ブロック少量	12 明褐色	ローム中ブロック中量
7 褐色	ローム粒子中量, 粘土小ブロック少量		

遺物 土師器片 32点, 須恵器片 12点である。1の土師器甕が中央の覆土中層から出土している。
 所見 竈の火床部の状況から, 短期間しか使用されなかった住居と考えられる。時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 古墳時代の6世紀と考えられる。



第56図 第25号住居跡実測図

第57図 第25号住居跡出土遺物実測図

第25号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図 1	壺 土師器	B(5.6)	頸部の破片。頸部は「く」の字状に屈曲している。	頸部内・外面横ナデ。外面上位へラ削り。	砂粒 スコリア 明赤褐色 普通	5% P122 覆土中層

第26号住居跡 (第58図)

位置 調査B区南部, C3e区。

規模と平面形 長軸3.04 m, 短軸2.86 mの隅丸方形である。

主軸方向 N-5°-E

壁 壁高は6-12 cmで, 外傾して立ち上がる。

床 全面が粘土質で, 平坦で硬く締まっている。特に, 竈の東側から中央にかけて, 硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 両側の袖部が残存している。

規模は, 煙道部から焚口部まで102 cm, 最大幅111 cm, 壁外への掘り込みは35 cmである。火床部は床面を2 cmほど掘り窪めており, 火熱を受けてわずかに赤変し, 硬化している。煙道部は外傾して, 緩やかに立ち上がる。

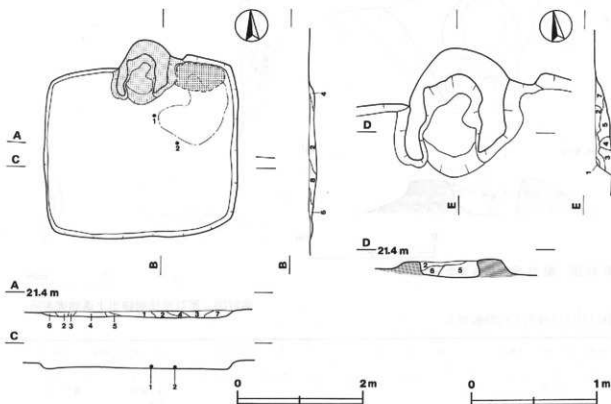
竈土層解説

- | | | | |
|----------|-----------------|-------|-------------------------|
| 1 におい黄褐色 | 粘土大ブロック少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム小ブロック・焼土小ブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック・焼土粒子少量 | 7 暗褐色 | ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子少量 | | |

覆土 8層からなり, ブロック状の堆積の状況が見られることから, 人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 5 褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子中量 |
| 2 褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック中量 | 6 褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量 | 7 褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック少量 |
| 4 褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子中量 | 8 暗褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量 |



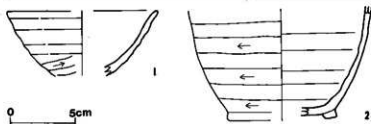
第58図 第26号住居跡実測図

遺物 土師器片 34 点, 須恵器片 11 点が出土している。1 の須恵器環, 2 の須恵器長頸壺が中央から甕手前にかけての覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 甕の東側に多量の焼土が確認されているが, 性格は不明である。甕の火床部の状況から, 短期間しか使用されなかった住居と考えられる。時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 奈良時代の 8 世紀と考えられる。

第26号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第59図 1	環 須恵器	A [12.0] B (5.2)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。外面下位へう削り。	長石 雲母 砂粒 赤灰色 普通	5% P123 覆土下層
2	長頸壺 須恵器	B (8.8) C [8.6] D 0.7	高台部から体部の破片。高台部は短く, 直線的に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ, 外面下位へう削り。底部回転へう削り。高台部貼付付け, ロクロナデ。	長石 砂粒 褐灰色 普通	20% P124 内面自然熱 覆土下層



第59図 第26号住居跡出土遺物実測図

第27号住居跡 (第60図)

位置 調査B区中央部, C3es区。

規模と平面形 長軸 3.76 m, 短軸 3.60 m の隅丸長方形である。

主軸方向 N-20°-E

壁 壁高は 15~21 cm で, 外傾して立ち上がる。

床 全面が粘土質で, 平坦で硬く踏み固められている。中央の一部が攪乱を受けている。

竈 3 か所。第1竈は, 北東壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 両側の袖部が残存している。規模は, 煙道部から焚口部まで 124 cm, 最大幅 65 cm, 壁外への掘り込みは 58 cm である。火床部は床面を 3 cm ほど掘り窪めており, 火熱を受けているが柔らかく, 赤変していない。煙道部は外傾して, 緩やかに立ち上がる。

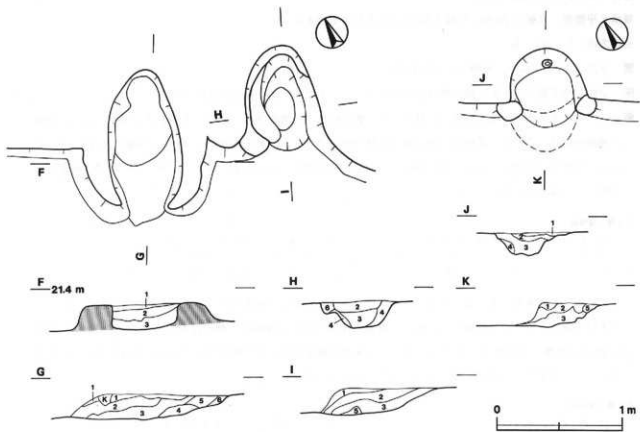
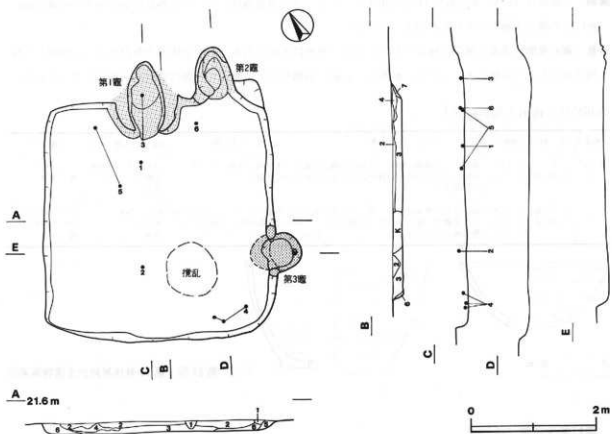
第1竈土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 4 暗褐色 | 焼土小ブロック多量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・炭化粒子少量 | 5 褐色 | 焼土粒子多量 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック少量 | 6 赤褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック多量 |

第2竈は, 北東壁の第1竈の東隣に, 砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 北東壁と東コーナー部を利用して, 粘土で袖部を作っている。規模は, 煙道部から焚口部まで 84 cm, 最大幅 70 cm, 壁外への掘り込みは 57 cm である。火床部は床面を 5 cm ほど掘り窪めており, 火熱を受けているが柔らかく, 赤変していない。煙道部は外傾して, 緩やかに立ち上がる。

第2竈土層解説

- | | | | |
|-------|--------------|--------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 4 暗赤褐色 | ローム粒子中量, 焼土小ブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 5 黒褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量 | 6 暗赤褐色 | 焼土粒子多量, 焼土小ブロック少量, 砂多量 |



第60图 第27号住居跡実測图

第3竈は、南東壁の南寄りに、砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しているが、煙道部が残存している。壁に砂混じりの粘土を貼って、袖部として利用している。煙道部から焚口部まで82cm、最大幅80cm、壁外への掘り込みは40cmである。火床部は床面を4cmほど掘り窪めており、火熱を受けて赤変し、硬化している。中央に須恵器の甕を支脚として利用している。煙道部は外傾して、階段状に立ち上がる。

第3竈土層解説

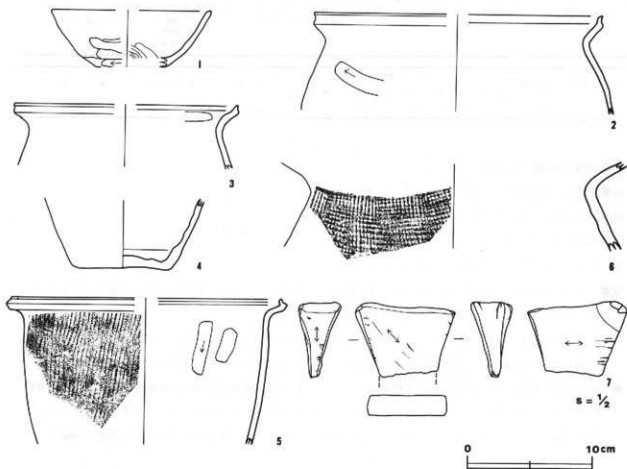
- | | | | |
|--------|-------------------|--------|-----------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 4 暗赤褐色 | 焼土小・中ブロック・褐色土中量 |
| 2 暗暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック少量 | 5 暗褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック中量 |
| 3 暗赤褐色 | ローム粒子少量、焼土小ブロック中量 | | |

覆土 1層は人為堆積、2層から7層は自然堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------|-------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子多量、焼土小ブロック少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・砂多量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量、砂少量 | 6 褐色 | ローム中ブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・褐色土中量 | 7 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子中量、焼土小ブロック微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子多量、焼土小ブロック少量 | | |

遺物 土師器片356点、須恵器片63点、砥石1点が出土している。1の須恵器環が中央の覆土下層から、2の土師器甕が南西壁寄りの覆土上層から、3の土師器甕が第1竈内から、4の土師器甕が南コーナー部の覆土下層から、5の須恵器鉢と6の須恵器甕が北コーナー部寄りの覆土下層から、7の砥石が覆土中からそれぞれ出土している。



第61図 第27号住居跡出土遺物実測図

所見 竈の構築順序は不明であるが、第1竈、第2竈は火床部の状況から、短期間しか使用されなかったものと考えられるため、竈を作り替えながら使用していた可能性が高い。時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代の9世紀後葉と考えられる。

第27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第61図 1	須恵器	A[12.5] B 4.5 C[5.4]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ、内彎気味に立ち上がる。	口縁部、体部内・外面クロナテ。体部外面下位へラ削り。内面下位へラ磨き。底部手持ちへラ削り。	長石 石英 砂粒 灰白色 普通	10% P125 覆土下層
2	埴土器	A[23.7] B(7.8)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がり、中位に腰を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナテ。体部内・外面ナテ、外面一部へラ削り。	長石 雲母 にふい褐色 普通	10% P126 覆土上層
3	埴土器	A[18.0] B(5.2)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がり、中位に腰を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部外面横ナテ、内面横ナテ、へラナテ。体部外面横ナテ、内面へラナテ。	長石 雲母 にふい褐色 普通	5% P127 第1竈内
4	埴土器	B(5.5) C 7.5	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ナテ。内面下位へラナテ。	長石 石英 雲母 砂粒 にふい褐色 普通	10% P128 覆土下層
5	須恵器	A[21.6] B(11.7)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反して、中位に2か所の腰を持つ。肩部はつまみ上げられた後、内面に折り返され、さらに上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面クロナテ。体部外面平行叩き、内面へラナテ。	長石 砂粒 灰色 普通	5% P129 覆土下層
6	須恵器	B(6.7)	胴部の破片。頸部は「く」の字状に屈曲する。	口縁部内・外面クロナテ。体部外面格子叩き、内面ナテ。	長石 石英 雲母 砂粒 褐色 普通	5% P130 覆土下層

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
7	磁石	(3.9)	(5.2)	(2.2)	(36)	凝灰岩	覆土中	Q4

第28号住居跡 (第62図)

位置 調査B区南西部, C3f区。

規模と平面形 長軸3.87 m, 短軸3.86 mの隅丸方形である。

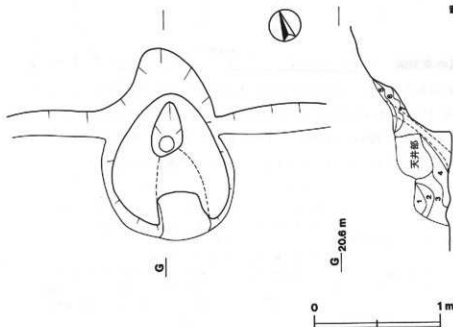
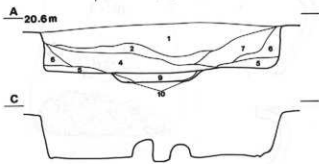
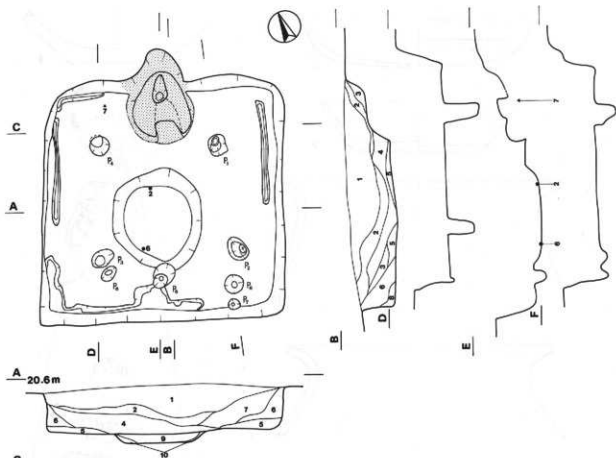
主軸方向 N-18'-E

壁 壁高は58~66 cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 東壁、南壁中央から西壁にかけての一部で検出した。上幅7~55 cm, 下幅3~26 cm, 深さ2~6 cmで、断面形はU字状である。南壁沿いは幅が極端に広がっている。

床 全面が灰白色粘土で、平坦である。中央には長径157 cm, 短径141 cmの楕円形で、深さ18 cmほどの掘り込みが見られる。中にはローム小ブロック、焼土小ブロック、炭化小ブロック、粘土ブロックが堆積している。

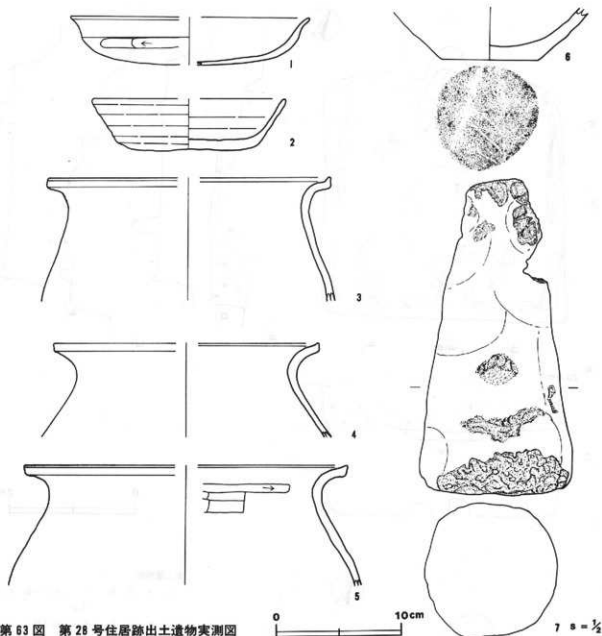
竈 北壁中央に砂混じりの灰白色粘土で構築されている。天井部、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで113 cm, 最大幅103 cm, 壁外への掘り込みは15 cmである。火床部は床面を8 cmほど掘り窪めている。火熱を受けているが、焼土が少なく、わずかに赤変硬化している。煙道部は外傾して、急に立ち上がる。



遺土層解説

- | | |
|--------|-----------------------------------|
| 1 灰褐色 | ローム粒子少量, 粘土多量 |
| 2 褐色 | 粘土・砂多量 |
| 3 暗褐色 | ローム大ブロック・焼土粒子・焼土大ブロック・砂多量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子・焼土中ブロック・炭化小ブロック多量 |
| 5 褐色 | 焼土粒子・砂多量 |
| 6 褐色 | ハードローム中ブロック中量, 焼土粒子・砂多量 |
| 7 赤褐色 | ローム中ブロック・焼土粒子・焼土大ブロック・粘土大ブロック・砂多量 |

第62図 第28号住居跡実測図



第63図 第28号住居跡出土遺物実測図

ピット 8か所 (P₁~P₈)。P₁~P₃は長径35~44cm, 短径28~30cmの楕円形, P₄は径32cmの円形で, いずれも深さ34~58cmの主柱穴である。P₆は径24cmの円形で, 深さ20cmの出入口施設に伴うピットである。P₇は径21~31cmの円形, P₈は長径28cm, 短径20cmの楕円形, いずれも深さ12~13cmで, 性格は不明である。

覆土 10層からなり, ローム, 焼土, 粘土ブロックを多く含有することから, 人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------------------|--------|--|
| 1 極暗褐色 | ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小・中ブロック多量 | 6 黒色 | 焼土小・中ブロック・粘土中ブロック多量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子・焼土小・中ブロック・粘土中・大ブロック多量 | 7 暗褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック・粘土小ブロック中量 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック中量 | 8 暗褐色 | 粘土小ブロック中量 |
| 4 褐色 | ローム粒子・ローム小・中ブロック多量, 焼土粒子・焼土小ブロック中量 | 9 暗褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化小ブロック・粘土小ブロック少量 |
| 5 褐色 | ローム粒子・ローム小・中ブロック多量, 焼土小ブロック中量 | 10 暗褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック少量, 粘土小ブロック中量 |

遺物 土師器片 308 点, 須恵器片 27 点, 支脚 1 点が出土している。1 の土師器環が竈内から, 2 の須恵器環, 6 の土師器甕が床面中央の掘り込みから, 3 ~ 5 の土師器甕が東壁寄りの覆土中から, 7 の支脚が竈西側の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 粘土層を掘り込んで造られている住居跡である。竈の火床部の状況から, 短期間しか使用されなかった住居跡と考えられる。また, 1 の土師器環は, 二次焼成がないことから, 竈祭祀に使用された可能性があると思われる。時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 奈良時代の 8 世紀前半と考えられる。

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第63図 1	環 土師器	A[18.0]	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり, 中位に稜を持つ。端部はわずかに外反する。	口縁部, 体部内・外面横ナテ。体部外面中位へラナテ。底部ナテ。	長石 雲母 砂粒 明赤褐色 普通	45% P132 竈内
		B(3.8)				
2	環 須恵器	A[15.4]	底部から口縁部の破片。平底。体部下位に稜を持ち, 口縁部にかけて, 直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部, 体部内・外面クロコナテ。底部手持ちへラ張り。	長石 雲母 砂粒 スコリア 灰褐色 普通	60% P133 掘り込み内
		B 4.2				
		C 9.2				
3	甕 土師器	A[22.6]	体部から口縁部の破片。口縁部は外反して立ち上がり, 中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナテ。体部内・外面ナテ, 内面一部へラナテ。	長石 雲母 砂粒 によい褐色 普通	5% P134 覆土中
		B(9.8)				
4	甕 土師器	A[21.2]	体部から口縁部の破片。口縁部は外反して立ち上がり, 中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナテ。体部内・外面ナテ。	長石 石英 砂粒 明赤褐色 普通	5% P135 覆土中
		B(7.6)				
5	甕 土師器	A[25.6]	体部から口縁部の破片。口縁部は外反して立ち上がり, 中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナテ。体部内・外面ナテ, 内面一部へラナテ。	長石 石英 雲母 砂粒 褐色 普通	5% P136 覆土中
		B(7.5)				
6	甕 土師器	B(4.3)	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ナテ。	長石 石英 雲母 砂粒 によい赤褐色 普通	5% P137 灰部不連続 掘り込み内
		C 7.6				

図版番号	器種	計測値			出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)		
7	支脚	16.7	8.1	(630)	覆土下層	DP9 90%

第29号住居跡 (第64図)

位置 調査B区南西部, C3d区。

重複関係 本跡は第73号住居跡と重複している。第73号住居跡が, 本跡の北西コーナー一部を掘り込んでいることから, 本跡が古い。

規模と平面形 長軸 4.38 m, 短軸 4.36 m の方形である。

主軸方向 N-0°

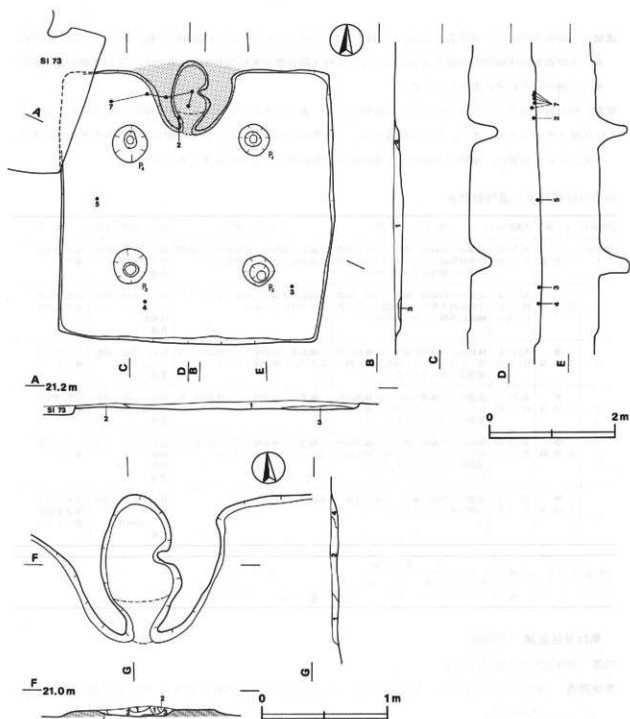
壁 壁高は 6 ~ 10 cm で, 外傾して立ち上がる。

床 全面が粘土質で, 平坦で硬く締まっている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。両側の袖部が残存している。規模は, 煙道部から焚口部まで 120 cm, 最大幅 150 cm, 壁外への掘り込みは 15 cm である。火床部は, 火熱を受けて赤変し, 硬化している。煙道部は外傾して, 緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|-------|-----------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量, 粘土多量 | 3 灰褐色 | 焼土粒子・焼土ブロック・砂多量 |
| 2 赤褐色 | 焼土小・中・大ブロック多量, 炭化材中量 | 4 赤褐色 | 焼土小・中・大ブロック多量 |



第64図 第29号住居跡実測図

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁~P₄は径50~60cmの円形で、いずれも深さ34~47cmの支柱穴である。

覆土 4層からなり、自然堆積と思われる。

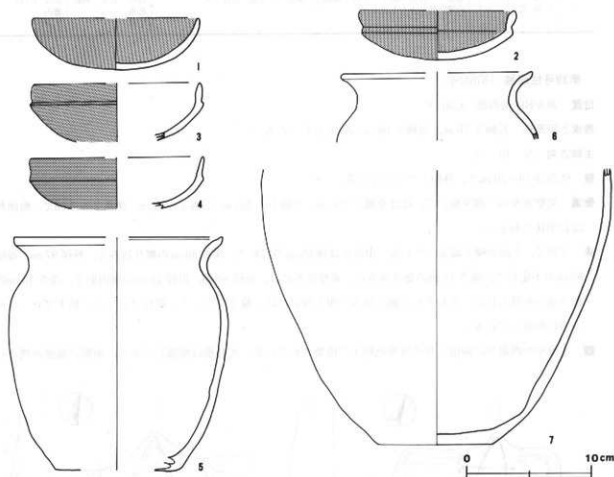
土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|---------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量 | 3 灰褐色 | 焼土粒子・小ブロック少量 |
| 2 灰褐色 | ローム粒子・粘土粒子中量 | 4 暗褐色 | 焼土粒子・粘土粒子・砂少量 |

遺物 土師器片104点、須恵器片8点、および混入した石鉄3点が出土している。遺物は細片が多い。1の土師器杯、6の土師器小形甕がP₁内から、2の土師器杯、7の土師器甕が竈内から、3の土師器杯が南東コーナー部の覆土下層から、4の土師器杯が南壁寄りの覆土下層から、5の土師器小形甕が西壁寄りの覆土下層

からそれぞれ出土している。

所見 覆土が薄かったために、壁の残存率が低い。窟内から遺物が多く出土しており、土器片を窟の補強材として使用していた可能性がある。時期は、遺構の形態や出土遺物から、古墳時代の6世紀後葉と考えられる。



第65図 第29号住居跡出土遺物実測図

第29号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第65図 1	坏 土器	A[13.2] B 4.1	底部から口縁部の破片。丸底。体部から口縁部にかけて、内傾気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部手持ちへラ削り。	長石 砂粒 褐色 普通	10% P138 内・外面黒色処理 P内
2	坏 土器	A[12.4] B 3.9	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内傾気味に立ち上がり、上位に稜を持つ。口縁部は外傾気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部手持ちへラ削り。	長石 石英 砂粒 に白い褐色 普通	10% P139 内・外面黒色処理 窟内
3	坏 土器	A[13.3] B(4.1)	体部から口縁部の破片。体部は内傾気味に立ち上がり、上位に稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石 石英 砂粒 褐色 普通	5% P140 外面黒色処理 覆土下層
4	坏 土器	A[13.8] B(4.0)	体部から口縁部の破片。体部は内傾気味に立ち上がり、上位に稜を持つ。口縁部は外傾気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石 砂粒 スコリア 褐色 普通	5% P141 外面黒色処理 内・外面割離 覆土下層
5	小形 土器	A[16.7] B 19.5 C[9.5]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内傾気味に立ち上がり。口縁部は外反して、中位に稜を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石 石英 砂粒 スコリア 赤褐色 普通	20% P142 覆土下層

第65図	小形 土器	A [15.0] B (5.4)	体部から口縁部の破片。体部は内彎 気味に立ち上がる。口縁部は外反し て、中位に稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外 面ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 スコリア 明赤褐色 普通	5% P143 P ₁ 内
7	寛 土器	B (22.0) C 8.6	底部から体部の破片。平底。体部は 内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面、底部ナデ。	長石 石英 砂粒 褐色 普通	30% P144 壺内

第30号住居跡 (第66図)

位置 調査B区南西部, C3b1区。

規模と平面形 長軸 2.76 m, 短軸 2.69 mの隅丸方形である。

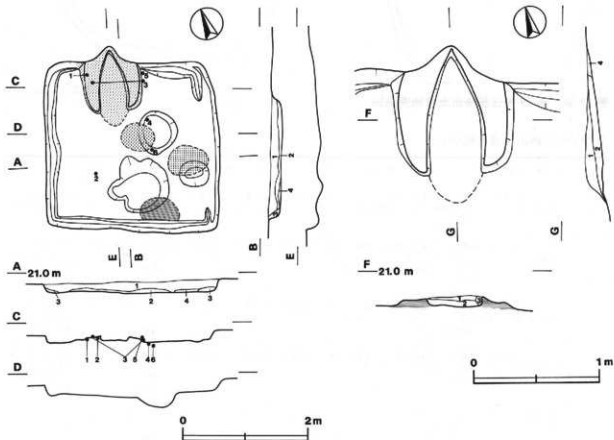
主軸方向 N-19°-E

壁 壁高は10~20 cmで、外傾して立ち上がる。

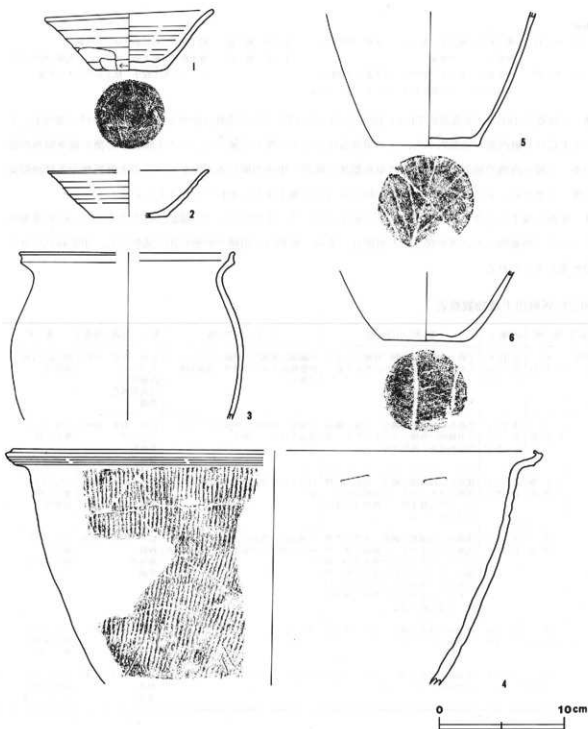
壁溝 東壁寄りの一部を除いて、ほぼ全周している。上幅10~25 cm, 下幅5~12 cm, 深さ2~4 cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、全面が硬く締まっている。中央には径65 cmの円形で、深さ50 cmの掘り込みと、長径97 cm, 短径85 cmの不定形で、深さ14 cmの掘り込みが、東壁寄りには、長径50 cm, 短径40 cmの楕円形で、深さ10 cmの掘り込みが見られる。それぞれの掘り込みの中と周辺には、焼土ブロック、炭化ブロック、粘土ブロックが多量に堆積している。

竈 北壁やや西寄りに砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存し



第66図 第30号住居跡実測図



第 67 図 第 30 号住居跡出土遺物実測図

ている。規模は、煙道部から焚口部まで 124 cm，最大幅 95 cm，壁外への掘り込みは 24 cm である。火床部は、火熱を受けているが、焼土が少なく、わずかに赤変硬化している。煙道部は外傾して、緩やかに立ち上がる。

焼土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化小ブロック中量，焼土粒子・粘土粒子多量 | 3 黒褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子少量，粘土粒子多量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土小・中ブロック・炭化粒子中量，焼土粒子・粘土粒子多量 | 4 暗褐色 | 焼土粒子・焼土小・中ブロック多量 |

覆土 4層からなり、焼土ブロック，粘土ブロックを多く含有していることから，人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・焼土小・中ブロック多量, 炭化粒子・炭化中ブロック中量
 2 暗褐色 焼土粒子・焼土小・中ブロック多量, 炭化粒子・炭化中ブロック・粘土粒子・粘土小ブロック中量
 3 灰褐色 粘土粒子・粘土小ブロック中量
 4 赤褐色 焼土粒子・焼土小・中ブロック多量, 炭化小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロック中量

遺物 土師器片 184 点, 須恵器片 74 点が出土している。ほとんどの遺物は中央から竈周辺にかけて集中し, 1 の須恵器が竈西側の袖部内から, 2 の須恵器が中央の覆土下層から, 3 の土師器小形甕が竈東側袖部脇の覆土下層と西側の袖部内から, 4 の須恵器鉢が竈内と中央の掘り込み内から, 5 の土師器甕が東側袖部脇の覆土下層から, 6 の土師器甕が中央の掘り込み内と覆土中からそれぞれ出土している。

所見 床面と覆土から多くの焼土ブロックや粘土ブロック, 炭化ブロックが確認されたことから, 住居廃棄時に人為的に廃棄物と共に埋め戻された可能性がある。時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 平安時代の 9 世紀後半と考えられる。

第30号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第67図 1	環 須恵器	A 13.6 B 4.1-4.8 C 5.6	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部外面下位へうけ削り。底部回転へうけ削り。	長石 雲母 砂粒 スコリア 外面灰色 内面黄褐色 普通	100% P146 袖部内
2	環 須恵器	A[12.8] B 3.7 C[5.7]	底部から口縁部の破片。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。底部平持ちへうけ削り。	長石 石英 砂粒 スコリア 黄灰色 普通	5% P147 覆土下層
3	小形甕 土師器	A[17.2] B[13.2]	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して, 中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石 石英 砂粒 暗褐色 普通	5% P148 覆土下層 袖部内
4	鉢 須恵器	A[42.4] B[18.9]	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反して, 中位と上位に稜を持つ。端部はつまみ上げられた後, 内側に折り返され, さらに上方へつまみ上げられる。端部直下と口唇部に棒状工具による凹線が走る。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面平行叩き。内面ナデ, アケ具痕有り。	長石 石英 雲母 砂粒 暗灰色 普通	10% P149 竈内 掘り込み内
5	甕 土師器	B(10.8) C 8.0	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ナデ。	長石 石英 砂粒 赤褐色 普通	35% P150 底部木炭痕 覆土下層
6	甕 土師器	B(5.6) C 6.7	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ナデ。	長石 石英 砂粒 暗褐色 普通	15% P151 底部木炭痕 掘り込み内 覆土中

第31号住居跡 (第68図)

位置 調査B区西部, C3b2区。

規模と平面形 長軸 3.64 m, 短軸 3.53 m の方形である。

主軸方向 N-15'-E

壁 壁高は 15~25 cm で, 外傾して立ち上がる。

壁溝 竈東側の一部を除いて, ほゞ全周している。上幅 13~22 cm, 下幅 4~13 cm, 深さ 2~6 cm で, 断面形は U 字状である。

床 全面が粘土質で, 平坦で硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。

規模は、煙道部から焚口部まで116 cm、最大幅112 cm、壁外への掘り込みは30 cmである。火床部は火熱を受け赤変し、硬化している。煙道部は外傾して、階段状に立ち上がる。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|--------|-------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・粘土少量 | 4 暗赤褐色 | 焼土小ブロック多量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量、砂中量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・粘土少量 | | |

ピット 1か所 (P₁)。P₁は長径43 cm、短径37 cmの楕円形で、深さ20 cmの出入口施設に伴うピットである。

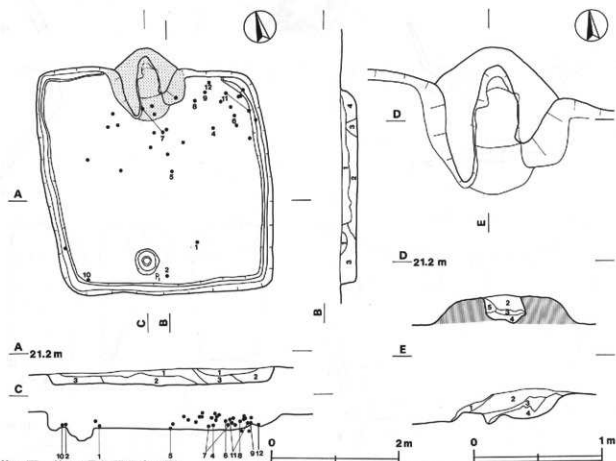
覆土 4層からなり、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

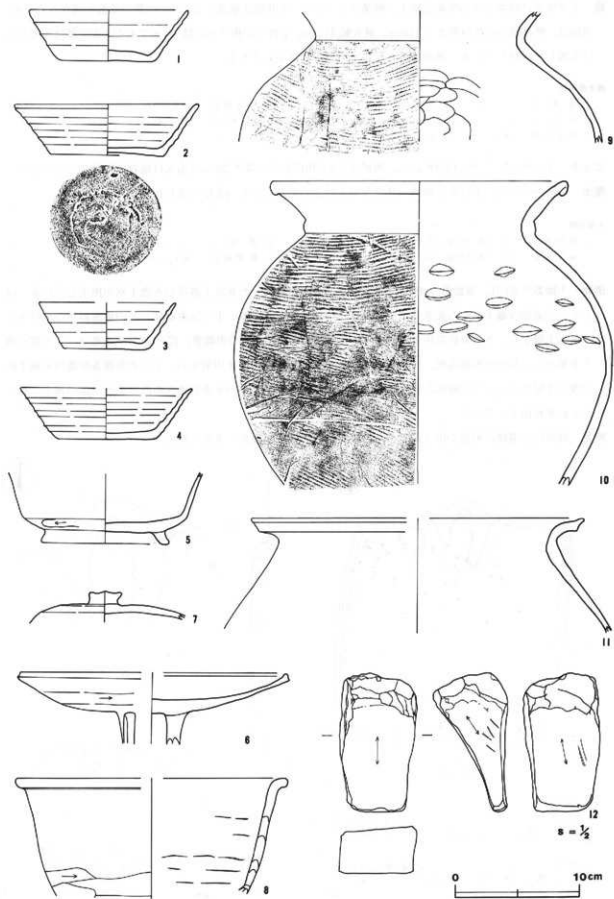
- | | | | |
|--------|-------------------------|--------|-------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子多量 | 3 黒褐色 | ローム中ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック・焼土粒子多量 | 4 極暗褐色 | 焼土小・中ブロック中量 |

遺物 土師器片63点、須恵器片46点、砥石1点、および混入した瓦質土器片の火舎1点が出土している。ほとんどの遺物は竈手前から北東コーナー部にかけて集中している。1の須恵器杯、2の須恵器杯が南壁寄りの覆土下層から、3の須恵器杯が竈内から、4の須恵器杯、9の須恵器甕、12の砥石が北東コーナー部の覆土下層から、6の須恵器高盤、11の土師器甕、8の須恵器鉢が覆土中層から、7の須恵器蓋が竈内と竈手前の覆土下層から、5の土師器高台付杯が中央の床面直上から、10の須恵器甕が南西コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代の8世紀後半と考えられる。



第68図 第31号住居跡実測図



第69图 第31号住居跡出土遺物実測図

第31号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第69図 1	坏 須臾器	A 12.4	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 灰白色 普通	60% P155 覆土下層
		B 4.1				
		C 7.1				
2	坏 須臾器	A 14.5	口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転へ切り付け、ヘラナデ。	長石 砂粒 灰白色 良好	95% P156 覆土下層
		B 13.4				
		C 8.9				
3	坏 須臾器	A[10.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部ヘラナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 黄灰色 普通	15% P157 甕内
		B 3.7				
		C 6.4				
4	坏 須臾器	A[13.4]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部手持ちへ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰白色 普通	10% P158 覆土下層
		B 4.1				
		C 7.6				
5	高台付坏 土師器	B (5.8)	底部から体部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は下位に腰を持ち、わずかに外反して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。外面下位へ削り。底部回転へ削り。高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 にしい橙色 普通	60% P159 床面直上
		D 10.0				
		E 1.0				
6	高 須臾器	A[21.1]	脚部から口縁部の破片。脚部は内傾し、3孔を有する。底部は丸みを持った平底。体部は内彎気味に立ち上がる。鋳部はつまみ上げられ、棒状工具による凹線を通らす。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。外面下位回転へ削り。脚部貼り付け、ロクロナデ。	長石 雲母 砂粒 灰白色 普通	30% P160 覆土中層
		B (5.7)				
7	蓋 須臾器	B (2.8)	天井部の破片。扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は、ほぼ平坦である。	つまみ、天井部内・外面ロクロナデ。頂部回転へ削り。	長石 雲母 砂粒 黄灰色 普通	50% P161 覆土下層 甕内
		F 2.6				
		G 1.1				
8	鉢 須臾器	A[21.4]	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反して、端部は厚みを増す。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。外面下位へ削り。内面輪縁あり。	長石 石英 雲母 砂粒 灰白色 普通	5% P163 覆土中層
		B (9.4)				
9	甕 須臾器	B(10.5)	体部から頸部の破片。頸部は「く」の字状に屈曲する。	体部外面平行叩き。内面横ナデ、アテ具痕有り。	長石 雲母 砂粒 黄灰色 普通	10% P164 覆土下層
10	甕 須臾器	A[21.3]-B4	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、頸部は「コ」の字状に屈曲している。口縁部は外反する。断面が三角形の折り返し口縁。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面平行叩き。内面ナデ、アテ具痕有り。	長石 石英 雲母 砂粒 スコリア 橙色 普通	30% P165 覆土下層
		B(24.4)				
11	甕 土師器	A[26.4]	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反して、中位に腰を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石 雲母 砂粒 スコリア 赤褐色 普通	5% P162 覆土中層
		B (9.2)				

図版番号	器種	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
12	砾石	(7.3)	(4.1)	(4.0)	(115)	凝灰岩	覆土下層	Q 6

第32号住居跡 (第70図)

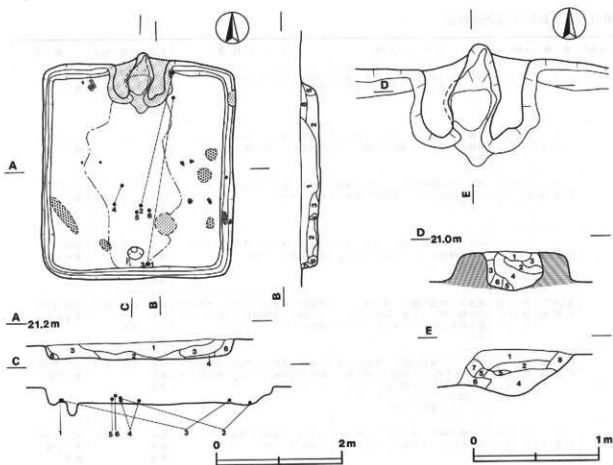
位置 調査B区西部、C3c区。

規模と平面形 長軸 3.43 m、短軸 3.05 mの長方形である。

主軸方向 N-1'-E

壁 壁高は17~28 cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅13~25 cm、下幅3~10 cm、深さ4~6 cmで、断面形はU字状である。



第70図 第32号住居跡実測図

床 全面が粘土質で、平坦で締まっている。特に、南壁から竈にかけて、硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部の一部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで95cm、最大幅102cm、壁外への掘り込みは15cmである。火床部は床面を6cmほど掘り窪めており、火熱を受け赤変し、硬化している。煙道部は外傾して、階段状に立ち上がる。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|------------------------|--------|-------------------------|
| 1 黒色 | ローム粒子多量、焼土粒子中量、粘土質 | 5 暗褐色 | ローム小ブロック・焼土粒子多量 |
| 2 極暗赤褐色 | 焼土小・中ブロック・砂多量 | 6 暗褐色 | ローム小ブロック・焼土粒子・粘土小ブロック多量 |
| 3 極暗赤褐色 | 焼土小・中ブロック・粘土小ブロック・粘土多量 | 7 暗褐色 | 焼土粒子・焼土中ブロック中量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子・焼土小・中ブロック多量 | 8 極暗褐色 | 焼土粒子・粘土小ブロック中量 |

ピット 1か所 (P₁)。P₁は長径26cm、短径20cmの楕円形で、深さ22cmの出入口施設に伴うピットである。

覆土 8層からなり、焼土ブロック、炭化材を多く含有していることから、人為堆積と思われる。

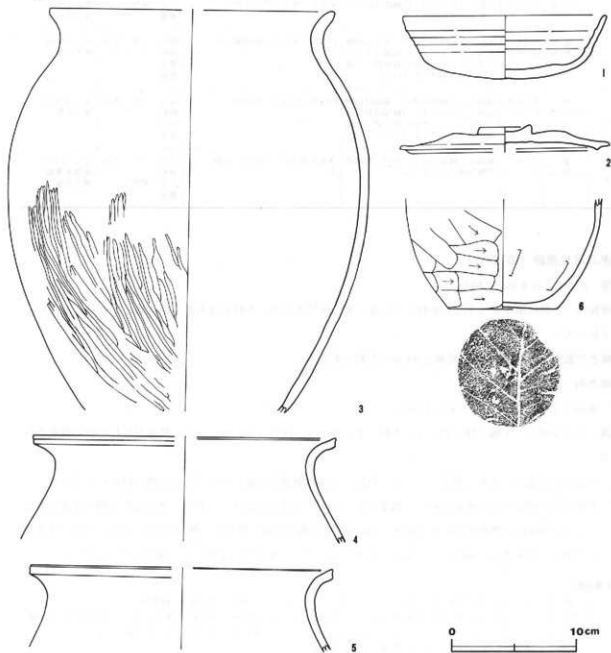
土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------------|-------|-------------------------------|
| 1 黒色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量 | 6 暗褐色 | 粘土小ブロック多量 |
| 2 黒色 | ローム粒子・ローム小・中ブロック中量 | 7 暗褐色 | ローム粒子・ローム小・中ブロック多量 |
| 3 黒色 | ローム粒子少量、焼土粒子・焼土小ブロック中量、炭化材多量 | 8 褐色 | ローム小・中ブロック多量 |
| 4 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | | ローム小・中ブロック多量、焼土粒子・焼土小・中ブロック中量 |
| 5 暗褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック中量、粘土粒子・ | | |

遺物 土師器片17点、須恵器片9点、および混入した石斧1点が出土している。ほとんどの遺物は電手前と中央やや南壁寄りに集中している。1の須恵器環が南壁寄りの覆土下層から、2の須恵器蓋が竈脇の床面直上と中央の覆土中層から、3の土師器甕が南壁寄り覆土下層と電手前の床面直上から、4と5の土師器甕が中

中央の覆土下層から、6の土師器甕が覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 住居跡の南半分を中心に、多量の焼土塊と炭化材が確認されていることから、焼失家屋と考えられ、人為的に埋め戻された可能性がある。時期は、遺構の形態や出土遺物から、古墳時代の7世紀後葉と考えられる。



第71図 第32号住居跡出土遺物実測図

第32号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第71図 1	坏 須 志 器	A 16.3 B 5.1	丸底、体部は内彎気味に立ち上がる。 口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ、 底部手持ちへラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 に濃い橙色 普通	100% P166 覆土下層

第71区 2	須 恵 器 片	A [16.6] B 2.2 F 4.0 G 0.6	天井部、口縁部一部欠損。扁平なボ タン状のつまみが付く。天井部はほ ぼ平坦で、緩やかに開く。口縁部は わずかに内彎しながら、縁部は外反 して、内側にかまよりが付く。	つまみ、天井部、口縁部内・外面ロ クロナデ。頂部回転へう削り。	長石 雲母 砂粒 スコリア にふい赤褐色 普通	70% P167 床面直上 覆土中層
3	壺 土 器 片	A [22.6] B (32.0)	体部から口縁部の破片。体部は内彎 気味に立ち上がる。口縁部はわずかに 外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外 面ナデ。外面中位へう磨き。	石英 雲母 砂粒 にふい褐色 普通	35% P168 覆土下層 床面直上
4	壺 土 器 片	A [23.9] B (8.4)	体部から口縁部の破片。体部は内彎 気味に立ち上がる。口縁部は外反し て立ち上がり、中位に壁を持つ。端 部はつまみ上げられている。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 スコリア 褐色 普通	50% P169 覆土下層
5	壺 土 器 片	A [24.0] B (6.6)	体部から口縁部の破片。体部は内彎 気味に立ち上がる。口縁部は外反し て立ち上がり、中位に壁を持つ。端 部はつまみ上げられている。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 スコリア 褐色 普通	5% P170 覆土下層
6	壺 土 器 片	B (8.8) C 44-44	底部から体部の破片。平底。体部は 内彎気味に立ち上がる。	体部外面下位へう削り、内面へうナ デ。	長石 石英 雲母 砂粒 にふい褐色 普通	30% P171 底部木炭灰 覆土中層

第33号住居跡 (第72図)

位置 調査B区南東部、C4d区。

重複関係 本跡は第168号土坑と重複している。第168号土坑が、本跡の南東部を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸2.98 m、短軸2.84 mの方形である。

主軸方向 N-14°E

壁 壁高は32 cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 ほぼ全周し、上幅 [18-32] cm、下幅 [2-10] cm、深さ [3-6] cmで、断面形はU字状と推定される。

床 全面が粘土質で、平坦で締まっている。特に、出入口施設から竈にかけて、硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで107 cm、最大幅120 cm、壁外への掘り込みは53 cmである。火床部は、火熱を受けわずかに硬化しているが、赤変していない。煙道部は外傾して、緩やかに立ち上がる。

遺土層解説

- | | | | |
|---------|---------------------------|---------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子多量 | 5 にふい褐色 | 焼土粒子・砂多量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子多量、焼土小ブロック少量 | 6 暗赤褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック中量、炭化粒子少量 |
| 3 赤褐色 | ローム粒子少量、焼土中・大ブロック多量、砂中量 | 7 暗褐色 | 焼土粒子・砂・粘土粒子少量 |
| 4 にふい褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック・砂多量、粘土ブロック中量 | | |

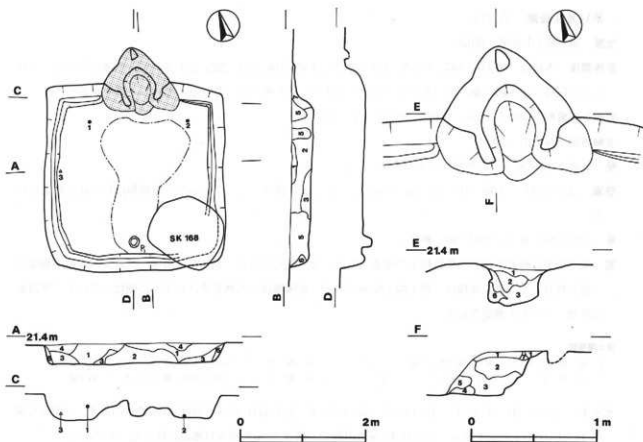
ピット 1か所 (P₁)。P₁は径17 cmの円形で、深さ18 cmの出入口施設に伴うピットである。

覆土 7層からなり、ブロック状の堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子中量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・ソフトローム小・中ブロック多量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・焼土小ブロック中量 | 6 明褐色 | ハードローム小・中ブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・粘土小ブロック中量 | 7 暗褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック中量、暗褐色土多量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子多量、ソフトローム小ブロック中量 | | |

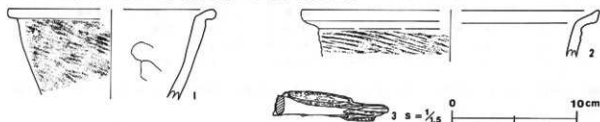
遺物 土師器片41点、須恵器片39点、刀子1点が出土している。1の須恵器鉢が竈西側の覆土中層から、2



第72図 第33号住居跡実測図

の須恵鉢鉢が竈東側の床面直上から、3の刀子が西壁寄りの床面直上からそれぞれ出土している。

所見 遺物が少ないことや、竈の火床部の状況から、短期間しか使用されなかった住居と考えられる。時期は、遺構の形態や出土物から、奈良時代の8世紀と考えられる。



第73図 第33号住居跡出土遺物実測図

第33号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
							長さ (cm)
第73図 1	鉢 須恵器	A [16.2]	体部から口縁部の破片。体部は外傾して立ち上がる。口縁部は強く外反し、口縁直下に凹線を施す。	口縁部、体部内面ロクロナデ。体部外面平行印き。内面アテ具痕有り。	石英 雲母 砂粒 黄灰色 普通	5% P173 覆土中層	
		B (7.2)					
2	鉢 須恵器	A [23.6]	体部から口縁部の破片。口縁部は強く外反し、中に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部、体部内面ロクロナデ。体部外面平行印き。	長石 雲母 砂粒 黄灰色 普通	5% P172 床面直上	
		B (3.7)					
図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
3	刀子	(8.1)	(1.4)	(0.6)	(17)		

第34号住居跡 (第74図)

位置 調査B区中央部, B3j区。

重複関係 本跡は, 第146, 147, 153 A, 153 B, 154, 156, 218, 224, 225, 227号土坑と重複している。これらの土坑群が, 本跡の竈, 床の北半分, 南壁と西壁の一部を掘り込んでいることから, 本跡が古い。

規模と平面形 長軸 5.17 m, 短軸 5.10 m の方形である。

主軸方向 N-10°-W

壁 壁高は 25~30 cm で, 外傾して立ち上がる。

壁溝 ほぼ全周し, 上幅 [10~22] cm, 下幅 [2~7] cm, 深さ [2~7] cm で, 断面形は U 字状と推定される。

床 全面が粘土質で, 平坦で硬く締まっている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されていたと推定される。天井部は崩落しており, 両側の袖部の一部が残存している。規模は, 最大幅 120 cm である。火床部は, 火熱を受けわずかに硬化している。竈道部は外傾していたと推定される。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 3 赤褐色 | ローム粒子中量, 焼土小・中ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土小ブロック・砂少量 |

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₃は径 25~55 cm の円形, P₄は長径 50 cm, 短径 43 cm の楕円形で, いずれも深さ 46~55 cm の支柱穴である。P₅は径 42 cm の円形で, 深さ 30 cm の出入口施設に伴うピットである。

覆土 14層からなり, ブロック状の堆積の状況が見られることから, 人為堆積と思われる。

土層解説

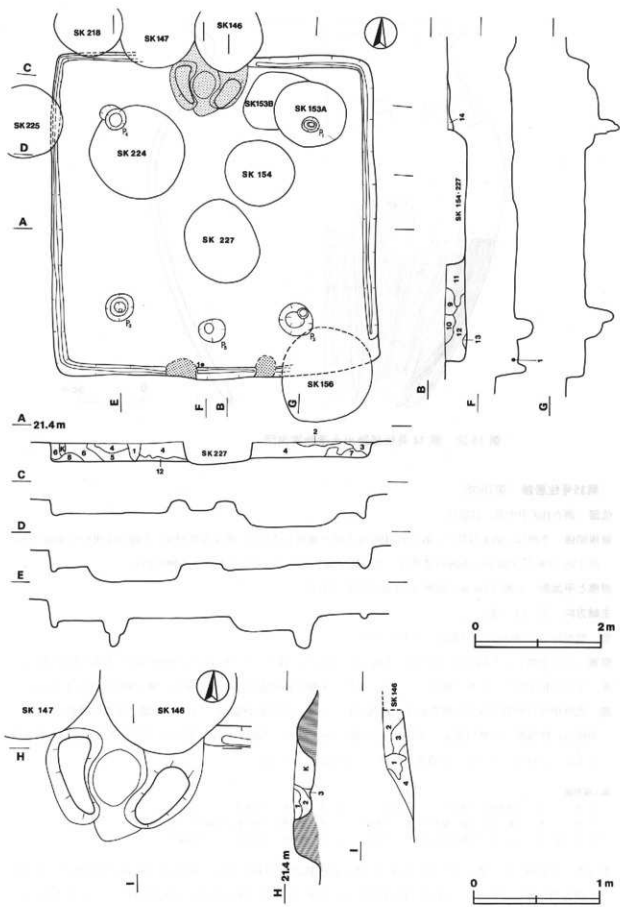
- | | | | |
|-------|--------------------|--------|--------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 8 褐色 | ローム小ブロック中量 |
| 2 灰褐色 | ローム粒子少量 | 9 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 3 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 10 暗褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック少量 |
| 4 褐色 | ローム粒子少量 | 11 暗褐色 | ローム中ブロック・粘土小ブロック少量 |
| 5 褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 12 暗褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 6 褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック少量 | 13 灰褐色 | 粘土粒子多量 |
| 7 褐色 | ローム小ブロック・焼土小ブロック少量 | 14 暗褐色 | ローム粒子少量, 粘性有り |

遺物 土師器片 105 点, 須恵器片 28 点, および混入した瀬戸・美濃系の陶器片 2 点が出土している。1 の土師器片が南壁寄りの覆土下層から出土している。

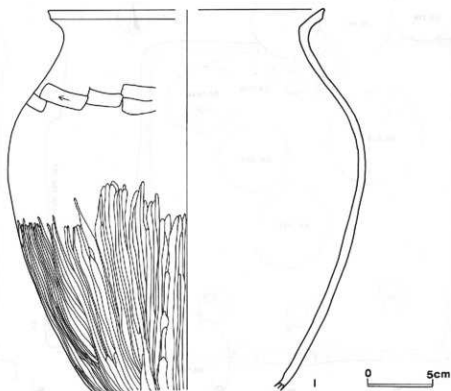
所見 南壁沿いに焼土が確認されているが, 性格は不明である。多くの土坑に掘り込まれていること, 遺物が少なく, ほとんど細片であったことなどから, 本跡に伴う遺物である可能性は低いと思われる。時期は, 遺物の形態や出土遺物から, 奈良時代の 8 世紀前半と考えられる。

第34号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第75図 1	土師器	A [21.9] B (30.3)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して, 中位に腹を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位へう彫り, 中位から下位はへう磨き。内面ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 褐色 普通	20% P174 内・外面スス付着 覆土下層



第 74 图 第 34 号住居跡実測图



第75図 第34号住居跡出土遺物実測図

第35号住居跡 (第76図)

位置 調査B区中央部, B3j6区。

重複関係 本跡は、第4号井戸、第138、196号土坑と重複している。第4号井戸が、本跡の中央やや南寄りを、第138、196号土坑が、本跡の北東コーナー部を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸5.60 m, 短軸5.34 mの方形である。

主軸方向 N-19°-E

壁 壁高は20~30 cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 ほは全周し、上幅[20~90] cm, 下幅[4~30] cm, 深さ[4~8] cmで、断面形はU字状と推定される。

床 全面が粘土質で、平坦で締まっている。特に、東壁と西壁寄りの一部を除き、硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。

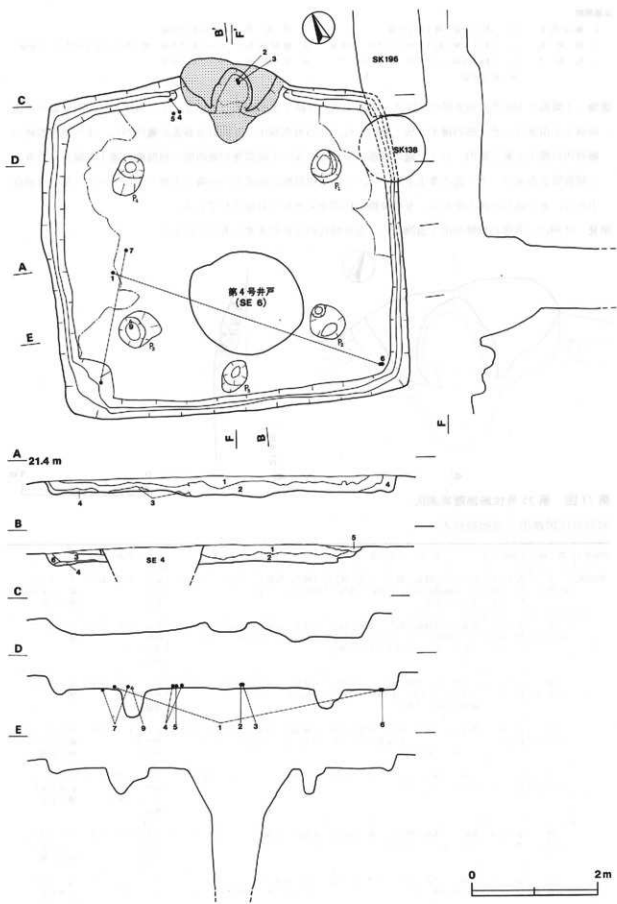
規模は、煙道部から焚口部まで40 cm, 最大幅80 cm, 壁外への掘り込みは20 cmである。火床部は、火熱を受け赤変し、硬化している。煙道部は外傾し、緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|----------------|
| 1 黒色 | 焼土粒子・焼土小ブロック中量 | 4 赤褐色 | 焼土大ブロック少量 |
| 2 黒色 | 焼土粒子中量, 焼土小ブロック多量 | 5 赤褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック中量 |
| 3 赤褐色 | 焼土粒子・焼土小・中ブロック中量 | 6 赤褐色 | 焼土大ブロック多量 |

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁は径50 cmの円形, P₂~P₄は長径60~63 cm, 短径44~55 cmの楕円形で、いずれも深さ30~45 cmの主柱穴である。P₅は径42 cmの円形で、深さ30 cmの出入口施設に伴うピットである。

覆土 6層からなり、自然堆積と思われる。



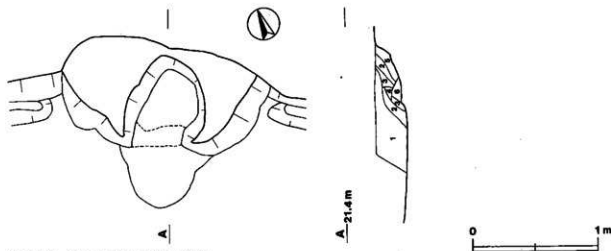
第76图 第35号住居跡実測图

土層解説

1 藍褐色	ローム粒子多量、焼土粒子中量	4 黒褐色	ローム粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック中量	5 藍褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・焼土小ブロック中量
3 暗褐色	ローム粒子多量、ソフトローム小ブロック・焼土粒子中量	6 黒褐色	ローム粒子中量

遺物 土師器片 169 点、須恵器片 224 点、砥石 1 点、鉄錐 1 点が出土している。1 の須恵器坏が西壁寄りの床面直上と南東コーナー部の覆土下層と竈内から、2 の須恵器坏、3 の須恵器蓋が竈内から、4 の須恵器鉢が竈周辺の覆土下層と竈内、および竈の袖部の中から、5 の土師器甕が竈西側の袖部裏の覆土下層から、6 の土師器甕が南東コーナー部の覆土下層から、7 の須恵器瓶が西壁寄りの覆土下層と南西コーナー部の床面直上から、8 の砥石が覆土中から、9 の鉄錐がP₃内からそれぞれ出土している。

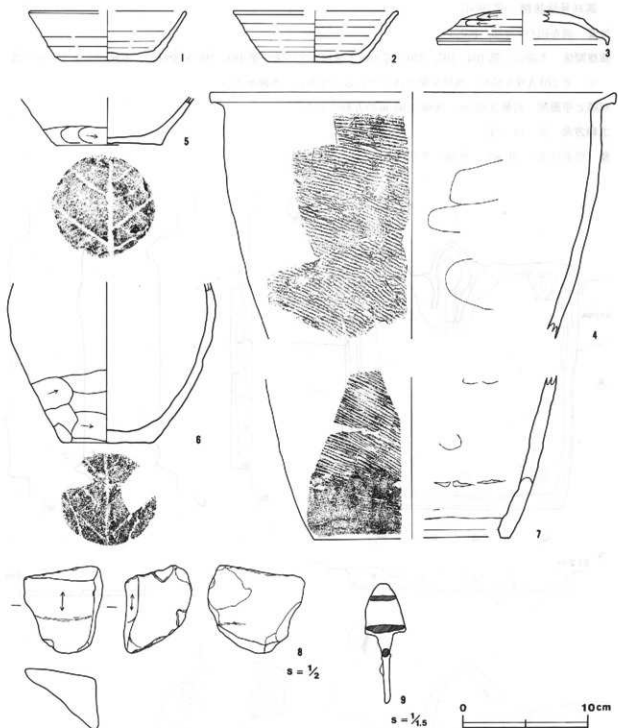
所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代の 8 世紀後半と考えられる。



第 77 図 第 35 号住居跡竈実測図

第 35 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第78図 1	坏 須恵器	A [12.4] B 4.0 C 7.4	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナテ。底部回転ヘラ削り。	長石 雲母 砂粒 灰白色 普通	50% P176 竈内 床面直上 覆土下層
2	坏 須恵器	A [13.0] B 4.1 C 7.6	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナテ。底部回転ヘラ削り後、ヘラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 黄灰色 普通	45% P177 竈内
3	蓋 須恵器	A [13.8] B (2.7)	天井部から口縁部の破片。天井部はほぼ平皿で、中位に縁を持って開く。端部は屈曲して垂下する。	天井部、口縁部内・外面ロクロナテ。頂部回転ヘラ削り。	長石 雲母 砂粒 普通	50% P178 竈内
4	鉢 須恵器	A [30.2] B (19.7)	体部から口縁部の破片。体部は外傾して立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に縁を持つ。	口縁部内・外面ロクロナテ。体部外面平行叩き、内面アテ具痕有り。	長石 石英 砂粒 褐灰色 普通	10% P180 竈内 袖部内 覆土下層
5	甕 土師器	B (3.9) C 8.6	底部から体部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面下位ヘラ削り、内面ナテ。	長石 石英 雲母 砂粒 におい赤褐色 普通	10% P181 底部木炭灰 覆土下層
6	甕 土師器	B (12.0) C 7.1	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ナテ。外面下位ヘラ削り。	長石 石英 砂粒 明赤褐色 普通	70% P179 底部木炭灰 覆土下層
7	瓶 須恵器	B (12.9) C [15.7]	底部から体部の破片。多孔式。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面平行叩き、下位ヘラ削り。内面アテ具痕、輪痕痕有り。	長石 雲母 砂粒 スコリア におい黄色 普通	5% P182 床面直上 覆土下層



第 78 图 第 35 号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
8	砥石	(4.7)	(4.2)	(3.5)	(48)	凝灰岩	覆土中	Q 8

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
9	鉄鏃	8.4	2.9	0.4~0.6	14	P ₁ 内	M 2 100%

第36号住居跡 (第79図)

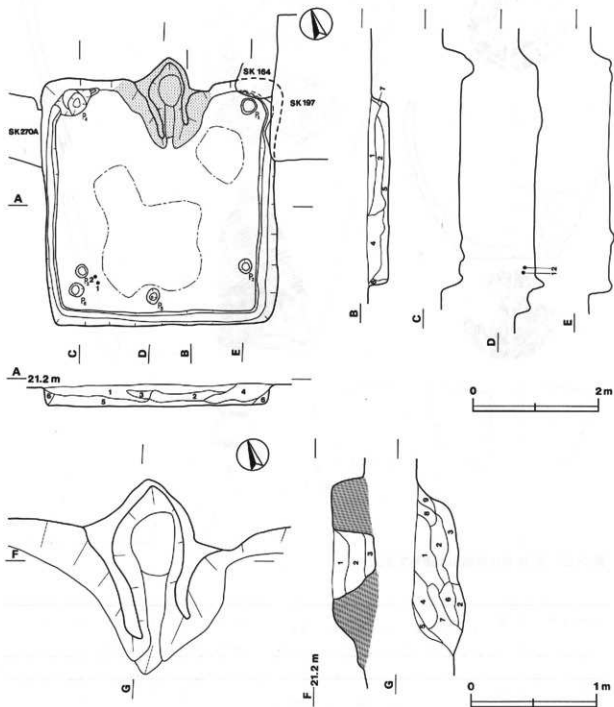
位置 調査B区中央部, B3ha区。

重複関係 本跡は, 第164, 197, 270 A号土坑と重複している。第164, 197号土坑が, 本跡の北東コーナー部を, 第270 A号土坑が, 西壁を掘り込んでいることから, 本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.92 m, 短軸3.65 mの方形である。

主軸方向 N-18°-E

壁 壁高は27~30 cmで, 外傾して立ち上がる。



第79図 第36号住居跡実測図

壁溝 ほぼ全周し、上幅 [16~34] cm、下幅 [6~16] cm、深さ [4~6] cmで、断面形はU字状と推定される。

床 全面が粘土質で、平坦で締まっている。特に、出入口施設付近と竈東側の一部が、硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂と小石混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで154 cm、最大幅120 cm、壁外への掘り込みは34 cmである。火床部は床面を4 cmほど掘り窪めており、火熱を受けてわずかに赤変しているが、あまり硬化していない。煙道部は外傾して、緩やかな階段状に立ち上がる。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------|-------|----------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土小ブロック少量、粘土小・中ブロック中量 | 6 暗褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック多量、褐色土中量 |
| 2 暗褐色 | 焼土小・中ブロック多量、粘土小・中ブロック中量 | 7 暗褐色 | 粘土小・中ブロック中量、天井部の崩落土 |
| 3 暗褐色 | 焼土小・中・大ブロック中量、粘土大ブロック多量 | 8 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 4 極暗褐色 | 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量 | 9 褐色 | ローム粒子・ソフトローム小・中ブロック・焼土粒子少量 |
| 5 極暗褐色 | 焼土粒子多量 | | |

ピット 6か所 (P₁~P₆)。P₁、P₂、P₃は径21~30 cmの円形、P₄は長径25 cm、短径21 cmの楕円形で、いずれも深さ4~16 cmの主柱穴である。P₅は長径25 cm、短径21 cmの楕円形で、深さ16 cmの出入口施設に伴うピットである。P₆は径23 cmの円形、深さ8 cmで、性格は不明である。

覆土 7層からなり、粘土ブロックの堆積している状況から、人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|-------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子少量 | 5 暗褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック・粘土小ブロック・砂多量 |
| 2 極暗褐色 | ローム小ブロック中量、焼土小ブロック少量 | 6 褐色 | ハードローム中ブロック多量 |
| 3 褐色 | ローム粒子・粘土小ブロック多量 | 7 暗褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック多量 |
| 4 暗褐色 | 焼土小・中ブロック・粘土小ブロック・砂多量 | | |

遺物 土師器片112点、須恵器片16点が出土している。1と2の須恵器片が南西コーナー部の覆土中層から、逆位で重なり合って出土している。

所見 遺物が少ないことや、竈の火床部の状況から、短期間しか使用されなかった住居跡と考えられる。時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代の8世紀中葉と考えられる。



第80図 第36号住居跡出土遺物実測図

第36号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第30図 1	環 須恵器	A 13.8 B 3.8 C 8.8	平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部手持ちへう削り。	長石 雲母 砂粒 灰黄色 普通	100% P183 覆土中層
2	環 須恵器	A 13.7 B 3.5-3.8 C 8.3	体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がり。下位に段を持つ。端部はやや外反している。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。外面下位へう削り。底部手持ちへう削り。	長石 石英 雲母 砂粒 ぶい黄褐色 普通	85% P184 内・外面ス付着 覆土中層

第37号住居跡 (第81図)

位置 調査B区西部, B3h1区。

規模と平面形 長軸 3.78 m, 短軸 3.54 m の方形である。

主軸方向 N-19°-E

壁 壁高は 2~10 cm で, 外傾して立ち上がる。

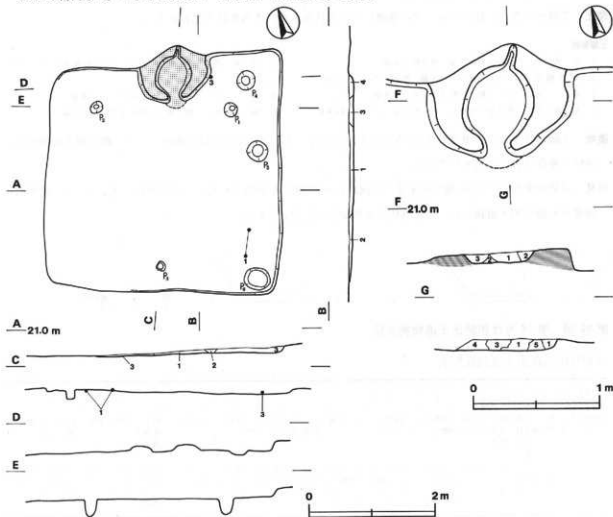
床 全面が粘土質で, 平坦で硬く締まっている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 両側の袖部が残存している。規模は, 煙道部から焚口部まで 100 cm, 最大幅 115 cm, 壁外への掘り込みは 26 cm である。火床部は, 火熱を受け赤変し, 硬化している。竈内に焼土ブロック多量, 炭化材中量が堆積している。煙道部は外傾し, 緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|---------------------|-------|-------------------------|
| 1 赤褐色 | 焼土小・中ブロック多量, 炭化粒子少量 | 4 暗褐色 | 粘土中ブロック多量, 天井部の崩落土 |
| 2 赤褐色 | 焼土小・中ブロック多量 | 5 赤褐色 | 焼土粒子・焼土中・大ブロック多量, 炭化材中量 |
| 3 極暗赤褐色 | 焼土小ブロック多量 | | |

ピット 6か所 (P₁~P₆)。P₁, P₂は径 20~22 cm の円形で, いずれも深さ 26 cm の支柱穴である。P₃は径 16 cm の円形で, 深さ 14 cm の出入口施設に伴うピットである。P₄とP₅は径 30~35 cm の円形, P₆は長径 41 cm, 短径 35 cm の楕円形で, いずれも深さ 9~31 cm で, 性格は不明である。



第 81 図 第 37 号住居跡実測図

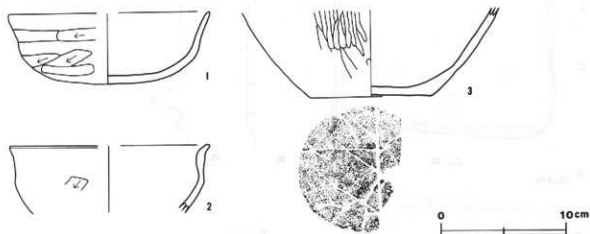
覆土 4層からなり、粘土ブロックの堆積している状況から、人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・焼土小ブロック中量 3 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック中量
 2 灰褐色 粘土小・中ブロック多量 4 褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量

遺物 土師器片 33点が出土している。1の土師器環が東壁寄りの床面直上から、2の土師器碗が西壁寄りの覆土中から、3の土師器甕が東側の袖部脇の床面直上からそれぞれ出土している。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、古墳時代の7世紀と考えられる。



第82図 第37号住居跡出土遺物実測図

第37号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第82図 1	坏 土師器	A [16.0] B 5.6	底部から口縁部の破片。丸底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ後、へう削り。内面微ナデ。底部手持ちへう削り。	長石 石英 砂粒 にふい黄褐色 普通	60% P185 底部外面ス付着 床面直上
2	碗 土師器	A [16.0] B (5.4)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈曲する。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。外面へう削り。	長石 砂粒 スコリア にふい褐色 普通	5% P186 覆土中
3	甕 土師器	B (6.9) C 9.8	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面へう磨き。	長石 石英 砂粒 明褐色 普通	5% P187 底部木葉痕 床面直上

第38号住居跡 (第83図)

位置 調査B区西部、B2f9区。

規模と平面形 長軸3.88m、短軸3.48mの長方形である。

主軸方向 N-29°-E

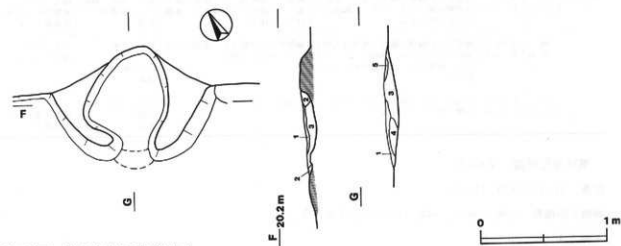
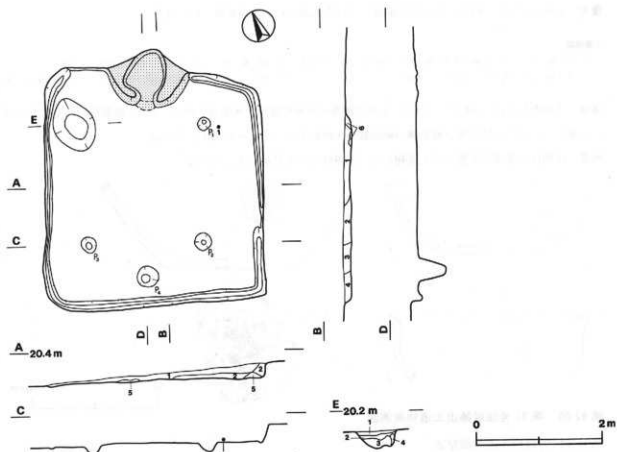
壁 壁高は8~17cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南東壁の一部を除き、ほぼ全周している。上幅8~20cm、下幅3~8cm、深さ3~5cmで、断面形はU字状である。

床 全面が貼り床になっており、平坦で、硬く締まった粘土質の床である。北コーナー部に、長径89cm、短径65cmの楕円形で、深さ30cmの掘り込みがあり、土層は4層からなり、人為堆積と思われる。

掘り込み土層解説

- 1 灰褐色 焼土小・中ブロック少量、砂中量 3 にふい褐色 焼土粒子・焼土中・大ブロック多量
 2 褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・砂中量 4 灰褐色 粘土ブロック多量



第83図 第38号住居跡実測図

竈 北東壁の中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで97cm、最大幅120cm、壁外への掘り込みは33cmである。火床部は床面を2cmほど掘り窪めており、火熱を受け赤変し、硬化している。煙道部は外傾し、緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- | | |
|---------------------------|------------------------------------|
| 1 灰褐色 焼土粒子中量、砂多量 | 4 濃い赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック中量、粘土小ブロック・砂多量 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子多量、粘土粒子・砂中量 | 5 赤褐色 焼土小ブロック少量 |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子・焼土小・中・大ブロック多量 | |

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁~P₃は径22~28 cmの円形で、いずれも深さ12~14 cmの主柱穴である。P₄は径36 cmの円形で、深さ45 cmの出入口施設に伴うピットである。

覆土 6層からなり、焼土ブロックと粘土ブロックを多く含有していることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------------------|
| 1 褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック中量、粘土中ブロック | 4 暗褐色 | 焼土中ブロック・砂少量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック・粘土小ブロック中量 | 5 灰褐色 | 焼土小ブロック少量、粘土小・中ブロック中量 |
| 3 暗褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック・粘土小ブロック中量 | 6 灰褐色 | 焼土小・中ブロック・砂多量 |

遺物 土師器片29点、須恵器片12点が出土している。1の須恵器環が東コーナー部の覆土下層から、2の須恵器環が掘り込みの中からそれぞれ出土している。

所見 調査区の中でも一番傾斜がある場所に作られた竪穴住居跡のひとつで、北西壁側の残存率が低く、遺物も少なかった。北コーナー部の掘り込みは、住居廃棄時に不要な土器や焼土を投棄した可能性がある。時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代の8世紀中葉と考えられる。



第84図 第38号住居跡出土遺物実測図

第38号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第84図 1	環 須恵器	A [14.1] B 4.1 C 9.0	体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	長石 雲母 砂粒 灰黄褐色 普通	80% P188 覆土下層
2	環 須恵器	A [14.5] B 4.7 C [8.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内側気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部手持ちヘラ削り。	長石 雲母 砂粒 灰黄褐色 普通	20% P189 掘り込み内

第39A、B号住居跡 (第85図)

位置 調査B区北東部、B4d区。

重複関係 第39A号住居跡と第39B号住居跡は重複している。床面の高さが同じことや竈や溝を共用していることから、第39A号住居跡を利用して第39B号住居跡が作られている。よって第39A号住居跡が古く、第39B号住居跡が新しい。

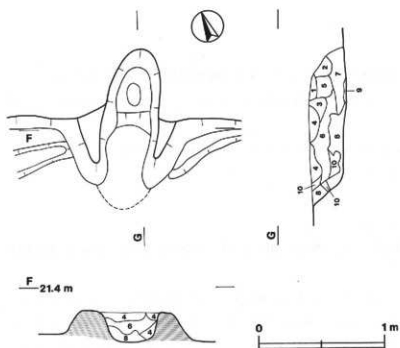
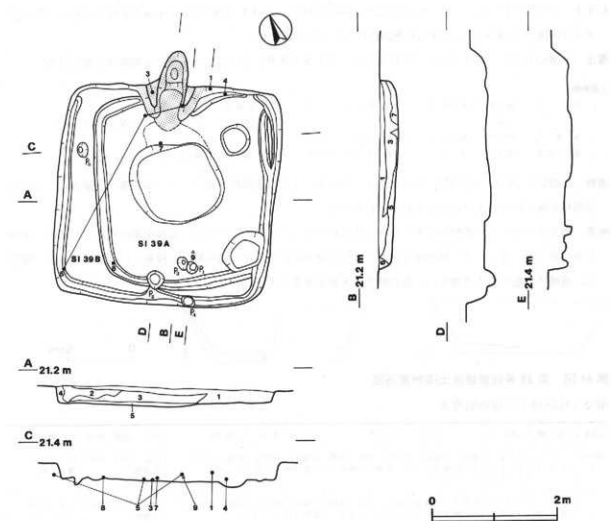
規模と平面形 第39A号住居跡は長軸 [3.18] m、短軸 [2.84] mの隅丸方形と推定され、第39B号住居跡は長軸 3.46 m、短軸 3.42 mの方形である。

主軸方向 N-29°-E

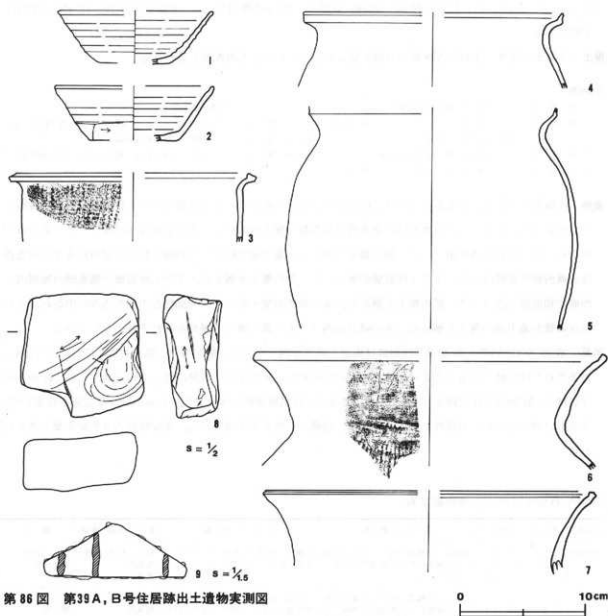
壁 壁高は26~28 cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南東壁沿いの一部を共有し、全周している。上幅13~26 cm、下幅5~18 cm、深さ4~8 cmで、断面形はU字状で、共通している。

床 平坦で、全面が白色粘土面で、硬く締まっている。特に、電手前が、硬く踏み固められている。中央に長径147 cm、短径125 cmの楕円形で、深さ11 cmほどの掘り込みが、東コーナー部に径47 cmの円形で、深さ10 cmほどの掘り込みが、さらに南コーナー部に長径70 cm、短径55 cmの楕円形で、深さ2 cmほどの掘り込みが確認されている。これらの掘り込みは、粘土層を掘り込んでおり、特に、中央の掘り込みにはローム粒子と



第 85 图 第 39 A, B 号住居跡実測图



第86図 第39A, B号住居跡出土遺物実測図

焼土粒子を少量、粘土小・中ブロックを中量含んだ、灰褐色土が堆積している。

竈 北東壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで255 cm、最大幅200 cm、壁外への掘り込みは110 cmである。火床部は、火熱を受け赤変し、硬化している。煙道部は外傾して、階段状に立ち上がる。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------------|---------|------------------------------------|
| 1 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 6 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック・粘土小ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・砂少量 | 7 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、粘土質 |
| 3 灰黄褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、粘土小ブロック多量 | 8 にい赤褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック多量、焼土中ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 4 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・粘土中ブロック少量 | 9 にい赤褐色 | 焼土粒子・粘土小ブロック少量 |
| 5 灰褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量 | 10 灰黄褐色 | 焼土粒子少量、粘土小・中ブロック多量、砂中量 |

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁は長径20 cm、短径16 cmの楕円形で、深さ12 cmの第39A号住居跡の出入口施設に伴うピットであり、P₂は長径25 cm、短径20 cmの楕円形で、深さ19 cmの第39B号住居跡の出入口施設に

伴うピットである。P₃～P₅は長径20～28cm、短径17～20cmの楕円形で、いずれも深さ10～12cmで、性格は不明である。

覆土 7層からなり、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	少量、粘土質
2	暗褐色	ローム粒子・ローム中ブロック・焼土粒子・ 焼土小ブロック少量	5 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量、 6 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
3	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子中量	7 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子・ 焼土小ブロック・砂少量
4	暗褐色	ローム粒子・ローム中ブロック・ 焼土粒子	

遺物 土師器片357点、須恵器片177点、砥石2点、火打ち鎌1点、および混入した瓦質土器片1点、陶器片1点が出土している。1の須恵器環が竈東側の袖部脇の覆土中層から、2の須恵器環が南コーナー部の覆土中から、9の火打ち鎌が南コーナー部の覆土下層から、竈の補強材として利用されたと思われる3の須恵器鉢が竈西側の袖部内から、4の土師器甕が東コーナー部の覆土下層から、5の土師器甕が竈東側の袖部内、西側の袖部脇と西コーナー部の覆土下層から、6の須恵器甕が東コーナー部付近の掘り込みの中から、7の須恵器甕が甕手前の覆土下層から、8の砥石が西コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 第39A号住居跡と第39B号住居跡は床面の高さが同じであり、竈と溝の一部を共用していることから、増築された住居跡であると考えられる。竈はその向きから第39B号住居跡に伴うものと考えられ、第39B号住居跡が、第39A号住居跡よりも新しいと思われる。住居廃棄時に床中央の掘り込みに不要な物を投棄して、人為的に埋め戻された可能性がある。時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代の9世紀中葉と考えられる。

第39A、B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第86図 1	環 須恵器	A[12.3] B 4.2 C[5.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部手持ちへつ削り。	長石 石英 砂粒 灰黄色 普通	30% P190 覆土中層
2	環 須恵器	A[12.6] B 4.4 C[7.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がる。端部はわずかに反折する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部外面下位へつ削り。底部手持ちへつ削り。	長石 砂粒 褐灰色 普通	5% P191 覆土中
3	鉢 須恵器	A[18.6] B(5.5)	体部から口縁部の破片。体部は直線的に立ち上がる。口縁部は強く外反して、中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられ、口唇部に棒状工具による凹線を返らす。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面格子叩き。内面ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 によい褐色 普通	5% P196 袖部内
4	甕 土師器	A[20.8] B(5.9)	体部から口縁部の破片。体部は外傾して立ち上がる。口縁部は強く外反して、中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石 石英 砂粒 橙色 普通	5% P192 覆土下層
5	甕 土師器	B(17.7)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がり、中位に稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 明赤褐色 普通	10% P193 袖部内 覆土下層
6	甕 須恵器	A[39.8] B(9.3)	頸部から口縁部の破片。頸部は「く」の字状に屈曲する。口縁部は外反して、中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。頸部外面平行叩き。内面ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 褐灰色 普通	5% P194 掘り込み内

7	須恵器	A[26.3] B(6.0)	頸部から口縁部の破片。口縁部は外反して、中に腰を持つ。端部はつまみ上げられ、口唇部に棒状工具による凹線を返らす。	口縁部内・外面ロクロナテ。	長石 石英 雲母 砂粒 明赤褐色 普通	5% P195 覆土下層
---	-----	-------------------	--	---------------	------------------------------	-----------------

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
8	砾石	(6.5)	(6.5)	(3.0)	(206)	砂岩	覆土下層	Q 9

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
9	大打ち鐵	10.1	4.0	0.4~0.5	49	覆土下層	M 3 100%

第40号住居跡 (第87図)

位置 調査B区中央部, B3f区。

重複関係 本跡は第14号掘立柱建物跡, 第349, 350号土坑と重複している。第14号掘立柱建物跡が、本跡の北半分を、第349, 350号土坑が南壁を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸 4.25 m, 短軸 4.02 m の方形である。

主軸方向 N-17°-E

壁 壁高は 28~34 cm で、外傾して立ち上がる。

壁溝 はほぼ全周し、上幅 [26~32] cm, 下幅 [4~15] cm, 深さ [2~5] cm で、断面形はU字状と推定される。

床 全面が粘土質で、平坦で硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで 134 cm, 最大幅 137 cm, 壁外への掘り込みは 55 cm である。火床部は、火熱を受けわずかに赤変し、煙道部にかけて次第に硬化している。煙道部は外傾して、緩やかな階段状に立ち上がる。

竈土層解説

1	にぶい褐色	焼土粒子・砂多量, 焼土小ブロック中量	7	暗褐色	ローム粒子少量, 粘土粒子・砂多量
2	赤褐色	焼土中・大ブロック多量, 砂中量	8	褐色	暗褐色土中量, 粘土粒子多量
3	赤褐色	粘土・砂多量	9	褐色	粘土大ブロック・砂多量
4	暗褐色	焼土小ブロック中量	10	赤褐色	焼土粒子中量
5	赤褐色	焼土大ブロック中量	11	にぶい褐色	ローム粒子少量, 砂中量
6	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量, 粘土粒子・砂多量	12	灰褐色	焼土粒子・焼土小ブロック少量, 粘土粒子・砂多量

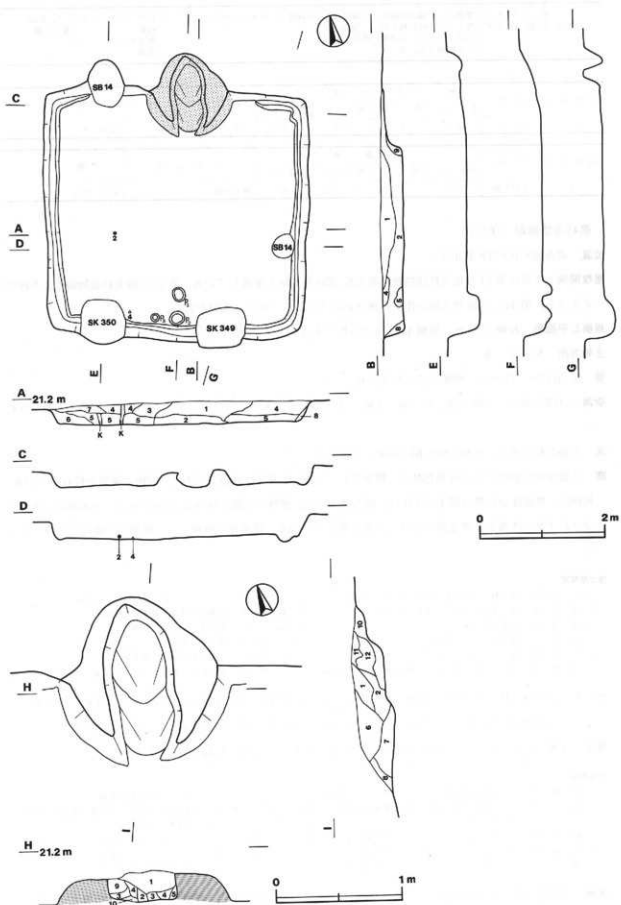
ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁は長さ 22 cm, 短径 19 cm の楕円形, P₂は径 23 cm の円形で、いずれも深さ 8~17 cm の出入口施設に伴うピットである。P₃は径 13 cm の円形で、深さ 3~13 cm で、性格は不明である。

覆土 9層からなり、ブロック状の堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小・中ブロック多量			ローム・炭化粒子中量
2	褐色	ハードローム小・中ブロック中量, 焼土粒子・焼土小ブロック少量	6	暗褐色	焼土小・中ブロック中量, 炭化粒子少量
3	暗褐色	ローム粒子・ローム小ブロック多量, 焼土粒子少量	7	褐色	焼土粒子多量
4	暗褐色	ローム粒子・ローム小ブロック多量	8	褐色	ローム粒子中量, 焼土小ブロック少量
5	褐色	ローム粒子・ローム小ブロック多量, 焼土小・中ブ	9	褐色	ソフトローム小・中ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子中量

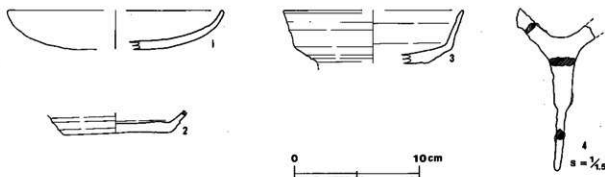
遺物 土師器片 62 点, 須恵器片 19 点, 鉄線 1 点が出土している。1 の土師器片が北壁寄りの覆土中から、2 の須恵器片が西壁寄り覆土下層から、3 の須恵器高台付片が覆土中から、4 の鉄線が南壁寄りの床面直上か



第 87 图 第 40 号位居跡実測图

らそれぞれ出土している。

所見 本跡は、甕や覆土の状況から、短期間しか使用されずに、埋め戻された可能性がある。時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代の8世紀中葉と考えられる。



第88図 第40号住居跡出土遺物実測図

第40号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第88図 1	坏 土器	A[17.0] B 3.1	底部から口縁部の破片。丸底。体部から口縁部にかけて内彎して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	雲母 砂粒 スコリア にふい褐色 普通	40% P198 覆土中
2	坏 須恵器	B(1.7) C 8.4	底部から体部の破片。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	体部内・外面クロコナデ。底部手持ちへツ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰褐色 普通	40% P199 外面スス付着 覆土下層
3	高台付坏 須恵器	A[14.4] B(4.2)	底部から口縁部の破片。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、下位に腰を持つ。口縁部はわずかに外反している。	口縁部。体部内・外面クロコナデ。底部回転へツ削り。	長石 砂粒 灰黄色 普通	20% P200 覆土中

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
4	鉄 鉢	11.3	(5.5)	0.4	(24)	床面直上	M4 層位の鉄 96%

第41号住居跡 (第89図)

位置 調査B区中央部, B3g区。

重複関係 本跡は第8号掘立柱建物跡と重複している。第8号掘立柱建物跡が、本跡の西部を掘り込んでいると考えられることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.96m, 短軸3.90mの方形である。

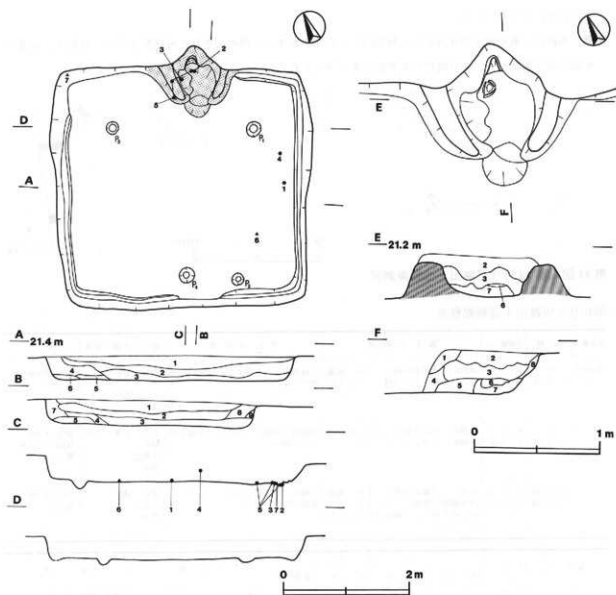
主軸方向 N-27°-E

壁 壁高は36~38cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 甕西側と出入口施設付近の一部を除き、ほぼ全周している。上幅17~30cm, 下幅4~10cm, 深さ4cmで、断面形はU字状である。

床 全面が粘土質で、平坦で硬く締まっている。

甕 北東壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで115cm, 最大幅130cm, 壁外への掘り込みは40cmである。火床部は床面を4cmほど掘り籠めており、火熱を受けて赤変し、硬化している。特に、西側の袖部内側から煙道部に向け



第89図 第41号住居跡実測図

て、焼土ブロックが多量に堆積し、煉瓦状に硬化している。また、火床部を粘土層まで掘り込み、土師器甕と須恵器甕を埋め込んで、支脚として利用している。煙道部は外傾して、緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|---------|-------------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子・焼土小・中ブロック多量 | 6 極暗赤褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・小・中ブロック・粘土ブロック多量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子中量 | 7 暗赤褐色 | 焼土中・大ブロック多量 |
| 3 暗褐色 | 焼土粒子多量、焼土中ブロック少量 | 8 灰褐色 | ローム粒子・焼土小・中ブロック・砂少量 |
| 4 暗褐色 | 焼土粒子・粘土小ブロック中量 | | |
| 5 暗褐色 | 焼土粒子・粘土小・中ブロック中量 | | |

ビット 4か所 (P₁~P₄)。P₁~P₃は径20~25cmの円形で、いずれも深さ10cmの支柱穴である。P₄は径25cmの円形で、深さ14cmの出入口施設に伴うビットである。

覆土 9層からなり、1層は自然堆積、2~9層は人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・焼土小ブロック少量 | 4 褐色 | 焼土粒子・ローム中ブロック多量、暗褐色土多量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子・砂多量 | 5 明褐色 | ハードローム中ブロック中量 |
| 3 褐色 | ローム粒子多量、ソフトローム小・中ブロック中量 | | |

6 明褐色 ローム中・大ブロック多量

8 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・焼土小ブロック少量

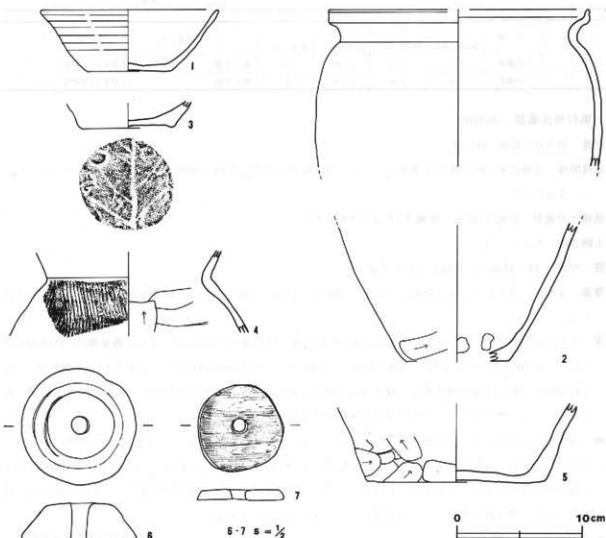
7 褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック中量

9 暗褐色 焼土粒子・焼土小・中ブロック中量, 粘土粒子少量

遺物 土師器片 149点, 須恵器片 82点, 土製紡錘車 2点が出土している。多くの遺物が竈内に集中している。

1の須恵器坏が南東壁寄りの覆土下層から, 4の須恵器甕が覆土中層から, 2, 3の土師器甕, および5の須恵器甕が竈内から, 6の紡錘車が南コーナー部寄りの覆土下層から, 7の紡錘車が北コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 竈内の状況や出土した土器が二次焼成を受けていることから, 壊れた土器片(2, 3の土師器甕, 5の須恵器甕など)を支脚や袖部の補強材として利用していると思われる。時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 平安時代の9世紀中葉と考えられる。



第90図 第41号住居跡出土遺物実測図

第41号住居跡出土遺物観察表

図番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第90図 1	坏 須恵器	A 14.0 B 4.9 C 6.6	体部, 口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。体部外面下位へラナデ。底部手持ちへラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 黒色 一部褐色 普通	85% P201 内・外面スチ付着 覆土下層

第90図	2	壺 土師器	A [3A-11] B (23.5) C [4.2]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中位に股を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面黄ナデ。体部外面ナデ。下位へう崩り。内面黄ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 微色 普通	10% P202 壺内
	3	壺 土師器	B (2.0) C 7.3	底部の破片。平底。	底部内面ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 内面によい微色 外面微色 普通	5% P407 底部木蓋痕 壺内
	4	甕 須恵器	B (6.5)	体部から頸部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。頸部は「く」の字状に屈曲する。	頸部内・外面ロクロナデ。体部外面平行叩き。内面へうナデ。アテ具痕有り。	長石 雲母 砂粒 褐灰色 普通	5% P203 覆土中層
	5	甕 須恵器	B (6.3) C 14.4	底部から体部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。外面下位へう崩り。底部外面へう崩り。内面ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 によい黄褐色 普通	20% P204 壺内
計 測 値							
図 番 号	器 種	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
6	紡錘車	6.1	2.1	0.8	65	覆土下層	DP10 100%
7	紡錘車	4.6	0.6	0.8	10	覆土下層	DP11 100%

第42号住居跡 (第91図)

位置 調査B区東部, B4i区。

重複関係 本跡は第286号土坑と重複している。第286号土坑が、本跡の西壁の一部を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸4.94 m, 短軸4.78 mの方形である。

主軸方向 N-18°-E

壁 壁高は34~37 cmで、外傾して立ち上がる。

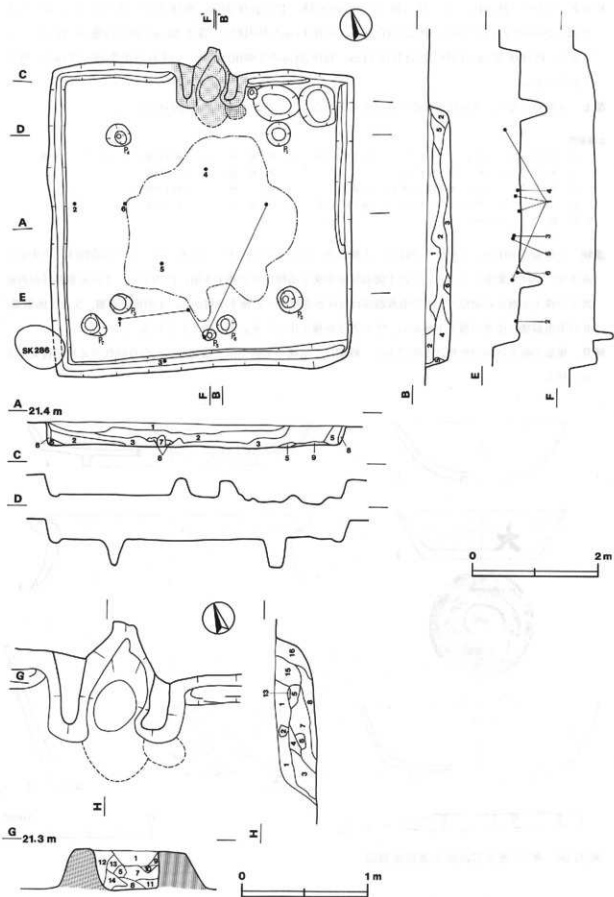
壁溝 東壁の一部を除き、ほぼ全周している。上幅24~40 cm, 下幅7~14 cm, 深さ6 cmで、断面形はU字状である。

床 全面が粘土質で、平坦で締まっており、特に中央が硬く踏み固められている。また、竈東側に、長径65 cm, 短径57 cmの楕円形で、深さ12 cmの掘り込みと、長径73 cm, 短径66 cmの楕円形で、深さ10 cmの掘り込みと、長径20 cm, 短径15 cmの楕円形で、深さ4 cmの掘り込みが検出され、それぞれにローム粒子、焼土粒子、炭化小ブロック、焼土中ブロックを少量含む灰褐色土が堆積している。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで127 cm, 最大幅110 cm, 壁外への掘り込みは33 cmである。火床部は床面を4 cmほど掘り窪めており、火熱を受けわずかに赤変し、硬化している。両袖部の内側はしっかりと焼けて、赤変している。煙道部は外傾して、最初緩やかで、のち急に立ち上がる。

甕土層解説

1 褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂少量	11 暗褐色	ローム粒子・焼土小ブロック少量、粘土粒子・砂中量
2 灰黄褐色	焼土粒子・砂中量	12 によい黄褐色	焼土小・中ブロック少量、砂中量
3 暗褐色	ローム粒子・砂中量	13 灰褐色	ローム粒子少量、砂中量
4 暗褐色	焼土粒子・砂中量	14 暗褐色	ローム粒子・砂少量
5 によい黄褐色	粘土ブロック・砂中量	15 褐色	ローム粒子・焼土粒子・焼土小・中ブロック多量、砂中量
6 明赤褐色	焼土中ブロック中量、粘土粒子・砂少量	16 褐色	ローム粒子・ローム中・大ブロック多量、焼土粒子少量
7 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック・砂少量		
8 によい赤褐色	焼土小ブロック・砂中量		
9 暗褐色	ローム粒子・焼土小ブロック少量		
10 暗褐色	ローム粒子・焼土小・粘土小ブロック少量		



第 91 图 第 42 号住居跡実測图

ピット 7か所 (P₁~P₇)。P₁~P₃は径35~40cmの円形、P₄は長径40cm、短径35cmの楕円形で、いずれも深さ41~48cmの主柱穴である。P₅は長径22cm、短径15cmの楕円形で、深さ33cmの出入口施設に伴うピットである。P₆は径30cmの円形、P₇は長径44cm、短径30cmの不整楕円形で、いずれも深さ19~27cmで、性格は不明である。

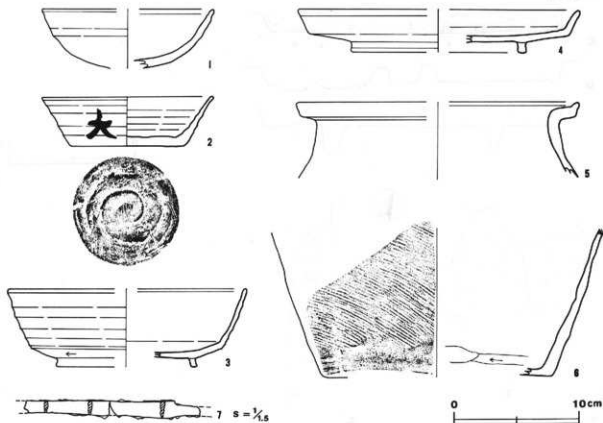
覆土 9層からなり、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム大ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 7 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量 | 8 褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子・ローム中ブロック・焼土粒子少量 | 9 灰褐色 | ローム粒子少量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量 | | |

遺物 土師器片191点、須恵器片104点、支脚1点、刀子1点が出土している。ほとんどの遺物は、中央から南半分にかけて集中している。1の土師器坏が中央と南壁寄りの覆土下層、P₅内から、2の須恵器坏が西壁寄りの覆土下層から逆位で、3の須恵器高台付坏が南壁寄りの覆土下層から、4の須恵器盤、5の土師器甕、6の須恵器甕が中央の覆土下層から、7の刀子が覆土中からそれぞれ出土している。

所見 竈脇の掘り込みの性格は不明である。時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代の8世紀後葉と考えられる。



第92図 第42号住居跡出土遺物実測図

第42号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第92図 1	坏 土 器	A [13.6] B (4.7)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がり、中位に2か所の稜を持つ。肩部の内側に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部外面下位へラナデ。	石英 砂粒 明赤褐色 普通	35% P205 覆土下層 F ₁ 内
2	坏 須 恵 器	A 13.7 B 13-14 C 9.0	体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がる。肩部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部外面回転へ切り残へラナデ。内面ナデ。	長石 雲母 砂粒 灰白色 普通	80% P206 体部外面造曹 「大」 覆土下層
3	高台付坏 須 恵 器	A [19.0] B 6.3 D [11.2] E 0.8	高台部から口縁部の破片。高台部は短く、「ハ」の字状に開く。平底。体部は外傾して立ち上がり、中位に稜を持つ。内彎気味に立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部外面下位から底部回転へラナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 砂粒 暗灰黄色 良好	30% P207 覆土下層
4	壁 須 恵 器	A [22.4] B 3.4 D 14.0 E 0.9	高台部から口縁部の破片。高台部は短く、「ハ」の字状に開く。平底。体部は外傾して立ち上がり、中位に稜を持つ。肩部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部外面下位から底部回転へラナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	石英 雲母・砂粒 灰白色 普通	25% P208 覆土下層
5	壁 土 器	A [32.3] B (6.1)	体部から口縁部の破片。口縁部は強く外反して、中位に稜を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 灰色 普通	5% P209 覆土下層
6	壁 須 恵 器	B (11.8) C [18.2]	底部から体部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面平行叩き、下位へラナデ。内面ナデ。一部へラナデ。底部へラナデ。	雲母 砂粒 灰色 普通	5% P210 覆土下層

図版番号	器種	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
7	刀子	(12.3)	(1.4)	(0.2)	(12)	覆土中	M5 40%

第43号住居跡 (第93図)

位置 調査B区東部, B4f区。

規模と平面形 長軸 4.13 m, 短軸 3.94 m の方形である。

主軸方向 N-33°-E

壁 壁高は 22~26 cm で、外傾して立ち上がる。

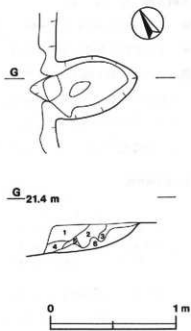
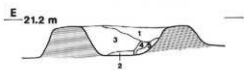
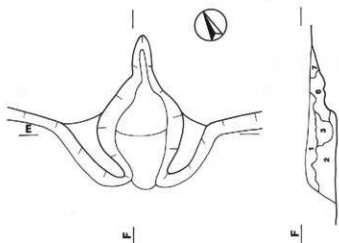
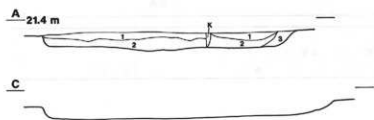
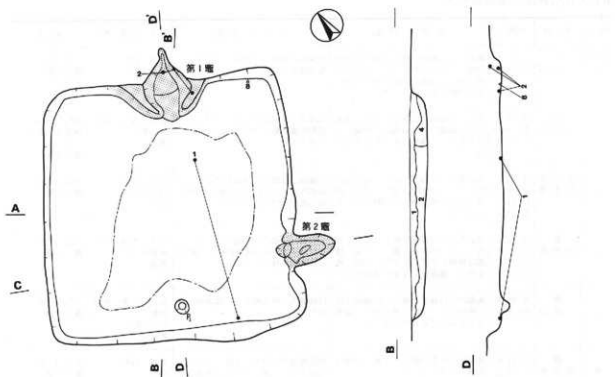
床 全面が粘土質で、平坦で締まっており、特に中央が硬く踏み固められている。

竈 2か所。第1竈は、北東壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで 120 cm, 最大幅 130 cm, 壁外への掘り込みは 55 cm である。火床部は床面を 4 cm ほど掘り窪めており、火熱を受けわずかに赤変し、硬化している。両袖部の内側から煙道部にかけてはしっかりと焼けて、赤変している。煙道部は外傾して、急に立ち上がる。

第1竈土層解説

1 暗 褐 色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	5 上よい褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子中量
2 灰 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	6 灰 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂少量
3 灰 黄 褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量、砂中量	7 褐 色	ローム粒子・焼土小ブロック・粘土粒子少量、焼土粒子中量
4 灰 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・砂少量		

第2竈は、南東壁南寄りには砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており残存していない。壁を外へ掘り込んでいるため、袖部は特に作られていない。規模は、煙道部から焚口部まで 80 cm, 最大幅 50 cm, 壁外への掘り込みは 64 cm である。火床部は、火熱を受け赤変し、焼土ブロックが多量に堆積して



第93图 第43号住居跡实测图

硬化している。煙道部は外傾して、緩やかに立ち上がる。

第2竈土層解説

- | | | | |
|----------|-------------------|-------|---------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・砂少量 | 4 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・砂少量 | 5 赤褐色 | 焼土粒子中量 |
| 3 におい赤褐色 | 焼土粒子・砂中量 | 6 赤褐色 | 焼土小・中・大ブロック中量 |

ピット 1か所 (P₁)。P₁は径24cmの円形で、深さ14cmの出入口施設に伴うピットである。

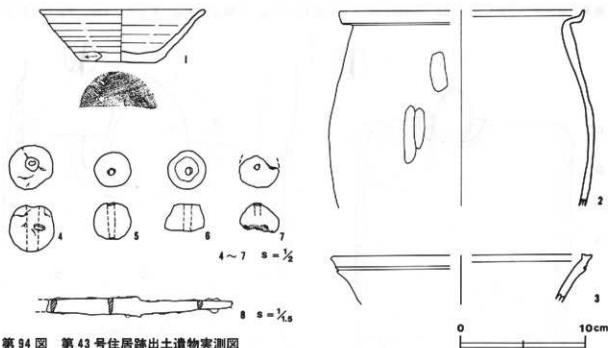
覆土 4層からなり、自然堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 3 暗褐色 | ローム粒子・ローム小・中ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・ローム小・中ブロック・焼土粒子・粘土粒子少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック少量 |

遺物 土師器片159点、須恵器片147点、土玉4点、刀子1点、および混入した縄文土器片1点が出土している。1の須恵器片が竈手前の覆土下層と南コーナー部の覆土下層から、2の土師器片が第1竈内から、3の須恵器片が覆土中から、4～7の土玉が南コーナー部の覆土中から、8の刀子が東コーナー部の床面直上からそれぞれ出土している。

所見 竈の構築順序は不明である。時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代の9世紀中葉と考えられる。



第94図 第43号住居跡出土遺物実測図

第43号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第94図 1	坏 須恵器	A 13.2 B 4.3 C 6.0	体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。外面下位へつ傾り。底部手持ちへつ傾り。	長石 雲母 砂粒 スコリア 黒褐色 普通	80% P211 覆土下層
2	焼土 土師器	A [19.6] B (15.6)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反して、中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、一部へラナデ。内面ナデ。	長石 雲母 砂粒 明赤褐色 普通	15% P212 第1竈内
3	須 須恵器	A [21.0] B (3.8)	口縁部の破片。口縁部は外反して立ち上がり、中位に棒状工具による凹溝を造らす。口縁部は板状工具により平直にならされている。	口縁部内・外面ロクロナデ。	長石 砂粒 スコリア 黒褐色 普通	5% P213 覆土中

図版番号	器種	計測値					出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
4	土玉	2.5	2.3	2.5	0.5~0.7	11	覆土中	DP12 100%
5	土玉	1.9	1.9	1.9	0.3	6	覆土中	DP13 100%
6	土玉	1.4	2.1	1.4	0.4	6	覆土中	DP14 100%
7	土玉	(1.6)	(2.1)	(1.6)	0.3	(3)	覆土中	DP15 50%

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
8	刀子	(13.2)	(1.5)	(0.4)	(17)	床面直上	M6 50%

第44号住居跡 (第95図)

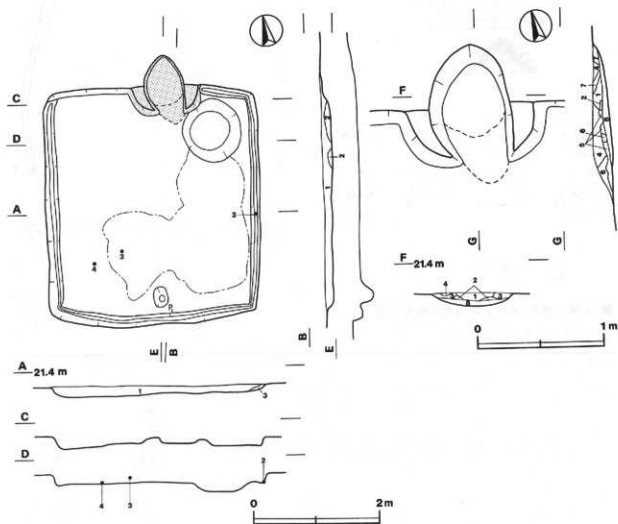
位置 調査B区北東部, B4es区。

規模と平面形 長軸 3.83 m, 短軸 3.41 m の長方形である。

主軸方向 N-14°-E

壁 壁高は 12~15 cm で, 外傾して立ち上がる。

壁溝 東西側の一部を除き, はほぼ全周している。上幅 12~22 cm, 下幅 2~8 cm, 深さ 2~4 cm, 断面形は U 字



第95図 第44号住居跡実測図

状である。

床 全面が粘土質で、平坦で締まっている。特に、東壁寄りから南壁寄りにかけては、硬く踏み固められている。また、竈東側に、長径100cm、短径94cmの楕円形で、深さ14cmの掘り込みが検出され、ローム粒子、ローム小ブロック、焼土粒子、炭化粒子、粘土中ブロックを少量から中量ほど含む暗褐色土が堆積している。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで111cm、最大幅117cm、壁外への掘り込みは47cmである。火床部は、火熱を受け赤変し、硬化している。煙道部は外傾して、緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- | | | | |
|----------|-------------------------|----------|--------------------|
| 1 におい黄褐色 | 粘土ブロック多量、崩落土 | 5 におい黄褐色 | 焼土粒子・粘土粒子・砂多量 |
| 2 赤褐色 | 焼土小・中ブロック多量、暗褐色土中量 | 6 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量、砂多量 |
| 3 暗褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック中量、砂多量 | 7 赤褐色 | 焼土小・中ブロック多量、暗褐色土中量 |
| 4 暗褐色 | ローム小中ブロック多量、焼土小ブロック・砂中量 | 8 赤褐色 | 焼土ブロック多量 |

ビット 1か所 (P₁)。P₁は長径30cm、短径24cmの楕円形で、深さ20cmの出入口施設に伴うビットである。

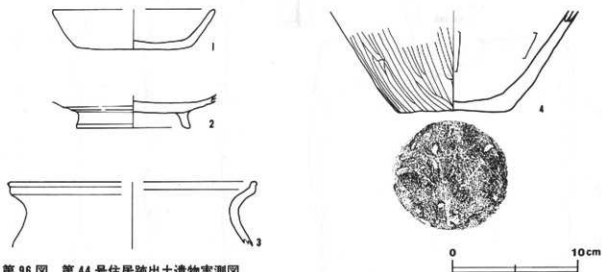
覆土 3層からなり、ブロック状の堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|---------|------------------|------|--------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子少量 | 3 褐色 | ローム粒子・ローム小・中ブロック少量 |
| 2 におい褐色 | 焼土粒子少量、粘土小ブロック多量 | | |

遺物 土師器片98点、須恵器片70点が出土している。1の須恵器坏が北東コーナー部の覆土中から、2の須恵器高台付坏が東壁下の壁溝から、3の土師器甕が中央の覆土下層から、4の土師器甕が南西コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 竈脇の掘り込みの性格は不明であるが、住居廃棄時に人為的に廃棄物を投棄した可能性がある。時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代の8世紀後半と考えられる。



第96図 第44号住居跡出土遺物実測図

第44号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第96図 1	須恵器 環	A [12.8] B 3.2 C 8.2	体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 におい黄褐色 普通	70% P216 覆土中

第96図 2	高台付環 須恵器	B (2.6) D 9.0 E 1.4	高台部から体部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外周ロクロナデ。底部回転へラ削り。高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 砂粒 灰色 普通	30% P217 壁溝
3	壺 土器	A [19.6] B (5.2)	頸部から口縁部の破片。口縁部は外反して、中位に壁を持つ。頸部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。	長石 石英 砂粒 にふい橙色 普通	5% P218 腹土下層
4	壺 土器	B (8.1) C 8.8	底部から体部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面へラ磨き、内面へラナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 褐色 普通	10% P219 底部木炭灰 腹土下層

第45号住居跡 (第97図)

位置 調査B区北東部, B4c7区。

重複関係 本跡は第298号土坑と重複している。第298号土坑が、本跡の竈部分を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸4.23 m, 短軸4.16 mの方形である。

主軸方向 N-9°-E

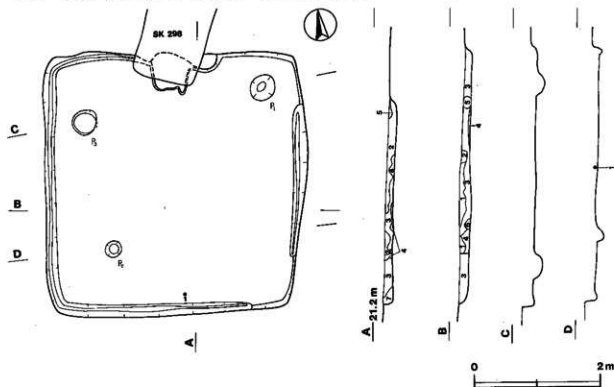
壁 壁高は12~14 cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北東コーナー部と南東コーナー部を除き、ほぼ全周している。上幅11~24 cm, 下幅2~9 cm, 深さ4~6 cmで、断面形はU字状である。

床 全面が粘土質で、平坦で硬く締まっている。

竈 第298号土坑に破壊されているが、焼土ブロックと粘土灰が残っていたことから、北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されていたと推定される。

ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁~P₃は径25~45 cmの円形で、深さ12~15 cmの支柱穴である。



第97図 第45号住居跡実測図

覆土 7層からなり、ブロック状の堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	5 によく褐色	焼土粒子・焼土小ブロック少量
2 褐色	ローム中ブロック多量	6 黒色土	
3 暗褐色	ローム粒子中量	7 によく褐色	ローム粒子・粘土粒子中量
4 明褐色	焼土小・中ブロック多量		

遺物 土師器片 35点, 須恵器片 14点が出土している。1の土師器環が南壁寄りの覆土下層から出土している。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代の8世紀前葉と考えられる。

第45号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第98図 1	環 土師器	A [14.6] B (4.4)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内唇気味に立ち上がる。上位に不明瞭な線を待つ。	口縁部内・外面、体部外面横ナズ。体部内面ナズ。	灰石 砂粒 スコリア によく赤褐色 普通	50% P220 覆土下層

第48号住居跡 (第99図)

位置 調査B区北東部, B4ca区。

重複関係 本跡は第291号土坑と重複している。第291号土坑が、本跡の南東壁寄りの床面を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.90m, 短軸3.82mの方形である。

主軸方向 N-21°-E

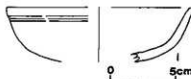
壁 壁高は4~8cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北西壁沿いの一部に検出した。上幅14~21cm, 下幅3~6cm, 深さ3~4cmで、断面形はU字状である。

床 全面が粘土質で、平坦で硬く締まっている。

竈 北東壁中央に砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、東側の袖部が残存している。

規模は、煙道部から焚口部まで111cm, 最大幅 [140] cm, 壁外への掘り込みは75cmである。火床部は床面を2cmほど掘り窪めており、火熱を受けているが、袖部を除き、赤変硬化していない。竈奥に土師器甕を埋め込み、支脚として利用している。煙道部は外傾して、階段状に立ち上がる。



第98図
第45号住居跡出土遺物実測図

覆土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	5 灰黄色	ローム粒子・砂少量, 焼土粒子中量
2 赤褐色	焼土粒子・焼土小ブロック中量	6 によく赤褐色	焼土粒子中量, 焼土小ブロック・砂少量
3 灰褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子中量	7 暗赤褐色	焼土小・中ブロック・暗褐色土中量
4 によく赤褐色	ローム粒子・砂少量, 焼土小ブロック中量		

ピット 7か所 (P₁~P₇)。P₁とP₂は長径30~34cm, 短径27~29cmの楕円形, P₃は径36cmの円形で、いずれも深さ16~19cmの主柱穴である。P₄は長径35cm, 短径26cmの楕円形で、深さ20cmの出入口施設に伴うピットである。P₅~P₇は長径40~52cm, 短径26~37cmの楕円形または不整楕円形で、深さ5~19cmで、性格は不明である。

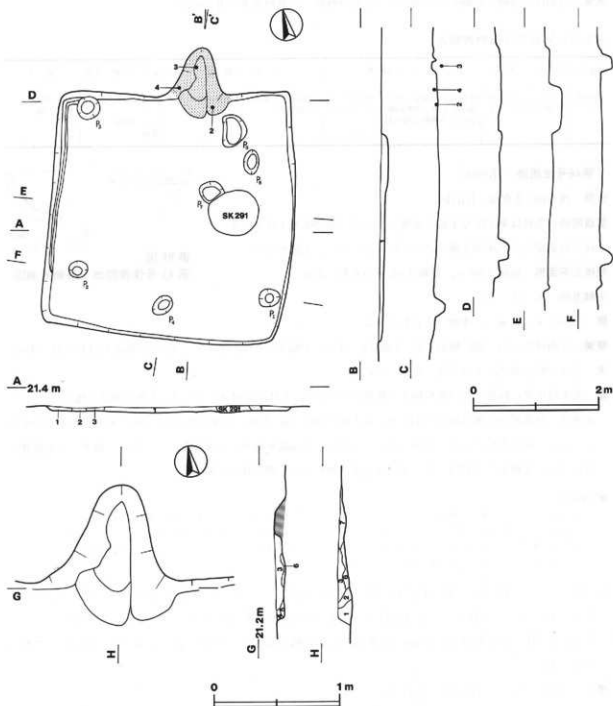
覆土 3層からなり、自然堆積と思われる。

土層解説

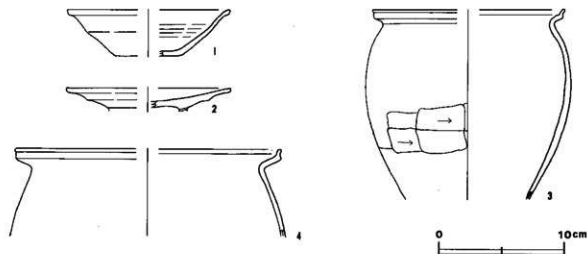
1 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	3 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子・ローム小ブロック少量		

遺物 土師器片 176点, 須恵器片 31点が出土している。覆土が薄くて残りが悪かったが, ほとんどの遺物が竈内とその周辺に集中している。1の須恵器坏が北東壁寄りの覆土中から, 2の土師器高台付皿が竈東側の袖部内から, 3の土師器甕が竈内の火床面から, 4の土師器甕が竈西側の袖部内からそれぞれ出土している。

所見 竈内の状況から, 土器片を竈の補強材や支脚(3の土師器甕)として利用していると思われる。時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 平安時代の9世紀後半と考えられる。



第99図 第46号住居跡実測図



第100図 第46号住居跡出土遺物実測図

第46号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第100図 1	坏 須臾器	A[12.8] B 3.7 C[5.2]	底部から口縁部の破片。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部手持ちへう削り。	長石 石英 砂粒 褐色 普通	10% P221 覆土中
2	高合付瓦 土師器	A[13.0] B(1.8)	底部から口縁部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、中位に壁を持つ。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転へう削り。	長石 雲母 砂粒 スクリア よい赤褐色 普通	20% P222 袖部内
3	甕 土師器	A[15.2] B(15.1)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がり、中位に壁を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ、外面中位へう削り。	長石 石英 砂粒 スクリア 明赤褐色 普通	20% P223 甕内
4	甕 土師器	A[10.5] B(6.9)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がり、中位に壁を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 褐色 普通	10% P224 袖部内

第47号住居跡 (第101図)

位置 調査B区北東部, B4ba区。

規模と平面形 長軸 3.48 m, 短軸 3.33 m の方形である。

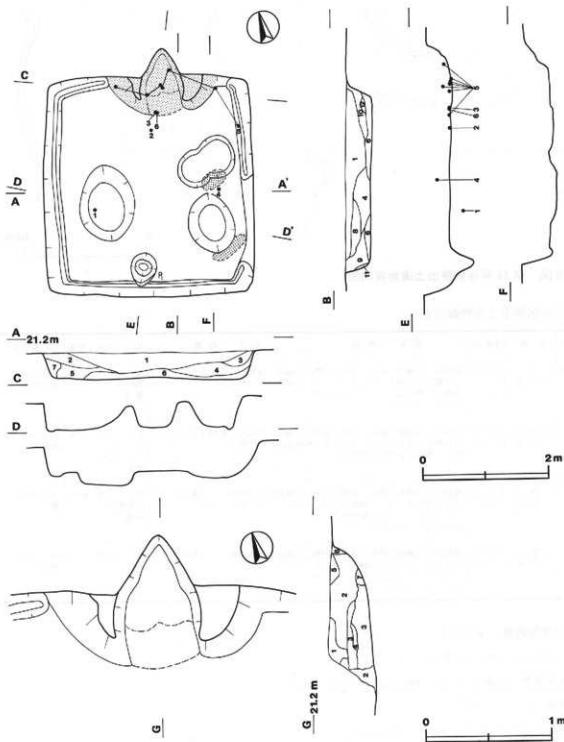
主軸方向 N-17°-E

壁 壁高は 40~42 cm で、外傾して立ち上がる。

壁溝 東壁沿いの一部を除いて、ほぼ全周している。上幅 18~35 cm, 下幅 4~7 cm, 深さ 3~6 cm で、断面形は U 字状である。

床 全面が粘土質で、平坦で硬く締まっている。東壁寄りに、長径 100 cm, 短径 50 cm の瓢箪形で、深さ 8 cm の、焼土ブロックを中量ほど含む白色粘土が堆積していた掘り込みと、長径 96 cm, 短径 72 cm の楕円形で、深さ 10 cm の、ローム小ブロック、粘土小ブロックを少量、焼土小ブロックを多量に含む暗褐色土が堆積していた掘り込みが、また、それらの周辺から多量の焼土塊が確認されている。また、西壁寄りに、長径 120 cm, 短径 90 cm の楕円形で、深さ 22 cm の、白色粘土を多量に含む褐色土の堆積した掘り込みが確認されている。

竈 北壁中央に砂混りの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。

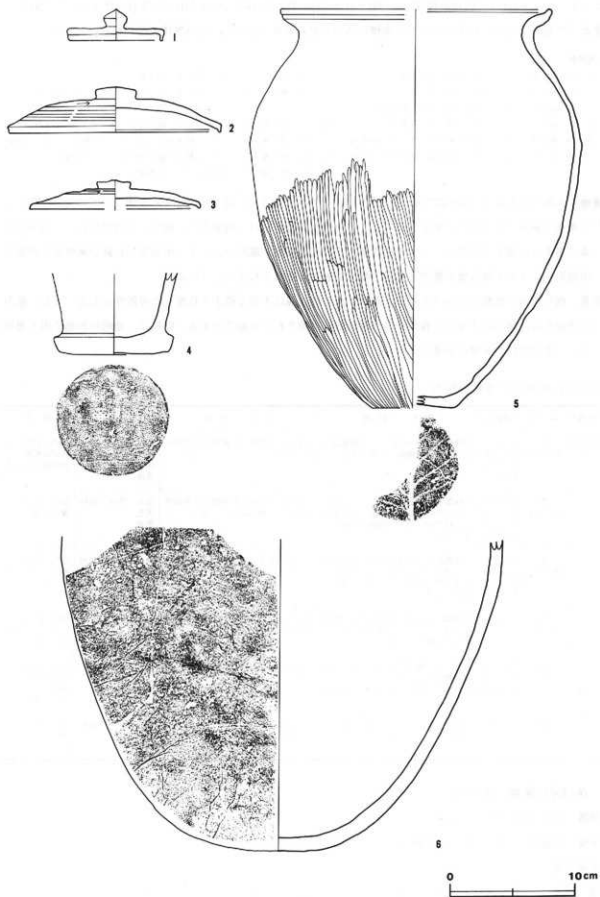


第101図 第47号住居跡実測図

規模は、煙道部から焚口部まで115cm、最大幅145cm、壁外への掘り込みは47cmである。火床部は床面を8cmほど掘り窪めており、火熱を受けて赤変し、硬化している。特に、煙道部にかけて、焼土と炭化材が多くになっている。煙道部は外傾して、階段状に立ち上がる。

焼土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|--------------------------|
| 1 明褐色 | 焼土小ブロック少量、粘土中ブロック中量 | 5 褐色 | 焼土中ブロック少量、粘土中ブロック中量 |
| 2 黄褐色 | 砂混じりの粘土 | 6 黄褐色 | 焼土粒子中量、焼土中ブロック・粘土中ブロック多量 |
| 3 黄褐色 | 焼土粒子中量、砂混じりの粘土 | 7 赤褐色 | 焼土ブロック |
| 4 褐色 | 粘土、崩落土 | | |



第 102 图 第 47 号住居跡出土遺物実測図

ピット 1か所 (P₁)。P₁は長径52cm、短径41cmの楕円形で、深さ38cmの出入口施設に伴うピットである。

覆土 12層からなり、粘土ブロックの堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	7 褐色	ローム粒子・砂少量
2 暗褐色	ローム粒子・砂少量	8 褐色	ローム粒子・ローム小・中ブロック・粘土小ブロック少量
3 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂少量	9 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック少量
4 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック少量	10 暗褐色	ローム粒子・ローム小ブロック・粘土小ブロック少量
5 暗褐色	ローム粒子・粘土小ブロック・砂少量	11 灰褐色	ローム粒子・粘土中ブロック・砂少量
6 灰褐色	ローム粒子・砂少量、粘土小・中ブロック中量	12 灰褐色	粘土大ブロック多量

遺物 土師器片136点、須恵器片46点、および混入した石鉢1点、縄文土器片4点が出土している。ほとんどの遺物は竈内とその周辺に集中している。1の須恵器蓋が完形で西壁寄りの掘り込みの中から、2の須恵器蓋が竈手前の覆土下層から、3の須恵器蓋、6の須恵器甕が竈内から、4の須恵器こね鉢が東壁寄りの覆土中層から、5の土師器甕が竈内と周辺の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 掘り込みの性格は不明であるが、確認された焼土塊は不要な焼土を投棄した可能性がある。また、竈内の状況から、竈内の多量の土器片は住居廃棄時に投棄された可能性がある。時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代の8世紀中葉と考えられる。

第47号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第102図 1	須恵器	A 7.4 B 2.5 F 1.8 G 1.3	宝珠状のつまみが付く。天井部は平坦で、端部は屈曲して垂下する。	つまみ、天井部、口縁部内・外面ロクロナデ。	長石 砂粒 褐色 灰オリーブ色(陶) 普通	100% P225 外面自然釉 西側掘り込み内
2	須恵器	A 16.8 B 3.6 F 3.2 G 1.0	口縁部一部欠損。扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は、ほぼ平坦で、緩やかに開く。端部は屈曲して垂下する。	つまみ、天井部、口縁部内・外面ロクロナデ。頂部回転へラ削り。	長石 雲母 砂粒 灰色 普通	95% P226 覆土下層
3	須恵器	A [13.6] B 2.3 F 2.7 G 0.8	口縁部からつまみの破片。扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は、ほぼ平坦で、緩やかに開く。端部は屈曲して垂下する。	つまみ、天井部、口縁部内・外面ロクロナデ。頂部回転へラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	70% P227 竈内
4	こね鉢 須恵器	B (6.5) C 8.6	口縁部一部欠損。底部は厚い円盤状の平底で、上位に明瞭な段を持つ。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	体部、底部内・外面ロクロナデ。底部外面へラ削り後、ナデ。	長石 砂粒 灰色 普通	80% P228 内・外面一部自然釉 覆土中層
5	土師器	A [21.6] B 31.6 C [6.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内側気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中位に段を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面削ナデ。体部内・外面ナデ、外面中位へラ磨き。	長石 石英 砂粒 スクリア 明赤褐色 普通	40% P229 底部木炭灰 竈内 覆土下層
6	須恵器	B (24.9)	底部から体部の破片。丸底。体部は内側気味に立ち上がる。	体部外面平行引き後、ナデ。内面ナデ。底部ナデ。	長石 石英 砂粒 灰黄色 普通	30% P230 竈内

第48号住居跡 (第103図)

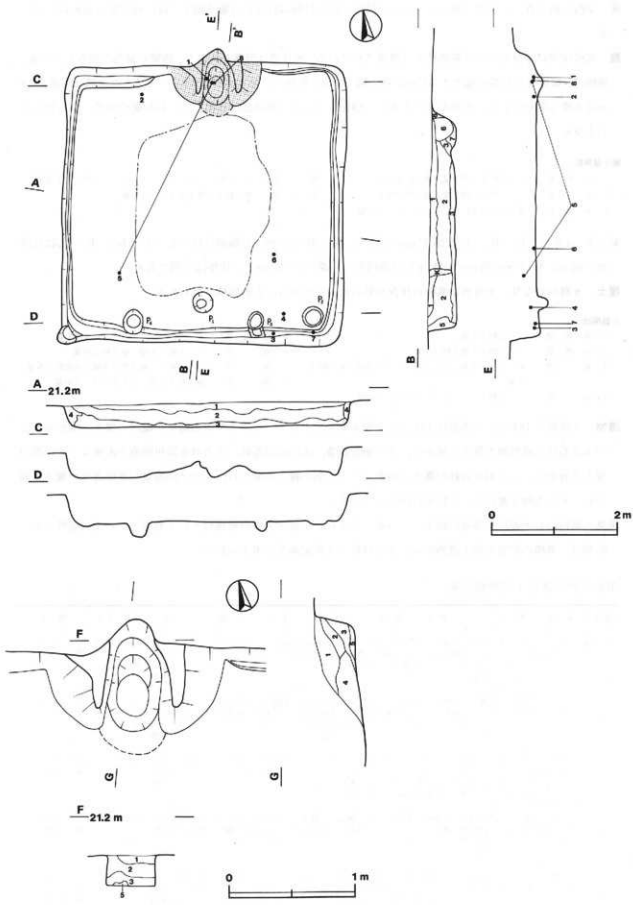
位置 調査B区中央部、B3c0区。

規模と平面形 長軸4.45m、短軸4.40mの方形である。

主軸方向 N-13°-E

壁 壁高は34~36cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅14~30cm、下幅3~16cm、深さ2~5cmで、断面形はU字状である。



第 103 图 第 48 号住居跡実測图

床 全面が粘土質で、平坦で締まっている。特に、出入口施設付近から竈手前までは、硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで107cm、最大幅139cm、壁外への掘り込みは15cmである。火床部は床面を10cmほど掘り窪めており、火熱を受け赤変し、硬化している。煙道部は外傾して、最初緩やかで、のちに立ち上がる。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|-------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・砂少量、焼土粒子少量 | 4 褐色 | ローム粒子・ローム中・火ブロック・焼土粒子中量 |
| 2 褐色 | ローム粒子・砂多量、焼土粒子中量 | 5 赤褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック中量 |
| 3 赤褐色 | 焼土粒子中量、焼土小・中ブロック少量 | | |

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁は径32cmの円形で、深さ18cmの出入口施設に伴うピットである。P₂~P₄は長径28~40cm、短径26~34cmの円形または楕円形で、深さ7~22cmで、性格は不明である。

覆土 8層からなり、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

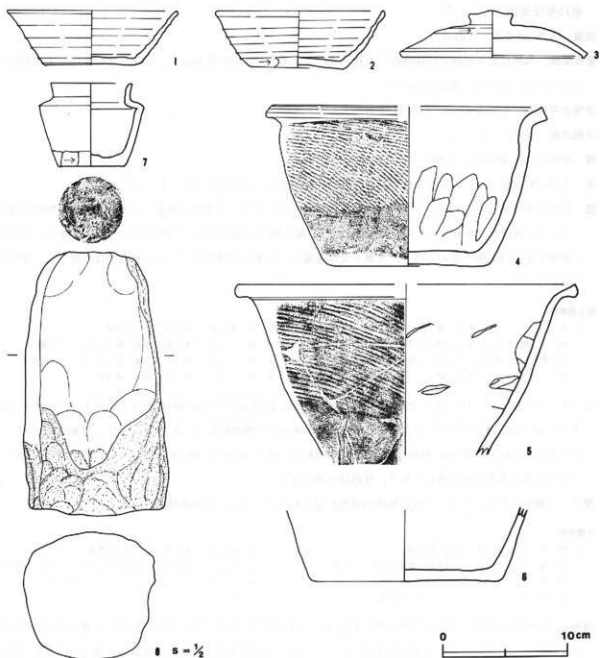
- | | | | |
|-------|---------------------------|-------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・ローム中ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量 | 6 褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子中量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック多量、焼土粒子少量 | 7 褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量 |
| 4 褐色 | ローム粒子・ローム小・中ブロック中量 | 8 暗褐色 | 焼土粒子少量、粘土中ブロック中量 |

遺物 土師器片184点、須恵器片151点、支脚4点が出土している。1の須恵器環が竈内の覆土下層から、2の須恵器環が竈西側の覆土下層から、3の須恵器蓋、4の須恵器鉢、7の須恵器短頸壺が南東コーナー部の覆土下層から、5の須恵器鉢が竈内と南西コーナー部の覆土中層から、6の土師器壺が東壁寄りの覆土下層から、8の支脚が竈内からそれぞれ出土している。

所見 竈内から土器片が多量に出土していることから、土器片を竈の補強材として利用している可能性がある。時期は、遺物の形態や出土遺物から、平安時代の9世紀前葉と考えられる。

第48号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第104図 1	環 須恵器	A 13.5	体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部手持ちへう削り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰色 にぶい褐色	90% P231 竈内
		B 4.3				
		C 7.2				
2	環 須恵器	A 13.4	体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。外面下位へう削り。底部回転へう切り後、へう削り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰色褐色 普通	85% P232 覆土下層
		B 4.1~4.7				
		C 7.3				
3	蓋 須恵器	A 14.4	口縁部、天井部一部欠損。扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は、ほぼ平坦で、中に稜を持ち、横やかに開く。端部は直線して垂下する。	つまみ、天井部、口縁部内・外面ロクロナデ。頂部回転へう削り。	石英 砂粒 普通	75% P233 覆土下層
		B 3.8				
		F 3.4				
		G 1.1				
4	鉢 須恵器	A [21.5]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反して、中に稜を持つ。端部はわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面平行叩き、下位へう削り。内面ナデ。アテ具痕有り。底部ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 灰色 普通	70% P234 覆土下層
		B 12.7				
		C 13.0				
5	鉢 須恵器	A [27.0]	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反して、中に稜を持つ。端部はわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面平行叩き、下位へう削り。内面ナデ。アテ具痕有り。	長石 雲母 砂粒 普通	30% P235 竈内 覆土中層
		B (13.6)				



第104図 第48号住居跡出土遺物実測図

6	壺土器	B(5.7) C 14.5	底部から体部の破片。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	体部内面へラナデ。体部外面、底部ナデ。	長石 雲母 砂粒 灰黄色 普通	10% P236 覆土下層
7	短頸密須器	A 6.1 B 6.6-11 C 5.3	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。上位で最大径を有し、強く内彎する。口縁部は直立する。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面クロナデ。体部外面下位へラ内り。底部回転へラ内り。	長石 石英 雲母 砂粒 外面暗灰色 内面灰色 普通	100% P237 覆土下層

図版番号	器種	計測値			出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)		
8	支脚	(13.9)	(7.8)	(620)	壺内	DP16 90%

第49号住居跡 (第105図)

位置 調査B区北部, B3b区。

重複関係 本跡は第9号掘立柱建物跡と重複している。第9号掘立柱建物跡が、本跡の東壁寄りの床面を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸4.95 m, 短軸4.58 mの方形である。

主軸方向 N-7°-E

壁 壁高は34~40 cmで、外傾して立ち上がる。

床 全面が粘土質で、平坦で締まっている。特に、東壁寄りが硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に褐色土と砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで115 cm, 最大幅130 cm, 壁外への掘り込みは30 cmである。火床部は床面を6 cmほど掘り窪めており、火熱を受け赤変し、わずかに硬化している。煙道部は外傾して、緩やかに立ち上がる。

土層解説

1 褐色	ローム粒子・焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量	5 赤褐色	焼土大ブロック多量
2 褐色	ローム粒子・焼土小ブロック少量	6 褐色	焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量
3 赤褐色	焼土小・中ブロック多量	7 褐色	焼土粒子少量, 粘土小ブロック・砂中量
4 褐色	ローム粒子・砂少量	8 褐色	焼土粒子少量, 砂多量

ピット 6か所 (P₁~P₆)。P₁~P₃は径35~57 cmの円形, P₄は長径70 cm, 短径50 cmの楕円形で、いずれも深さ19~49 cmの主柱穴である。P₅は長径74 cm, 短径48 cmの不整楕円形で、深さ25 cmの出入口施設に伴うピットである。P₆は長径80 cm, 短径70 cmの不整楕円形で、深さ30 cmで、焼土粒子, 粘土中ブロック, 大ブロックを中量含む褐色土が堆積しており、性格は不明である。

覆土 7層からなり、ブロック状の堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

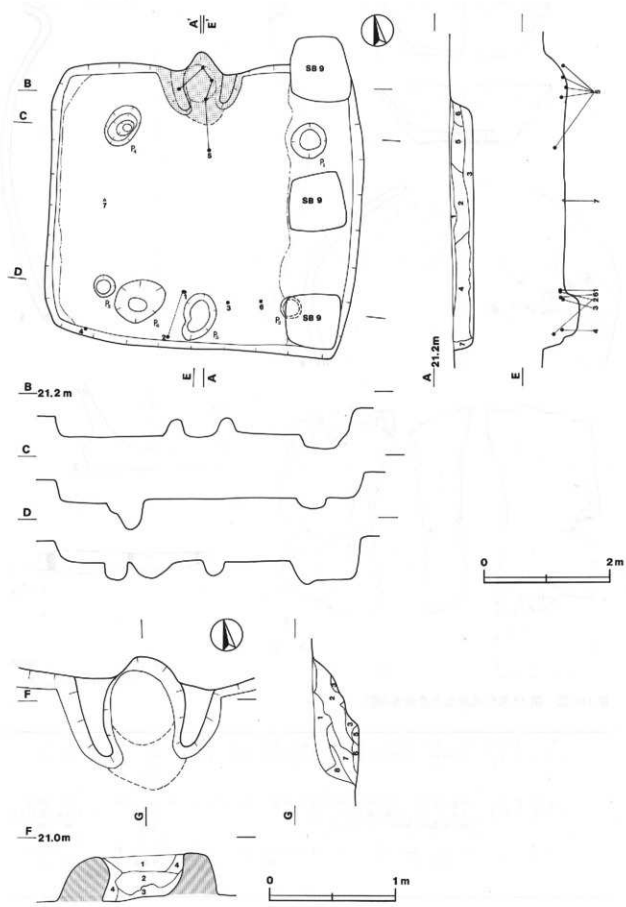
1 暗褐色	焼土粒子中量, 砂多量	5 暗褐色	焼土小・中ブロック多量
2 暗褐色	焼土粒子・砂多量, 焼土小ブロック中量	6 暗褐色	焼土粒子・焼土小・中ブロック少量, 砂多量
3 暗褐色	焼土粒子・焼土小ブロック中量	7 褐色	ローム粒子・焼土小ブロック中量
4 暗褐色	焼土小・中ブロック・砂中量		

遺物 土師器片231点, 須恵器片102点, 砥石1点, 支脚3点, 刀子1点, および混入した縄文土器片1点が出土している。竈内に多くの遺物が集中している。1, 2の須恵器坏, 3の須恵器こね鉢, 6の砥石が南壁寄りの覆土下層から、4の須恵器壺が南西コーナー部の覆土下層から、5の土師器壺が竈内と左袖部内、竈手前の覆土下層から、7の刀子が西壁寄りの床面直上からそれぞれ出土している。

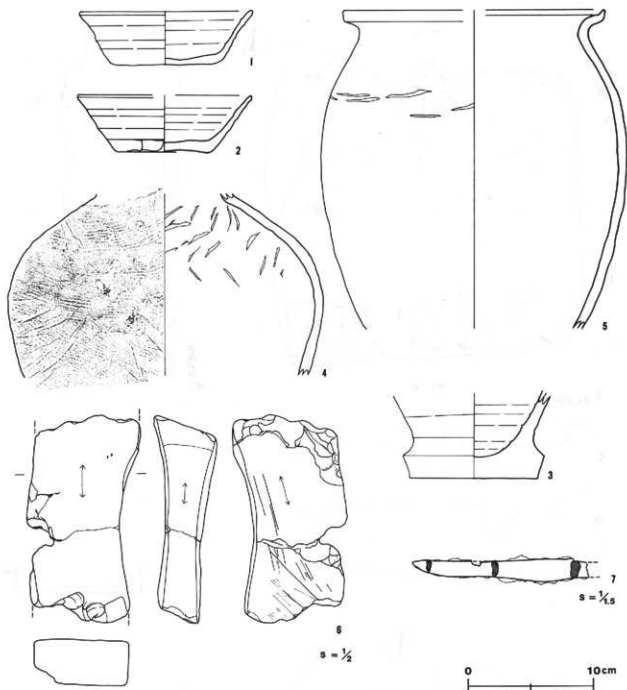
所見 竈内から多量の土器片が出土していることや、その多くが火床部中央に残っていたことから、住居廃棄時に、土器片を投棄した可能性があると思われる。時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代の9世紀前葉と考えられる。

第49号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第105図 1	須恵器 環	A 13.6 B 4.3 C 8.0	底部、体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面クロコナア。底部手持ちへろ削り。	長石 雲母 砂粒 灰黄色 普通	80% P238 覆土下層



第 105 图 第 49 号住居跡実測图



第106図 第49号住居跡出土遺物実測図

第106図 2	坏 須恵器	A [13.8] B 4.6 C 7.5	体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部外面下位へラ削り。底部回転へラ削り後、ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 黄灰色 普通	70% P239 覆土下層
3	こね鉢 須恵器	B (6.6) C 10.1	口縁部一部欠損。底部は厚い円盤状の平底で、上位に明確な縁を持つ。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	体部、底部内・外面ロクロナデ。底部ナデ。	長石 砂粒 灰色 普通	70% P240 内面一部自然釉 覆土下層
4	壺 須恵器	B (14.5)	体部の破片。体部は内傾して立ち上がり、中位で最大径を有する。	体部外面平行印き後、ナデ。内面ナデ。アテ具痕有り。	雲母 砂粒 外面黄灰色 内面にふい黄褐色 普通	25% P241 覆土下層

5	土器	A[20.8] B(25.5)	体部から口縁部の破片。体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中粒に装を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	石灰 砂粒 褐色 普通	20% P242 竈内 袖部内 覆土下層
---	----	--------------------	--	------------------------	-------------------	-------------------------------

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
6	礫石	(11.0)	(6.0)	(3.3)	(210)	凝灰岩	覆土下層	Q11

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
7	刀子	(12.5)	(2.1)	(0.6)	(21)	床面直上	M7 50%

第50号住居跡 (第107図)

位置 調査B区北部, B3c区。

規模と平面形 長軸 3.45 m, 短軸 3.33 mの隅丸方形である。

主軸方向 N-20°-E

壁 壁高は24~26 cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南西壁の北寄りから竈を経て、東コーナー部までの一部を除き、ほぼ半周している。上幅14~27 cm, 下幅2~7 cm, 深さ4~6 cmで、断面形はU字状である。

床 全面が粘土質で、平坦で締まっている。特に、中央から西コーナー部にかけて、硬く踏み固められている。

竈 北東壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで74 cm, 最大幅95 cm, 壁外への掘り込みは38 cmである。火床部は、火熱を受けわずかに赤変し、奥に焼土が堆積している。煙道部は外傾して、最初緩やかに、のち急に立ち上がる。

覆土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 4 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、粘土質 | 5 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック中量、炭化粒子少量 | 6 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |

ビット 3か所 (P₁~P₃)。P₁は長径32 cm, 短径26 cmの楕円形, P₂は径16 cmの円形で、いずれも深さ6~16 cmの主柱穴である。P₃は長径32 cmの円形で、深さ30 cmの出入口施設に伴うビットである。

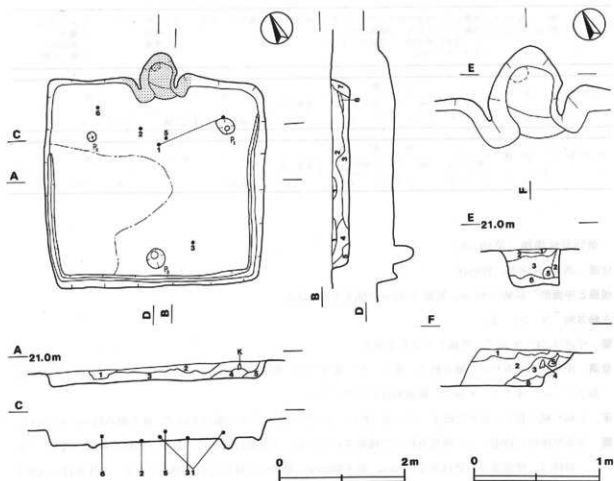
覆土 7層からなり、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

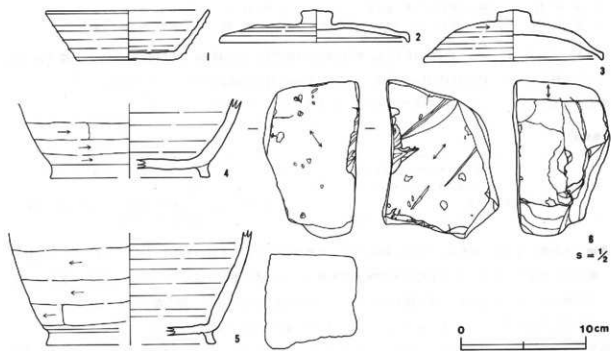
- | | | | |
|-------|-------------------------------|-------|-------------------------------|
| 1 橙褐色 | 粘土中ブロック・砂中量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量、焼土小ブロック少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・粘土中ブロック少量、暗褐色土中量 | 7 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子多量、炭化中ブロック中量 |
| 4 褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック少量 | | |

遺物 土器碎片77点, 須恵器片31点, 礫石2点, 支脚2点, 土玉片1点が出土している。ほとんどの遺物が竈周辺に集中している。1の須恵器環が竈手前と東コーナー部の覆土下層から, 2の須恵器蓋が竈手前の覆土下層から, 5の須恵器長頸壺が覆土中層から, 3の須恵器蓋が南コーナー部の覆土下層と覆土中層から, 4の須恵器長頸壺が北コーナー部の覆土中層から, 6の礫石が覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 竈内の状況から、短期間しか使用されなかった住居跡の可能性が。時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代の8世紀後葉と考えられる。



第107图 第50号住居跡実測図



第108图 第50号住居跡出土遺物実測図

第50号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第108図 1	坏 須臾器	A 12.9	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部手持ちへう削り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰白色 普通	60% P243 覆土下層
		B 13-10				
		C 7.7				
2	蓋 須臾器	A 15.2	口縁部一部欠損。ボタン状のつまみが付く。天井部は、ほぼ平坦で、緩やかに開く。縁部は屈曲して垂下する。	つまみ、天井部、口縁部内・外面ロクロナデ。頂部回転へう削り。	長石 石英 雲母 砂粒 黄灰色 普通	95% P246 覆土下層
		B 2.6				
		F 2.0				
		G 1.1				
3	蓋 須臾器	A 14.4	体部、口縁部一部欠損。扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は内彎気味に開く。口縁部はわずかに外反して、縁部は屈曲して垂下する。	つまみ、天井部、口縁部内・外面ロクロナデ。頂部回転へう削り。	長石 石英 雲母 砂粒 黄灰色 普通	70% P247 覆土下層 覆土中
		B 4.1				
		F 2.6				
		G 1.0				
4	長須臾器	B (6.3)	高台部から体部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転へう削り。高台部張り付け、ロクロナデ。	長石 砂粒 黄灰色 普通	15% P244 覆土中
		D [12.8]				
		E 1.1				
5	長須臾器	B (9.0)	高台部から体部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転へう削り。高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 砂粒 黄灰色 普通	15% P245 覆土中層
		D [13.4]				
		E 1.0				

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
6	磁石	(8.3)	(5.1)	(6.2)	(285)	磁灰岩	覆土中層	Q12

第51号住居跡 (第109図)

位置 調査B区北西部, B3c区。

重複関係 本跡は第134号土坑と重複している。第134号土坑が、本跡の南東部を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸4.00 m, 短軸3.70 mの長方形と推定される。

主軸方向 N-7°-E

壁 壁高は20~24 cmで、外傾して立ち上がる。

床 全面が粘土質で、平坦で締まっている。特に、西壁寄り半分が硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。

規模は、煙道部から焚口部まで102 cm, 最大幅113 cm, 壁外への掘り込みは45 cmである。火床部は、火熱を受け赤変し、硬化している。煙道部は外傾して、階段状に立ち上がる。

竈土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂少量	7 灰褐色	砂少量, 粘土質
2 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂・粘土小ブロック少量	8 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂少量
3 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂・粘土粒子少量	9 褐色	ローム粒子・焼土粒子中量, 砂少量
4 灰褐色	ローム粒子・砂少量	10 赤褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子・焼土小ブロック中量
5 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂少量	11 赤褐色	ローム粒子・焼土粒子多量
6 灰褐色	焼土粒子・砂少量	12 赤褐色	ローム粒子・焼土小ブロック中量

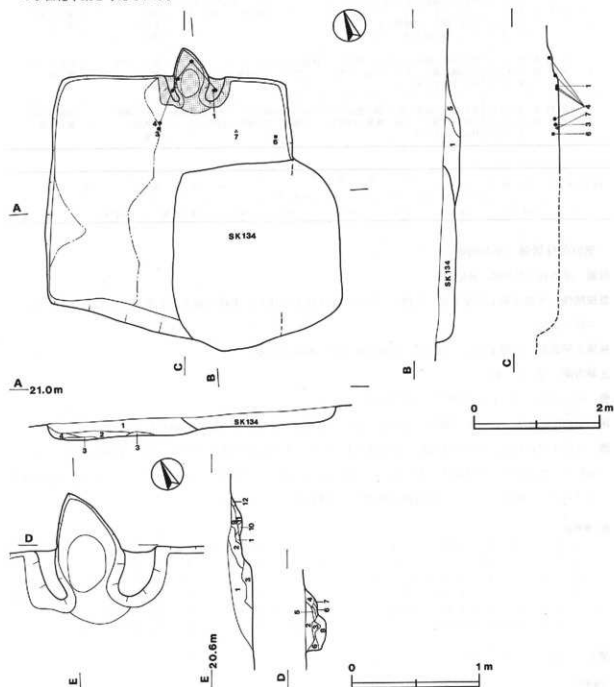
覆土 5層からなり、自然堆積と思われる。

土層解説

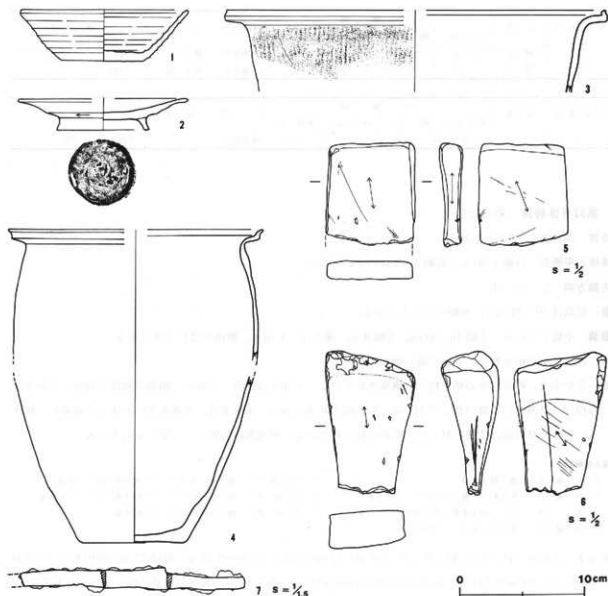
1 暗褐色	ローム粒子中量	4 褐色	ローム粒子中量
2 褐色	ローム粒子・粘土中ブロック中量	5 暗褐色	焼土小・中ブロック多量
3 褐色	ローム粒子・粘土小・中ブロック中量		

遺物 土師器片 284 点、須恵器片 104 点、砥石 2 点、刀子 1 点、植物の種子炭化物および混入した尖頭器 1 点、縄文土器片 1 点が出土している。1 の須恵器坏が竈東側の袖部内から、2 の須恵器高台付皿が竈内から、3 の須恵器鉢が竈手前の覆土下層から、4 の土師器甕が竈内と両袖部内、竈手前の覆土下層から、5 の砥石が南西コーナー一部の覆土中から、6 の砥石が東壁寄りの覆土下層から、7 の刀子が床面直上からそれぞれ出土している。

所見 覆土と床が共に粘土質で硬く締まっており、色調もほとんど同じであったことから、掘り込みが困難であった上に、第 134 号土坑との切り合いが不明瞭であった。時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代の 9 世紀中葉と考えられる。



第 109 図 第 51 号住居跡実測図



第110図 第51号住居跡出土遺物実測図

第51号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第110図 1	坏 須恵器	A 13.2 B 4.6-4.1 C 6.4	体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部手持ちへラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰青色 普通	90% P248 袖部内
2	高台付皿 須恵器	A[13.5] B 2.5 D 7.4 E 1.0	高台部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、下位に段を持つ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。外面下位割駝へラ削り。底部割駝へラ削り。高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 スコリア 赤褐色 普通	50% P250 内面ス付着 腕内
3	鉢 須恵器	A[30.4] B(6.5)	体部から口縁部の破片。口縁部は強く外反して、中位に段を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面平行叩き、内面ナデ。	長石 雲母 砂粒 スコリア 橙色 普通	5% P253 覆土下層
4	甕 土師器	A[20.4] B(23.2) C 8.4	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中位に段を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面ナデ。体部内・外面ナデ、外面下位へラナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 暗褐色 普通	30% P252 外面ス付着 腕内 袖部内 覆土下層

図版番号	器種	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
5	磁石	(5.4)	(4.7)	(1.2)	(50)	凝灰岩	覆土中	Q13
6	磁石	(7.6)	(4.8)	(3.0)	(103)	凝灰岩	覆土下層	Q15

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
7	刀子	(15.9)	(1.9)	(0.3)	(25)	床面直上	M8 50%

第52号住居跡 (第111図)

位置 調査B区北西部, B3as区。

規模と平面形 長軸 4.80 m, 短軸 4.63 m の方形である。

主軸方向 N-17°-E

壁 壁高は 10~24 cm で, 外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅 16~30 cm, 下幅 8 cm, 深さ 3~6 cm で, 断面形は U 字状である。

床 ほほは全面が粘土質で, 平坦で硬く締まっている。

竈 北壁中央に砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 両側の袖部が残存している。

規模は, 煙道部から焚口部まで 117 cm, 最大幅 136 cm である。火床部は, 火熱を受けわずかに赤変し, 硬化している。焚口部は北壁に対して, 斜めに作られている。煙道部は外傾して, 急に立ち上がる。

覆土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|--------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子少量 | 5 明赤褐色 | 焼土中・大ブロック・炭化中ブロック多量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子・焼土小・中ブロック多量 | 6 赤褐色 | 焼土小・中ブロック・粘土小ブロック・砂多量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量, 焼土中ブロック多量 | 7 赤褐色 | 焼土小・中ブロック・砂多量 |
| 4 赤褐色 | 焼土中・大ブロック多量 | | |

ビット 5か所 (P₁~P₅)。P₁, P₃, P₄は径 34~42 cm の円形, P₂は長径 37 cm, 短径 33 cm の楕円形で, いずれも深さ 31~39 cm の支柱穴である。P₅は径 34 cm の円形で, 深さ 15 cm の出入口施設に伴うビットである。

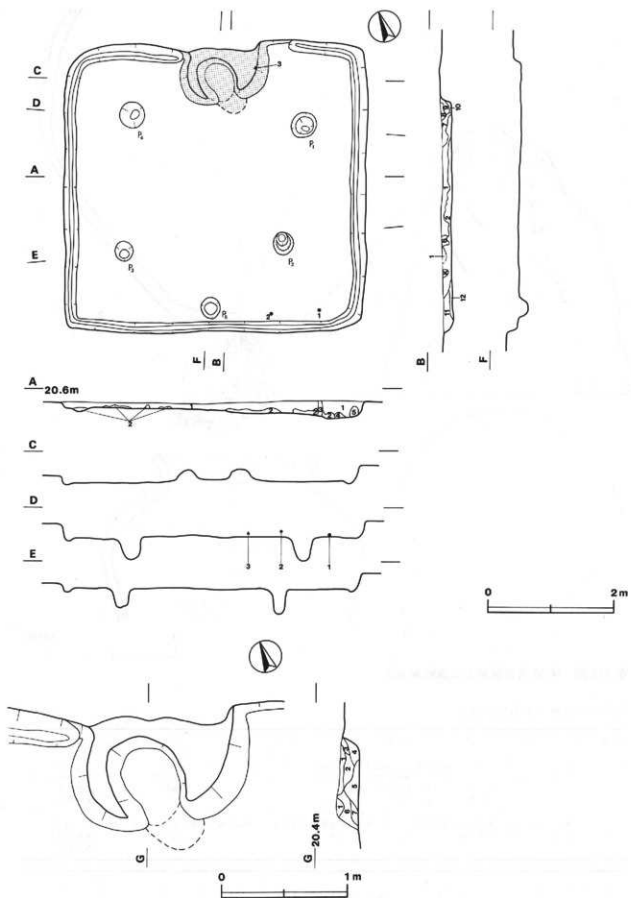
覆土 12層からなり, ブロック状の堆積の状況が見られることから, 人為堆積と思われる。

土層解説

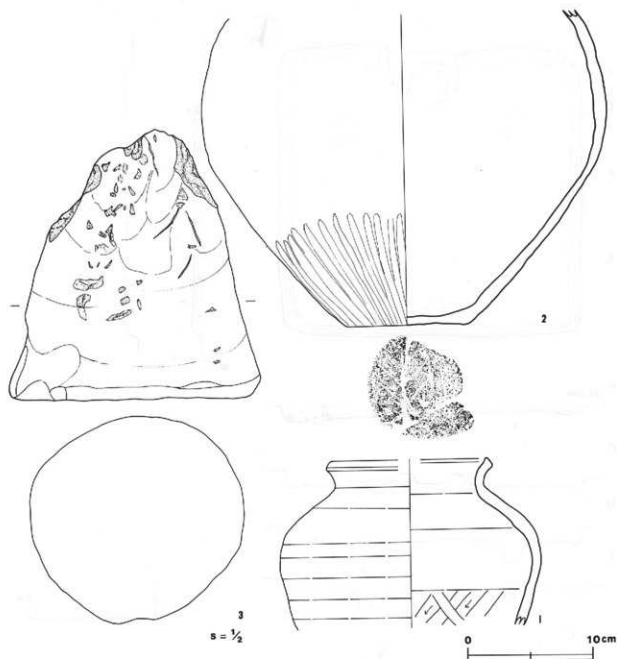
- | | | | |
|-------|----------------------|--------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック多量, 砂中量 | 8 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・焼土小・中ブロック多量 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量, 焼土小ブロック多量 | 9 褐色 | ローム粒子・焼土粒子多量, 焼土小・中・大ブロック中量 |
| 3 褐色 | 砂多量 | | |
| 4 黄褐色 | 粘土小・中ブロック・砂多量 | 10 褐色 | 粘土小・中ブロック・砂多量 |
| 5 黄褐色 | 焼土粒子・粘土小ブロック・砂多量 | 11 褐色 | ローム小ブロック・焼土粒子中量 |
| 6 褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子中量 | 12 暗褐色 | 焼土小・中ブロック・粘土中・大ブロック中量 |
| 7 褐色 | ローム粒子・焼土小・中ブロック多量 | | |

遺物 土師器片 80 点, 須恵器片 15 点, 支脚 1 点が出土している。1 の須恵器片が南東コーナー部の床面直上から, 2 の土師器片が覆土下層から, 3 の支脚が竈東側の袖部脇の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 奈良時代の 8 世紀中葉と考えられる。



第 111 图 第 52 号住居跡実測图



第112図 第52号住居跡出土遺物実測図

第52号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第112図 1	壺 須恵器	A [12.6] B (13.2)	体部から口縁部の破片。体部は内壁して立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がり、中位に横を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。内面下位へラナデ。	砂粒 黄灰色 良好	30% P255 内・外面自然釉 釉西窯産 床面直上
2	埴 土器	B (24.9) C 9.8	底部から体部の破片。平底。体部は内壁気味に立ち上がる。	体部内・外面ナデ。外面下位へラ磨き。	長石 石英 砂粒 青色 普通	35% P254 底部木炭灰 覆土下層
図版番号	器種	計測値			出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
3	支脚	(14.3)	(13.3)	(11.3)	(1510)	覆土下層 DP17 90%

第53号住居跡 (第114図)

位置 調査B区北東部, B4d区。

規模と平面形 長軸3.48 m, 短軸2.68 mの長方形である。

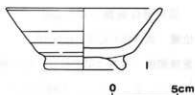
主軸方向 N-23°-E

壁 壁高は4~8 cmで, 外傾して立ち上がる。

床 全面が粘土質で, 平坦で締まっている。特に, 中央が硬く踏み固められている。

ピット 2か所 (P₁, P₂)。P₁は径34 cmの円形で, 深さ28 cm, P₂は長径24 cm, 短径17 cmの楕円形で, 深さ8 cmで, 性格は不明である。

覆土 3層からなり, ハードロームブロック, 焼土ブロック, 粘土ブロックの堆積の状況から, 人為堆積と思われる。



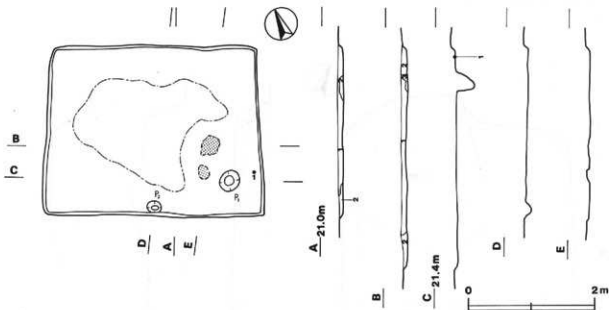
第113図 第53号住居跡出土遺物実測図

土層解説

- 1 暗褐色 ハードローム大ブロック・焼土粒子・焼土小・中・大ブロック中量
- 2 褐色 ローム粒子・ハードローム小・中ブロック中量, 粘土小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・ハードローム中ブロック中量

遺物 土師器片37点, 須恵器片4点, 雲母片岩の礫1点, および混入した磁器片1点が出土している。1の土師器高台付環が南コーナー部の覆土下層と覆土中から出土している。

所見 竈の痕跡はなく, 住居として使用されたものかどうか不明である。中央南コーナー寄りに確認された焼土塊は床面を掘り込んだものではないことから, 炉として使用された可能性は低いと思われる。時期は, 出土遺物から, 平安時代の9世紀と考えられる。



第114図 第53号住居跡実測図

第53号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第113図	高台付環土師器	A 12.5 B 5.0 D 6.0 E 1.1	高台部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて, 内埋気味に立ち上がる。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。底部回転へく廻り, 高台部貼り付け, ロクロナデ。	長石 砂粒 外面にふい黄褐色 内面淡黄褐色 普通	60% P256 内面スス付着 覆土下層 覆土中

第54号住居跡 (第115図)

位置 調査B区北部, B3a7区。

重複関係 本跡は第290号土坑と重複している。第290号土坑が、本跡の竈から東コーナー部にかけて掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.68m, 短軸3.60mの隅丸方形と推定される。

主軸方向 N-20°-E

壁 壁高は46cmで、外傾して立ち上がる。

床 全面が粘土質で、平坦で硬く締まっている。

竈 第290号土坑によって破壊されているが、焼土痕が北東壁に残っていることや、支脚が第290号土坑から出土していることから、灰褐色粘土で構築されていたと推定される。

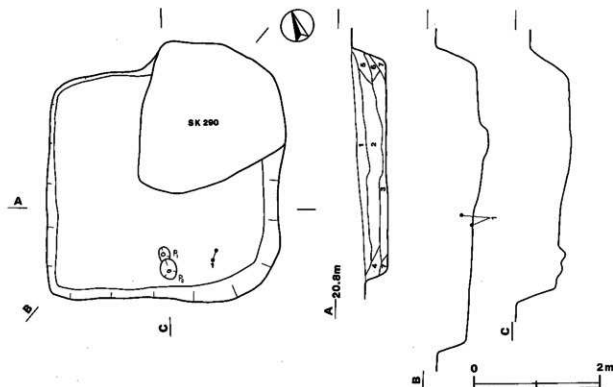
ピット 2か所 (P₁, P₂)。P₁は長径[20]cm, 短径17cmの楕円形で、深さ11cm, P₂は長径32cm, 短径25cmの楕円形で、深さ8cmの出入口施設に伴うピットである。

覆土 7層からなり、焼土粒子と焼土ブロックを多く含有している状況から、人為堆積と思われる。

土層解説

- | | |
|-------------------------|------------------------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子少量, 砂中量 | 5 暗褐色 焼土粒子・焼土小ブロック中量 |
| 2 暗褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・砂中量 | 6 褐色 ローム粒子・焼土粒子中量, 焼土小ブロック多量 |
| 3 暗褐色 焼土小ブロック中量, 砂少量 | 7 褐色 ローム粒子中量, ローム中・大ブロック多量 |
| 4 褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック中量 | |

遺物 土師器片122点, 須恵器片70点が出土している。1の須恵器鉢が南コーナー部の覆土下層と覆土中層からそれぞれ出土している。



第115図 第54号住居跡実測図

所見 第290号土坑に床を掘り込まれているために、流れ込んだ遺物が多いと思われる。また、第290号土坑のピットが住居跡に伴うピットの可能性がある。時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代の8世紀後葉と考えられる。

第54号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第116図 1	鉢 須置器	A[20.7] B(6.0)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がり、上位に壁を持つ。口縁部は外反して、中位に壁を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部、体部内・外面ロコロナテ。	長石 灰色 良好	5% P258 覆土下層 覆土中層

第55号住居跡(第117図)

位置 調査B区北部, A37区。

規模と平面形 長軸4.75m, 短軸4.70mの方形である。

主軸方向 N-16°-E

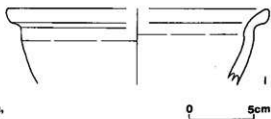
壁 壁高は34~40cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁の一部を除き、ほぼ全周している。上幅14~34cm,

下幅4~7cm, 深さ4~6cmで、断面形はU字状である。

床 全面が粘土質で、平坦で硬く締まっている。

竈 北壁中央に砂混りした灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで133cm, 最大幅135cm, 壁外への掘り込みは13cmである。火床部は床面を1cmほど掘り窪めており、火熱を受け赤変し、硬化している。特に、西側袖部の内側が赤変硬化が激しい。煙道部は外傾して、急に立ち上がる。



第116図 第54号住居跡出土遺物実測図

覆土層解説

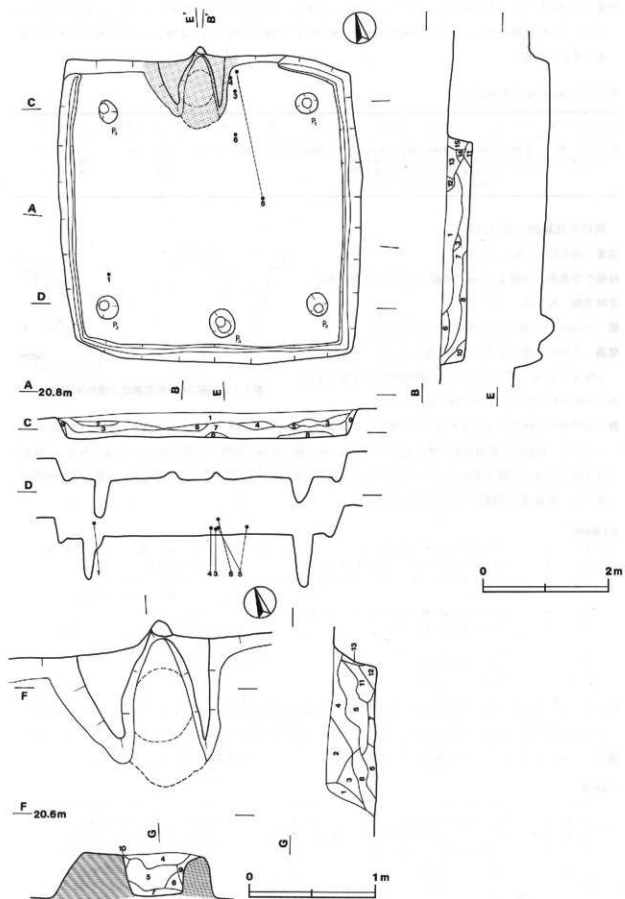
1 褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・砂多量	8 褐色	ローム粒子・焼土小ブロック多量, 粘土粒子・砂中量
2 褐色	ローム粒子・粘土小・中ブロック中量, 焼土粒子多量	9 暗褐色	ローム粒子・砂中量
3 褐色	ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック中量, 粘土粒子・砂多量	10 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック中量
4 褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・焼土小・中・大ブロック多量	11 暗赤褐色	焼土小・中・大ブロック・砂多量
5 褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・焼土小・中・大ブロック多量	12 暗赤褐色	焼土小・中ブロック・砂多量
6 褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子多量	13 灰褐色	粘土大ブロック多量
7 赤褐色	焼土中・大ブロック多量		

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁とP₂は径34~36cmの円形, P₃とP₄は長径34~37cm, 短径30~33cmの楕円形で、いずれも深さ41~83cmの主柱穴である。P₅は径43cmの円形で、深さ22cmの出入口施設に伴うピットである。

覆土 15層からなり、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

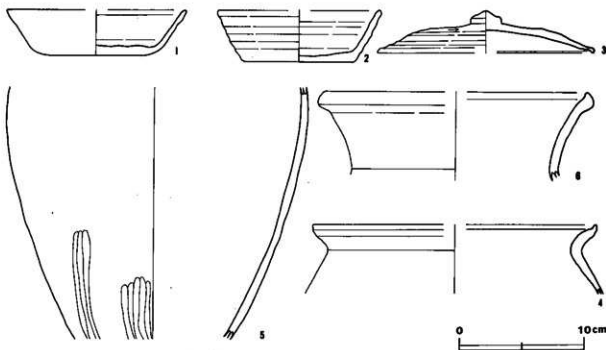
1 暗褐色	ローム粒子・砂少量	8 褐色	ローム粒子・ローム小ブロック中量, 焼土粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子・砂少量, 硬く締まっている	9 褐色	ローム粒子・ローム中ブロック少量
3 暗褐色	ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量	10 暗褐色	ローム粒子・ローム小ブロック・砂少量
4 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	11 暗褐色	ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・砂少量
5 灰褐色	ローム中ブロック少量, 粘土質	12 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂少量
6 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	13 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量, 砂中量
7 褐色	ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量, 砂中量	14 暗褐色	ローム粒子・粘土中ブロック少量, 砂中量
		15 暗褐色	ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・砂少量



第117图 第55号住居跡実測図

遺物 土師器片 56 点, 須恵器片 30 点が出土している。1 の須恵器環が南西コーナー部の覆土中層から, 2 の須恵器環が東壁寄りの覆土中から, 3 の須恵器蓋が北壁寄りの覆土下層と覆土中から, 4 の土師器甕が竈東側の袖部脇の覆土下層から, 5 の土師器甕が竈東側の袖部脇の覆土下層, 中央の覆土下層, ならびに東壁寄りの覆土中から, 6 の須恵器甕が竈手前の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 奈良時代の 8 世紀前半と考えられる。



第 118 図 第 55 号住居跡出土遺物実測図

第 55 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 118 図 1	環 須 恵 器	A [14.2] B 3.7 C 7.8	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部手持ちへう磨り。	長石 石英 雲母 砂粒 褐灰色 普通	30% P262 覆土中層
2	環 須 恵 器	A [13.0] B 4.1 C 8.6	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部手持ちへう磨り。	長石 雲母 砂粒 灰色 普通	35% P263 覆土中
3	蓋 須 恵 器	A [17.3] B 3.3 F 2.4 G 1.0	つまみから口縁部の破片。扁平な宝珠状のつまみが付く。天井部は、ほぼ平組で、中位に線をもち、内彎気味に開く。端部は悪直して垂下する。	つまみ、天井部、口縁部内・外面ロクロナデ。頂部回転へう磨り。	長石 砂粒 黄灰色 普通	20% P264 覆土下層 覆土中
4	甕 土 師 器	A [22.6] B (5.5)	体部から口縁部の破片。口縁部は外反して、中位に線を持つ。端部はつまみ上げられ、頂下を板状工具で平組にならされている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	石英 砂粒 スコリア にふい黄色 普通	5% P265 覆土下層
5	甕 土 師 器	B (21.1)	体部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ナデ。外面下位へう磨き。	長石 砂粒 にふい黄色 普通	25% P266 覆土下層 覆土中
6	甕 須 恵 器	A [21.1] B (7.1)	口縁部の破片。口縁部は外反して、中位に線を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。	長石 雲母 砂粒 褐灰色 普通	5% P267 覆土中層

第56号住居跡 (第119図)

位置 調査B区北部, A3j9区。

規模と平面形 長軸 3.01 m, 短軸 2.94 mの隅丸方形である。

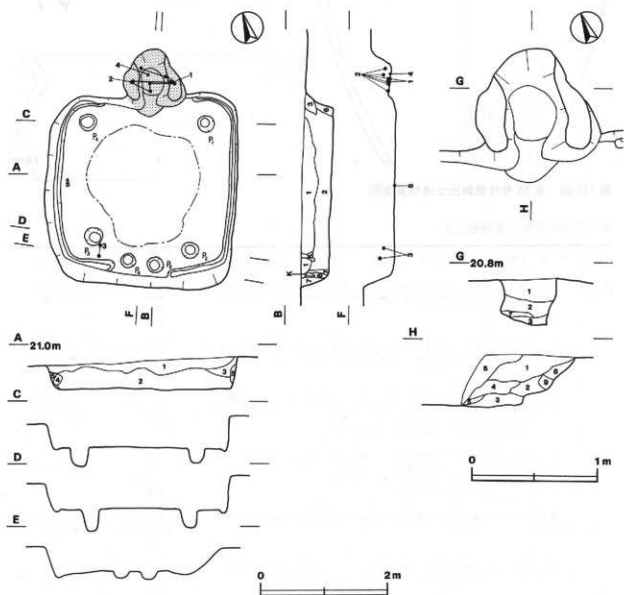
主軸方向 N-23°-E

壁 壁高は40~52 cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 出入口施設付近の一部を除き、ほぼ全周している。上幅10~30 cm, 下幅2~11 cm, 深さ2~6 cmで、断面形はU字状である。

床 全面が粘土質で、平坦で締まっている。特に、中央が硬く踏み固められている。

竈 北東壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで105 cm, 最大幅95 cm, 壁外への掘り込みは73 cmである。火床部は火熱を受け赤変し、硬化している。煙道部は外傾して、階段状に立ち上がる。



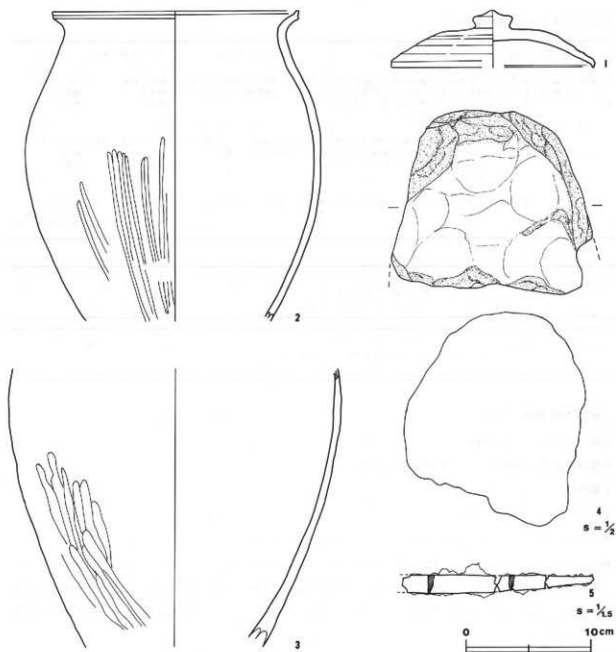
第119図 第56号住居跡実測図

竈土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|----------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土小・中ブロック多量 | 6 褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・焼土小ブロック少量、砂中量 |
| 2 暗褐色 | 焼土小・中ブロック多量、粘土小ブロック・砂中量 | 7 暗褐色 | ローム粒子・砂少量 |
| 3 暗褐色 | 焼土粒子・焼土小・中ブロック多量 | 8 暗褐色 | 焼土粒子少量 |
| 4 褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック・粘土小ブロック多量 | 9 赤褐色 | 焼土粒子・小・中・大ブロック中量 |
| 5 赤褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック多量 | | |

ピット 6か所 (P₁~P₆)。P₁~P₄は径26~29 cmの円形で、いずれも深さ23~33 cmの支柱穴である。P₅とP₆は径25~27 cmの円形で、いずれも深さ11~14 cmの出入口施設に伴うピットである。

覆土 8層からなり、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。



第120図 第56号住居跡出土遺物実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|-------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・砂少量 | 5 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・ローム小・中ブロック・焼土粒子・砂少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・砂少量、粘性あり | 7 灰褐色 | ローム粒子・砂少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量 | 8 灰褐色 | ローム粒子・ローム中ブロック・砂少量 |

遺物 土師器片 109 点, 須恵器片 59 点, 支脚 1 点, 刀子 1 点が出土している。1 の須恵器蓋が竈の両袖部内と北コーナー部の覆土中から, 2 の土師器甕が竈内と袖部内から, 3 の土師器甕が西コーナー部の覆土中層と覆土中から, 4 の支脚が竈内から, 5 の刀子が北西壁寄りの床面直上からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 奈良時代の 8 世紀中葉と考えられる。

第56号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第120図 1	須恵器 蓋	A [15.2] B 4.6 F 3.1 G 1.6	つまみから口縁部の破片。扁平な宝珠状のつまみが付く。天井部は、ほぼ平温で、内筒気味に開く。端部は扇曲して垂下する。	つまみ、天井部、口縁部内・外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ磨り。	長石 砂粒 褐色 普通	35% P268 袖部内 覆土中
2	土師器 甕	A 19.8 B (24.7)	体部から口縁部の破片。体部は内筒気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中位に壁を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面ナデ。体部内・外面ナデ、外面下位ヘラ磨き。	長石 石英 砂粒 にふい赤褐色 普通	35% P269 竈内 袖部内
3	土師器 甕	B (22.1)	体部の破片。体部は内筒気味に立ち上がる。	体部内・外面ナデ、外面下位ヘラ磨き。	長石 砂粒 褐色 普通	10% P270 外面スス付露 覆土中層 覆土中

図版番号	器種	計測値			出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)		
4	支脚	(9.3)	(10.9)	(850)	竈内	DP18 30%

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
5	刀子	(13.4)	(2.3)	(0.5)	(18)	床面直上	M9 50%

第57号住居跡 (第121図)

位置 調査B区北部, A3hs区。

規模と平面形 長軸 2.95 m, 短軸 2.50 m の長方形である。

主軸方向 N-31°-E

壁 壁高は 2 ~ 4 cm で, 外傾して立ち上がる。

床 全面が粘土質で, 平坦で硬く締まっている。中央は貼り床である。

竈 北東壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 両側の袖部が残存している。規模は, 煙道部から焚口部まで 117 cm, 最大幅 124 cm, 壁外への掘り込みは 52 cm である。火床部は床面を 4 cm ほど掘り窪めており, 火熱を受けわずかに赤変し, 硬化している。煙道部は外傾して, 緩やかに立ち上がる。

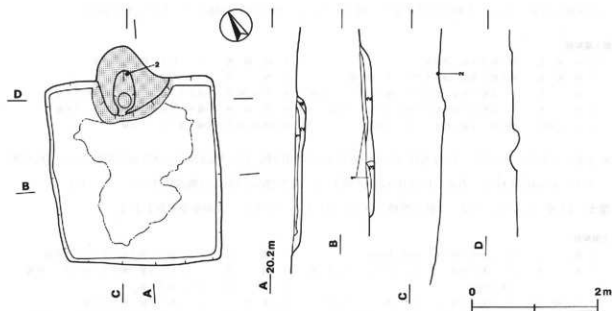
覆土 4層からなり, 1, 2, 4層は自然堆積, 3層は人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子中量, 砂少量 3 褐色 砂多量, 小石中量
 2 暗褐色 ローム粒子・砂多量, 焼土粒子中量 4 褐色 焼土粒子・焼土小ブロック中量, 砂多量

遺物 土師器片 25 点, 須恵器片 19 点, および混入した剃片 1 点が出土している。1 の須恵器環が北コーナ
 部の覆土中から, 2 の土師器高台付環が竈内から逆位で, それぞれ出土している。

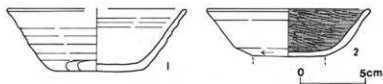
所見 北西側に向下る傾斜の強い場所に作られており, 覆土が浅く, 壁の残存率が悪い。2 の高台付環は二次焼
 成を受けておらず, 竈実に逆位で備えられてあったことから, 竈祭祀として利用された可能性が高いと思わ
 れる。時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 平安時代の 9 世紀前半と考えられる。



第 121 図 第 57 号住居跡実測図

第 57 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 122 図 1	環 須恵器	A [14.2] B 4.0 C 6.8	底部から口縁部の破片。平底。体部 は直線的に外傾して立ち上がる。端 部はわずかに外反する。	口縁部, 体部内・外面クロロナデ, 外面下位へラ削り, 底部手持ちへラ 削り。	長石 雲母 砂粒 スコリア に多い黄褐色 普通	45% P271 覆土中
2	高台付環 土師器	A 12.7 B (3.8)	高台部欠損。平底。体部は内彎気味 に立ち上がり, 下位に段を持つ。端 部はわずかに外反する。	口縁部, 体部内・外面クロロナデ, 外面下位から底部回転へラ削り。内 面へラ磨き。	長石 石英 砂粒 褐色 普通	90% P272 内部黒色処理 竈内



第 122 図 第 57 号住居跡出土遺物実測図

第58号住居跡 (第123図)

位置 調査B区北部, A3ha区。

規模と平面形 長軸 5.50 m, 短軸 5.38 m の隅丸方形である。

主軸方向 N-9°-E

壁 壁高は 34~39 cm で, 外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅 10~37 cm, 下幅 2~7 cm, 深さ 2~4 cm で, 断面形は U 字状である。

床 粘土質で, 全面に貼り床が施され, 平坦で硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 両側の袖部が残存している。

規模は, 煙道部から焚口部まで 90 cm, 最大幅 127 cm, 壁外への掘り込みは 40 cm である。火床部は床面を 8 cm ほど掘り窪めており, 火熱を受け赤変し, 硬化している。煙道部は外傾して, 急に立ち上がる。

覆土層解説

- | | | | |
|---------|-------------------------|---------|-------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子少量, 砂中量 | 6 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子多量, 焼土小ブロック・砂中量 | 7 黒色 | ローム粒子少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・焼土小ブロック多量 | 8 明赤褐色 | 焼土中ブロック多量, 炭化粒子中量 |
| 4 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック中量 | 9 暗褐色 | 焼土粒子中量, 焼土中ブロック少量 |
| 5 におい褐色 | 焼土粒子少量, 粘土小ブロック中量 | 10 明赤褐色 | 焼土中ブロック多量 |

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁は長径 80 cm, 短径 70 cm の楕円形, P₂~P₄は径 70~87 cm の円形で, いずれも深さ 34~43 cm の支柱穴である。P₅は径 47 cm の円形で, 深さ 26 cm の出入口施設に伴うピットである。

覆土 12層からなり, ブロック状の堆積の状況が見られることから, 人為堆積と思われる。

土層解説

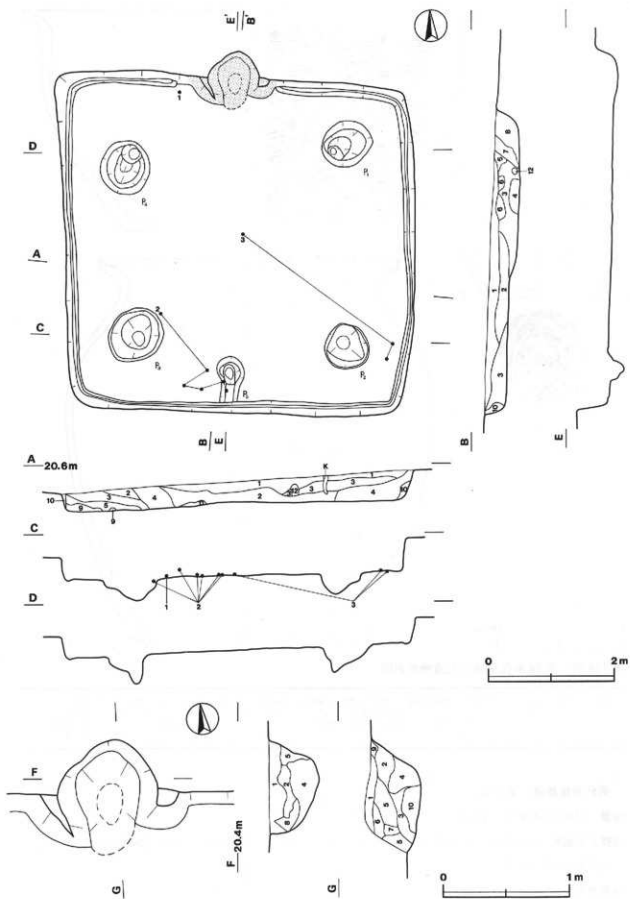
- | | | | |
|-------|-------------------------------|--------|----------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量, 砂少量 | 7 褐色 | ローム粒子・焼土小・中ブロック多量 |
| 2 褐色 | ローム粒子多量, ローム小・中ブロック中量, 焼土粒子少量 | 8 褐色 | ローム粒子多量, 焼土小・中ブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子多量, ローム小・中ブロック中量 | 9 褐色 | ローム粒子多量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子多量, ローム中ブロック中量 | 10 明褐色 | ローム粒子多量, 褐色土中量 |
| 5 灰褐色 | ローム粒子多量, ローム小・中・大ブロック中量 | 11 褐色 | ローム粒子・ローム小・中ブロック中量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック多量 | 12 褐色 | ローム大ブロック多量 |

遺物 土師器片 123 点, 須恵器片 34 点, および混入した縄文土器片 4 点, 瀬戸・美濃系陶器片 1 点が出土している。1 の須恵器環が竈西側の袖部脇の床面直上から, 2 の須恵器鉢が南壁寄りの覆土下層と床面直上, および P₅内から, 3 の土師器甕が東壁寄りの覆土下層, 中央の床面直上, および覆土中からそれぞれ出土している。

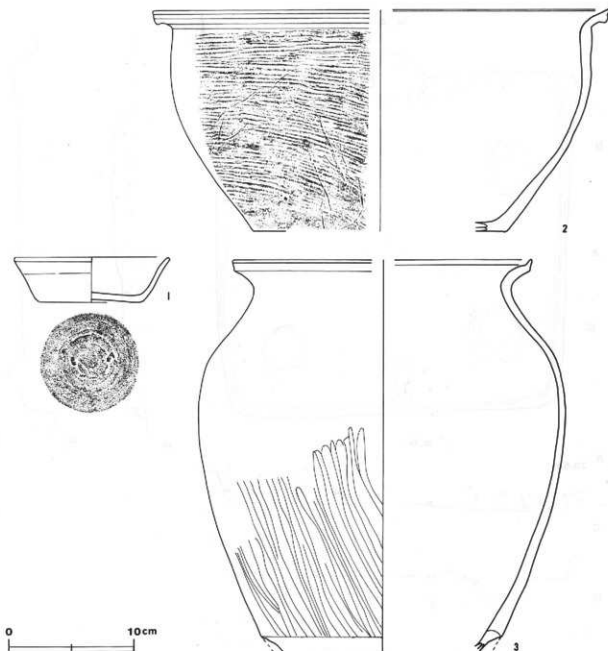
所見 時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 奈良時代の 8 世紀中葉と考えられる。

第58号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第124図 1	須恵器 環	A 12.2 B 3.6 C 8.0	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部。体部内・外面ロクロナデ。底部回転へら削り。	長石 雲母 砂粒 暗灰黄色 普通	70% P273 床面直上
2	須恵器 鉢	A[36.4] B 17.7 C[20.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反して, 中位に壁を持つ。端部はつまみ上げられ, 口唇部直下に杵状工具による凹線を返らす。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面平行叩き, 下位へら削り。内面ナデ。底部ナデ。	長石 雲母 砂粒 褐灰色 普通	35% P274 床面直上 覆土下層 P ₅ 内



第 123 图 第 58 号住居跡実測图



第124図 第58号住居跡出土遺物実測図

第124図 3	甕 土 脚 部	A [24.1] B (31.2)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中位に横を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナテ、体部内・外面ナテ。外面中位へラ磨き。内面輪横直有り。	長石 砂粒 に濃い黄褐色 普通	15% P275 床面直上 覆土下層 覆土中
------------	------------	----------------------	--	---------------------------------------	-----------------------	---------------------------------

第59号住居跡 (第125図)

位置 調査B区東北部, A4is区。

規模と平面形 長軸 4.07 m, 短軸 (1.72) m である。本跡の東壁が調査区域外のため、平面形は不明であるが、長方形と推定される。

主軸方向 N-13°-Eと推定される。

壁 壁高は 48~56 cm で、外傾して立ち上がる。

壁溝 半周している。上幅12~27cm, 下幅3~17cm, 深さ9cmで, 断面形はU字状である。

床 全面が粘土質で, 平坦で硬く締まっている。

ピット 2か所 (P₁, P₂)。P₁とP₂は径25~28cmの円形で, いずれも深さ35~43cmの支柱穴である。

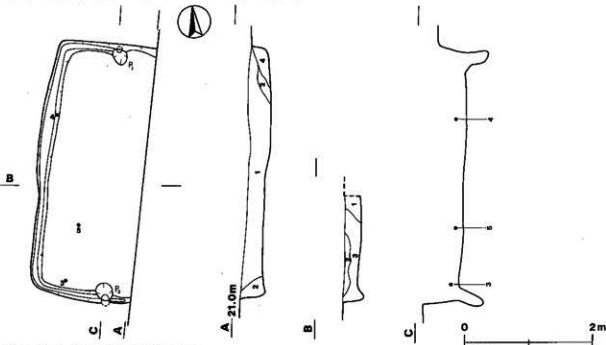
覆土 4層からなり, 粘土ブロック, 焼土ブロックの堆積の状況が見られることから, 人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | | | |
|---|----|------------------------|---|-----|-----------------------|
| 1 | 褐色 | 焼土粒子・焼土小・中ブロック・粘土中ブロック | 3 | 暗褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック中量 |
| | | 多量 | 4 | 暗褐色 | 焼土粒子・炭化中ブロック少量, 粘土小・中 |
| 2 | 褐色 | 粘土中ブロック多量 | | | ブロック中量 |

遺物 土師器片34点, 須恵器片23点が出土している。1の須恵器杯, 2の須恵器高台付環が北壁寄りの覆土中から, 3の須恵器壺が南壁寄りの覆土下層から, 4の須恵器蓋が西壁寄りの覆土下層から, 5の須恵器壺が西壁寄りの覆土下層と南壁寄りの覆土中からそれぞれ出土している。

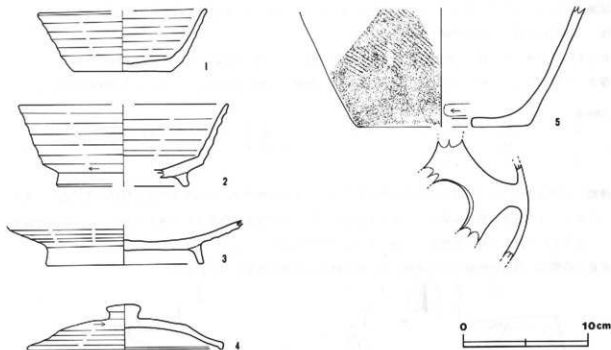
所見 時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 平安時代の9世紀前半と考えられる。



第125図 第59号住居跡実測図

第59号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第126図 1	環 須恵器	A[13.3] B 6.0 C 7.8	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて, 直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。外面下位へラナデ。底部回転へラ切り後, へラ削り。	長石 石英 砂粒 灰色 普通	70% P276 覆土中
2	高台付環 須恵器	A[16.8] B 6.5 D[10.6] E 1.0	高台部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体形は下位に狭を持ち, 口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。外面下位回転へラ削り。底部回転へラ削り後, ナデ。高台部貼り付け, ロクロナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 外面黒褐色 内面黄灰色 普通	20% P277 覆土中
3	壺 須恵器	B(3.4) D 12.6 E 1.6	高台部から体部の破片。高台部は長く, 「ハ」の字状に開く。平底。体部は内傾気味に立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転へラ削り後, ナデ。高台部貼り付け, ロクロナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	60% P278 覆土下層
4	蓋 須恵器	A 15.6 B 3.6 F 2.7 G 1.1	扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は, ほぼ平坦で, 中位に壁を持ち, 緩やかに開く。端部は屈曲して垂下する。	つまみ, 天井部, 口縁部内・外面ロクロナデ。頂部回転へラ削り。	長石 雲母 砂粒 灰黄褐色 普通	100% P279 覆土下層



第126図 第59号住居跡出土遺物実測図

第126図 5	瓶 灰器	B(9.5) C[13.6]	底部から体部の破片。多孔式。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面平行叩き、外面下位へラナテ。内面ナテ、下位へラナテ。底部ナテ。	長石 雲母 砂粒 灰黄褐色 普通	5% P280 覆土下層 覆土中
------------	---------	-------------------	-----------------------------	-------------------------------------	------------------------	------------------------

第60号住居跡 (第127図)

位置 調査B区北部, B4a2区。

重複関係 本跡は第9号獨立柱建物跡と重複している。第9号獨立柱建物跡が、本跡の床面中央と南壁を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.10 m, 短軸3.05 mの方形である。

主軸方向 N-8°-E

壁 壁高は42 cmで、外傾して立ち上がる。

床 全面が粘土質で、平坦で硬く締まっている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。

規模は、煙道部から焚口部まで93 cm, 最大幅115 cm, 壁外への掘り込みは29 cmである。火床部は床面を4 cmほど掘り窪めており、火熱を受けわずかに赤変し、硬化している。煙道部は外傾して、急に立ち上がる。

覆土層解説

- | | |
|--------------------------|--------------------------------|
| 1 明黄褐色 粘土ブロック・暗褐色土中量、崩落土 | 4 褐色 焼土粒子・粘土中ブロック中量、焼土中ブロック多量 |
| 2 灰褐色 粘土ブロック・暗褐色土中量、崩落土 | 5 赤褐色 焼土小・中ブロック・炭化粒子・炭化小ブロック中量 |
| 3 褐色 炭化粒子多量 | |

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁は径29 cmの円形, P₂とP₃は長径41~53 cm, 短径33~47 cmの楕円形で、いずれも深さ21~27 cmの主柱穴である。P₄とP₅は径26 cmの円形, 深さ10 cmで、性格は不明である。

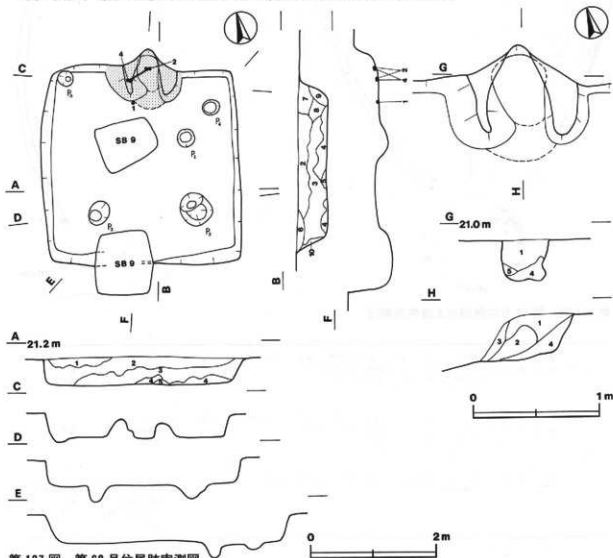
覆土 10層からなり、粘土ブロックの堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------------|--------|----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・粘土小ブロック少量 | 5 灰黄褐色 | 粘土中ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 3 灰褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック少量 | 7 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 4 灰褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小・中ブロック少量 | 8 灰褐色 | ローム粒子・ローム小・中ブロック・粘土大ブロック少量 |
| | | 9 灰褐色 | ローム粒子少量, 粘土中・大ブロック中量 |
| | | 10 灰褐色 | 粘土大ブロック多量 |

遺物 土師器片 49 点, 須恵器片 20 点が出土している。ほとんどの遺物が竈内に集中している。1 の須恵器蓋が竈手前の覆土下層から, 2 から 4 の土師器甕が竈内と西側の袖部内からそれぞれ出土している。

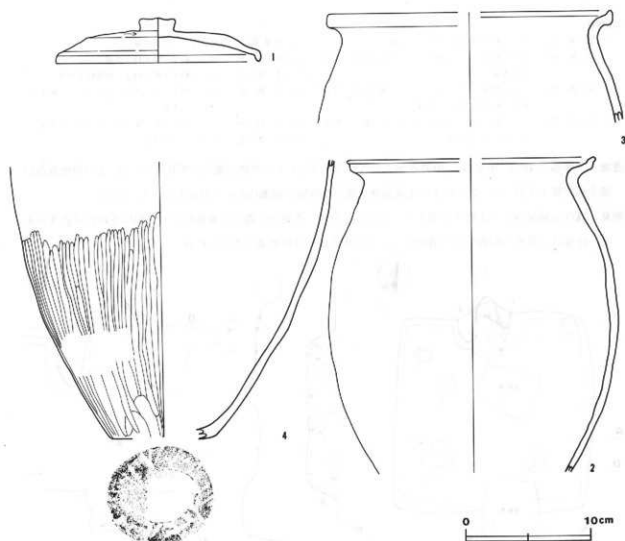
所見 竈内や袖部内から土器片が出土していることから, 多量の土器片は補強材として利用された可能性がある。時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 平安時代の 9 世紀前葉と考えられる。



第 127 図 第 60 号住居跡実測図

第 60 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第128図 1	蓋 須恵器	A 16.4 B 3.6 F 3.0 G 1.1	扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は、ほぼ平坦で、中位に縁を持ち、縦やかに開く。端部は屈曲して漸下する。	つまみ、天井部、口縁部内・外面ロクロナデ。頂部回転へう漕り。	長石 雲母 砂粒 灰白色 普通	100% P281 覆土下層



第128図 第60号住居跡出土遺物実測図

2	甕 土 脚 器	A [19.6] B (25.0)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中位に線を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	石英 雲母 砂粒 にふい褐色 普通	10% P282 甕内 袖部内
3	甕 土 脚 器	A [22.6] B (8.9)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中位に線を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石 砂粒 明褐色 普通	5% P283 甕内 袖部内
4	甕 土 脚 器	B (21.8) C 8.0	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ナデ。外面中位へラ磨き。	長石 石英 雲母 砂粒 外面灰褐色 内面にふい褐色 普通	40% P284 底部木炭灰 甕内 袖部内

第61号住居跡 (第129図)

位置 調査B区北部, A4ha区。

規模と平面形 長軸 [3.60] m, 短軸 [3.20] mの長方形と推定される。

主軸方向 N-6°-E

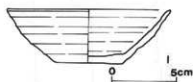
壁 壁高は3cmで、外傾して立ち上がる。東壁から南壁にかけての一部が残存しているのみである。

床 全面が粘土質で、平坦で硬く締まっている。

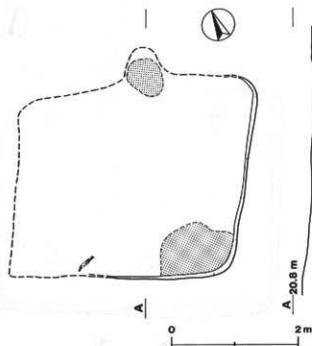
竈 焼土痕が北壁に残っていることから、北壁中央に設置されていたものと推定される。

遺物 土師器片14点、須恵器片5点が出土している。1の須恵器環が覆土中から出土している。

所見 南東コーナー部に焼土痕が、南壁寄りに炭化材が確認されたことから、焼失家屋の可能性が有る。時期は、遺構の形態や出土物から、平安時代の9世紀後半と考えられる。



第130図 第61号住居跡出土遺物実測図



第129図 第61号住居跡実測図

第61号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第130図 1	環 須恵器	A 12.9 B 4.3~4.4 C 5.3	体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ、直線的に外傾して立ち上がり、中位に不明瞭な稜を持つ。胎部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部手持ちへラ削り。	長石 砂粒 灰白色 普通	75% P285 覆土中

第62号住居跡 (第131図)

位置 調査B区北東部、A4街区。

規模と平面形 長軸 4.50 m、短軸 3.85 mの長方形である。

主軸方向 N-25°-E

壁 壁高は5 cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南コーナー部から北コーナー部にかけて、ほぼ半周している。上幅 12~20 cm、下幅 3~10 cm、深さ 4 cmで、断面形はU字状である。

床 全面が粘土質で、平坦だがぼろぼろしている。

竈 多量の焼土ブロックが北東壁に確認されることから、北東壁中央に設置されていたと推定される。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₄は径 16~34 cmの円形で、いずれも深さ 22~38 cmの主柱穴である。P₅は径 30 cmの円形で、深さ 44 cmの出入口施設に伴うピットである。

覆土 単一層であるが、不明である。

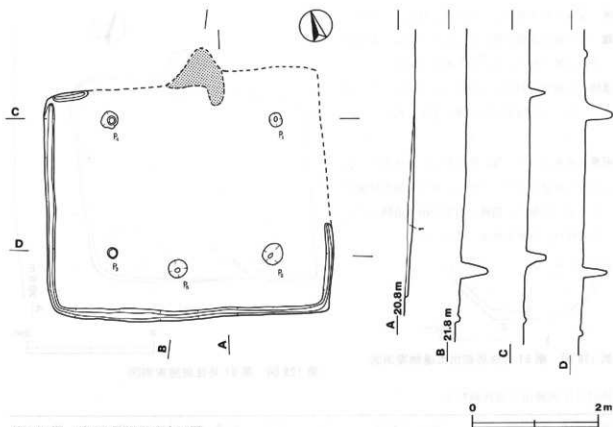
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、粘土小・中ブロック中量

遺物 土師器片27点、須恵器片2点が出土している。1の土師器小形甕が西壁寄りの覆土中から出土している。

所見 覆土が薄く、壁の残存率が悪かったため、遺物が少なく、住居跡に伴う遺物であるかどうか不明である。

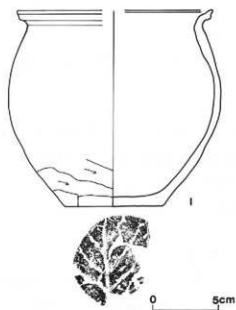
時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代の9世紀前半と考えられる。



第131図 第62号住居跡実測図

第62号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第132図 1	小形土器 土器	A [15.6] B 15.7 C 7.8	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中位に轅を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナズ。体部内・外面ナズ、外面下位へテ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 外面明赤褐色 内面黒褐色 普通	30% P286 底部木炭灰 覆土中



第132図 第62号住居跡出土遺物実測図

第63号住居跡 (第133図)

位置 調査B区北部, A4i区。

規模と平面形 長軸 6.24 m, 短軸 5.84 m の隅丸長方形である。

主軸方向 N-20°-E

壁 壁高は 5 cm で、外傾して立ち上がる。

壁溝 北東壁の一部を除き、ほぼ全周している。上幅 11~25 cm, 下幅 4~15 cm, 深さ 3~10 cm で、断面形は U 字状である。

床 全面が粘土質で、平坦で硬く締まっている。

竈 北東壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、東側袖部と西側袖部の一部が残存している。竈の粘土が潰れて広く拡散している。規模は、煙道部から焚口部まで [67] cm, 最大幅 [130] cm と推定される。火床部は、床面を 4 cm ほど掘り窪めており、火熱を受けわずかに赤変し、硬化している。煙道部は外傾して、緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

1	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量	5	にぶい黄褐色	焼土粒子中量, 粘土大ブロック少量
2	赤褐色	焼土小・中ブロック中量	6	にぶい黄褐色	焼土粒子少量, 粘土大ブロック中量
3	灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂少量	7	にぶい赤褐色	焼土粒子中量
4	にぶい赤褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・砂中量			

ピット 6か所 (P₁~P₆)。P₁, P₃ならびにP₄は長径 51~66 cm, 短径 45~59 cm の楕円形で、P₂は径 54 cm の円形で、いずれも深さ 47~63 cm の主柱穴である。P₅は長径 43 cm, 短径 37 cm の楕円形で、深さ 28 cm の出入口施設に伴うピットである。P₆は径 30 cm の円形、深さ 10 cm で、性格は不明である。

覆土 単一層で、自然堆積と思われる。

土層解説

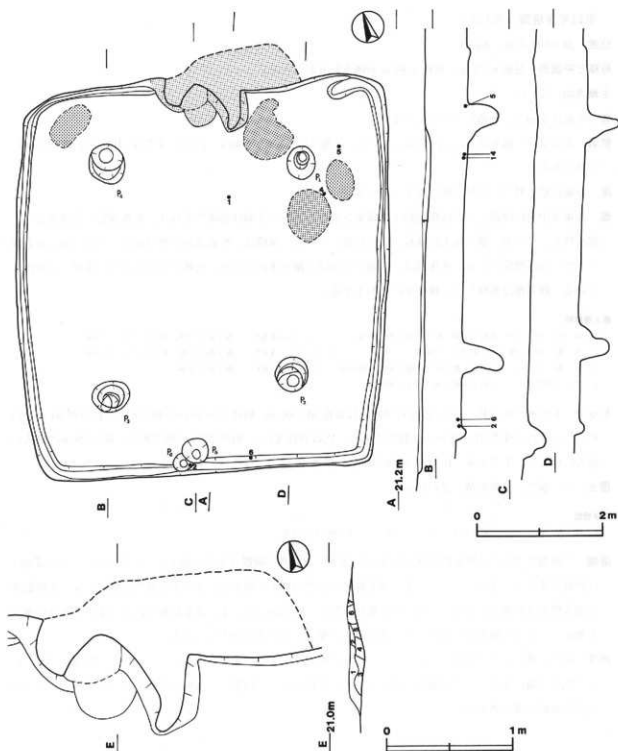
1	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小・中ブロック・焼土粒子少量
---	-----	----------------------------

遺物 土師器片 195 点, 須恵器片 96 点, および混入した常滑の陶器片 1 点が出土している。ほとんどの遺物は住居跡の北半分に集中している。1 の須恵器環が中央の覆土下層から、2 の須恵器高台付坏、6 の土師器甕が南西壁寄りの覆土下層から、3 の須恵器高台付坏が確認面から、4 の須恵器盤がP₃内と南東壁寄りの覆土下層から、5 の土師器甕が東コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 覆土が薄く、壁の残存率が悪かった。多量の焼土ブロックが竈周辺からピットにかけて散在しており、この焼土は竈が潰れたときに竈外に排出された可能性がある。時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代の 8 世紀中葉と考えられる。

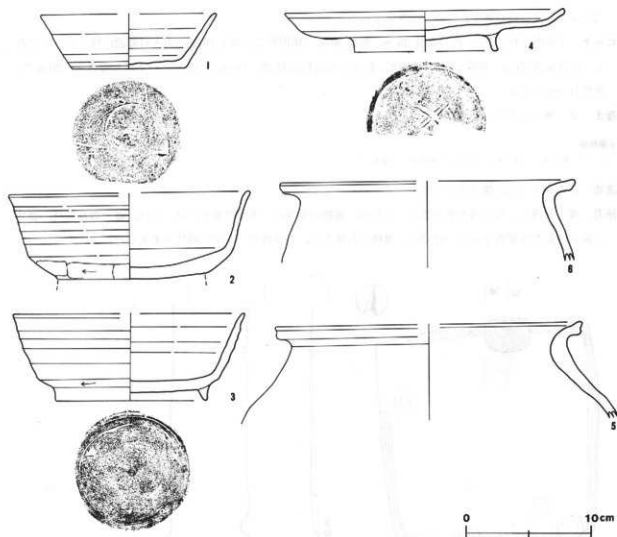
第63号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第134図 1	坏 須恵器	A[14.0] B 4.3 C 9.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナテ。底部回転へう切り。	長石 石英 砂粒 にぶい黄褐色 普通	50% P288 覆土下層
2	高台付坏 須恵器	A[19.2] B(6.9) D[12.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、下位に鋭角を持つ。縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナテ。外面下位へう覆り。底部回転へう削り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰白色 普通	55% P287 覆土下層



第133図 第63号住居跡実測図

第134図 3	高台付環 須恵器	A [18.4]	高台部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、下位に横を持つ。口縁部は直線的に立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ、外面下位へラ削り、底部回転へラ削り。高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 雲母 砂粒 淡黄色 普通	60% P289 遺構確認面
		B 7.0 D 12.0 E 1.2				
4	釜 須恵器	A 22.4 B 3.4 D [11.4] E 1.4	高台部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、下位に横を持つ。口縁部は直線的に立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ、底部回転へラ削り、高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 雲母 砂粒 灰色 普通	50% P290 北部外面へラ記号 覆土下層 P ₁ 内



第134図 第63号住居跡出土遺物実測図

第134図 5	壺 土 脚 器	A[24.1] B(7.7)	体部から口縁部の破片、口縁部は外反して、中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石 砂粒 明赤褐色 普通	5% P291 覆土下層
6	壺 土 脚 器	A[23.4] B(6.4)	体部から口縁部の破片、口縁部は狭く外反して、中位に稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 にふい橙褐色 普通	5% P292 覆土下層

第64号住居跡 (第135図)

位置 調査B区北東部、A4街区。

規模と平面形 長軸 3.35 m, 短軸 3.27 m の方形である。

主軸方向 N-7°-E

壁 壁高は 2 cm で、外傾して立ち上がる。

壁溝 北東コーナー部を除き、ほぼ全周している。上幅 12-18 cm, 下幅 3-6 cm, 深さ 4 cm で、断面形は U 字状である。

床 平坦で、全面が粘土質の貼り床で、硬く締まっている。

竈 攪乱を受けて残存していないが、北壁中央に粘土痕が、その手前に多量の焼土ブロックが確認されている。

ことから、ここに設置されていたと推定される。

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁は長径35cm、短径30cmの楕円形で、深さ19cmの出入口施設に伴うピットである。P₂は長径35cm、短径24cmの楕円形、P₃ならびにP₄は径29~40cmの円形で、いずれも深さ9~20cmで、性格は不明である。

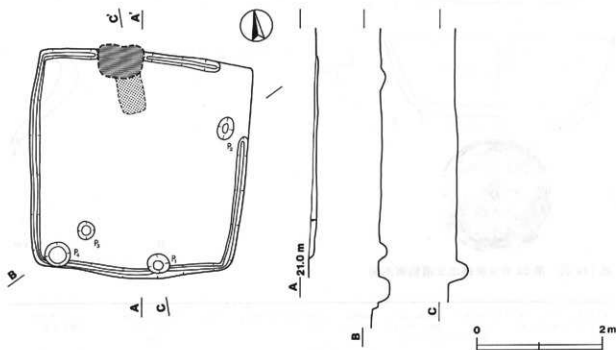
覆土 単一層であるが、不明である。

土層解説

1 明褐色 焼土粒子・粘土小・中ブロック中量

遺物 1の土玉1点が覆土中から出土している。

所見 覆土が薄く、壁の残存率が悪かったため、遺物が少ない。多量の焼土ブロックは、電が潰れた時に窟外に排出された可能性がある。時期は、遺構の形態から、奈良時代から平安時代と考えられる。



第135図 第64号住居跡実測図

第64号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値					出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
第135図 1	土玉	1.9	2.1	1.9	0.4	7	覆土中	DP19 100%



第136図 第64号住居跡出土遺物実測図

第65号住居跡 (第137図)

位置 調査B区西部, B2es区。

規模と平面形 長軸 3.75 m, 短軸 3.35 m の長方形である。

主軸方向 N-28°-E

壁 壁高は 14~36 cm で, 外傾して立ち上がる。

壁溝 東コーナー部を除いて, ほゞ全周している。上幅 16~28 cm, 下幅 2~15 cm, 深さ 4~10 cm で, 断面形は U 字状である。

床 全面が粘土質で, 平坦で硬く締まっている。東コーナー部に, 長径 135 cm, 短径 96 cm の楕円形で, 深さ 25 cm の掘り込みが検出され, 焼土粒子, 炭化粒子, 砂を少量, 粘土小・中・大ブロックを中量ほど含んだ, 硬く締まった暗褐色土と灰褐色土が堆積している。

竈 北東壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 両側の袖部が残存している。規模は, 煙道部から焚口部まで 86 cm, 最大幅 115 cm, 壁外への掘り込みは 35 cm である。火床部は床面を 4 cm ほど掘り窪めており, 火熱を受け赤変し, 硬化している。煙道部は外傾して, 緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック・砂少量 3 におい褐色 焼土小ブロック多量, 砂少量, 粘土質
2 灰黄褐色 ローム粒子・砂中量, 焼土粒子少量, 粘土質 4 褐色 焼土中ブロック中量

ピット 7 か所 (P₁~P₇)。P₁~P₄ は径 25~37 cm の円形で, いずれも深さ 20~43 cm の支柱穴である。P₅ は径 42 cm の円形で, 深さ 28 cm の出入口施設に伴うピットである。P₆ は径 35 cm の円形, P₇ は長径 57 cm, 短径 34 cm の不整楕円形で, いずれも深さ 7~16 cm で, 性格は不明である。

覆土 5 層からなり, 自然堆積と思われる。

土層解説

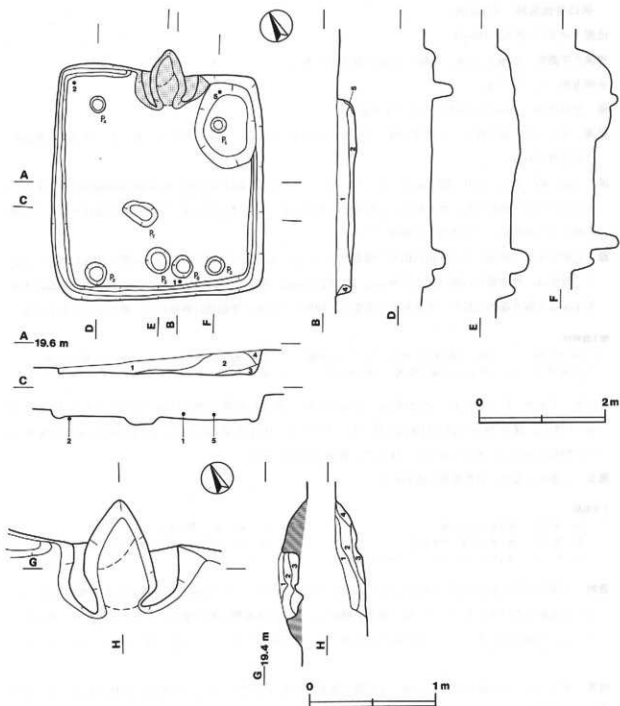
- 1 暗褐色 焼土粒子・砂中量 4 暗褐色 焼土粒子少量
2 暗褐色 焼土粒子中量, 砂多量 5 暗褐色 焼土粒子・焼土小ブロック中量
3 暗褐色 焼土粒子・焼土小ブロック中量, 砂多量

遺物 土師器片 179 点, 須恵器片 66 点, 砥石 1 点が出土している。1 の須恵器環が南西壁寄りの覆土下層から, 2 の須恵器高台付环が北コーナー部の覆土下層から, 3 の須恵器盤が覆土中から, 4 の土師器甕が覆土中から, 5 の土師器甕が東コーナー部の掘り込み内から, 6 の砥石が東コーナー部の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 東コーナー部の掘り込みは, 竈の不要物を廃棄したものと考えられる。時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 平安時代の 9 世紀前半と考えられる。

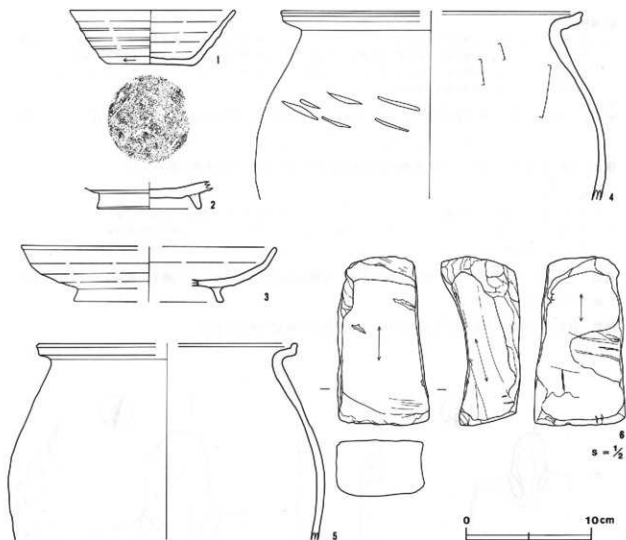
第65号住居跡出土遺物観察表

図物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第138図 1	環 須恵器	A 13.2	体部, 口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて, 直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部, 体部内・外面ロクロナテ。外面下位へラ削り, 底部手持ちへラ削り。	長石 砂粒 灰黄褐色 普通	85% P293 覆土下層
		B 42~44 C 6.8				
2	高台付環 須恵器	B (2.1)	高台部から底部の破片。高台部は直線的に開く。平底。	底部回転へラ削り, 高台部軸り付け, ロクロナテ。	長石 雲母 砂粒 灰黄褐色・普通	20% P405 覆土下層
		D 8.4 E 1.3				
3	盤 須恵器	A [20.4]	高台部から口縁部の破片。高台部は直線的に開く。平底。体部から口縁部にかけて, 内傾気味に立ち上がり, 中位に腰を持つ。	口縁部, 体部内・外面ロクロナテ。高台部軸り付け, ロクロナテ。	長石 雲母 砂粒 黄褐色 普通	10% P294 覆土中
		B 4.5 D [12.0] E 1.3				



第137図 第65号住居跡実測図

第138図 4	壘 土 跡 器	A [24.0] B [15.0]	体部から口縁部の破片。体部は内彎 気味に立ち上がる。口縁部は強く外 反して、半位に壁を持つ。端部はつ まみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外 面ナデ。外面中位へラナデ、内面へ ラナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 外面浅黄褐色 内面によい橙色 普通	10% P295 覆土中
5	壘 土 跡 器	A [20.4] B [15.6]	体部から口縁部の破片。体部は内彎 気味に立ち上がる。口縁部は強く外 反して、半位に壁を持つ。端部はつ まみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外 面ナデ。	長石 雲母 砂粒 スコリア によい赤褐色 普通	10% P296 盛り込み内



第138図 第65号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
6	砥石	(8.9)	(4.9)	(4.2)	(214)	凝灰岩	覆土中	Q19

第66号住居跡 (第139図)

位置 調査B区西部, B2b区。

規模と平面形 長軸 3.22 m, 短軸 (1.75) mである。本跡の西壁が調査区域外のため、平面形は不明であるが、方形と推定される。

主軸方向 N-25°-E

壁 壁高は 38~55 cmで、外傾して立ち上がる。

床 全面が粘土質で、平坦で締まっている。特に、出入口施設付近が硬く踏み固められている。

竈 北東壁の東コーナー部付近に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで 125 cm, 最大幅 80 cm, 壁外への掘り込みは 65 cmである。火床部は床面を 2 cmほど掘り窪めており、火熱を受け赤変し、硬化している。煙道部は外傾して、緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・砂少量 | 5 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土中ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・砂少量、硬く締まっている | 6 灰褐色 | 粘土中・大ブロック中量、崩落土 |
| 3 赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、焼土小・中ブロック中量 | 7 灰褐色 | 焼土粒子・焼土中・大ブロック少量 |
| 4 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、粘土質 | | |

ビット 1か所 (P₁)。P₁は長径37cm、短径30cmの不整楕円形で、深さ37cmの出入口施設に伴うビットである。

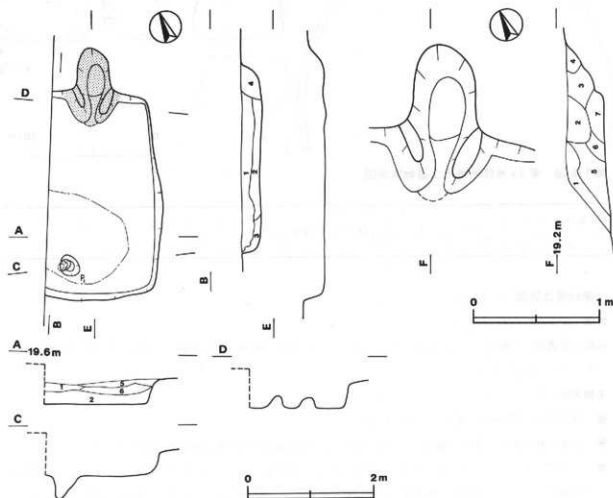
覆土 6層からなり、ブロック状の推積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・砂少量 | 4 暗褐色 | 焼土粒子少量、砂多量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・ハードローム小・中ブロック多量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量、砂少量 |
| 3 暗褐色 | 砂中量 | 6 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・砂中量 |

遺物 土師器片57点、須恵器片19点、砥石1点、支脚片2点、および混入した縄文土器片3点が見られ、いずれも細片で出土している。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代の8世紀と考えられる。



第139図 第66号住居跡実測図

第67号住居跡 (第140図)

位置 調査B区中央部, C3c3区。

規模と平面形 長軸3.27 m, 短軸2.97 mの隅丸方形である。

主軸方向 N-18°-E

壁 壁高は22 cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁と北東コーナー部の一部を除き, ほは全周している。上幅8~23 cm, 下幅2~7 cm, 深さ2~8 cmで, 断面形はし状である。南東コーナー部に, 径45 cmの円形で, 深さ10 cmの広がりがある。

床 全面が粘土質で, 平坦で硬く締まっている。

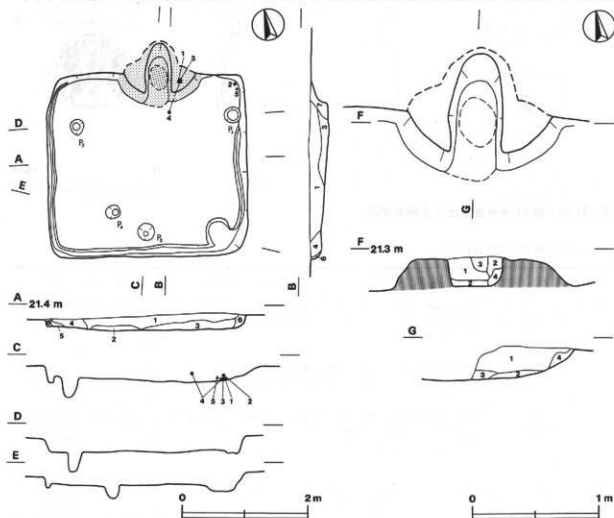
竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 両側の袖部が残存している。

規模は, 煙道部から焚口部まで105 cm, 最大幅130 cm, 壁外への掘り込みは53 cmである。火床部は床面を2 cmほど掘り窪めており, 火熱を受け赤変し, 硬化している。煙道部は外傾して, 緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|--------|---------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量 | 3 暗褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック多量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子・焼土小・中ブロック中量 | 4 暗赤褐色 | 焼土小・中ブロック多量, 炭化粒子中量 |

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁とP₃は径24~26 cmの円形で, 深さ5~31 cmの支柱穴である。P₂は径29 cmの円形で, 深さ33 cmの出入口施設に伴うピットである。P₄は径22 cmの円形, 深さ20 cmで, 性格は不明である。



第140図 第67号住居跡実測図

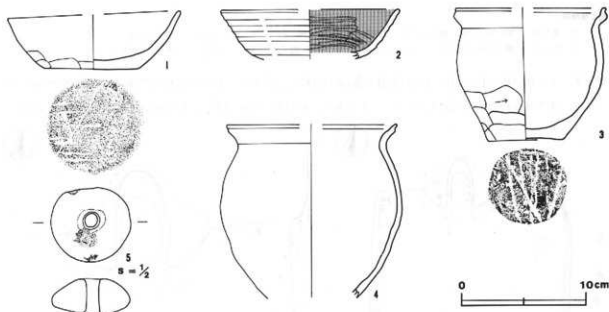
覆土 7層からなり、ロームブロックを多く含有することから、人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|-------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・ローム中ブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム小・中ブロック・焼土粒子中量 | 6 褐色 | ソフト・ハードローム中・大ブロック多量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム中・大ブロック・焼土粒子中量 | 7 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・焼土小ブロック多量 |
| 4 暗褐色 | ソフトローム中・大ブロック多量 | | |

遺物 土師器片 145点、須恵器片 34点、土製紡錘車1点が出土している。1の土師器環、3の土師器小形甕が竈東側の袖部内から、2の土師器環、5の紡錘車が北東コーナー部寄りの覆土下層から、4の土師器小形甕が竈東側の袖部内と電手前の覆土中層、北東コーナー部寄りの覆土中からそれぞれ出土している。

所見 南東コーナー部の溝の広がり、遺物が出土していないことや、覆土の違いが見られなかったことから、土坑とは判断できない。竈内や袖部内から土器片が出土していることから、土器片を竈の補強材として利用している可能性がある。時期は、遺物の形態や出土遺物から、平安時代の9世紀後半と考えられる。



第141図 第67号住居跡出土遺物実測図

第67号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第141図 1	環 土師器	A [13.6] B 4.1-4.6 C 7.5	体部、口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁内・外面横ナデ。体部外面下位へラ削り。底部手持ちへラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 にふい赤褐色 普通	85% P297 袖部内
2	環 土師器	A [14.2] B (3.9)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面クロロナデ。体部内面へラ磨き。	砂粒 褐色 普通	25% P298 内面黒色処理 覆土下層
3	小形甕 土師器	A [12.0] B 11.4-9.7 C 5.9	体部、口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中に稜を持つ。端部はつまみ上げられ、棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。外面下位へラ削り。	石英 雲母 砂粒 にふい橙色 普通	70% P299 底部木炭灰 袖部内
4	小形甕 土師器	A [13.5] B (13.8)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、上位に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石 石英 砂粒 赤色 普通	25% P300 袖部内 覆土中層 覆土中

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
5	紡錘車	4.2	1.9	0.8	29	覆土下層	DP20 100%

第68号住居跡 (第142図)

位置 調査B区中央部, C3be区。

重複関係 本跡は第233号土坑と重複している。第233号土坑が、本跡の西壁を掘り込んでいることから、本跡が古い。

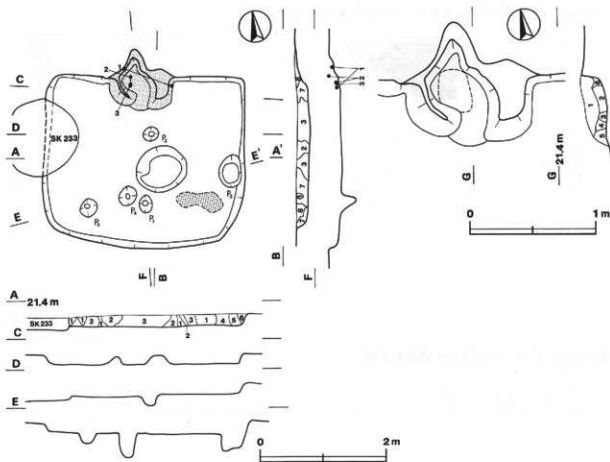
規模と平面形 長軸3.17 m, 短軸2.69 mの長方形である。

主軸方向 N-5°-E

壁 壁高は14~19 cmで、外傾して立ち上がる。

床 全面が粘土質で、平坦で硬く締まっている。中央に、長径80 cm, 短径75 cmの楕円形で、深さ18 cmの掘り込みがあり、ローム粒子、ローム中ブロック、大ブロックを中量ほど含む褐色土と、ハードローム中ブロック、大ブロックを多量に含む明褐色土が堆積している。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落している。両側の袖部が残存しており、東側袖部が東側に潰された形跡がある。規模は、煙道部から焚口部まで106 cm, 最大幅100 cm, 壁外への掘り込みは45 cmである。火床部は、火熱を受けわずかに赤変しているが、硬化していない。煙道部は外傾して、階段状に立ち上がる。



第142図 第68号住居跡実測図

覆土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------------|-------|---------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子・砂多量、焼土小ブロック少量 | 4 暗褐色 | ソフトローム小ブロック多量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子・砂多量、ソフトローム小・中ブロック・焼土小ブロック少量 | 5 褐色 | 焼土粒子・砂多量 |
| 3 暗褐色 | 砂多量 | 6 褐色 | ローム大ブロック多量 |

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁は長径29cm、短径22cmの楕円形で、深さ26cmの出入口施設に伴うピットである。P₂は径26cmの円形、P₃~P₅は長径29~52cm、短径26~37cmの楕円形で、いずれも深さ16~38cmで、性格は不明である。

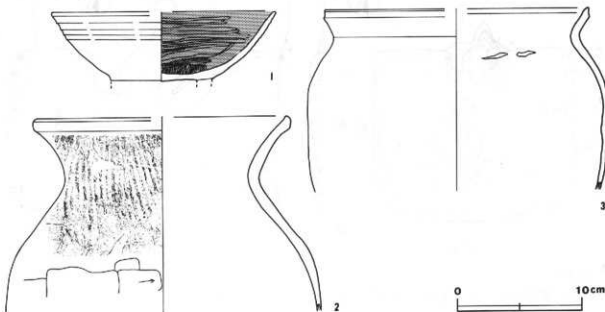
覆土 8層からなり、ブロック状の堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 5 褐色 | ローム粒子中量、硬く締まっている |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック少量 | 6 褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量 | 7 褐色 | ローム粒子少量、締まっている |
| 4 褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 8 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |

遺物 土師器片107点、須恵器片45点が出土している。ほとんどの遺物は竈周辺に集中している。1の土師器高台付坏が竈内、竈東側の袖部脇の床面直上と覆土中から、2の土師器甕が竈内と覆土中から、3の土師器甕が竈内からそれぞれ出土している。

所見 竈の状況から、本跡は短期間しか使用されなかった住居跡と考えられる。中央の掘り込みは円形土坑群のものより規模が小さいことから、本跡に伴うものと考えられる。また、南東コーナー部付近に確認された焼土ブロックについては不明であるが、住居廃棄時に投棄された可能性がある。時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代の9世紀後葉から10世紀前葉と考えられる。



第143図 第68号住居跡出土遺物実測図

第68号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第143図 1	高台付坏 土師器	A [17.7] B (5.5)	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内舞欠縁に立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ、体部外面下位へフナデ、内面へフ磨き。底部回転へフ磨り。	砂粒 褐色 普通	60% P301 内面黒色処理 竈内赤黒土・覆土中

第143区 2	土師器	A [20.0] B (15.7)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反して、中位に壁を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位平行即き、中位へう閉り。内面ナデ。	長石 褐色 普通	雲母 砂粒	20% P302 窠内 覆土中
3	土師器	A [21.2] B (14.5)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中位に壁を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石 砂粒 赤褐色 普通	石英 雲母	10% P303 窠内

第69号住居跡 (第144区)

位置 調査B区東部, B4a区。

規模と平面形 長軸3.44 m, 短軸3.34 mの方形である。

主軸方向 N-10°-W

壁 壁高は41~46 cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 窠周辺の一部を除き、ほぼ全周している。上幅18~33 cm, 下幅3~13 cm, 深さ2~5 cmで、断面形はU字状である。

床 全面が粘土質で、平坦で締まっている。特に中央が硬く踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで108 cm, 最大幅110 cm, 壁外への掘り込みは23 cmである。火床部は、火熱を受け赤変し、硬化している。煙道部は外傾して、初めは階段状に、のち垂直に立ち上がる。

窠土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量	4 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量, 粘土質
2 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	5 濃い赤褐色	ローム粒子少量, 焼土小ブロック中量
3 灰褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・炭化大ブロック中量	6 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック少量
		7 暗赤褐色	焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量, 粘土粒子多量

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁, P₂とRは径21~38 cmの円形, P₃は長径50 cm, 短径40 cmの不整楕円形で、いずれも深さ12~23 cmの主柱穴である。P₄は径25 cmの円形, 深さ9 cmで、性格は不明である。

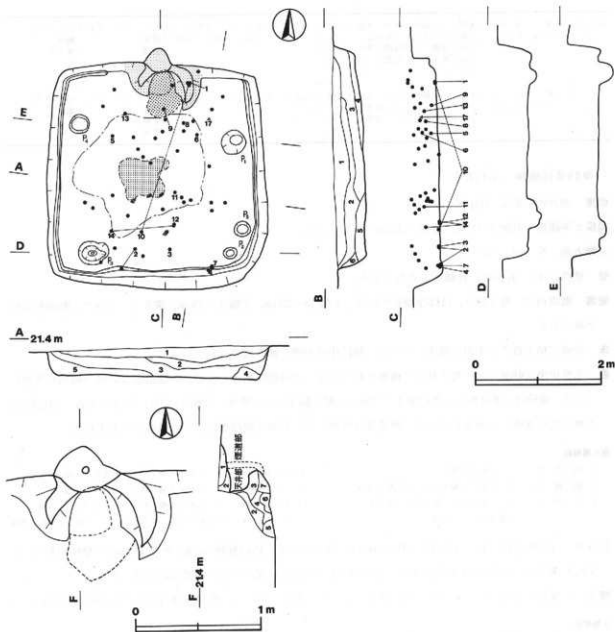
覆土 6層からなり、ロームブロック, 焼土ブロック, 粘土ブロックの堆積の状況から、人為堆積と思われる。

土層解説

1 暗褐色	焼土粒子中量, 炭化粒子少量	4 褐色	ローム中・大ブロック多量, 粘土小ブロック中量
2 暗褐色	焼土粒子中量, 焼土小ブロック多量, 炭化粒子少量	5 褐色	ローム中・大ブロック多量, 粘土小・中ブロック中量
3 褐色	ローム粒子多量, ローム中・大ブロック中量	6 褐色	ローム粒子・ローム中・大ブロック多量

遺物 土師器片690点, 須恵器片212点, 刀子1点が出土している。遺物は全体的に散在している。1の土師器片が竈東側の袖部内から, 2, 3と4の土師器片, 7の須恵器片が南壁寄りの覆土下層から, 5の須恵器片が中央西壁寄りの覆土下層から, 6の須恵器片が中央東壁寄りの覆土中層から, 8の須恵器高台付環が竈手前の覆土中層から, 9の須恵器壺が覆土下層から, 10の土師器小形甕が竈東側の袖部内と中央南壁寄りの覆土下層から, 11の土師器甕が中央の覆土中層から, 12の土師器甕が中央の床面直上, および覆土中から, 13の土師器甕が竈手前の覆土中層から, 14の土師器甕が, 中央の床面直上, 南壁寄りの覆土中層, および覆土中から, 15の土師器甕が北西コーナー部付近の覆土中から, 16の須恵器甕が覆土中から, 17の刀子が竈東側の袖部手前の覆土中層からそれぞれ出土している。

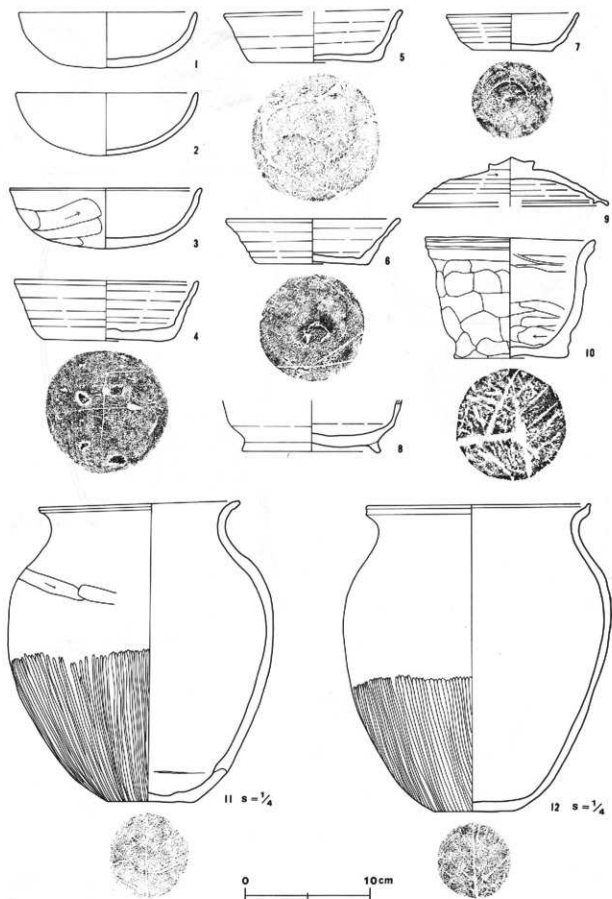
所見 中央部に多量の焼土塊と炭化物が確認され、遺物の残りがよいことから、焼失家屋と考えられ、人為的に埋め戻された可能性がある。時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代の8世紀前葉と考えられる。



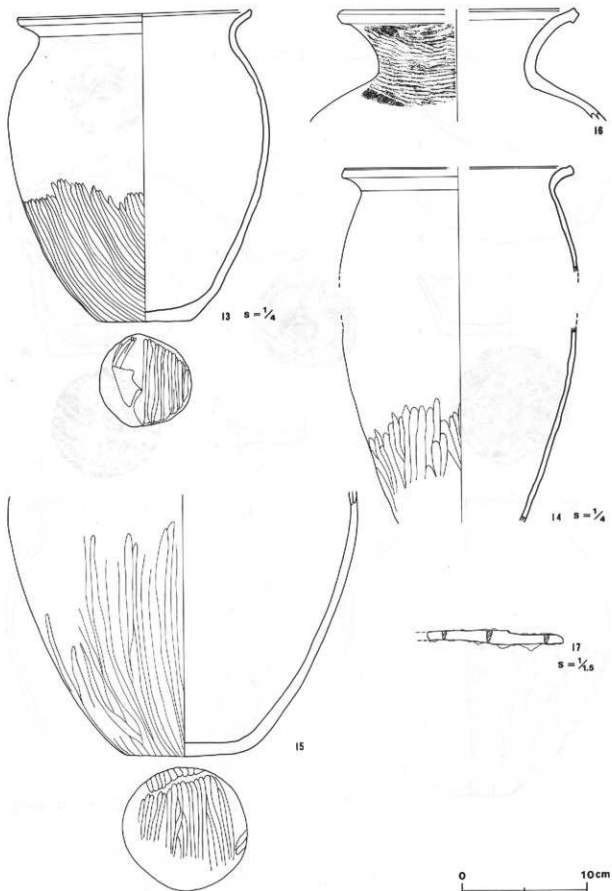
第144図 第69号住居跡実測図

第69号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第145図 1	坏 土師器	A 14.1 B 4.4	口縁部一部欠損。丸底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部ヘラナデ。	雲母 砂粒 スコリア 明赤褐色 普通	95% P304 袖部内
2	坏 土師器	A 14.4 B 5.0	底部、口縁部一部欠損。丸底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。底部ヘラナデ。	長石 石英 砂粒 スコリア 明赤褐色 普通	95% P305 覆土下層
3	坏 土師器	A 15.2 B 4.8	体部、口縁部一部欠損。丸底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。外面中位ヘラ削り。底部手持ちヘラ削り。	砂粒 にふい橙色 普通	95% P306 外面スス付着 覆土下層
4	坏 須恵器	A 14.8 B 4.9 C 10.0	体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面クロコナデ。底部手持ちヘラ削り。	長石 雲母 砂粒 にふい黄褐色 普通	80% P307 底部外面ヘラ記号 覆土下層



第 145 图 第 69 号住居跡出土遺物実測図(1)



第 146 图 第 69 号住居跡出土遺物実測図(2)

第145図	5	環 須意器	A [14.1] B 13-11 C 10.6	底部、体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部手持ちへラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰褐色 普通	80% P308 覆土下層
	6	環 須意器	A 14.0 B 3.8 C 9.0	体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転へラ切り後、へラ削り。	雲母 砂粒 灰褐色 普通	75% P309 覆土中層
	7	環 須意器	A 10.6 B 12-11 C 6.4	底部、体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がり、下位に稜を持つ。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転へラ削り。	長石 雲母 砂粒 スコリア 灰黄色 普通	70% P310 覆土下層
	8	高台付環 須意器	B (4.0) D 11.0 E 0.8	高台部から体部の破片。高台部は短く「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、下位に稜を持つ。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転へラ削り。高台部貼り付け、ロクロナデ。	雲母 砂粒 黄灰色 普通	30% P311 覆土中層
	9	甕 須意器	A [15.6] B 4.0 F 3.7 G 1.1	つまみ部から口縁部の破片。扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は内彎気味に開く。口縁部は内面に短い返りが付く。	つまみ、天井部、口縁部内・外面ロクロナデ。頂部回転へラ削り。	長石 雲母 砂粒 黄灰色 普通	60% P312 覆土下層
	10	小形甕 土師器	A 13.6 B 12-17 C 9.0	体部、口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、端部に棒状工具による凹線を施す。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面へラナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 スコリア 褐色 普通	70% P313 底部木炭灰 灰部内 覆土下層
	11	甕 土師器	A 20.4 B 22-21.4 C 9.0	体部、口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がり、中位に稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面中位へラナデ、下位へラ磨き。内面ナデ、輪轆痕有り。	長石 雲母 砂粒 に白い黄褐色 普通	90% P314 底部木炭灰 灰部直上 覆土中層
	12	甕 土師器	A 23.9 B 32.0 C 8.4	体部、口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられ、棒状工具による凹線を施す。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ、外面下位へラ磨き。	長石 石英 砂粒 褐色 普通	80% P315 底部木炭灰 灰部直上 覆土中
第146図	13	甕 土師器	A 24.6 B 22-21.5 C 9.6	体部、口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。外面下位へラ磨き。底部へラ磨き。	長石 砂粒 褐色 普通	75% P316 覆土中層
	14	甕 土師器	A [23.8] B (31.3)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ、外面下位へラ磨き。	長石 砂粒 スコリア 褐色 普通	35% P317 灰部直上 覆土中層 覆土中
	15	甕 土師器	B (20.9) C 9.8	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ナデ、外面下位へラ磨き。底部へラ磨き。	長石 石英 雲母 砂粒 に白い褐色 普通	40% P318 外面刻線 覆土中
	16	甕 須意器	A [18.6] B (9.0)	体部から口縁部の破片。頸部は「く」の字状に屈曲する。口縁部は外反して、下位に稜を持つ。折り返し口縁。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面平行印き、内面ナデ。	長石 砂粒 灰色 普通	10% P319 覆土中

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
17	刀子	(9.6)	(1.6)	(0.4)	(10)	覆土中層	M10 40%

第70号住居跡 (第147図)

位置 調査B区中央部、B4j区。

重複関係 本跡は、第244、307号土坑と重複している。第244号土坑が、本跡の中央やや西コーナー一部寄り、第307号土坑が、本跡の南コーナーの一部を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸 2.82 m, 短軸 2.46 m の隅丸長方形である。

主軸方向 N-24°-E

壁 壁高は 17-21 cm で、外傾して立ち上がる。

壁溝 東コーナー部から、南コーナー部を経て、西コーナー部の手前まで、半周している。上幅 14-26 cm, 下幅 2-9 cm, 深さ 2-6 cm で、断面形は U 字状である。

床 全面が粘土質で、平坦で締まっている。特に、中央が硬く踏み固められている。

竈 北東壁中央に砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。

規模は、煙道部から焚口部まで 103 cm, 最大幅 95 cm, 壁外への掘り込みは 70 cm である。火床部は火熱を受け赤変し、硬化している。土師器甕を支脚として利用している。煙道部は外傾して、緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|--------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック少量, 焼土粒子多量 | 6 暗赤褐色 | ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック中量 |
| 3 赤褐色 | 焼土粒子・焼土中ブロック多量 | 7 褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子多量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量 | 8 赤褐色 | 焼土小・中・大ブロック多量 |

ピット 1か所 (P₁)。P₁は径 13 cm の円形, 深さ 8 cm で、性格は不明である。

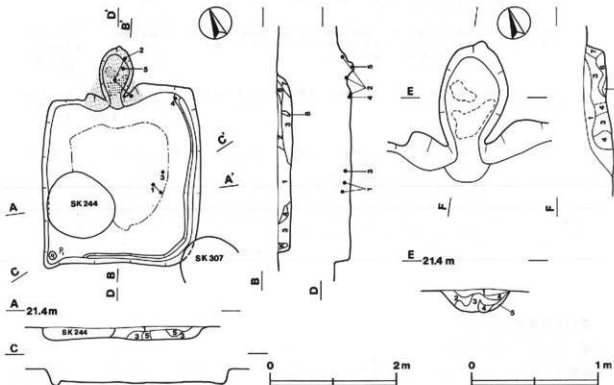
覆土 8層からなり、ブロック状の堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子・ローム小・中ブロック中量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子少量 |
| 3 赤褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 7 褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量 |
| 4 褐色 | ローム粒子多量, ハードローム中ブロック中量 | 8 褐色 | ローム大ブロック多量 |

遺物 土師器片 44 点, 須恵器片 21 点が出土している。1 の土師器環が南東壁寄りの覆土下層と覆土中から、

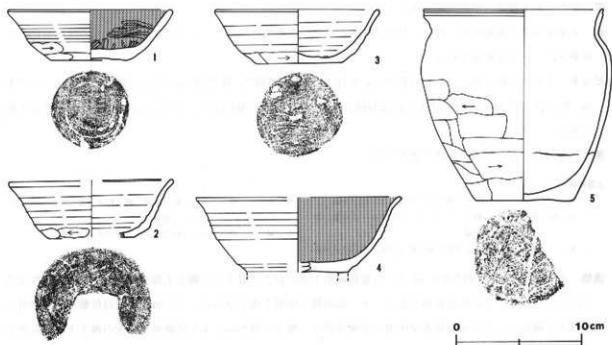
3 の須恵器環が覆土下層から、2 の土師器環が竈内と竈東側の袖部内から、4 の土師器高台付環が東コーナー



第 147 図 第 70 号住居跡実測図

部の床面直上から、5の土師器小形甕が竈の火床部に逆位で埋められて、それぞれ出土している。

所見 竈内や袖部内から土器片が多く出土していることから、竈の補強材や支脚（5の土師器甕）として利用されていたと考えられる。時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代の9世紀中葉と考えられる。



第148図 第70号住居跡出土遺物実測図

第70号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第148図 1	坏 土師器	A 13.1 B 4.1 C 6.1	体部、口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部外面下位へラ削り。内面へラ置き。底部外面回転へラ削り。	長石 石英 砂粒 明黄褐色 普通	90% P 320 内面黒色処理 覆土下層 覆土中
2	坏 土師器	A [13.0] B 15.4 C 6.8	底部、体部、口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部外面下位へラ削り。底部手持ちへラ削り。	石英 砂粒 明黄褐色 普通	90% P 322 竈内 袖部内
3	坏 須恵器	A 13.0 B 4.5 C 6.8	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部外面下位へラ削り。底部手持ちへラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 黄灰色 普通	90% P 321 覆土下層
4	高台付坏 土師器	A [16.4] B (6.0)	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部外面下位へラ削り。底部回転へラ削り。	長石 砂粒 明黄褐色 普通	50% P 323 内面黒色処理 床面直上
5	小形甕 土師器	A 14.4 B 15.3 C 8.0	体部、口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中に梗を持つ。端部はつまみ上げられ、棒状工具による凹線を施す。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。外面下位へラ削り。内面輪積痕有り。	長石 石英 雲母 砂粒 にふい褐色 普通	70% P 324 底部木炭直 竈内（火床部）

第71号住居跡（第149図）

位置 調査B区中央部、B3b区。

重複関係 本跡は、第258 A、258 B、277、278号土坑と重複している。第258 A、258 B号土坑が、本跡の南西壁を、第277、278号土坑が、本跡の竈を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.30 m、短軸3.24 mの方形である。

主軸方向 N-23°-E

壁 壁高は40~42cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北東壁を除き、ほぼ全周している。上幅22~40cm、下幅4~14cm、深さ6cmで、断面形はU字状である。

床 全面が粘土質で、平坦で硬く締まっている。

竈 北東壁中央に両袖部の一部と、焚口部に焼土ブロックが残存していることから、砂混じりの灰褐色粘土で構築されていたと推定される。

ピット 4か所(P₁~P₄)。P₁は長径19cm、短径16cmの楕円形で、深さ20cmの出入口施設に伴うピットである。P₂とP₃は径18~20cmの円形、P₄は長径21cm、短径15cmの楕円形で、いずれも深さ6cmで、性格は不明である。

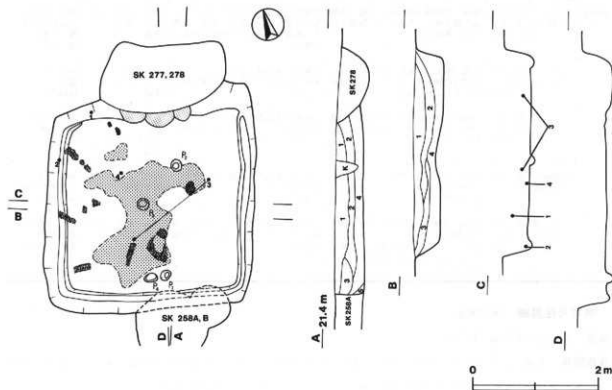
覆土 5層からなり、自然堆積と思われる。

土層解説

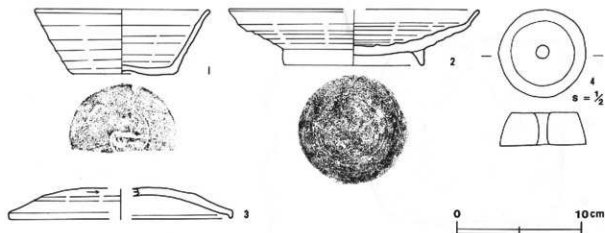
- | | | | |
|--------|----------------------------|------|-----------------------------|
| 1 概略褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量 | 4 褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・ソフトローム中ブロック中量、炭化粒子少量 | 5 褐色 | ローム粒子・ローム中ブロック多量 |
| 3 褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量 | | |

遺物 土師器片96点、須恵器片52点、石製紡錘車1点、および混入した縄文土器片1点、土師質土器片2点が出土している。1の須恵器環が北コーナー部の覆土中層と覆土中から、2の須恵器高台付盤が北西壁寄りの覆土下層から、3の須恵器蓋が中央と南東壁寄りの覆土下層から、4の紡錘車が中央の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 中央から南西壁と北西壁寄りに、多量の焼土塊と炭化材が散在していることから、焼失家屋と考えられる。時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代の9世紀前葉と考えられる。



第149図 第71号住居跡実測図



第150図 第71号住居跡出土遺物実測図

第71号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第150図 1	坏 須恵器	A 14.0 B 5.2 C 8.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部に向け、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、ナデ。	長石 砂粒 灰色 普通	55% P325 覆土中層 覆土中
2	甕 須恵器	A [20.0] B 4.5 D 11.2 E 1.3	高台部から口縁部の破片。高台部は直線的に開く。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、上位に稜を持つ。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 砂粒 褐色 普通	60% P326 覆土下層
3	甕 須恵器	A [17.8] B (2.5)	天井部から口縁部の破片。天井部はほぼ平坦で、中位に稜を持ち、緩やかに開く。端部は屈曲して垂下する。	天井部、口縁部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	長石 石英 砂粒 灰青色 普通	30% P327 覆土下層

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
4	紡錘車	4.7	1.8	0.7	61	粘板岩	覆土下層	Q20 100%

第72号住居跡 (第151図)

位置 調査B区西部, B210区。

規模と平面形 長軸 3.09 m, 短軸 3.02 m の隅丸方形である。

主軸方向 N-6°-W

壁 壁高は 18~32 cm で、外傾して立ち上がる。

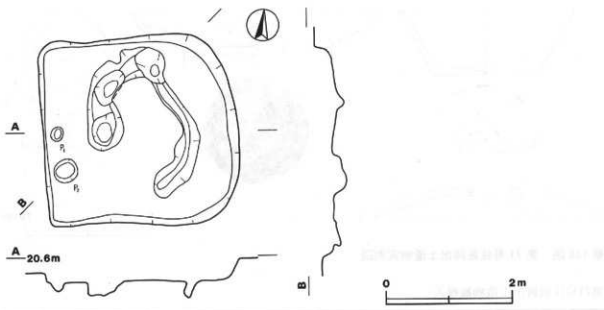
床 平坦で、全面が粘土で、硬く締まっている。中央部に、上幅 25~55 cm, 下幅 12~30 cm, 深さ約 22 cm の溝が、粘土層を掘り込んで、楕円形を描くように広がっている。

ピット 2か所 (P₁, P₂)。P₁は長径 24 cm, 短径 21 cm の楕円形, P₂は径 38 cm の円形で、いずれも深さ 12~14 cm で、性格は不明である。

覆土 粘土ブロックが多量含まれた褐色土。

遺物 土師器片 16 点, 須恵器片 2 点が出土している。

所見 粘土層を掘り込んで作られており、壁はしっかりとしている。中央の溝は床をくり抜いており、粘土を採掘した可能性がある。竈の痕跡もなく、住居として使用されたか不明である。時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代から平安時代と考えられる。



第151図 第72号住居跡実測図

第73号住居跡 (第152図)

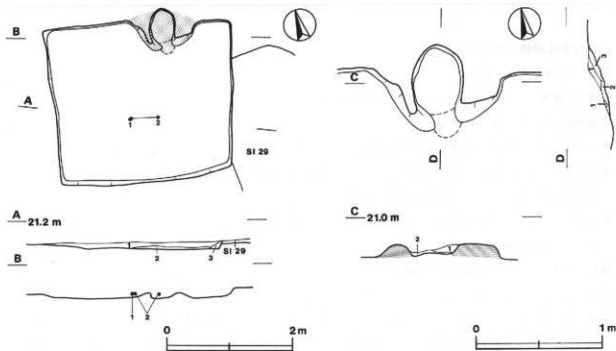
位置 調査B区南西部, C2ca区。

重複関係 本跡は第29号住居跡と重複している。本跡が、第29号住居跡を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸2.90m, 短軸2.59mの長方形である。

主軸方向 N-18°-E

壁 壁高は8~13cmで、外傾して立ち上がる。



第152図 第73号住居跡実測図

床 全面が粘土質で、平坦で硬く締まっている。

竈 北壁中央やや東寄りに砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで55cm、最大幅95cm、壁外への掘り込みは18cmである。火床部は、火熱を受け赤変し、硬化している。煙道部は外傾して、緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子・粘土中量、崩落土 | 3 暗赤褐色 焼土中・大ブロック多量、粘土質 |
| 2 赤褐色 焼土中・大ブロック多量 | |

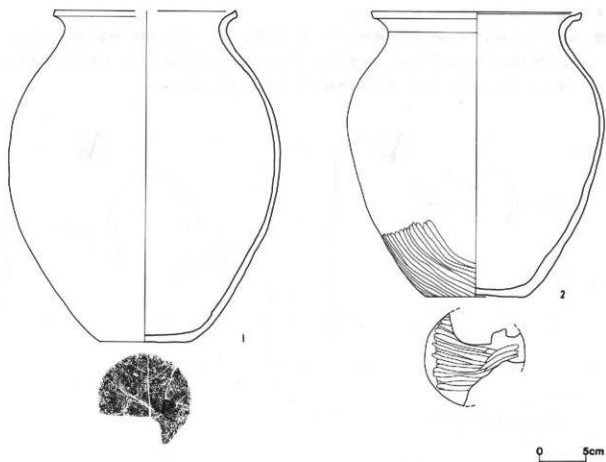
覆土 3層からなり、自然堆積と思われる。

土層解説

- | | |
|--------------------|---------------|
| 1 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子中量 | 3 極暗褐色 粘土・砂少量 |
| 2 灰褐色 粘土 | |

遺物 土師器片53点、須恵器片1点、および混入した土師質土器片1点が出土している。1と2の土師器甕が中央の覆土下層からそれぞれ出土している。2の土師器甕は第29号住居跡の竈西側の覆土中からも出土している。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、古墳時代の7世紀と考えられる。



第153図 第73号住居跡出土遺物実測図

第73号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第153図 1	罌土器	A 19.2 B 34.3 C 9.6	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面磨ナデ。体部内・外面ナデ。	長石 砂粒 スコリア ぶい黄褐色 普通	50% P329 底部木炭痕 覆土下層
2	罌土器	A 22.2 B 29.7 C 10.0	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面磨ナデ。体部内・外面ナデ。外面下位へフ磨き。底部へラ磨き。	長石 砂粒 ぶい黄褐色 普通	40% P330 覆土下層

第75号住居跡 (第154図)

位置 調査B区北西部, A3j3区。

規模と平面形 長軸 2.24 m, 短軸 2.18 m の方形である。

主軸方向 N-34°-E

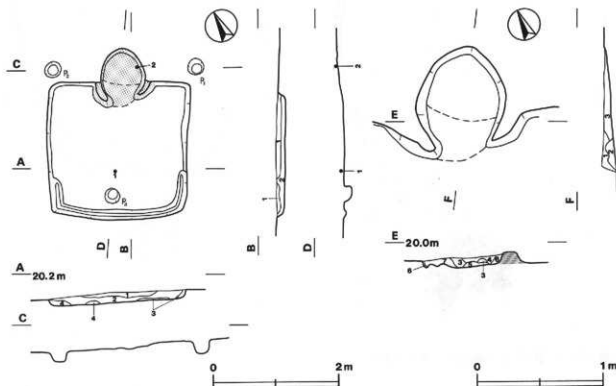
壁 壁高は 6~16 cm で, 外傾して立ち上がる。

壁溝 南コーナー部から西コーナー部の一部に確認されている。上幅 14~20 cm, 下幅 4~6 cm, 深さ 4 cm で, 断面形は U 字状である。

床 全面が粘土質で, 平坦で硬く締まっている。

竈 北東壁中央に砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 両側の袖部が残存している。

規模は, 煙道部から焚口部まで 90 cm, 最大幅 94 cm, 壁外への掘り込みは 57 cm である。火床部は, 火熱を受け赤変し, わずかに硬化している。煙道部は外傾して, 緩やかに立ち上がる。



第154図 第75号住居跡実測図

覆土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・粘土粒子少量 | 5 黒褐色 | 焼土小ブロック中量, 粘土粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・粘土粒子少量 | 6 黒褐色 | 焼土粒子・粘土粒子少量 |
| 3 藍褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・粘土粒子少量 | 7 藍褐色 | 焼土粒子・粘土粒子少量, 硬く締まっている |
| 4 藍褐色 | 焼土粒子・粘土粒子少量 | | |

ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁とP₂は径26~28cmの円形で、いずれも深さ17~21cmの支柱穴である。P₃は径24cmの円形で、深さ15cmの出入口施設に伴うピットである。

覆土 6層からなり、粘土が多く含まれていることから、人為堆積と思われる。

土層解説

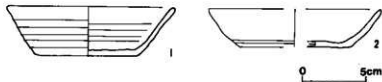
- 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・粘土小ブロック少量
- 暗褐色 ローム粒子・粘土小ブロック少量, ローム小ブロック中量
- 灰褐色 ローム粒子少量
- にがい黄褐色 粘土多量

遺物 土師器片33点, 須恵器片9点が出土している。1の須恵器環が中央の覆土下層から逆位で、2の須恵器環が竈内からそれぞれ出土している。

所見 覆土が薄く、壁の残存率が悪い。西壁側が下り斜面になっているので、特に西壁の残存率が悪く、遺物が少なかった。時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代の8世紀後葉と考えられる。

第75号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第155図 1	須恵器 環	A 13.2 B 4.0 C 7.7	体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転へず回り。	長石 石英 雲母 砂粒 スコリア 淡黄色 普通	85% P331 覆土下層
2	環 須恵器	A[14.0] B 3.1 C[8.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転へず回り。	石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	40% P332 竈内



第155図 第75号住居跡出土遺物実測図

第77号住居跡 (第156図)

位置 調査B区北部, A3h3区。

規模と平面形 長軸3.40m, 短軸3.12mの長方形である。

主軸方向 N-58°-W

壁 壁高は10~30cmで、外傾して立ち上がる。

床 全面が粘土質で、平坦で硬く締まっている。

竈 北西壁の西コーナー部寄りに砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。火床面が露出していて覆土は不明。

天井部は崩落しており、両側の袖部が薄く残存している。規模は、煙道部から焚口部まで126cm, 最大幅111cm, 壁外への掘り込み74cmである。火床部は、火熱を受け赤変し、わずかに硬化している。煙道部は外傾し

て、わずかに立ち上がる。

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁、P₂とP₄は径33~37cmの円形、P₃は長径30cm、短径24cmの楕円形で、いずれも深さ28~54cmの主柱穴である。

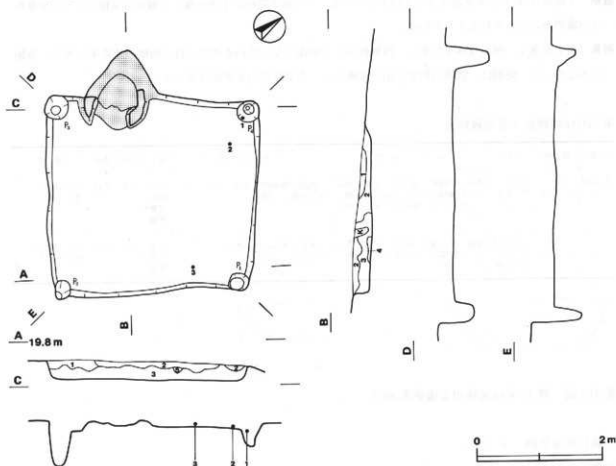
覆土 5層からなり、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | |
|-------|---------------------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・砂少量 | 鉄分偏じり |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック少量、砂中量 | 焼土小ブロック少量、砂中量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック少量、砂中量 | 焼土中ブロック中量、硬く締まっている |

遺物 土師器片66点、須恵器片45点が出土している。1の須恵器高台付坏がP₁から、2の須恵器壺が北コーナー部の覆土下層から、3の土師器甕が東コーナー部の覆土下層と覆土中からそれぞれ出土している。

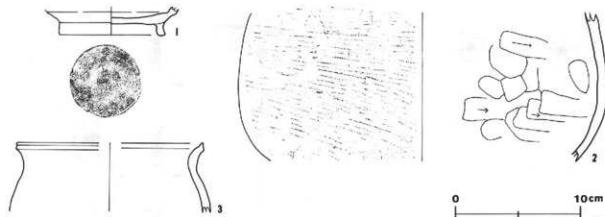
所見 覆土が薄く、西壁側が下り斜面になっており、竈や壁の残存率が悪い。時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代の9世紀前後と考えられる。



第156図 第77号住居跡実測図

第77号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第157図 1	高台付坏 須恵器	B (2.4) D 8.4 E 1.0	高台部から体部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面クロコナデ。底部回転ヘラ削り。高台部貼り付け、クロコナデ。	長石 雲母 砂粒 灰黄褐色 普通	20% P333 P ₁ 内
2	壺 須恵器	B (12.9)	体部の破片。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面平行叩き。内面ナデ。一部ヘラナデ、アテ具痕有り。	長石 砂粒 褐色 普通	5% P335 覆土下層



第157図 第77号住居跡出土遺物実測図

第157図 3	須 土器	A[14.8] B(5.3)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中に縦溝を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ、体部内・外面ナデ。	灰石 石英 砂粒 赤色 普通	20% P334 覆土下層 覆土中
------------	---------	-------------------	--	----------------------	----------------------	-------------------------

2 掘立柱建物跡

今回の調査では、調査B区の中央部の西側と北側を中心にして、14棟の掘立柱建物跡を検出した。それらのほとんどが、平安時代以降のものと思われるが、出土遺物が極端に少なく、時期を特定することは困難であった。以下、それぞれの特徴や出土遺物について記載する。

第1号掘立柱建物跡 (第158図)

位置 調査B区南部, D3C9区。

規模 東西1間(2.90m), 南北3間(4.30m), 柱間寸法は桁行1.5~1.8m, 梁行2.8~3.0mで、面積は12.47㎡である。柱穴は7か所(P₁~P₃, P₄~P₇の2列)である。柱穴の掘り方は、平面形が長軸35~42cm, 短軸25~35cmの長方形または方形で、深さ16~46cmである。断面形は、逆台形状を呈し、底面は丸く窪んでいる。柱痕はP₁~P₇で認めることができた。柱の寸法は、径約14~20cmである。

長軸方向 N-14°-E

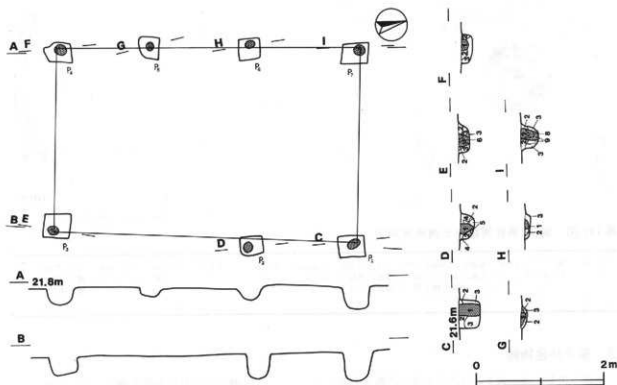
覆土 暗褐色土と褐色土を中心に堆積しており、人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子多量, 炭化粒子少量, 褐色土中量 | 6 暗褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 褐色 | ソフトローム中・大ブロック中量 | 7 暗褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 褐色 | ソフトローム中・大ブロック・暗褐色土中量 | 8 灰褐色 | 粘土ブロック |
| 4 褐色 | ローム小ブロック多量, 暗褐色土中量 | 9 暗褐色 | 褐色土中量 |
| 5 明褐色 | ハードローム中ブロック・褐色土多量 | | |

遺物 土師器片5点, 須恵器片1点が出土している。いずれも細片で、土師器甕の体部がP₁から、土師器甕の体部と須恵器杯の口縁部がP₃からそれぞれ出土している。

所見 B区の南部, 方形の土坑群に隣接した平坦地に位置している。調査の結果, P₃の梁行方向に対応する柱穴は検出できなかった。柱穴規模は、深さが不揃いであるが、断面形や柱間寸法は規則性が認められる。また、隣接する長方形の土坑群と長軸方向がほぼ一致することから、墓域関係の施設の可能性がある。時期は、出土遺物が極めて少ないこともあり、特定はできないが、平安時代以降と考えられる。



第158図 第1号掘立柱建物跡実測図

第2号掘立柱建物跡 (第159図)

位置 調査B区東部, C4cs区。

重複関係 本跡は、第3号掘立柱建物跡と重複している。柱穴同士の切り合いがないことから、新旧関係は不明である。

規模 東西4間(5.84m)、南北2間(3.97m)を確認したが、東側が調査区域外に延びているために、東西の規模は不明である。柱間寸法は桁行1.0~2.9m、梁行1.9~2.0mで、面積は不明である。欄柱構造で、柱穴は8か所(P₁~P₈)である。柱穴の掘り方は、平面形が長径36~83cm、短径32~56cmの楕円形または不整楕円形、または径42~70cmの円形で、深さ10~68cmである。断面形は、底面が丸みを帯びる逆台形状と二段掘り状を呈している。柱痕はP₁、P₄、P₅、およびP₇で認めることができた。柱の寸法は、径約10~18cmである。

長軸方向 N-52°-E

覆土 黒色土、暗褐色土と褐色土を中心に堆積しており、人為堆積である。

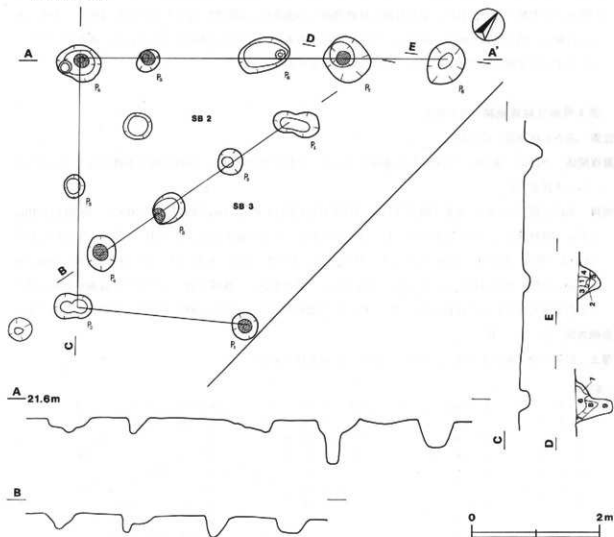
土層解説

1 黒色	ローム粒子少量	6 暗褐色	ローム粒子少量
2 黒色	ローム粒子少量、ソフトローム中ブロック中量	7 褐色	ローム粒子多量、ソフト・ハードローム中・大ブロック中量
3 暗褐色	ローム粒子・ソフトローム中ブロック中量	8 暗褐色	ローム粒子中量、ソフトローム小ブロック少量
4 暗褐色	ローム粒子多量	9 褐色	ローム粒子・ソフトローム小・中ブロック多量中量
5 褐色	ローム粒子多量、ソフトローム中・大ブロック中量		

遺物 土師器片2点が出土している。いずれも細片で、土師器甕の体部と口縁部がそれぞれ出土している。

所見 B区の東部、平坦地のピット群の中に構築されている。調査区域外と隣接していることもあり、遺構として考えられる柱穴は2棟分のみ(本跡と第3号掘立柱建物跡)を検出した。調査の結果、P₅の梁行方向に

対応する柱穴は検出できなかった。柱穴規模は、断面形、深さ、柱間寸法は不揃いで、規則性が乏しく、その性格は不明である。長軸方向では、他の遺構との違いが見られ、その関連も不明瞭である。特に、第3号掘立柱建物跡については、时期的な相違があることは考えられるが、性格的な関連については、調査区域外の調査結果を踏まえながら、考慮する必要があると思われる。時期は、出土遺物が極めて少なく、すべて細片であることもあり、特定はできないが、隣り合ったピットから中世の常滑片が出土しており、中世以降の可能性はある。



第159図 第2、3号掘立柱建物跡実測図

第3号掘立柱建物跡 (第159図)

位置 調査B区東部、C4ds区。

重複関係 本跡は、第2号掘立柱建物跡と重複している。柱穴同士の切り合いがないことから、新旧関係は不明である。

規模 南北3間(3.70m)を確認したが、東側が調査区域外に延びているために、東西の規模は不明である。柱間寸法は桁行1.1~1.4mである。柱穴は4か所(P₁~P₄)の1列である。柱穴の掘り方は、平面形が長径(径)40~70cm、短径25~48cmの楕円形および円形で、深さ14~34cmである。断面形は、底面が丸みを帯びる逆台形状と二段掘り状を呈している。柱痕はP₃とP₄で認めることができ、底が硬く締まっている。柱の寸法は、

径10~14cmである。

長軸方向 不明

遺物 土師器片5点, 須恵器片2点が出土している。いずれも細片で, 土師器環と須恵器環の口縁部, および土師器甕の体部がP₃から, 土師器環と須恵器環の口縁部, 土師器甕の体部がP₄からそれぞれ出土している。

所見 B区の東部, 平坦地のピット群の中に構築されている。本跡の西側には, 対応すると考えられる柱穴は検出できなかった。柱穴規模は, 断面形, 深さは不揃いだが, 柱間寸法は規則性が認められる。他の遺構との関連は不明瞭であり, 特に, 第2号掘立柱建物跡との関連は, 同時期に存在した可能性は低く, 不明である。時期は, 出土遺物が極めて少なく, すべて細片であることもあり, 特定はできないが, 隣り合ったピットから中世の常滑片が出土しており, 中世以降の可能性はある。

第4号掘立柱建物跡 (第160図)

位置 調査B区西部, C3a3区。

重複関係 本跡は, 第131, 274号土坑と重複している。それぞれの土坑が, 本跡の柱穴を掘り込んでいることから, 本跡が古い。

規模 東西2間(3.75m), 南北3間(6.45m), 柱間寸法は桁行1.8~2.3m, 梁行1.7~2.0mで, 面積は24.19㎡である。側柱構造で, 柱穴は10か所(P₁~P₁₀)である。柱穴の掘り方は, P₅とP₁₀を除き, 平面形が長径(径)51~76cm, 短径50~74cmの円形または楕円形で, 深さ31~52cmである。P₅とP₁₀は長径(径)36cm, 短径30cmの楕円形または円形で, 深さ22~25cmである。断面形は, 二段掘り状を主として, 底面が丸みを帯びる逆台形状も見られる。柱痕はP₁~P₄, P₆, P₇で認めることができた。柱の寸法は, 径約10~14cmである。

長軸方向 N-5°-W

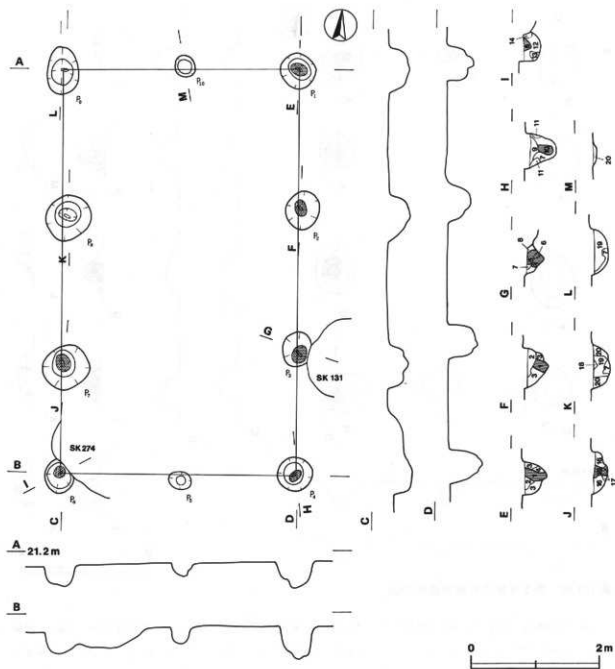
覆土 暗褐色土と褐色土を中心に堆積しており, 人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック多量	11 褐色	ローム粒子少量, ローム中ブロック中量
2 暗褐色	ローム粒子中量	12 褐色	ローム粒子少量, ローム中ブロック中量
3 褐色	ローム粒子多量	13 暗褐色	ローム粒子・ローム小ブロック少量
4 褐色	ローム粒子多量, ローム中ブロック少量	14 暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック中量
5 暗褐色	ローム粒子少量	15 褐色	ローム中ブロック多量
6 黒褐色	ローム粒子少量	16 褐色	ローム粒子・ローム小・中ブロック中量
7 褐色	ローム粒子少量	17 褐色	ローム粒子・粘土小ブロック中量
8 黒褐色	ローム粒子中量	18 褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック中量
9 暗褐色	ローム粒子少量	19 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子少量
10 暗褐色	ローム粒子中量	20 褐色	ローム粒子・ローム小・中ブロック多量

遺物 土師器片2点, 須恵器片1点が出土している。いずれも細片で, 土師器甕と須恵器甕の体部がP₂から, 土師器甕の体部がP₃からそれぞれ出土している。

所見 B区の西部, 台地上の縁辺部に位置し, 西側の斜面を望むように構築されている。柱穴規模は, 梁行方向のP₃, P₁₂とその他の柱穴に差異が認められる。共に深さは不揃いであるが, 断面形と柱間寸法はほぼ規則性が認められる。性格は不明瞭であり, 他の遺構との関連は不明瞭であるが, 構造や間数について他の掘立柱建物跡と共通する点が多いことから, 性格的な関連も注目される。時期は, 出土遺物が極めて少ないこともあり, 特定はできない。ただ, 隣接する第31号竪穴住居跡が奈良時代の8世紀後葉, 第32号竪穴住居跡が古墳時代の7世紀後葉, 本跡と重複している土坑が近世と考えられることから, 本跡は平安時代の9世紀以降近世にかけて構築されていたと思われる。



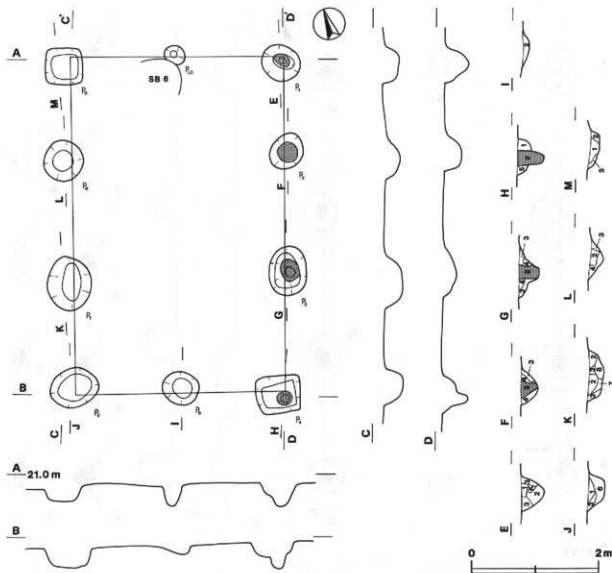
第160図 第4号掘立柱建物跡実測図

第5号掘立柱建物跡 (第161図)

位置 調査B区西部, B3g3区。

重複関係 本跡は、第6号掘立柱建物跡と重複している。第6号掘立柱建物跡が、本跡の柱穴を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模 東西2間(3.50m), 南北3間(5.35m), 柱間寸法は桁行1.5~2.0m, 梁行1.6~1.8mで、面積は18.73m²である。側柱構造で、柱穴は10か所(P₁~P₁₀)である。柱穴の掘り方は、P₄とP₉を除き、平面形が長径



第161図 第5号掘立柱建物跡実測図

(径) 33~86cm, 短径30~70cmの楕円形または円形で、深さ12~38cmである。P₄とP₅は長軸60~70cm, 短軸56~59cmの方形で、深さ20~42cmである。断面形は、底面が丸みを帯びる逆台形状を主として、二段掘り状のものも見られる。柱痕はP₁~P₄で認めることができた。柱の寸法は、径約14~24cmである。

長軸方向 N-20°-E

覆土 褐色土とロームブロックを中心に堆積しており、人為堆積である。

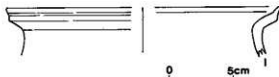
土層解説

1	褐色	ローム粒子・ローム中ブロック中量, 粘土中ブロック少量	4	によい黄褐色	粘土中ブロック中量
2	褐色	ローム粒子多量, ローム中ブロック中量, 粘土中ブロック少量	5	によい黄褐色	粘土大ブロック多量, 暗褐色土中量
3	褐色	ローム粒子多量, 粘土小・中ブロック・暗褐色土中量	6	褐色	ローム粒子・ローム中ブロック中量
			7	褐色	ローム粒子・ローム中ブロック少量
			8	褐色	ローム粒子・粘土中ブロック中量

遺物 土師器片5点, 須恵器片2点, 常滑の陶器片1点が出土している。いずれも細片で、土師器甕と須恵器甕の体部がP₂から、土師器環の口縁部, 土師器甕の体部, および須恵器甕の口縁部がP₃から、1の土師器甕の口縁部と体部がP₄から、常滑甕の体部がP₉からそれぞれ出土している。

所見 B区の西部, 台地上の縁辺部に位置し、西側の斜面を望むように構築されている。柱穴規模は、深さは

不揃いであるが、断面形と柱間寸法にはほぼ規則性が認められる。他の遺構との関連は不明瞭であるが、構造や間数について他の掘立柱建物跡と共通する点が多いことから、性格的な関連も注目される。特に、柱穴規模や面積が異なる第6号掘立柱建物跡と、間数が異なる第7号掘立柱建物跡については、同軸方向で、ほぼ同じ場所に構築されていることから同じ性格を持つと思われる。時期は、出土遺物が極めて少ないこともあり、特定はできないが、常滑片が出土していることから、12世紀以降と考えられる。



第162図 第5号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第5号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第162図 1	土師器	A [21.8] B (3.9)	口縁部の破片。口縁部は外反して、中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられ、口唇部直下に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内・外面横ナア。	長石 石英 砂粒 褐色 普通	5% P383 P ₁ 内

第6号掘立柱建物跡 (第163図)

位置 調査B区西部, B3es区。

重複関係 本跡は、第5, 7号掘立柱建物跡と重複している。第5号掘立柱建物跡については、本跡が第5号掘立柱建物跡の柱穴を掘り込んでいることから、本跡が新しい。第7号掘立柱建物跡については、柱穴同士の切り合いがないことから、新旧関係は不明である。

規模 東西2間(4.90m), 南北3間(6.20m), 柱間寸法は桁行1.8~2.1m, 梁行1.4~3.4mで、面積は30.38㎡である。側柱構造で、柱穴は10か所(P₁~P₁₀)である。柱穴の掘り方は、P₅を除き、平面形が長径(径)50~83cm, 短径44~79cmの円形または楕円形で、P₅は径30cmの円形で、深さ34~48cmである。断面形は、底面が丸みを帯びる逆台形状を主として、二段掘り状のものも見られる。柱痕はP₁~P₄, P₆, P₈, P₁₀で認めることができた。柱の寸法は、径約15cmである。

長軸方向 N-22°-E

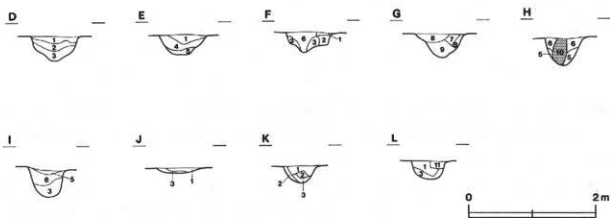
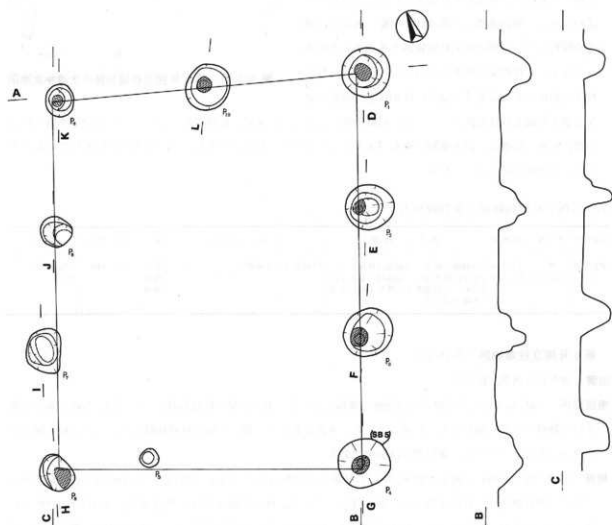
覆土 褐色土と粘土ブロックを中心に堆積しており、人為堆積である。

土層解説

1	褐色	ローム小ブロック・焼土粒子少量	7	褐色	ローム粒子・ローム中ブロック中量, 粘土中ブロック少量
2	褐色	焼土粒子中量			
3	暗褐色	ローム粒子少量	8	褐色	ローム粒子多量, 粘土小・中ブロック中量
4	褐色	ローム粒子少量, 粘土中ブロック中量	9	褐色	ローム粒子中量, 暗褐色土多量
5	褐色	ローム粒子少量, 粘土小・中ブロック多量	10	褐色	焼土粒子少量, 粘土小ブロック中量
6	褐色	粘土中・大ブロック多量	11	褐色	ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック中量

遺物 土師器片12点, 須恵器片1点, および混入した縄文土器片2点が出土している。いずれも細片で、土師器甕の体部と底部, 須恵器環の口縁部がP₁から、土師器甕の体部と土師器環の口縁部がP₂から、土師器甕の体部と口縁部, 縄文土器片がP₃から、土師器甕の体部がP₃からそれぞれ出土している。

所見 B区の西部, 台地上の縁辺部に位置し、西側の斜面を望むように構築されている。P₅と梁行方向に位置するP₁₀にずれが見られるが、深さの不揃いさを除けば、柱穴規模は、断面形と柱穴距離にはほぼ規則性が認められる。他の遺構との関連は不明瞭であるが、構造や間数について他の掘立柱建物跡と共通する点が多いこ



第 163 图 第 6 号掘立柱建物跡突測図

とから、性格的な関連も注目される。特に、柱穴規模や面積が異なる第5号掘立柱建物跡と、間数が異なる第7号掘立柱建物跡については、同軸方向で、ほぼ同じ場所に構築されていることから同じ性格を持つと思われる。時期は、出土遺物が極めて少ないこともあり、特定はできないが、第5号掘立柱建物跡の柱穴を掘り込んでいることから、12世紀以降と考えられる。

第7号掘立柱建物跡 (第164図)

位置 調査B区西部, B3e4区。

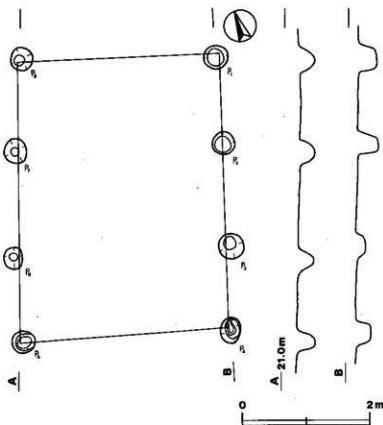
重複関係 本跡は、第6号掘立柱建物跡と重複している。柱穴同士の切り合いがないことから、新旧関係は不明である。

規模 東西1間(3.15m)、南北3間(4.40m)、柱間寸法は桁行1.4~1.7m、梁行3.2~3.3mで、面積は13.86㎡である。柱穴は8か所(P₁~P₄、P₅~P₈の2列)である。柱穴の掘り方は、平面形が長径(径)35~40cm、短径32~36cmの円形または楕円形で、深さ16~30cmである。断面形は、逆台形状を呈し、底面は丸く窪んでいる。柱痕は認めることができなかった。

長軸方向 N-17°-E

遺物 土師器片8点、須恵器片2点が出土している。いずれも細片で、土師器環の口縁部、土師器甕の体部、および底部がP₁から、土師器甕の体部がP₂から、須恵器甕の体部がP₃から、土師器甕の体部と須恵器甕の底部がP₈から出土している。

所見 B区の西部、台地上の縁辺部に位置し、西側の斜面を望むように構築されている。柱穴規模は、深さは不揃いであるが、断面形と柱穴距離には規則性が認められる。他の遺構との関連は不明瞭であるが、第5号掘立柱建物跡と第7号掘立柱建物跡については、同軸方向で、ほぼ同じ場所に構築されていることから、共通した性格を有することが考えられる。時期は、出土遺物が極めて少ないこともあり、特定はできないが、平安時代以降と考えられる。



第164図 第7号掘立柱建物跡実測図

第8号獨立柱建物跡 (第165図)

位置 調査B区西部, B3f区。

重複関係 本跡は, 第41号竪穴住居跡と重複している。切り合いを確認することができなかったが, 第41号竪穴住居跡の覆土下層の堆積状況が人為堆積であること, 住居跡の床面の深さと本跡の柱穴の深さが同じくらいと予想されることから, 本跡の方が新しい可能性がある。

規模 東西3間(6.20m), 南北2間(4.20m), 柱間寸法は桁行約2.2m, 梁行約2.1mで, 面積は[26.04]㎡と推定される。隅柱構造で, 柱穴は8か所(P₁~P₈)である。柱穴の掘り方は, 平面形が長径(径)65~124cm, 短径65~78cmの楕円形または円形で, 深さ34~50cmである。断面形は, 逆台形状を呈し, 底面は丸く窪んでいる。柱底はP₂, P₄, P₆, P₇で認めることができた。柱の寸法は, 径約12~22cmである。P₁には粘土が大量に堆積しており, 周囲にも広がっている。

長軸方向 N-70°-W

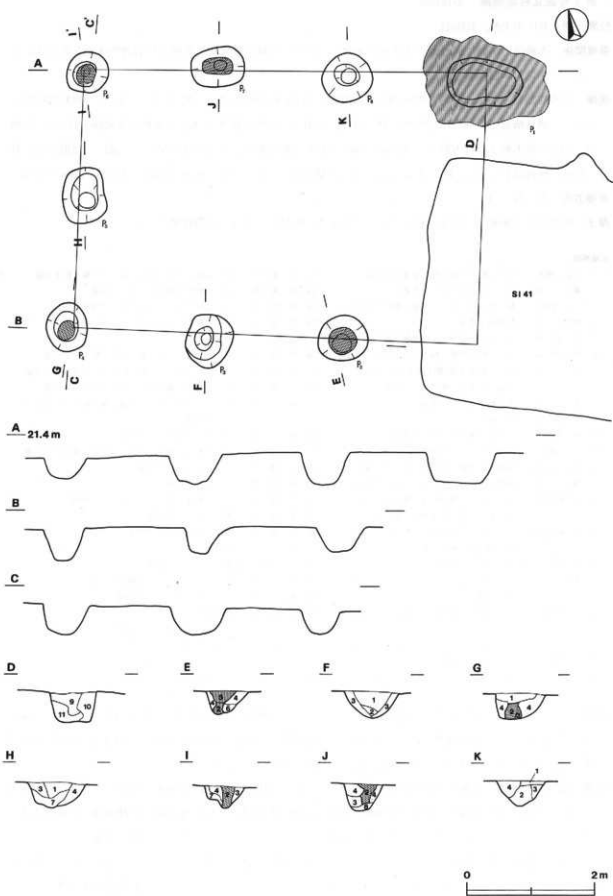
覆土 暗褐色土と褐色土を中心に堆積しており, 人為堆積である。

土層解説

1 褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子少量		中ブロック多量
2 暗褐色	ローム粒子多量, ソフトローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量	7 褐色	ローム粒子・ソフト・ハードローム中・大ブロック多量, 焼土小・中ブロック中量
3 暗褐色	ローム粒子中量	8 暗褐色	ローム粒子・粘土小・中ブロック中量
4 褐色	ローム粒子・ローム中・大ブロック・粘土中ブロック中量	9 暗褐色	粘土小ブロック中量
5 暗褐色	ソフトローム小・中ブロック中量	10 におい黄褐色	粘土中・大ブロック多量, 褐色土中量
6 褐色	ソフトローム小・中ブロック中量, 粘土小	11 におい黄褐色	粘土小・中ブロック多量, 暗褐色土中量

遺物 土師器片18点, 須恵器片2点が出土している。いずれも細片で, 土師器甕の体部と須恵器環の口縁部がP₂から, 土師器環の口縁部と甕の体部, 須恵器環の底部がP₃から, 土師器甕の体部がP₄からそれぞれ出土している。

所見 B区の中央部, 台地上の平坦地に位置している。柱穴規模は, 深さは不揃いであるが, 断面形と柱間寸法には規則性が認められる。P₁の覆土の堆積状況は他の柱穴と特異な状況であったが, P₂がP₆~P₈と桁行方向において同一軸上に位置すること, 検出した調査区中央部の台地上に構築された獨立柱建物跡のほとんどが, 3間の規模を有すること, また, 第10, 13号獨立柱建物跡と比べると, 2間分の規模は本跡の方が大きく, 共通性が低いことから, P₁を本跡の一部として扱うこととした。よって, P₁から多量の粘土が堆積し, 遺物が1片も出土していないことから, 本跡廃棄後にP₁を意図的に再利用して, 粘土貯蔵用に利用した可能性があると思われる。性格は不明であり, 他の遺構との関連も不明瞭であるが, 隣接する第14号獨立柱建物跡とは桁行方向の軸のずれがあること, 規模に差異があることから, 同一時期ではないと考えられる。時期は, 出土遺物が極めて少ないこともあり, 第41号竪穴住居跡が平安時代の9世紀中葉と考えられるので, 平安時代の9世紀後葉以降と思われる。



第 165 图 第 8 号掘立柱建物跡実測図

第9号掘立柱建物跡 (第166図)

位置 調査B区中央部, B4b1区。

重複関係 本跡は, 第49, 60号竪穴住居跡と重複している。本跡の柱穴が, 各竪穴住居跡の床面を掘り込んで
いることから, 本跡が新しい。

規模 東西2間(4.30m), 南北3間(6.20m), 柱間寸法は桁行2.0~2.2m, 梁行2.1~2.3mで, 面積は26.66㎡
である。側柱構造で, 柱穴は10か所(P₁~P₁₀)である。柱穴の掘り方は, 平面形が長軸86~115cm, 短軸
70~95cmの長方形または方形で, 深さ58~76cmである。断面形は, 逆台形状を呈し, 一部に二段掘り状が見
られる。柱径はP₁, P₃, P₈, P₉, およびP₁₀で認めることができた。柱の寸法は, 径約14~20cmである。

長軸方向 N-16°-E

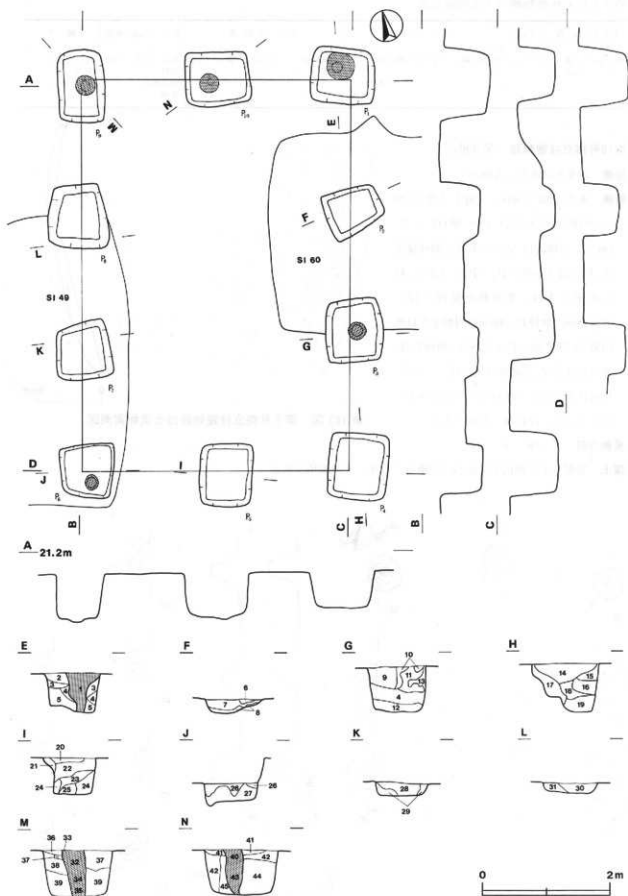
覆土 暗褐色土と褐色土, および粘土ブロックを中心に堆積しており, 人為地積である。

土層解説

1	によい褐色	ローム粒子・焼土粒子中量, 砂多量	22	黒褐色	ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量
2	褐色	ローム中・大ブロック多量	23	暗褐色	ローム粒子・粘土小ブロック少量
3	によい黄褐色	粘土中・大ブロック多量, 褐色土少量	24	暗褐色	ローム粒子・ローム小ブロック少量
4	褐色	暗褐色土中量	25	黒褐色	ローム粒子・ローム小ブロック・粘土小ブロック 少量
5	暗褐色	ローム小・中ブロック多量, 褐色土中量	26	暗褐色	ローム小ブロック・焼土粒子・粘土粒子少量
6	暗褐色	ローム粒子中量, 粘土小・中ブロック少量	27	灰褐色	ローム小ブロック少量, 粘土小・中ブロック中量
7	褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子・焼土小ブロック 少量, 粘土小・中ブロック中量	28	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック少量
8	褐色	灰色粘土ブロック多量	29	褐色	ローム小・中ブロック中量, 焼土粒子・粘土小ブ ロック少量
9	暗褐色	砂多量	30	褐色	ローム小・中ブロック中量
10	暗褐色	砂中量, 焼土大ブロック多量	31	暗褐色	ローム粒子・焼土小ブロック少量, 焼土粒子中量
11	によい黄褐色	粘土中ブロック・暗褐色土中量	32	暗褐色	ローム小ブロック少量
12	褐色	暗褐色土中量, 粘土中ブロック少量	33	暗褐色	ローム粒子中量
13	褐色	暗褐色土中量, 褐色粘土ブロック少量	34	暗褐色	ローム粒子・粘土小・中ブロック中量
14	灰黄褐色	ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック・ 炭化粒子・粘土粒子少量, 砂中量	35	暗褐色	粘土小ブロック少量
15	灰黄褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック・ 砂少量, 粘土粒子中量	36	暗褐色	粘土小・中ブロック少量
16	灰褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	37	褐色	砂中量
17	褐色	ローム粒子・ローム小・中ブロック・焼土 粒子少量	38	明黄褐色	粘土中ブロック中量
18	灰黄褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土小 ブロック少量	39	褐色	ローム中ブロック・暗褐色土多量
19	暗褐色	ローム粒子・粘土小・中ブロック少量	40	褐色	ローム中・大ブロック多量
20	暗褐色	ローム粒子・砂少量	41	暗褐色	焼土粒子中量
21	褐色	ローム粒子・ローム小ブロック少量	42	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子中量
			43	黄褐色	粘土中・大ブロック多量
			44	暗褐色	粘土中ブロック中量
			45	褐色	粘土中ブロック多量

遺物 土師器片15点, 須恵器片4点が出土している。いずれも細片で, 土師器甕の体部がP₁から, 1の土師器
甕の体部がP₃から, 土師器甕の体部がP₈から, 土師器甕の口縁部と体部, 須恵器杯の口縁部, および須恵器
甕の体部がP₉から, 須恵器杯の口縁部がP₁₀からそれぞれ出土している。

所見 B区の中央部, 合地上の平坦地に位置している。柱穴規模は, 深さ, 断面形, 柱間寸法にはほぼ規則性
が認められる。他の遺構との関連は不明瞭であるが, 構造や間数について他の掘立柱建物跡と共通する点
が多い。しかし, 柱穴の掘り方が他の掘立柱建物跡と比べると, しっかりとした長方形の箱掘りになって
いることから, 性格の違う施設であった可能性がある。出土遺物が極めて少ないこともあり, 特定はできないが,
掘り込んでいる二つの竪穴住居跡が平安時代の9世紀前葉と考えられることから, 時期は平安時代の9世紀
中葉以降と思われる。



第 166 图 第 9 号掘立柱建物跡実測图

第9号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第167図 1	壺 土師器	B(20.5)	体部の破片。体部は内壁気味に立ち上がる。	体部外面ナデ、中位へラ磨き。内面ナデ、一部へラナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 明赤褐色 普通	10% P384 P ₁ 内

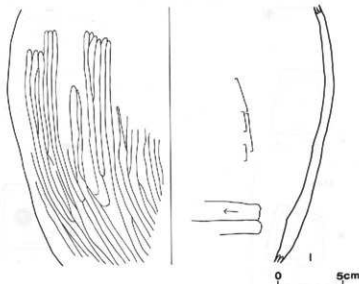
第10号掘立柱建物跡 (第168図)

位置 調査B区北部, A4h区。

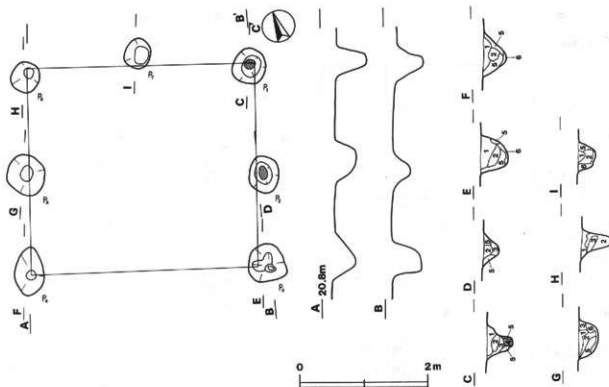
規模 東西2間(3.60m), 南北2間(3.20m), 柱間寸法は桁行1.75m, 梁行1.5~1.7mで、面積は11.52㎡である。側柱構造で、柱穴は7か所(P₁~P₂)である。柱穴の掘り方は、平面形が長径(径)50~78cm, 短径42~60cmの円形または楕円形で、深さ26~47cmである。断面形は、逆台形状を呈し、底面は丸く窪んでいる。柱痕はP₁とP₂で認めることができた。柱の寸法は、径約10~20cmである。

長軸方向 N-18°-E

覆土 暗褐色土と褐色土を中心に堆積しており、人為堆積である。



第167図 第9号掘立柱建物跡出土遺物実測図



第168図 第10号掘立柱建物跡実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------|-------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量, 砂中量 | 4 黒褐色 | ローム粒子少量, 粘土小ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量, 砂少量 | 5 褐色 | ローム粒子多量, ローム中ブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子中量, 砂少量 | 6 褐色 | ローム粒子多量, ローム中ブロック・焼土粒子中量 |

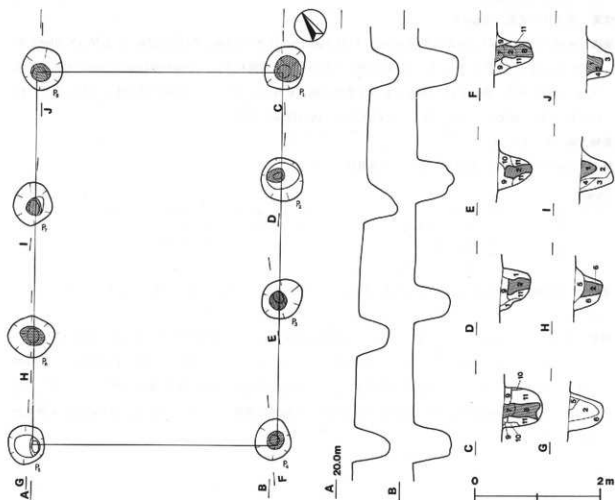
遺物 土師器片3点, 須恵器片2点が出土している。いずれも細片で, 土師器甕の体部と須恵器甕の体部がP₂から, 須恵器甕の体部がP₃からそれぞれ出土している。

所見 B区の北部, 台地上の縁辺部に位置し, 北側の斜面を望むように構築されている。調査の結果, P₂の桁行方向に対応する柱穴は検出できなかった。柱穴規模は, 深さは不揃いであるが, P₂, P₃およびP₄のような中間の柱が浅い傾向を持つ。断面形や柱間寸法はほぼ規則性が認められる。第13号掘立柱建物跡と類似する規模であるが, 性格および遺構間の関連性は不明である。時期は, 出土遺物が極めて少ないこともあり, 特定はできないが, 奈良時代以降と考えられる。

第11号掘立柱建物跡 (第169図)

位置 調査B区北部, A3hs区。

規模 東西1間(4.00m), 南北3間(6.00m), 柱間寸法は桁行1.7~2.3m, 梁行約4.0mで, 面積は24.00㎡である。柱穴は8か所(P₁~P₄, P₅~P₈の2列)である。柱穴の掘り方は, 平面形が径60~73cmの円形で, 深さ48~62cmである。断面形は, 底面が丸みを帯びる逆台形状を主として, 二段掘り状のものも見られる。



第169図 第11号掘立柱建物跡実測図

柱痕はP₁~P₄、およびP₆~P₈で認めることができた。柱の寸法は、径約18~22cmである。

長軸方向 N-34°-E

覆土 暗褐色土と褐色土を中心に堆積しており、人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色 砂多量、粘土小ブロック中量	7 暗褐色 ローム粒子・砂少量
2 暗褐色 粘土小ブロック少量、砂・粘土小ブロック中量	8 暗褐色 ローム粒子・粘土小ブロック・砂少量
3 暗褐色 砂・褐色土中量	9 褐色 ローム粒子少量
4 褐色 ローム中ブロック・砂中量	10 褐色 ローム粒子少量、硬く締まっている
5 におい黄褐色 砂多量、砂ブロック中量	11 灰褐色 ローム粒子・砂少量、粘土小・中ブロック中量
6 暗褐色 砂多量、砂ブロック中量	

遺物 土師器甕の体部片1点が、細片でP₇から出土している。

所見 B区の北部、台地上の縁辺部に位置し、西側の斜面を望むように構築されている。柱穴規模は、深さは不揃いであるが、断面形と柱間寸法はほぼ規則性が認められる。他の遺構との関連は不明瞭であるが、第4、5、6、7号獨立柱建物跡と同様の立地条件を満たしており、共通した性格を有することも考えられる。時期は、出土遺物が極めて少ないので特定はできないが、平安時代の9世紀前葉の第57号竪穴住居跡に隣接していることから、平安時代の9世紀中葉以降と考えられる。

第12号獨立柱建物跡（第170図）

位置 調査B区北部、A3ga区。

規模 東西1間(2.00m)、南北2間(4.00m)、柱間寸法は桁行1.8~2.1m、梁行約2.2mで、面積は8.00㎡である。柱穴は6か所(P₁~P₃、P₄~P₆の2列)である。柱穴の掘り方は、平面形が径55~74cmの円形で、深さ25~53cmである。断面形は、底面が丸みを帯びる逆台形状を主として、二段掘り状のものも見られる。柱痕はP₃とP₆で認めることができた。柱の寸法は、径約12cmである。

長軸方向 N-12°-E

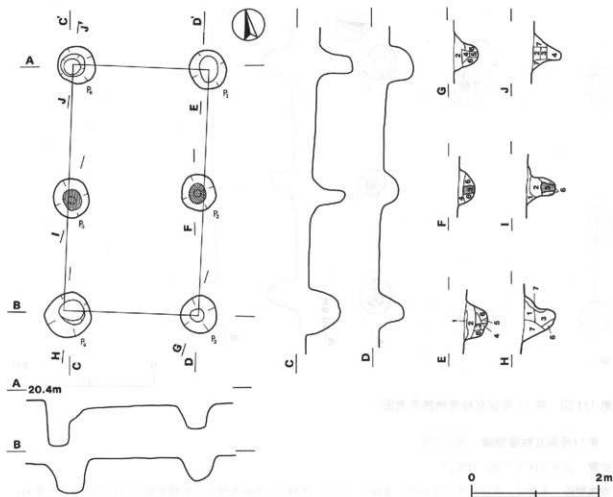
覆土 暗褐色土を中心に堆積しており、人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量	5 黒褐色 ローム小・中ブロック少量
2 暗褐色 ローム小・中ブロック中量	6 灰褐色 ローム中・大ブロック少量
3 暗褐色 ローム粒子少量、粘土質	7 暗褐色 ローム粒子中量
4 暗褐色 ローム小・中ブロック少量	

遺物 土師器甕の口縁部片1点、須恵器甕の体部片1点が出土している。いずれも細片で、P₆から出土している。

所見 B区の北部、台地上の縁辺部に位置し、西側の斜面を望むように構築されている。柱穴規模は、深さは不揃いであるが、断面形と柱間寸法はほぼ規則性が認められる。また、第10、13号獨立柱建物跡に近い規模と構造であるが、性格および遺構間の関連性は不明である。時期は、出土遺物が極めて少ないことから、特定はできないが、奈良時代の8世紀中葉の第58号竪穴住居跡に隣接していることから、奈良時代の8世紀後葉以降と考えられる。



第170図 第12号掘立柱建物跡実測図

第13号掘立柱建物跡 (第171図)

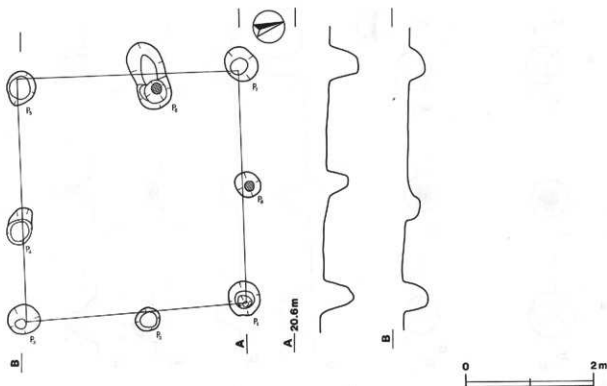
位置 調査B区北部, A4g区。

規模 東西2間(3.80m), 南北2間(3.50m), 柱間寸法は桁行1.5~2.3m, 梁行1.3~2.2mで, 面積は13.30㎡である。側柱構造で, 柱穴は8か所(P₁~P₈)である。柱穴の掘り方は, 平面形が長径(径)39~56cm, 短径35~53cmの円形または楕円形で, 深さ13~53cmである。断面形は, 底面が丸みを帯びる逆台形状を主として, 二段掘り状のものも見られる。柱痕はP₆とP₈で認めることができた。柱の寸法は, 径約14cmである。

長軸方向 N-71'-W

覆土 粘土質で硬く締まった, 暗褐色土と褐色土を中心に堆積しており, 人為堆積である。

所見 B区の北部, 台地上の縁辺部に位置し, 西側の斜面を望むように構築されている。柱穴規模は, 深さは不揃いであるが, 断面形と柱間寸法はほぼ規則性が認められる。第10号掘立柱建物跡と類似する規模であるが, 性格および遺構間の関連性は不明である。時期は, 出土遺物が残っていないこともあり, 特定はできないが, 平安時代の9世紀後葉の第61号竪穴住居跡と隣接していることから, 10世紀以降と考えられる。



第171図 第13号掘立柱建物跡実測図

第14号掘立柱建物跡 (第172図)

位置 調査B区中央部, B3f4区。

重複関係 本跡は, 第40号竪穴住居跡と重複している。本跡が, 第40号竪穴住居跡を掘り込んでいることから, 本跡が新しい。

規模 東西3間(4.60m), 南北2間(3.10m), 柱間寸法は桁行1.4~2.0m, 梁行1.5~2.2mで, 面積は[14.26] m²と推定される。側柱構造で, 柱穴は9か所(P₁~P₉)である。柱穴の掘り方は, 平面形が長径(径)37~80cm, 短径35~63cmの楕円形または円形で, 深さ12~48cmである。断面形は, 逆台形状を呈し, 底面は丸く窪んでいる。柱底はP₁とP₉で認めることができた。柱の寸法は, 径約17~20cmである。

長軸方向 N-70°-W

覆土 暗褐色土と褐色土を中心に堆積しており, 人為堆積である。

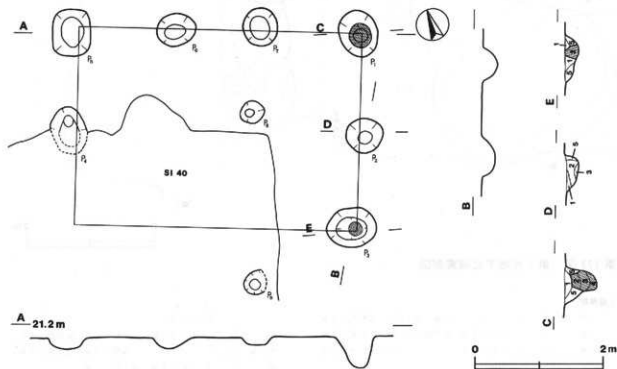
土層解説

1	褐色	ローム粒子・ローム中・大ブロック中量, 焼土粒子少量	3	暗褐色	褐色土中量
2	褐色	ローム粒子多量, ローム中ブロック中量	4	暗褐色	ローム中ブロック少量, 褐色土中量
			5	褐色	ローム中・大ブロック中量

遺物 土師器甕の体部片2点, 須恵器甕の口縁部, 体部, および底部片5点か, P₄から出土している。

所見 B区の中央部, 台地上の平坦地に位置している。柱穴規模は, 深さは不揃いであるが, 断面形と柱間寸法はほぼ規則性が認められる。第40号竪穴住居跡の床面や壁を掘り込んだ柱穴が検出されたが, P₂の桁行方向に対応する柱穴は検出されなかった。これは住居跡の覆土よりも柱穴の深さが浅かったと考えられる。また, P₈とP₉に対応する柱穴も検出されなかったが, 住居跡の竈が破壊されずに残っていることから, 元来柱穴がなかったと思われる。第8号掘立柱建物跡と類似する構造であるが, 柱穴の桁行方向の軸はずれており, 梁行方向の幅も合わないことから, 時期的な差があると考えられる。また, 性格は不明で, 他の遺構との関

連性は不明瞭である。時期は、出土遺物が極めて少ないこともあり、特定はできないが、第40号竪穴住居跡が奈良時代の8世紀中葉と考えられるので、奈良時代8世紀後葉以降と思われる。



第172図 第14号掘立柱建物跡実測図

3 地下式墳

当遺跡からは、地下式墳4基を検出した。地下式墳は調査A区の中央部の北側から東側に位置し、中世と考えられる溝によって区画された、墓域の中に構築されている。以下、それぞれの地下式墳の特徴と出土遺物について記載する。

第1号地下式墳（第173図）（SK-38）

位置 調査A区中央部，F4a1区。

重複関係 第1号堀（SD-1）、第5号溝（SD-8）と重複している。第1号堀が本跡の主室中央を、第5号溝が竪坑を掘り込んでいることから、本跡が古い。

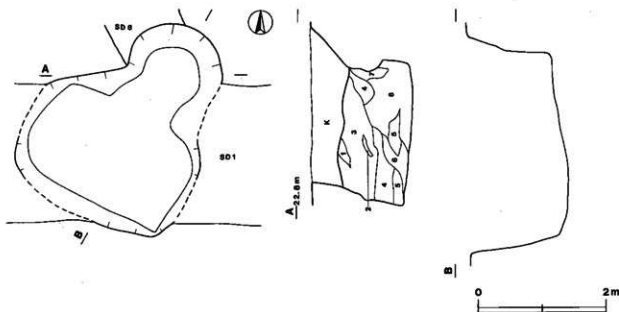
長軸方向 N-38°-E

竪坑 上面は径1.54mの円形で、底面は長径1.10m、短径0.92mの楕円形である。底面は平坦で、主室まで緩やかに下る。確認面からの深さは1.38mである。壁面は、垂直に、その後外傾して立ち上がる。

主室 底面は長軸2.55m、短軸1.55mの長方形で、平坦である。確認面から底面までの深さは1.60mである。

壁面は垂直に立ち上がる。

覆土 8層からなり、人為堆積と考えられる。下層に天井部が崩落した層が見られる。



第173図 第1号地下式墳実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------------|-------|-------------------------|
| 1 明褐色 | ローム小ブロック多量, 焼土粒子・暗褐色土少量 | 褐色土中量 | |
| 2 褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子・暗褐色土中量 | 5 褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子少量, 暗褐色土中量 |
| 3 褐色 | ローム粒子多量, ローム小・中ブロック中量, 焼土粒子少量 | 6 明褐色 | ローム中ブロック・褐色土多量, 焼土粒子少量 |
| 4 明褐色 | ローム小・中・大ブロック多量, 焼土粒子少量 | 7 褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子少量 |
| | | 8 褐色 | ローム大ブロック多量, 焼土粒子少量, 崩落土 |

遺物 覆土中から, 土師器片3点, 礫1点が出土している。

所見 A区北側の中世の墓城の南端に位置している。竪坑の覆土上層が第1号堀によって削られてしまったために, 第5号溝が本跡をどのように掘り込んでいたのか不明である。第3, 4号地下式墳が第6号溝(SD-9)に掘り込まれていること, 第5号溝と第6号溝は同一時期と考えられることから, 第5号溝が本跡を掘り込んで構築されたと考えられる。時期は, 遺構の形態から, 中世と考えられる。

第2号地下式墳(第174図)(SK-47)

位置 調査A区東部, E4c1区。

長軸方向 N-38°-E

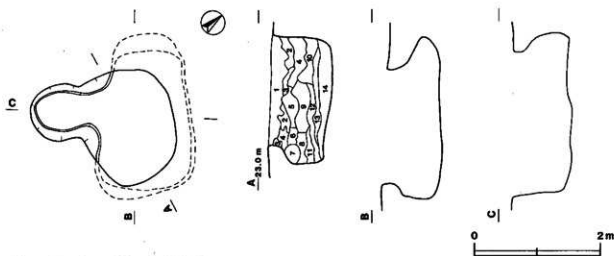
竪坑 上面は長径1.15m, 短径0.90mの楕円形で, 底面は長径0.85m, 短径0.60mの楕円形である。底面は平坦で, 主室まで平坦である。確認面からの深さは0.95mである。壁面は, 垂直に立ち上がる。

主室 底面は長軸2.20m, 短軸1.35mの長方形で, 平坦である。確認面から底面までの深さは0.92mである。壁面はフラスコ状に, 内嚢して立ち上がる。

覆土 14層からなり, 人為堆積と考えられる。下層に天井部が崩落した層が見られる。

遺物 覆土中から, 須恵器片1点, 土師質土器片1点, 礫1点が出土している。

所見 A区北側の中世の墓城の東端に位置している。時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 中世と考えられる。



第174図 第2号地下式墳実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|--------|------------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量 | 9 暗褐色 | ローム粒子・黒色土少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子少量 | 10 黒褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 3 褐色 | ソフトローム大ブロック多量 | 11 暗褐色 | ローム小ブロック・白色粘土小ブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ローム小ブロック少量 | 12 黒褐色 | ローム小ブロック・白色粘土小ブロック少量、
崩落土 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量 | 13 暗褐色 | ローム大ブロック多量、崩落土 |
| 6 褐色 | ローム粒子少量、締まりなし | 14 暗褐色 | ローム大ブロック多量、白色粘土少量、崩落土 |
| 7 褐色 | ローム小ブロック少量、締まりなし | | |
| 8 暗褐色 | ローム粒子・白色粘土粒子少量 | | |

第3号地下式墳 (第175図) (SK-61)

位置 調査A区北部, E4e1区。

重複関係 第6号溝 (SD-9) と重複している。第6号溝が、本跡の主室部を掘り込んでいることから、本跡が古い。

長軸方向 N-10°-E

墓坑 上面は長径2.20m, 短径1.65mの不定形で、底面は長軸1.28m, 短軸0.60mの長方形である。底面は平坦で、主室まで緩やかに傾斜する。確認面からの深さは0.46mである。壁面は、やや外傾して立ち上がる。

主室 底面は長軸2.90m, 短軸1.70mの長方形で、平坦である。確認面から底面までの深さは0.84mである。

壁面は垂直に立ち上がる。

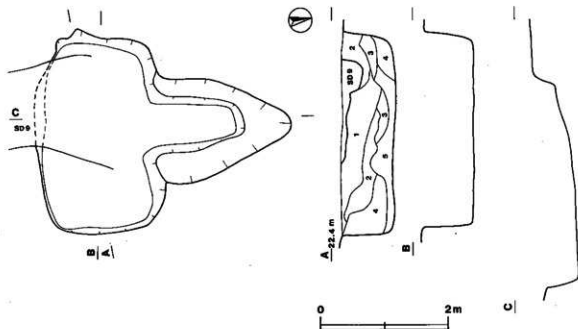
覆土 5層からなり、人為堆積と考えられる。下層に天井部が崩落した層が見られる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・ソフトローム中ブロック中量 | 3 褐色 | ソフトローム中・大ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、ソフトローム中ブロック多量、
褐色土中量 | 4 暗褐色 | ローム中・大ブロック中量、崩落土 |
| | | 5 褐色 | ローム大ブロック多量、崩落土 |

遺物 覆土中から、土師器片7点、須恵器片2点、陶器片(常滑)2点が出土している。

所見 A区北側の中世の墓城の北端に位置している。時期は、遺構の形態や出土遺物から、中世と考えられる。



第175図 第3号地下式墳実測図

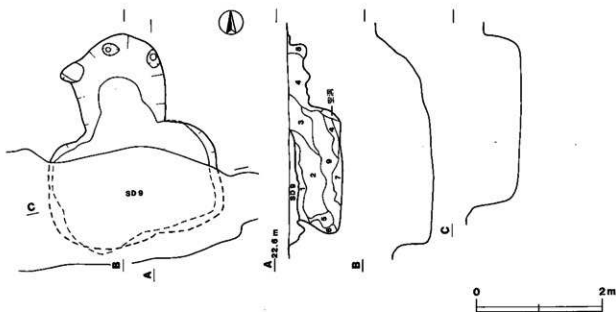
第4号地下式墳 (第176図) (SK-63)

位置 調査A区北部, E4e0区。

重複関係 第6号溝 (SD-9) と重複している。第6号溝が, 本跡の主室部を掘り込んでいることから, 本跡が古い。

長軸方向 N-86°-E

竪坑 上面は径1.40 mほどの円形で, 底面は長径0.80 m, 短径0.67 mの不定形である。底面は平坦で, 主室まで緩やかに傾斜する。確認面からの深さは0.67 mである。壁面は, 緩やかに, 外傾して立ち上がる。また, 竪坑の入口部に, 長径30 cm, 短径20~25 cmの楕円形で, 深さ約20 cmのピットが, 3か所検出されている。

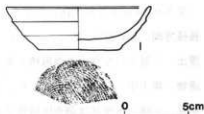


第176図 第4号地下式墳実測図

主室 底面は長軸2.72 m、短軸1.70 mの長方形で、平坦である。

確認面から底面までの深さは0.85 mである。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 9層からなり、人為堆積と考えられる。下層に天井部が崩落した層が見られる。



第177図 第4号地下式墳出土遺物実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|-------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 | ソフトローム中ブロック多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量 | 5 暗褐色 | ソフトローム中ブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ソフトローム中ブロック多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量 | 6 褐色 | 暗褐色土中量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量 | 7 暗褐色 | ソフトローム小・中ブロック多量、崩落土 |
| 4 褐色 | ソフトローム中・大ブロック多量、焼土粒子中量 | 8 暗褐色 | ソフトローム小・中ブロック多量、ハードローム小・中ブロック少量 |
| | | 9 暗褐色 | ローム大ブロック多量、崩落土 |

遺物 覆土中から、土師器片3点、須恵器片1点、1の土師質土器皿1点が出土している。

所見 A区北側の中世の墓域の北西部に位置している。時期は、遺構の形態から、中世と考えられる。

第4号地下式墳出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第177図 1	皿 土師質土器	A 11.5 B 3.5 C 6.4	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部に向け、内壁気味に立ち上がる。	水洗き成形。底部回転未切り後、ナデ。	砂粒 赤褐色 普通	40% P342 外面スス付着 内面二次焼成 覆土中

4 井戸

当遺跡からは、井戸4基を検出した。調査A区から1基、調査B区から3基である。以下、それぞれの井戸の特徴と出土遺物について記載する。

第1号井戸（第179図）（SE-1）

位置 調査A区東部、E4j6区。

規模と形状 平面形は楕円形、断面形は深めの楕円状をしており、確認面から1.50 mの深さまで急傾斜を呈し、そこから下は円筒形である。規模は上面径2.35～3.35 m、底面径0.90～0.98 mで、深さ2.90 mまで掘り込んだところで、壁の崩落の危険があるために、それ以下の調査を打ち切った。

長径方向 N-7'-E

覆土 16層からなり、人為堆積と考えられる。

遺物 覆土中から土師器片7点、須恵器片3点、土師質土器片1点が出土している。

所見 調査A区の中世の墓域の南端に構築されている。時期は、遺構の形態や出土遺物から、中世と考えられる。

第2号井戸（第179図）（SE-4）

位置 調査B区東部、C4g4区。

規模と形状 平面形は円形、断面形は円筒形である。規模は上面径(1.23)～1.38 m、底面径0.80～0.88 mで、

深さ0.80 mまで掘り込んだところで、壁の崩落の危険があるために、それ以下の調査を打ち切った。

長径方向 N-27°-E

覆土 7層からなり、人為堆積と考えられる。

遺物 覆土中から、土師器片3点、須恵器片2点が出土している。

所見 本跡の南東部は調査区域外である。時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代以降と考えられる。

第3号井戸 (第179図) (SE-5)

位置 調査B区中央部, C3er区。

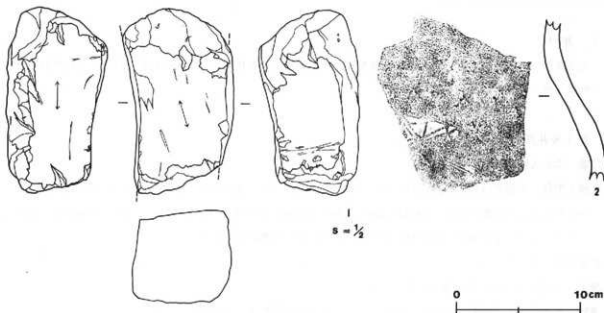
規模と形状 平面形は上面が楕円形、底面が方形である。断面形は確認面から1.00 mの深さまで急傾斜を持った、深めの擋鉢状をしており、そこから下は角柱状である。規模は上面径1.40~2.20 m、底面軸0.88 mほどで、深さ1.90 mまで掘り込んだところで、壁の崩落の危険があるために、それ以下の調査を打ち切った。また、東側傾斜面に、径10 cmほどの円形の掘り込みを、5か所検出している。

長径方向 N-80°-E

覆土 5層からなり、人為堆積と考えられる。

遺物 覆土中から、土師器片32点、須恵器片10点、陶器片(常滑)6点、雲母片岩を中心に礫20点、砥石1点が出土している。1の砥石、2の陶器(常滑)甕の体部片が覆土中からそれぞれ出土している。

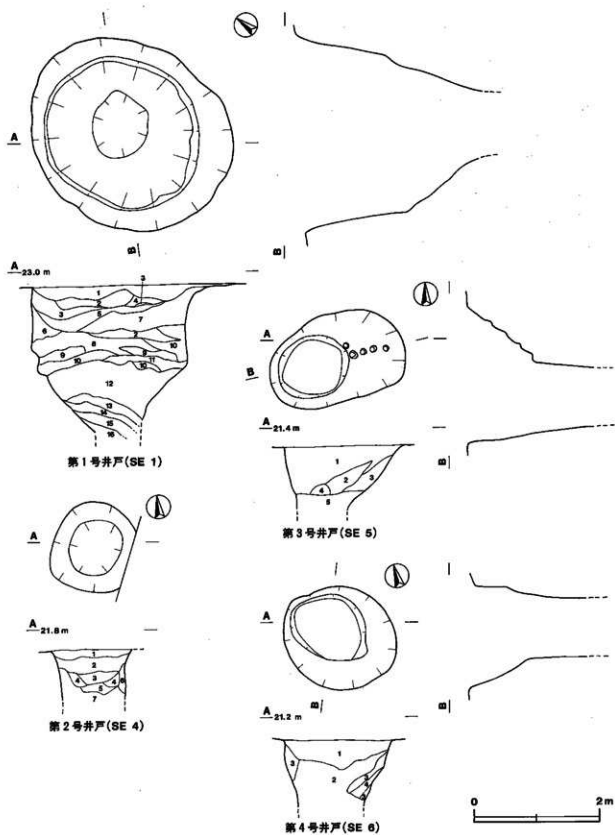
所見 傾斜面の掘り込みは、4か所が縦一直線に並んでいることから、足場として利用した可能性がある。時期は、遺構の形態や出土遺物から、中世以降と考えられる。



第178図 第3号井戸出土遺物実測図

第3号井戸出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第178図 1	砥石	(9.8)	(5.9)	(5.4)	(370)	礫炭岩	覆土中	Q26



第179图 第1, 2, 3, 4号井平面图

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考
第178図 2	環 陶器	胴部	縦線と×印を組み合わせた押印文様が施されている。	TP14 外面褐色、自然釉 内面灰褐色 常滑産 覆土中

第4号井戸 (第179図) (SE-6)

位置 調査B区中央部, B3js区。

重複関係 第35号竪穴住居跡と重複している。本跡が、第35号竪穴住居跡の床面を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と形状 平面形は楕円形、断面形は確認面から0.70mの深さまで急傾斜を持った、深めの楕円状をしており、そこから下は円筒形である。規模は上面径1.65~1.87m、底面径0.86~1.20mで、深さ1.90mまで掘り込んだところで、壁の崩落の危険があるために、それ以下の調査を打ち切った。

長径方向 N-40°-W

覆土 4層からなり、人為堆積と考えられる。

所見 時期は、遺構の形態から、第35号竪穴住居跡が奈良時代の8世紀後葉であることから、平安時代の9世紀以降と考えられる。

第1号井戸土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂少量	9 明褐色	ローム小・中・大ブロック多量
2 暗褐色	ローム粒子・粘土小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子中量	10 明褐色	ハード・ソフトローム中・大ブロック多量
3 暗褐色	ローム小ブロック・粘土小・中ブロック少量	11 褐色	ローム中・大ブロック多量
4 明褐色	ローム中・大ブロック多量、褐色土少量	12 灰黄褐色	粘土大ブロック・褐色土多量
5 暗褐色	粘土小・中ブロック・褐色土中量	13 褐色	粘土大ブロック・褐色土多量
6 暗褐色	粘土小・中ブロック中量	14 褐色	粘土中ブロック多量、暗褐色土中量
7 褐色	ローム小・中・大ブロック多量	15 暗褐色	粘土中ブロック多量、褐色土中量
8 褐色	ローム小・中・大ブロック多量、暗褐色土中量	16 暗褐色	粘土小・中ブロック・褐色土多量

第2号井戸土層解説

1 褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	5 暗褐色	黒褐色土多量
2 暗褐色	ローム粒子少量	6 灰褐色	混っている
3 黒褐色	ローム小ブロック少量	7 暗褐色	ローム小ブロック・暗褐色土少量
4 暗褐色	ローム小ブロック少量		

第3号井戸土層解説

1 黒色	ローム粒子少量、ソフトローム中・大ブロック中量	3 褐色	ローム粒子少量、ローム中ブロック中量
2 黒色	ローム粒子少量	4 暗褐色	ローム粒子少量
		5 暗褐色	ローム粒子少量、焼土小ブロック中量

第4号井戸土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、粘土小・中ブロック中量	3 暗褐色	粘土中ブロック多量
2 黒褐色	ローム粒子少量、焼土小・中ブロック・粘土小・中ブロック中量	4 暗褐色	粘土中ブロック中量

5 大形竪穴状遺構

当遺跡からは、大形竪穴状遺構2基を検出した。調査A区から1基、調査B区から1基である。大形竪穴状遺構は、茨城県南部から千葉県北部にかけて検出される例が多く、これまで「井戸または井戸状遺構」として報告されてきた。ここでは「大形竪穴状遺構」という名称で扱うことにする。以下、それぞれの特徴と出土遺物について記載する。

第1号大形竪穴状遺構 (第180図) (SE-2)

位置 調査A区北部, E3dr区。

重複関係 墓域を区画・形成していると思われる第5号溝(SD-8)と重複している。第5号溝が, 本跡の南西部を掘り込んでいることから, 本跡が古い。

規模と形状 平面形は楕円形, 断面形は深めの楕円状で, 底面に一段の掘り込みを持つ。底面は平坦である。

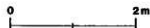
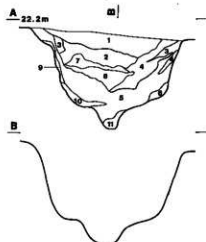
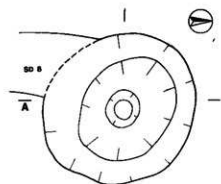
規模は上面径2.30~2.60 m, 低面径1.45~1.76 m, 掘り込み面の径0.30 mで, 深さ1.52 mである。

長径方向 N-38°-W

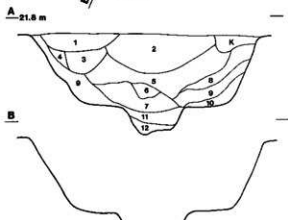
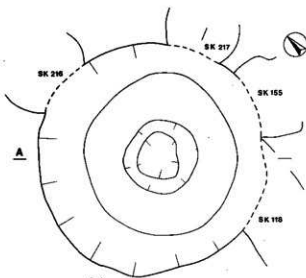
覆土 11層からなり, 人為堆積と考えられる。低面部から, 多量の灰, 炭化材, 焼土が出土している。下部の掘り込みは白色粘土層まで掘り込んでいる。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------|----------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 7 暗褐色 | 黒色土中量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子・黒色土少量 | 8 褐色 | 黒色土中量 |
| 3 暗褐色 | 黒色土少量 | 9 褐色 | 黒色土少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子・黒色土多量 | 10 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 5 褐色 | ソフトローム小アブロック多量 | 11 におい褐色 | ローム小・中アブロック中量, 炭化粒子・粘土小・中ブロック多量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量, 黒色土中量 | | |



第180図 第1, 2号大形竪穴状遺構実測図



遺物 覆土中から、土師器片12点、須恵器片2点、土師質土器片1点が出土している。1と2の土師器甕が覆土中からそれぞれ出土している。

所見 性格については不明であるが、遺構の形態や出土遺物から、時期は平安時代と考えられる。

第2号大形竪穴状遺構（第180図）（SE-3）

位置 調査B区東部、C4区。

重複関係 第118、155、216、217号土坑と重複している。第118、155、216、217号土坑が、本跡の北部から南部にかけて掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と形状 平面形は円形、断面形は深めの楕円状で、底面に一段の掘り込みを持つ。底面は平坦である。規模は上面径3.65~3.70m、低面径2.38~2.45m、掘り込み面の径0.70mで、深さ1.78mである。

長径方向 N-0°

覆土 12層からなり、人為堆積と考えられる。全体的に、炭化粒子や焼土粒子を含んでいる。下部の掘り込みは白色粘土層まで掘り込んでいる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量	7 暗褐色	ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	8 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
3 暗褐色	ローム粒子・ローム中ブロック少量	9 暗褐色	ローム小ブロック中量、炭化小ブロック少量
4 暗褐色	ローム粒子少量	10 灰褐色	ローム粒子少量、硬く締まっている
5 暗褐色	ソフトローム小ブロック多量	11 暗褐色	ローム粒子少量、じっとり湿っている
6 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	12 灰褐色	ローム粒子少量、びしょびしょに湿っている

遺物 覆土中から、土師器片78点、須恵器片50点、土師質土器片6点、礫1点が出土している。3の須恵器環、4と5の須恵器高台付環、6と7の須恵器鉢が覆土中から、8の土師器小形甕が覆土下層からそれぞれ出土している。

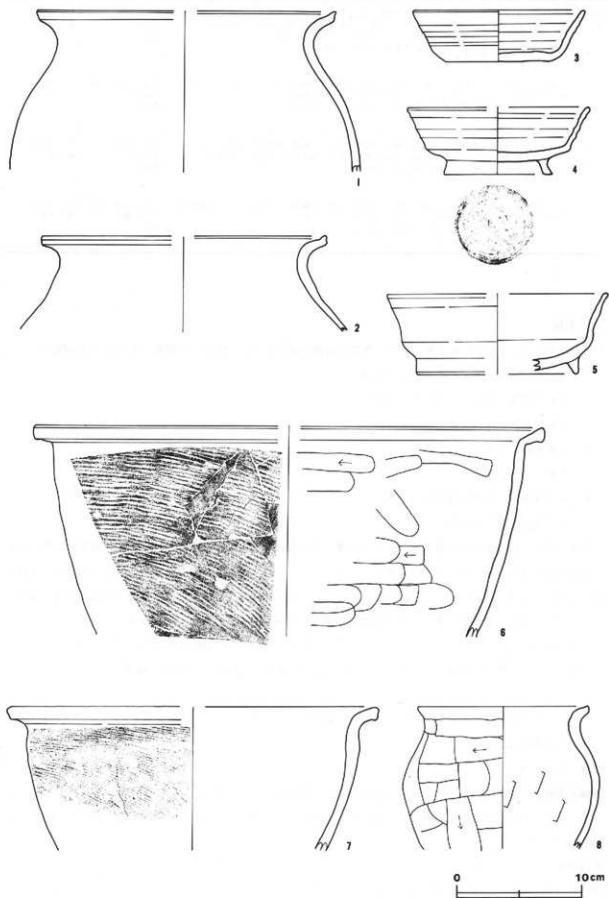
所見 性格については不明であるが、遺構の形態や出土遺物から、時期は平安時代と考えられる。

第1号大形竪穴状遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第181図 1	土師器	A [23.8]	体部から口縁部の破片。体部は内側気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒 にふい赤褐色 普通	5% P374 覆土中
		B (12.8)				
2	土師器	A [22.6]	体部から口縁部の破片。口縁部は外反して、中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石 石英 霏母 砂粒 にふい褐色 普通	5% P375 覆土中
		B (7.6)				

第2号大形竪穴状遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第181図 3	須恵器	A 13.6	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面口ロナデ。底部回転ヘラ削りナデ。	長石 砂粒 黄灰色 普通	40% P376 覆土中
		B 4.2				
		C 8.4				
4	高台付須恵器	A [14.6]	高台部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、下位に稜を持つ。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面口ロナデ。底部回転ヘラ削り。高台部貼り付け、口ロナデ。	長石 砂粒 黄灰色 普通	60% P377 底部外面へラ削り 覆土中
		B 5.4				
		D 8.6				
		E 1.3				



第181图 第1, 2号大形竖穴状遗物出土物实测图

第181図	高台付坏 須 墓 器	A[17.6] B 6.4 D[13.0] E 1.4	高台部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、下位に稜を持つ。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ、底部回転ヘラ削り。高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 砂粒 灰白色 良好	30% P378 覆土中
6	鉢 須 墓 器	A[40.4] B(16.7)	体部から口縁部の破片。体部は外傾して立ち上がる。口縁部は強く外反して、中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ、体部外面平行印き。内面ナデ、アテ具概有り。	長石 雲母 砂粒 灰白色 普通	5% P380 覆土中
7	鉢 須 墓 器	A[29.0] B(11.5)	体部から口縁部の破片。体部は外傾して立ち上がる。口縁部は強く外反して、中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ、体部外面平行印き、内面ナデ。	雲母 砂粒 灰白色 普通	5% P381 覆土中
8	小形 甕 土 器	A 13.6 B(11.4)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がる。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	長石 石英 砂粒 灰白色 普通	40% P379 覆土下層

6 土坑

当遺跡からは、土坑 350 基を検出した。性格や時期の違いについて検討した結果、次のように分類した。

- (1) 楕円形で墓塚と考えられる土坑…25 基
- (2) 円形で墓塚と考えられる土坑…140 基
- (3) 方形竪穴状遺構…2 基
- (4) 火葬施設…1 基
- (5) 方形土坑…65 基
- (6) 粘土探器坑、粘土貯蔵土坑…5 基
- (7) その他の土坑…112 基

墓塚と考えられる土坑の判断基準は、土坑の覆土中に人骨や骨片等が含まれていること、副葬品と考えられる遺物が出土すること、以上の2点を満たしていることを前提とした。しかし、実際には、土坑の出土遺物は細片が多く、全体的に数が少なかったことから、上記の条件を満たした墓塚と形状や覆土の堆積状況が類似している土坑、周辺に副葬品と考えられる遺物が出土した土坑についても、総じて土壇墓と考えることとした。

以下、(1)～(6)について、形状のしっかりしたものや特徴のあるもの、遺物が多いものについて文章で記載し、その他のものは一覧表に掲載した。また、(7)については第200～204図と一覧表に掲載した。

- (1) 楕円形で墓塚と考えられる土坑…25 基 (第182、183図)

第17 B号土坑

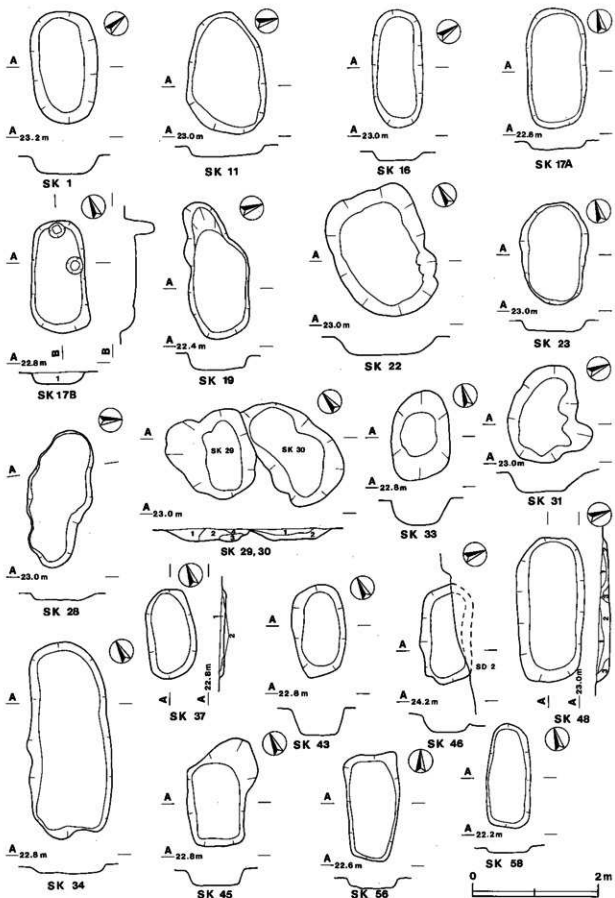
位置 調査B区北東部、E4h区。

規模と形状 平面形は、長径1.76 m、短径0.86 mの楕円形で、深さ20 cmである。底面は平坦で、楕円形を呈している。壁面は緩やかに外傾して、立ち上がっている。北側には一辺14 cmの方形で、深さ47 cmのビットが確認された。

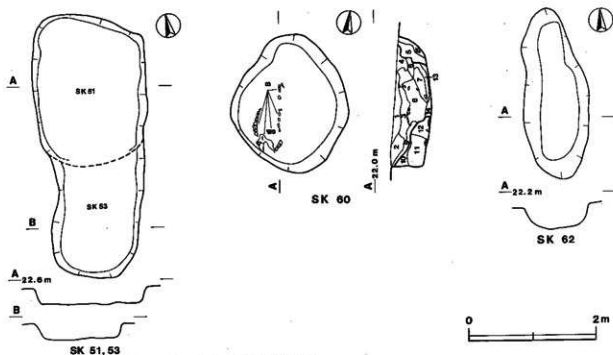
長径方向 N-23°-E

覆土 I層からなり、人為堆積と考えられる。

所見 時期は、出土遺物がないことから特定できないが、中・近世と考えられる。



第 182 図 楕円形で墓壇と考えられる土坑実測図(1)



第183図 楕円形で墓塚と考えられる土坑実測図(2)

第37号土坑

位置 調査A区北東部, E4es区。

規模と形状 平面形は、長径1.42m, 短径0.77mの楕円形で、深さ8cmである。底面は平坦で、楕円形を呈している。壁面は緩やかに外傾して、立ち上がっている。

長径方向 N-80°-W

覆土 2層からなり、人為堆積と考えられる。

遺物 覆土中から、古銭「紹豊元寶」1点が出土している。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、中世と考えられる。

第60号土坑

位置 調査A区北部, E3da区。

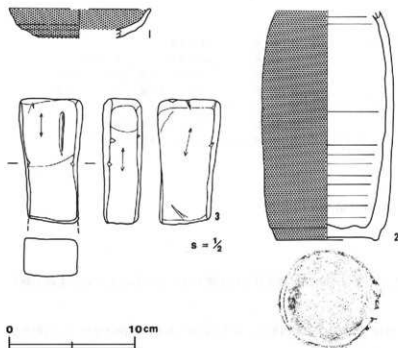
規模と形状 平面形は、長径2.18m, 短径1.84mの楕円形で、深さ60cmである。底面は平坦で、楕円形を呈している。壁面は外傾して、立ち上がっている。

長径方向 N-11°-W

覆土 15層からなり、人為堆積と考えられる。

遺物 土師器片3点, 瀬戸・美濃系と志野系の陶器片5点, 銅製品1点, 砥石1点, 人骨(歯), 獣骨(牛)が出土している。1の陶器(志野系)皿, 2の陶器(瀬戸系)中瓶, 3の砥石が覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、土層の状況から、同一坑内で複数回にわたって使用されたものと考えられる。最初に使用されていたのは、5, 10-12, 15層の土坑であり、出土した獣骨は解体したものを廃棄したものと思われる。時期は不明であるが、近世以前の可能性がある。後から掘り込まれたのは、1-4, 6-9, 13, 14層の土坑であり、人骨が出土したことや底面の状況から、座棺による墓塚の可能性が高い。時期は、遺構の形態や出土遺物から、近世の17-18世紀と考えられる。



第184図 精円形で墓瘡と考えられる土坑出土遺物実測図

第60号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第184図 1	皿 陶器	A[11.4] B(2.2)	体部から口縁部の破片。体部から11 縁部にかけて、内彎気味に立ち上がり、 中位に梗を持つ。	水挽き成形。	砂粒 にぶい黄褐色 灰白色(軸) 普通	10% P340 志野系(17C) 覆土中
2	中 陶器	B(18.2) C 8.2	底部から体部の破片。上げ底。体部 は内彎気味に立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り後、ナ ズ。	砂粒 淡黄褐色 明黄褐色(軸) 普通	60% P341 外部灰物 瀬戸系(18C未) 覆土中

図版番号	器種	計測値				重量(g)	石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)					
3	砥石	(6.6)	(3.3)	(2.1)	(76)	凝灰岩	覆土中	Q47	

第17号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック少量

第37号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、ソフトローム小ブロック少量
2 明褐色 ローム小・中ブロック中量

第29号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム小・中ブロック中量
2 褐色 ローム小・中ブロック中量
3 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
4 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量

第48号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量
2 褐色 ローム粒子・ローム中ブロック多量
3 明褐色 ローム小・中ブロック多量

第38号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量
2 明褐色 ローム小・中ブロック多量

第 80 号土坑土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量、ざくざくしている	9	暗褐色	ローム粒子多量
2	褐色	ローム粒子多量	10	暗褐色	ローム粒子多量、ごつごつしている
3	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	11	暗褐色	ローム大ブロック多量、ごつごつしている
4	暗褐色	ローム粒子・ローム小ブロック多量	12	暗褐色	ローム小ブロック多量、ごつごつしている
5	褐色	ローム小ブロック少量、ごつごつしている	13	褐色	ローム粒子多量
6	暗褐色	ローム粒子少量	14	灰褐色	ローム小ブロック少量、粘性有り
7	暗褐色	ローム小ブロック多量、ざくざくしている	15	褐色	ローム大ブロック多量、ごつごつしている
8	暗褐色	ローム粒子中量			

(2) 円形で墓塚と考えられる土坑…140基 (第 185～190 図)

第 10 号土坑

位置 調査A区東部、E4j7区。

重複関係 本跡は、第9号土坑と重複している。本跡が、第9号土坑を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と形状 平面形は、長径1.24 m、短径1.13 mの不整形円で、深さ31 cmである。底面は平坦で、円形を呈している。壁面は垂直に、立ち上がっている。

長径方向 N-72°-W

覆土 4層からなり、人為堆積と考えられる。

所見 時期は、遺構の形態から、近世と考えられる。

第 83 号土坑

位置 調査B区南部、D3i7区。

規模と形状 平面形は、長径1.22 m、短径1.11 mの不整形円で、深さ24 cmである。底面は平坦で、円形を呈している。壁面は外傾して、立ち上がっている。

長径方向 N-37°-E

覆土 5層からなり、人為堆積と考えられる。底面に黒色土がうっすらと堆積している。

遺物 覆土中から、土師器片2点、鉄釘片3点が出土している。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、近世と考えられる。

第 165 号土坑

位置 調査B区中央部、B3i8区。

重複関係 本跡は、第193、261、282号土坑と重複している。それぞれの切り合いが不明なことから、新旧関係は確定できない。

規模と形状 平面形は、長径1.25 m、短径1.19 mの円形で、深さ30 cmである。底面は平坦で、円形を呈している。壁面は外傾して、立ち上がっている。

長径方向 N-50°-E

覆土 4層からなり、人為堆積と考えられる。

遺物 覆土中から、土師器片2点、古銭1点が出土している。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、近世と考えられる。

第173号土坑

位置 調査B区中央部, B3is区。

重複関係 本跡は, 第226, 282号土坑と重複している。本跡が, 第226号土坑と第282号土坑を掘り込んでい
ることから, 本跡が新しい。

規模と形状 平面形は, 長径1.60 m, 短径1.42 mの円形で, 深さ44 cmである。底面は平坦で, 円形を呈して
いる。壁面は外傾して, 立ち上がっている。

長径方向 N-0°

覆土 2層からなり, 人為堆積と考えられる。

遺物 覆土中から, 土師器片5点, 1の土師質土器皿1点が出土している。

所見 時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 近世と考えられる。

第175号土坑

位置 調査B区東部, C4ds区。

規模と形状 平面形は, 径1.29 mの円形で, 深さ51 cmである。底面は平坦で, 円形を呈している。壁面は外
傾して, 立ち上がっている。

長径方向 N-0°

覆土 5層からなり, 人為堆積と考えられる。

遺物 覆土中から, 土師器片8点, 須恵器片10点, 2の土師質土器皿1点が出土している。

所見 時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 近世と考えられる。

第247号土坑

位置 調査B区中央部, B3ds区。

規模と形状 平面形は, 長径1.50 m, 短径1.42 mの円形で, 深さ16 cmである。底面は平坦で, 円形を呈して
いる。壁面は緩やかに外傾して, 立ち上がっている。

長径方向 N-52°-W

覆土 3層からなり, 人為堆積と考えられる。

遺物 覆土中から, 土師器片1点, 須恵器片1点, 3の土師質土器皿1点が出土している。

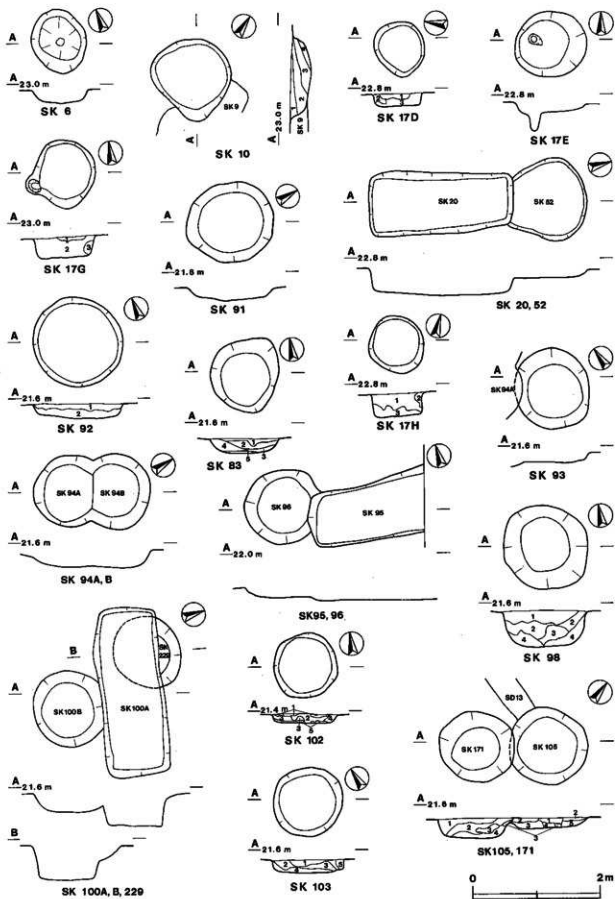
所見 時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 近世と考えられる。

第173号土坑出土遺物観察表

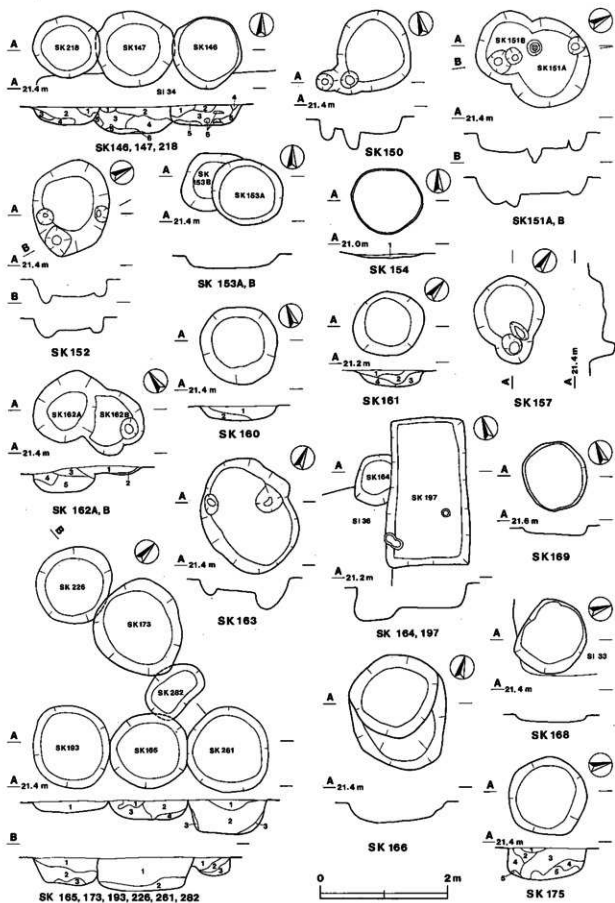
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第191図 1	皿 土師質土器	A[8.2] B 1.9 C[5.4]	底部から口縁部の破片。平底。体部 から口縁部にかけて, 直線的に外傾し て立ち上がる。	口縁部, 体部内・外面横ナデ。底部 ナデ。	砂粒 褐色 普通	10% P360 覆土中

第175号土坑出土遺物観察表

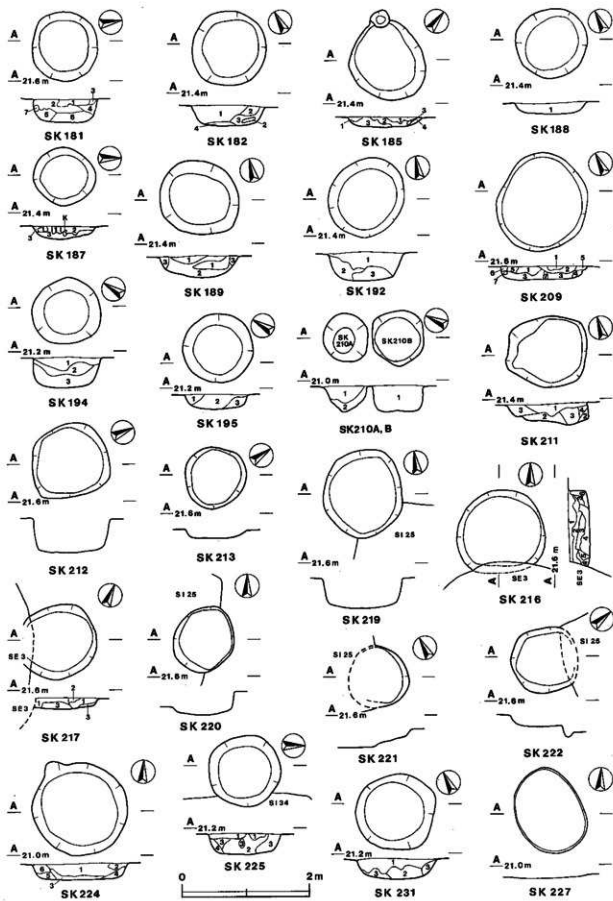
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第191図 2	皿 土師質土器	A[8.8] B 2.0 C[5.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部 から口縁部にかけて, 直線的に外傾し て立ち上がる。	水挽き成形。底筋ナデ。	雲母砂粒 スコリア 褐色 普通	15% P361 覆土中



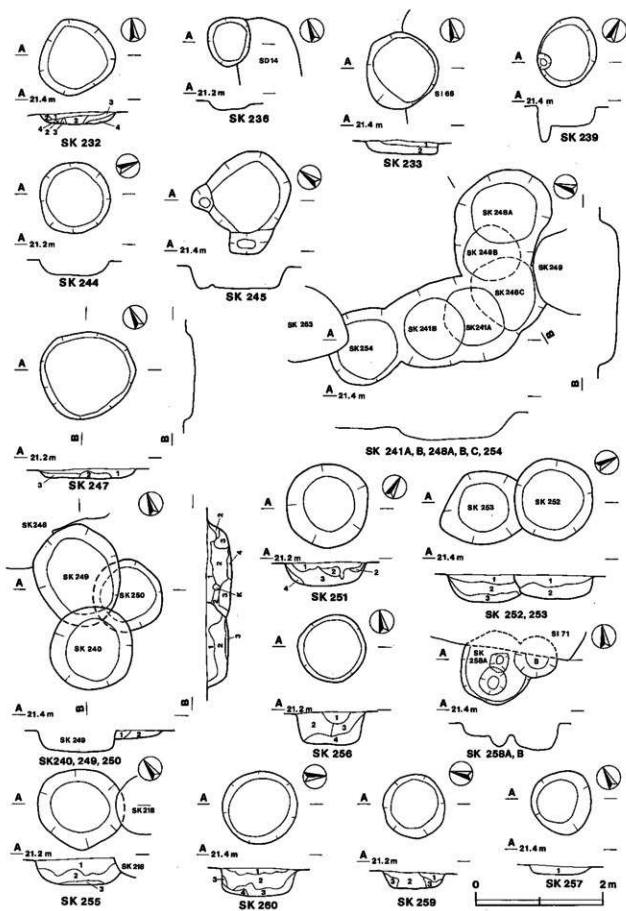
第185図 円形で基壇と考えられる土坑実測図(1)



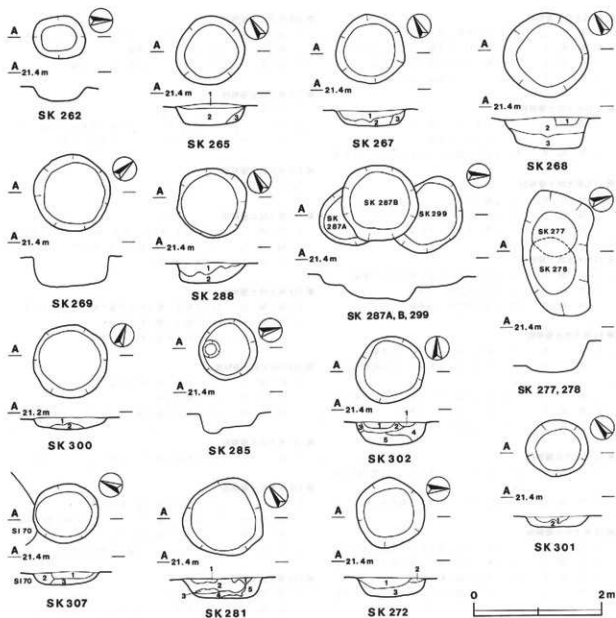
第 187 図 円形で墓塚と考えられる土坑実測図(3)



第188図 円形で墓壇と考えられる土坑実測図(4)



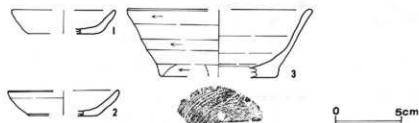
第189図 円形で墓壇と考えられる土坑実測図(5)



第190図 円形で墓墳と考えられる土坑実測図(6)

第247号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第191図 3	皿 土質質土器	A [14.2] B 5.4	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。端部はわずかに外反する。	水残き成形。底部回転糸切り後、十字。	砂粒 スコリア 橙色 普通	20% P367 覆上中



第191図 円形で墓墳と考えられる土坑出土遺物実測図

第10号土壌土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子多量、締まり有り
- 2 暗褐色 ローム小ブロック多量、さくさくしている
- 3 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム中ブロック多量、締まり有り

第17D号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム大ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小・中ブロック中量

第17G号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小・中ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム中・大ブロック中量

第17H号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック中量
- 2 黒褐色 ローム中・大ブロック中量
- 3 灰褐色 ローム小・中ブロック多量

第83号土壌土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量
- 2 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・暗褐色土少量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 4 黒褐色 ソフトローム小ブロック多量
- 5 黒褐色 ソフトローム小ブロック中量

第82号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック中量、黒褐色土少量

第88号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中・大ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子中量、ローム中・大ブロック多量

第102号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、しゃりしゃりしている
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 灰褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、硬く締まっている
- 5 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量

第103号土壌土層解説

- 1 褐色 ローム小・中ブロック・暗褐色土中量
- 2 褐色 ローム小ブロック・暗褐色土中量
- 3 褐色 ハードローム中ブロック・暗褐色土中量
- 4 褐色 炭化粒子少量、暗褐色土多量
- 5 褐色 ローム中ブロック・暗褐色土中量

第105号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム大ブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量
- 3 褐色 ローム粒子多量、暗褐色土中量
- 4 明褐色 ローム粒子多量、ローム大ブロック中量
- 5 明褐色 ローム中・大ブロック多量

第108号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量

第109号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小・中ブロック中量、黒褐色土少量
- 3 褐色 ローム小・中ブロック・黒褐色土中量

第118号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量

第113号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、粘土質、締まり有り
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、粘土質
- 3 灰褐色 粘土質、硬く締まっている

第114号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、硬く締まっている
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、粘土粒子中量

第128号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子少量、粘土小・中ブロック中量

第127号土壌土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、ローム中・大ブロック多量

第138号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子少量、柔らかい
- 4 暗褐色 ローム小ブロック中量、黒褐色土多量

第135号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック・黒褐色土少量
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック中量

第137号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 4 褐色 ローム大ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量

第171号土壌土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子多量、暗褐色土少量
- 3 暗褐色 褐色土中量
- 4 褐色 焼土粒子少量、暗褐色土中量

第142号土壌土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量、締まり有り

第 144 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック・粘土中ブロック中量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック中量
- 5 褐色 ローム粒子中量, ローム中・大ブロック多量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量

第 145 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム小・中ブロック中量, 焼土粒子・焼土小・中ブロック多量, 粘土中ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック多量, 焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小・中ブロック多量, 焼土粒子少量
- 4 暗褐色 焼土粒子多量, 褐色土中量
- 5 褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・暗褐色土多量
- 6 褐色 ローム大ブロック少量

第 147 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, ローム中ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック多量, 粘土小ブロック少量
- 4 褐色 粘土小ブロック少量
- 5 暗褐色 褐色土中量
- 6 黒褐色 ローム中ブロック・粘土小ブロック中量

第 154 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量

第 160 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量, 黒褐色土少量, 硬く締まっている

第 161 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 硬く締まっている
- 3 灰褐色 ローム小ブロック少量, 硬く締まっている
- 4 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック少量

第 162 A, B号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量, 締まり有り
- 3 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・暗褐色土少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック中量
- 5 暗褐色 ローム粒子・ローム大ブロック・焼土粒子少量, ローム小・中ブロック多量

第 165 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・黒褐色土少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック・黒褐色土少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック中量, 黒褐色土少量
- 4 暗褐色 ローム中・大ブロック・褐色土中量

第 173 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム中・大ブロック・粘土中・大ブロック多量
- 2 褐色 ローム中・大ブロック多量, 粘土大ブロック少量, 暗褐色土中量

第 175 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・ローム中ブロック多量
- 2 褐色 ローム粒子・ローム中ブロック多量, 焼土粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム中・大ブロック多量
- 4 褐色 ローム粒子・焼土粒子中量
- 5 褐色 ローム粒子・ローム中・大ブロック・焼土粒子中量

第 181 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量, ローム小・中ブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量, 締まり有り
- 5 暗褐色 ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム中ブロック・ローム大ブロック・粘土粒子少量
- 7 褐色 ローム大ブロック少量

第 182 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック多量
- 2 褐色 ローム粒子・ローム中ブロック多量, 焼土粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 4 暗褐色 ローム小・中ブロック少量

第 185 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック多量
- 4 明褐色 ローム中ブロック多量

第 187 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 3 灰褐色 ローム粒子・ローム中ブロック・黒褐色土少量

第 188 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック多量, 焼土粒子中量

第 189 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム中・大ブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中・大ブロック多量
- 3 褐色 焼土粒子少量, 明褐色土多量

第 192 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム中ブロック・焼土粒子・粘土粒子・粘土小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック・粘土粒子少量

第 193 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック少量

第 194 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム小・中ブロック中量
- 2 褐色 ローム粒子多量、ローム中・大ブロック・粘土中ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック多量、粘土小ブロック中量

第 195 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小・中ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量、ローム小・中ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小・中ブロック・粘土小・中ブロック中量

第 200 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・炭化小ブロック中量
- 2 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム大ブロック・炭化粒子多量
- 4 褐色 ローム粒子多量、締まっている
- 5 褐色 ローム粒子多量
- 6 明褐色 ローム粒子多量、ローム大ブロック中量
- 7 ぶい褐色 ローム大ブロック中量

第 210 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム中ブロック・粘土小・中ブロック多量

第 211 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム大ブロック中量、焼土粒子少量
- 2 褐色 ローム小・中ブロック・暗褐色土中量
- 3 褐色 ローム大ブロック・暗褐色土中量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック中量

第 216 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック中量、黒褐色土少量
- 4 暗褐色 ローム小・中ブロック・黒褐色土少量
- 5 黒褐色 褐色土中量
- 6 黒褐色 ローム粒子多量

第 217 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、暗褐色土中量
- 2 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量、締まり有り
- 3 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量

第 218 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック多量、焼土粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム大ブロック中量
- 4 暗褐色 ローム小・中ブロック・黒色土中量、焼土小・中ブロック少量

第 224 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック・粘土中・大ブロック多量
- 2 暗褐色 粘土小ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム中・大ブロック多量、焼土粒子中量
- 4 暗褐色 ローム中・大ブロック多量、焼土粒子中量
- 5 褐色 ローム中・大ブロック・粘土中ブロック多量
- 6 褐色 ローム中・大ブロック多量

第 229 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小・中ブロック少量
- 2 褐色 ローム中・大ブロック・明褐色土多量
- 3 暗褐色 ローム粒子・褐色土中量
- 4 褐色 ローム粒子多量、ローム小・中ブロック中量

第 226 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・ローム小・中・大ブロック多量
- 2 褐色 ローム粒子・ローム小・中・大ブロック多量、粘土中ブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子多量

第 231 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム中ブロック・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・ローム中ブロック中量
- 3 黒褐色 ローム粒子・ローム中ブロック中量、締まり有り

第 232 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小・中ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子中量、焼土中ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック多量、焼土粒子少量

第 233 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小・中ブロック中量

第 240 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量、焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

第 247 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック中量
- 2 灰褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量、粘土質

第 248 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小・中ブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム中・大ブロック多量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

第 250 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小・大ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量

第 251 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック中量
- 2 褐色 ローム粒子多量、ローム小・中ブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム中・大ブロック中量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック中量

第 252 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム大ブロック・焼土粒子少量

第 253 号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子・粘土小・中ブロック少量、ローム小ブロック中量
- 2 暗 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・粘土小・大ブロック少量
- 3 黒 褐色 ローム粒子・砂少量

第 255 号土坑土層解説

- 1 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック中量
- 2 暗 褐色 ローム粒子・ローム中ブロック中量、焼土粒子少量
- 3 黒 色 ローム小ブロック少量

第 256 号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子・焼土粒子中量
- 2 暗 褐色 ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック中量
- 3 暗 褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック・焼土粒子少量
- 4 極暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック少量

第 257 号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量、ローム小・中ブロック中量

第 258 号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子・ローム大ブロック少量
- 2 暗 褐色 ローム小・中ブロック中量
- 3 灰 褐色 ローム小・中・大ブロック少量

第 259 号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック・焼土粒子少量
- 2 暗 褐色 ローム中ブロック・粘土小ブロック中量
- 3 暗 褐色 ローム粒子少量、ローム小・中ブロック中量
- 4 暗 褐色 ローム中ブロック・粘土中ブロック少量

第 261 号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子少量
- 2 暗 褐色 ローム粒子・粘土粒子・粘土小ブロック少量、ローム小ブロック中量
- 3 暗 褐色 ローム粒子・粘土粒子少量

第 263 号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 3 暗 褐色 ローム粒子少量

第 267 号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 2 暗 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量、締まり有り
- 3 暗 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量

第 268 号土坑土層解説

- 1 褐 色 ローム粒子中量、粘土小・中ブロック多量
- 2 褐 色 ローム粒子・ローム中ブロック多量
- 3 褐 色 ローム粒子・ローム中・大ブロック・粘土中ブロック多量、黒色土少量

第 272 号土坑土層解説

- 1 黒 褐色 ローム小・中ブロック少量
- 2 黒 褐色
- 3 極暗褐色 ローム中ブロック中量

第 281 号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量、ぼろぼろしている
- 2 褐 色 ローム粒子・ローム中ブロック少量、ローム大ブロック中量
- 3 暗 褐色 ローム粒子少量
- 4 褐 色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 5 褐 色 ローム粒子・ローム小・大ブロック少量

第 288 号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 2 褐 色 ローム中・大ブロック多量、焼土粒子少量

第 306 号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子中量、ローム小・中ブロック少量
- 2 褐 色 ローム粒子少量、ローム小・中ブロック中量

第 301 号土坑土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子中量
- 2 暗 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量

第 302 号土坑土層解説

- 1 褐 色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 2 黒 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 3 暗 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量、締まっている
- 4 黒 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量、暗褐色土少量
- 5 黒 褐色 ローム粒子少量、ローム小・中ブロック中量

第 307 号土坑土層解説

- 1 褐 色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 2 褐 色 ローム粒子・暗褐色土中量
- 3 褐 色 ローム粒子多量、ローム中・大ブロック中量

第 320、324 号土坑土層解説 (第 186 図)

- 1 暗 褐色 ローム粒子・ローム中ブロック中量、しゃりしゃりしている
- 2 暗 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ぼろぼろしている
- 3 灰 褐色 ローム粒子中量
- 4 暗 褐色 ローム小ブロック中量、硬く締まっている

(3) 方形竪穴状遺構 (第 192 図)

第 1 号方形竪穴状遺構 (SK-39)

位置 調査A区北東部、E4f区。

規模と形状 平面形は、長軸2.07 m、短軸1.88 mの不整長方形で、深さ51 cmである。底面は平坦で、長方形を呈している。壁面は外傾して、立ち上がっている。南壁中央部に、長さ60 cm、幅65 cmのスロープ状の出入口施設が付設されている。ピットは2か所 (P₁, P₂)。長径30 cm、短径20~25 cmの楕円形で、深さ26 cm前後である。

長軸方向 N-6°-E

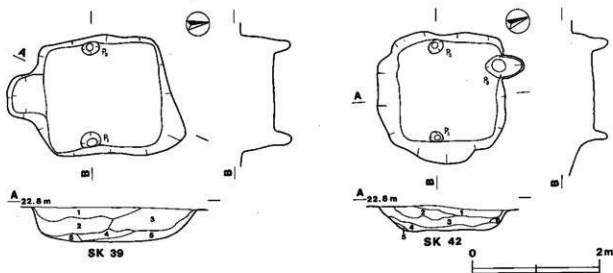
覆土 5層からなり、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック少量 | 4 褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小・中ブロック中量 | 5 褐色 | ローム粒子多量、ハードローム小ブロック・焼土 |
| 3 褐色 | ローム粒子・ローム小・中ブロック中量、焼土粒子多量 | | 粒子・焼土小ブロック・炭化粒子中量 |

遺物 覆土中から、土師器片12点、須恵器片8点が出土している。

所見 遺構の形態や出土遺物から、調査A区の墓域に伴う埋葬施設の可能性が高いと思われる。時期は中世と考えられる。



第192図 第1, 2号方形竪穴状遺構実測図

第2号方形竪穴状遺構 (SK-42)

位置 調査A区北東部, E4fs区。

規模と形状 平面形は、長軸2.04 m、短軸1.98 mの不整方形で、深さ35 cmである。底面は平坦で、方形を呈している。壁面は外傾して、立ち上がっている。ピットは3か所 (P₁~P₃)。P₁とP₂は、長径20~24 cm、短径15~19 cmの楕円形で、深さ22~24 cm、P₃は、長径62 cm、短径34 cmの楕円形で、深さ10 cmである。

長軸方向 N-71°-W

覆土 6層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・焼土粒子少量 | 4 黒褐色 | ローム粒子多量、炭化物(木炭)少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量 | 5 暗褐色 | 粘土大ブロック多量 |
| 3 暗暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック・炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム小ブロック・炭化粒子少量 |

遺物 覆土中から、骨粉が出土している。

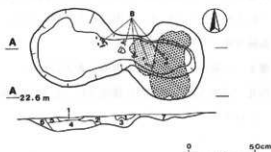
所見 遺構の形態や出土遺物から、調査A区の墓域に伴う埋葬施設の可能性が高いと思われる。時期は中世と考えられる。

(4) 火葬施設 (第193図)

第1号火葬施設 (SK-18)

位置 調査A区北部, E4f区。

規模と形状 本跡は、吸気坑と燃焼坑の2基の土坑から構成されている。吸気坑は、東西に長軸を持ち、平面形は、長径0.75 m、短径0.60 mの楕円形で、深さ11 cmである。燃焼坑は、南北に長軸を持ち、平面形は、長径0.62 m、短径0.60 mの円形で、深さ5 cmである。底面は共に皿状であり、壁面は緩やかに外傾して、立ち上がっている。また、吸気坑と燃焼坑は、長さ20 cm、幅16 cmの通気孔を介して繋がれており、通気孔と燃焼坑の底面は火熱を受けて赤変している。通気孔から燃焼坑にかけて多量の焼土塊が広がり、燃焼坑の中央部には多量の炭化材が確認された。



第193図 第1号火葬施設実測図

長径方向 (吸気坑) N-71°-W, (燃焼坑) N-0°

覆土 7層からなり、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 褐色	ローム粒子多量、ソフトローム中ブロック中量	5 褐色	ローム粒子・暗褐色土中量
2 暗褐色	ローム粒子多量、褐色土中量、骨片を含む	6 明褐色	ソフト・ハードローム小ブロック中量
3 褐色	焼土粒子中量、焼土小・中ブロック多量、骨片を含む	7 褐色	焼土大ブロック・炭化材・骨片多量
4 褐色	ソフトローム中ブロック・暗褐色土中量		

遺物 多量の人骨が出土している。

所見 調査A区の墓域の中央やや北側に構築されている。本跡は、焼土塊と炭化材の確認範囲が限定されていること、また、人骨は通気孔から燃焼坑にかけて一直線上に出土していることから、機能的相違がある土坑で構成されていると考えられる。よって埋葬を目的とした火葬墓とは異なり、火葬する事を目的とした施設と思われる。時期は、遺構の形態から、中世と考えられる。

(5) 方形土坑…65基 (第194～196図)

第3号土坑

位置 調査A区北東部, F4a区。

規模と形状 平面形は、長軸2.27 m、短軸0.83 mの長方形で、深さ36 cmである。底面は平坦で、長方形を呈している。壁面は垂直に立ち上がっている。

長軸方向 N-56°-W

覆土 6層からなり、人為堆積と考えられる。

遺物 覆土中から、土師器片2点、土師質土器片2点が出土している。1の土師質土器皿が覆土中から出土している。

所見 調査A区の墓域内に構築されており、墓域の可能性はある。時期は、遺構の形態や出土遺物から、中・近世と考えられる。

第9号土坑

位置 調査A区北東部, E4j区。

重複関係 本跡は, 第10号土坑と重複している。第10号土坑が, 本跡を掘り込んでいることから, 本跡が古い。

規模と形状 平面形は, 長軸1.80 m, 短軸0.84 mの長方形で, 深さ(28) cmと推定される。底面は平坦で, 長方形を呈している。壁面は垂直に立ち上がっている。

長軸方向 N-4'-E

覆土 3層からなり, 人為堆積と考えられる。

所見 調査A区の墓域内に構築されており, 墓壇の可能性が有る。時期は, 遺構の形態から, 中・近世と考えられる。

第44号土坑

位置 調査A区北東部, E4f区。

規模と形状 平面形は, 長軸2.61 m, 短軸1.20 mの長方形で, 深さ13 cmである。底面は平坦で, 長方形を呈している。壁面は外傾して, 立ち上がっている。

長軸方向 N-27'-E

覆土 3層からなり, 人為堆積と考えられる。

遺物 覆土中から, 土師器片1点, 2の陶器片(常滑)甕1点が出土している。

所見 調査A区の墓域内に構築されており, 墓壇の可能性が有る。時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 中世と考えられる。

第88号土坑

位置 調査B区南部, D3ee区。

規模と形状 平面形は, 長軸5.60 m, 短軸0.86 mの長方形で, 深さ44 cmである。底面は平坦で, 長方形を呈している。壁面は垂直に立ち上がっており, 整然とした箱掘りである。

長軸方向 N-24'-E

覆土 5層からなり, 人為堆積と考えられる。

遺物 覆土中から, 土師器片7点, 須恵器片5点, 瓦質土器片2点, 3の陶器片(志野系)折縁皿1点, 磁器片1点, 鉄製品5点が出土している。

所見 性格については不明であるが, 時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 近世の17世紀と考えられる。

第101B号土坑

位置 調査B区南東部, C4g2区。

重複関係 本跡は, 第101A, 215号土坑と重複している。本跡が, 第101A, 215号土坑を掘り込んでいることから, 本跡が新しい。

規模と形状 平面形は, 長軸4.40 m, 短軸0.90 mの長方形で, 深さ25 cmである。底面は平坦で, 長方形を呈している。壁面は外傾して, 立ち上がっている。

長軸方向 N-74'-W

覆土 3層からなり, 人為堆積と考えられる。

遺物 覆土中から、土師器片10点、須恵器片3点、6の模1点、銅製品1点が出土している。

所見 性格については不明であるが、時期は、遺構の形態や出土遺物から、近世と考えられる。

第124号土坑

位置 調査B区南部、D3c6区。

規模と形状 平面形は、長軸4.94m、短軸0.83mの長方形で、深さ38cmである。底面は平坦で、長方形を呈している。壁面は垂直に立ち上がっており、整然とした箱掘りである。また、底面には多量の焼土、灰、炭化材が散在している。

長軸方向 N-19°-E

覆土 5層からなり、人為堆積と考えられる。

遺物 覆土中から、土師器片55点、須恵器片12点、土師質土器片1点、陶器片9点、磁器片5点、土製品1点、鉄釘8点、かんざし1点が出土している。4の磁器碗が覆土中から、5のかんざしが覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 性格については不明であるが、多量の焼土、炭化材が確認されていることから、焼却する施設として構築され、使用後にそのまま埋め戻したものと考えられる。骨粉のような白い粉や植物の皮のような薄い炭化材が多量に出土している。時期は、遺構の形態や出土遺物から、近世の18-19世紀と考えられる。

第3号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第197図 1	土師質土器	A[9.2] B 2.8 C[4.6]	底部から口縁部の破片。突出した平底。体部から口縁部にかけて、内湾気味に立ち上がる。	水挽き成形。底部手持ちヘラ削り。	砂粒 褐色 普通	20% P336 覆土中

第44号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第197図 2	陶器	B(8.1) C[17.8]	底部から体部の破片。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。外面下位ヘラ削り。	長石 砂粒 外面にふい・褐色 内面灰褐色 普通	5% P339 内面自然釉 常滑産 覆土中

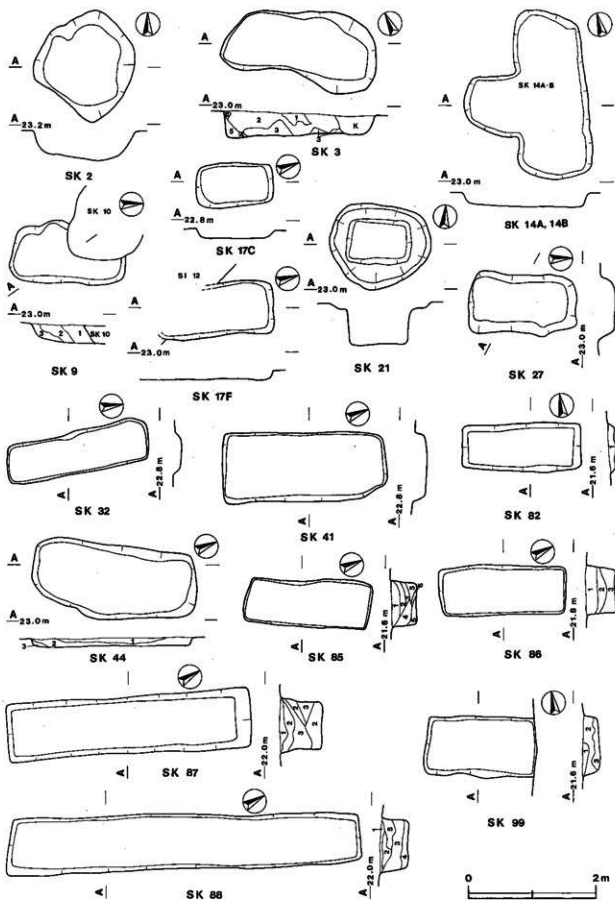
第88号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第197図 3	折縁皿 陶器	A[12.4] B(1.5)	体部から口縁部の破片。口縁部は強く外反している。	水挽き成形。	砂粒 にふい・黄褐色 灰白色(釉) 普通	5% P344 瀬戸・美濃系 (17C) 覆土中

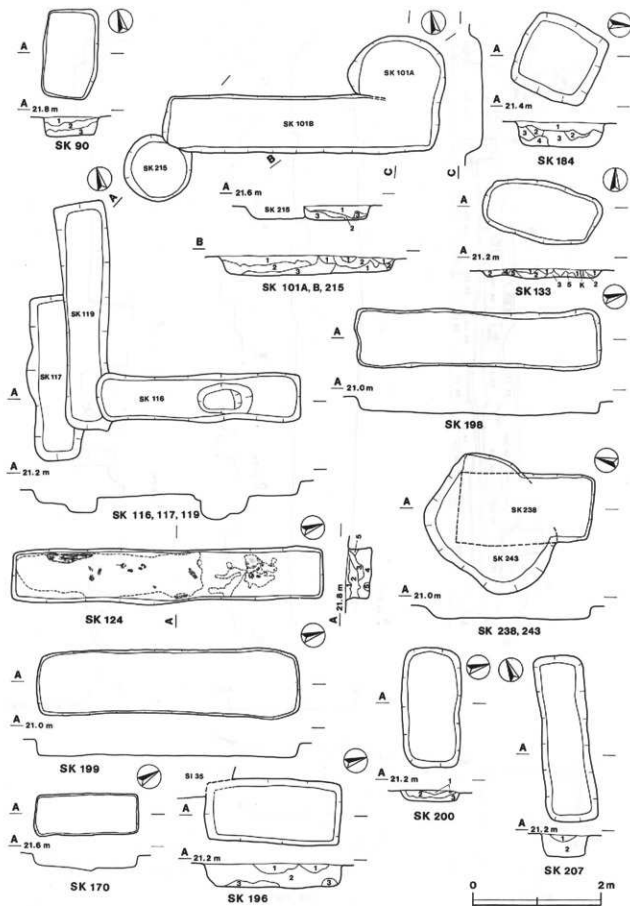
第124号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第197図 4	磁器	B(3.7) D[4.8] E 0.7	高台部から体部の破片。高台部は短く、直線的に開く。丸底。体部は内湾して立ち上がる。	水挽き成形。染め付け。華付けは露胎。	砂粒 灰白色 明緑灰色(釉) 良好	10% P350 (18-19C) 覆土中

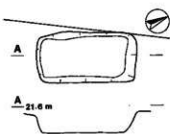
図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
5	かんざし	15.0	0.5	0.4	8	床面直上	M13 銅製 80%



第194图 方形土坑实测图(1)

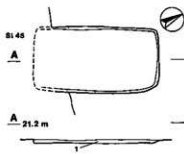


第 195 图 方形土坑实测图(2)

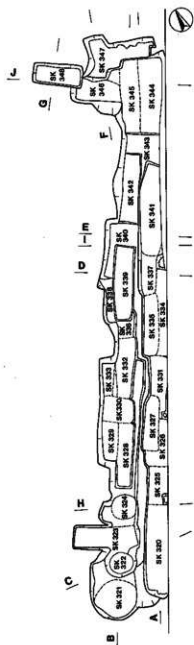


SK 223

第 196 图 方形土坑实测图(3)



SK 296



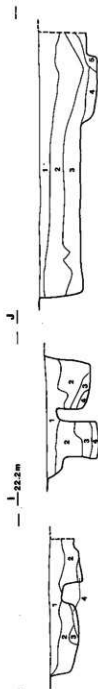
A 22.0 m

B

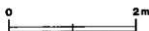
C

F 22.0 m

G



SK 320~348



第 3 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・褐色土中量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ハードローム中ブロック多量
- 3 明褐色 ハードローム中・大ブロック多量, 褐色土中量
- 4 明褐色 ハードローム大ブロック多量
- 5 褐色 ソフトローム小・中ブロック多量
- 6 褐色 ローム粒子・暗褐色土中量

第 9 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, ざくざくしている
- 2 褐色 ローム小ブロック多量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, 締まり有り

第 44 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・粘土小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック中量, 締まり有り
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・粘土大ブロック少量

第 82 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック多量, ざくざくしている

第 85 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック中量, 焼土小ブロック少量
- 2 褐色 ローム小・中ブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子多量, 柔らかい
- 4 褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック中量
- 5 褐色 ローム粒子・ローム中ブロック・暗褐色土中量
- 6 褐色 ローム小ブロック中量, 暗褐色土少量

第 86 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム小・中ブロック多量
- 2 褐色 ローム小・中・大ブロック多量
- 3 褐色 ローム大ブロック少量

第 87 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック多量
- 2 褐色 ローム粒子多量, 暗褐色土中量
- 3 褐色 ローム小・中ブロック多量

第 88 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子少量
- 2 明褐色 ローム粒子・ソフトローム中ブロック多量
- 3 褐色 ローム粒子・ソフトローム中・大ブロック多量
- 4 暗褐色 ローム粒子・ハードローム小・中ブロック中量
- 5 明褐色 ソフト・ハードローム中ブロック多量

第 88 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・ローム中ブロック・暗褐色土中量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック中量
- 3 褐色 ローム大ブロック多量, 炭化粒子少量, ざくざくしている

第 89 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック少量

第 101 A, B 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 褐色土中量
- 2 暗褐色 ソフトローム中ブロック・褐色土中量
- 3 暗褐色 ローム粒子・ソフトローム中ブロック中量

第 124 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・焼土粒子多量, 炭化粒子少量
- 2 明褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック多量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック多量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック多量
- 5 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

第 133 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 砂多量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 砂多量
- 3 にぶい褐色 粘土大ブロック多量
- 4 褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック多量
- 5 褐色 ローム大ブロック多量

第 184 号土坑土層解説

- 1 褐色 暗褐色土中量
- 2 褐色 ハードローム中ブロック・暗褐色土中量
- 3 明褐色 ローム中ブロック・暗褐色土中量
- 4 明褐色 ローム中ブロック多量

第 188 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中・大ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, 柔らかい

第 289 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック中量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック中量, 暗褐色土多量

第 287 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・粘土中ブロック少量, ローム中・大ブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック少量, ぼろぼろしている

第 288 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量

第 329, 324 号土坑土層解説

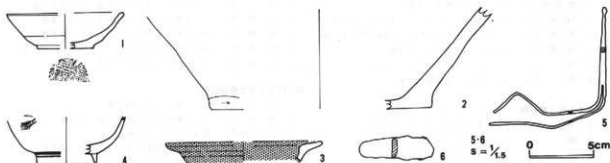
- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック中量, しゅりしゅりしている
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ぼろぼろしている
- 3 灰褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック中量, 硬く締まっている

第 336, 341 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・炭化粒子少量, しゅりしゅりしている
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量, ぼろぼろしている
- 3 灰褐色 ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, 締まっている

第 344, 345, 346, 348 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・炭化粒子少量, しゅりしゅりしている
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, ぼろぼろしている
- 3 灰褐色 ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック中量, 締まっている
- 5 灰褐色 ローム小ブロック少量, 締まっている



第197図 方形土坑出土遺物実測図

第101B号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第197図 6	椀	5.4	1.7	0.4	11	覆土中	M12

(6) 粘土採掘坑, 粘土貯蔵土坑 (第198図)

第139号土坑

位置 調査B区西部, B3d区。

規模と形状 平面形は, 長径6.88 m, 短径5.02 mの不定形で, 深さ98 cmである。中央部が二段に掘り込まれており, 底面は平坦である。壁面は外傾し, 立ち上がっている。

長径方向 N-35°-W

覆土 6層からなり, 人為堆積と考えられる。

土層解説

1	黒色	ローム粒子・ローム小ブロック少量, 焼土小・中ブロック中量	4	灰白色	粘土層
2	暗褐色	焼土小・中・大ブロック中量, 粘土大ブロック多量	5	暗褐色	焼土小・中ブロック中量, 灰色粘土中・大ブロック多量, 土器片多量
3	にぶい黄褐色	粘土層	6	灰白色	灰白色粘土ブロック多量

遺物 土師器片180点, 須恵器片117点が出土している。1と2の土師器片, 3と4の須恵器片, 5の土師器高台付片, 6の土師器高台付皿, 7の須恵器蓋, 8の土師器壺, 9の土師器甕が覆土中からそれぞれ出土している。

所見 灰白色粘土層を掘り込んで構築されており, 全面が粘土の床面であることから, 粘土採掘を目的とした遺構の可能性が高い。時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 平安時代の9世紀中葉と考えられる。

第186号土坑

位置 調査B区東部, C4a区。

規模と形状 平面形は, 長径2.64 m, 短径1.32 mの不定形で, 深さ65 cmである。底面は凹凸である。壁面は外傾して, 立ち上がっている。北壁と南壁沿いにピットが3か所確認されているが, 性格は不明である。

長径方向 N-80°-E

覆土 9層からなり, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------------|----------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子多量、ソフト・ハードローム中・大ブロック中量、焼土粒子少量 | 5 褐色 | ローム粒子・ソフトローム中ブロック多量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、粘土中・大ブロック多量 | 6 暗褐色 | 黒色土多量 |
| 3 暗褐色 | 粘土大ブロック多量 | 7 によい褐色 | 粘土層 |
| 4 褐色 | 粘土層 | 8 によい黄褐色 | 粘土層 |
| | | 9 によい褐色 | 粘土層 |

遺物 土師器片4点、須恵器片4点が出土している。10の須恵器鉢が覆土中から出土している。

所見 土層の状況から、土坑に粘土を選び、貯蔵したと考えられる。意図的に粘土を貯蔵するため掘り込まれているのか、廃棄された土坑を利用しているのかは不明である。粘土採掘坑や他の貯蔵土坑との関連についてははっきりしていない。時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代以降と考えられる。

第306号土坑

位置 調査B区北部、A3b区。

規模と形状 平面形は、長径(3.66)m、短径2.47mの不定形で、深さ80cmである。中央部が二段に掘り込まれており、底面は平坦であるが、傾斜している。壁面は外傾して、立ち上がっている。

長径方向 N-52°-E

覆土 11層からなり、人為堆積と考えられる。全体的に、硬く締まった粘土質の土層である。

土層解説

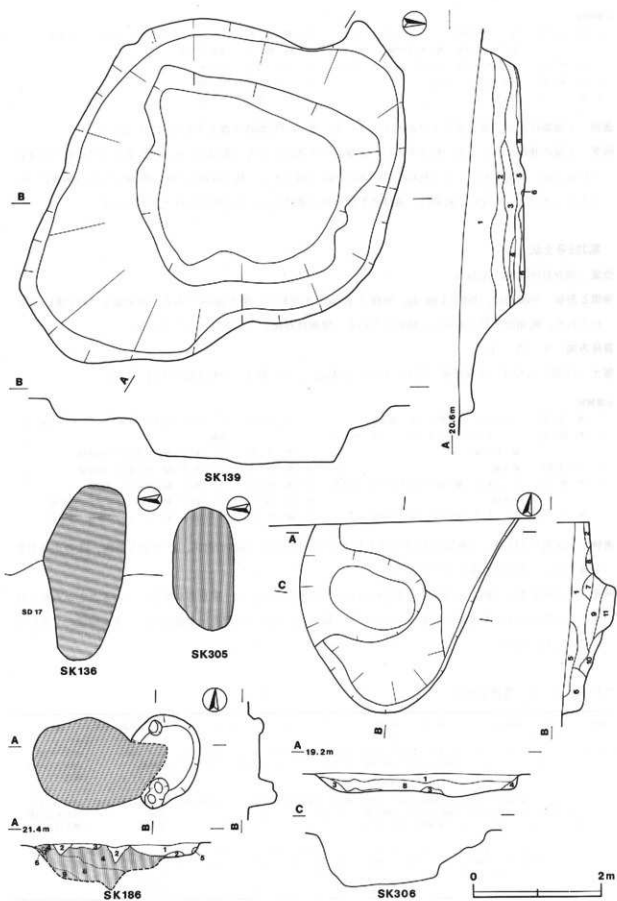
- | | | | |
|----------|---------------------------|--------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、砂中量 | 6 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック少量、砂中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量、砂中量 | 7 黒褐色 | ローム粒子少量、粘土粒子・砂中量 |
| 3 によい黄褐色 | 砂多量 | 8 暗褐色 | ローム粒子少量、粘土粒子・砂中量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック少量、砂中量 | 9 暗褐色 | ローム粒子・粘土小ブロック少量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、砂中量 | 10 暗褐色 | ローム粒子少量、粘土小ブロック・砂中量 |
| | | 11 暗褐色 | ローム粒子・粘土小ブロック少量、砂中量 |

遺物 土師器片111点、須恵器片49点が出土している。11の須恵器高台付杯、12の須恵器蓋、13の土師器甕が覆土中からそれぞれ出土している。

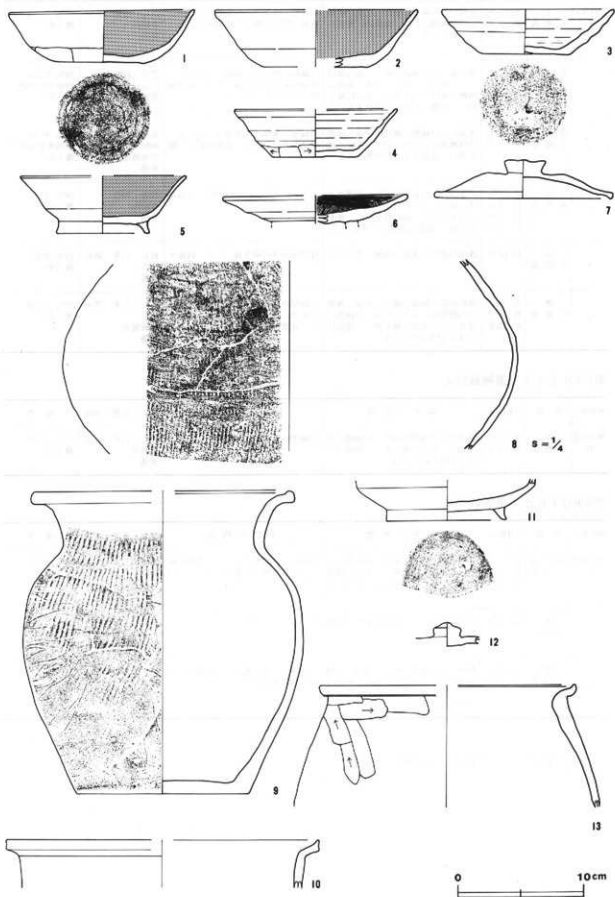
所見 第139号土坑の粘土とは異なる褐色粘土が混じる覆土であるが、掘り方が類似していることから粘土採掘の為に掘り込まれた可能性があると思われる。時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代の9世紀中葉以降と考えられる。

第139号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第199図 1	坏土師器	A 14.9 B 13-14 C 7.1	体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、内層気味に立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位へラ削り。底部回転へラ削り。	長石 砂粒 明褐色 普通	85% P251 内面黒色地埋 覆土中
2	坏土師器	A[16.2] B 4.6 C[8.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内層気味に立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位へラ削り。底部ナデ。	長石 石英 砂粒 普通	40% P252 内面黒色地埋 覆土中
3	坏須恵器	A 13.7 B 3.7 C 7.0	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面クロコナテ。外面下位へラ削り。底部回転へラ削り後、ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 パイス によい黄褐色 普通	95% P353 覆土中



第198图 粘土探掘坑，粘土贮藏土坑实测图



第199图 粘土探掘坑，粘土贮藏土坑出土遗物实测图

第199図 4	坏 須 意 器	A[12.9] B 4.4 C 6.7	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。外面下位へラ削り。底部ナデ。	長石 石英 砂粒 黄褐色 普通	20% P354 覆土中
5	高台付 土 師 器	A[13.4] B 4.7 D 7.5 E 1.0	高台部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、中位に線を待つ。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転へラ切り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	雲母 砂粒 にぶい 褐色 普通	70% P355 内面黒色処理 覆土中
6	高台付 土 師 器	A[14.4] B(2.3)	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、中位に線を持つ。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部内面へラ磨き。底部回転へラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 明赤褐色 普通	20% P356 内面黒色処理 覆土中
7	蓋 須 意 器	A 14.1 B 3.0 F 3.0 G 1.1	つまみから口縁部の破片。扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は、ほぼ平坦で、上位に線を持ち、緩やかに開く。端部は屈曲して垂下する。	つまみ、天井部、口縁部内・外面ロクロナデ。	雲母 砂粒 灰黄色 普通	50% P357 覆土中
8	壺 土 師 器	B(18.0)	体部の破片。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面平行叩き後、ナデ。内面ナデ。	長石 石英 砂粒 褐色 普通	10% P358 覆土中
9	壺 土 師 器	A[20.4] B 24.1 C 13.6	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中位に線を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面平行叩き、外面下位へラ削り。内面ナデ。底部へラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 暗灰黄色 普通	35% P359 覆土中

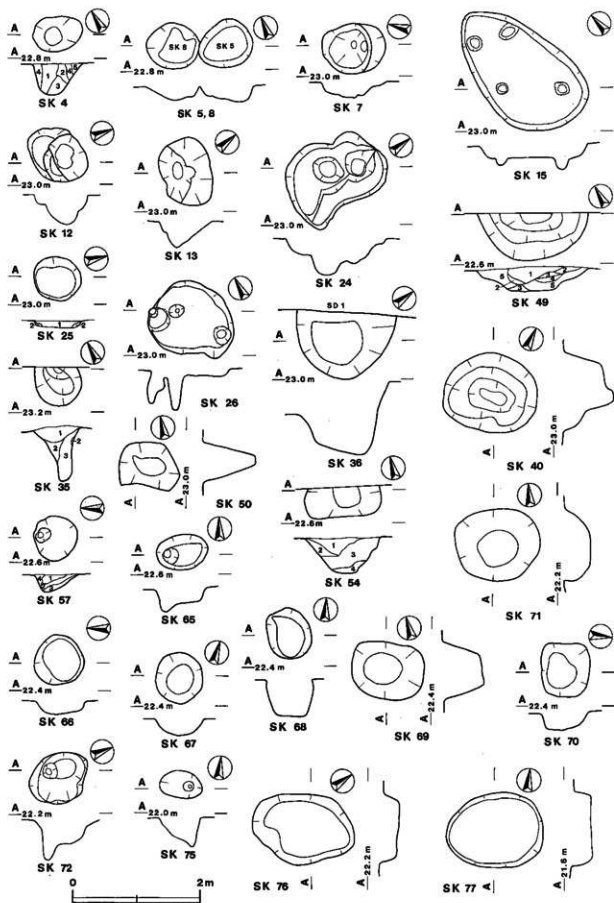
第186号土坑出土土物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第199図 10	鉢 須 意 器	A[25.0] B(3.8)	体部から口縁部の破片。口縁部は外反して、中位に線を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。	長石 石英 砂粒 黒褐色 普通	5% P363 覆土中

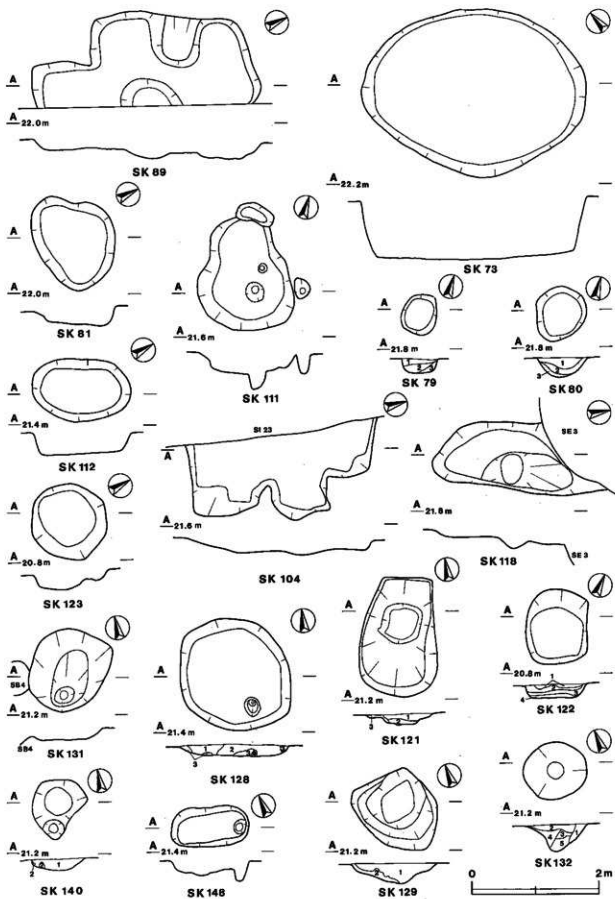
第306号土坑出土土物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第199図 11	高台付 須 意 器	B(3.3) D 9.8 E 0.9	高台部から体部の破片。高台部は短く、「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、中位に線を持つ。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転へラ削り。高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 黄灰色 普通	30% P370 覆土中
12	蓋 須 意 器	B(1.9)	つまみの破片。つまみは扁平な宝珠状。	つまみロクロナデ。	長石 雲母 砂粒 にぶい 黄褐色 普通	5% P371 覆土中
13	壺 土 師 器	A[30.4] B(9.7)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中位に線を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。外面上位へラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 赤褐色 普通	10% P372 覆土中

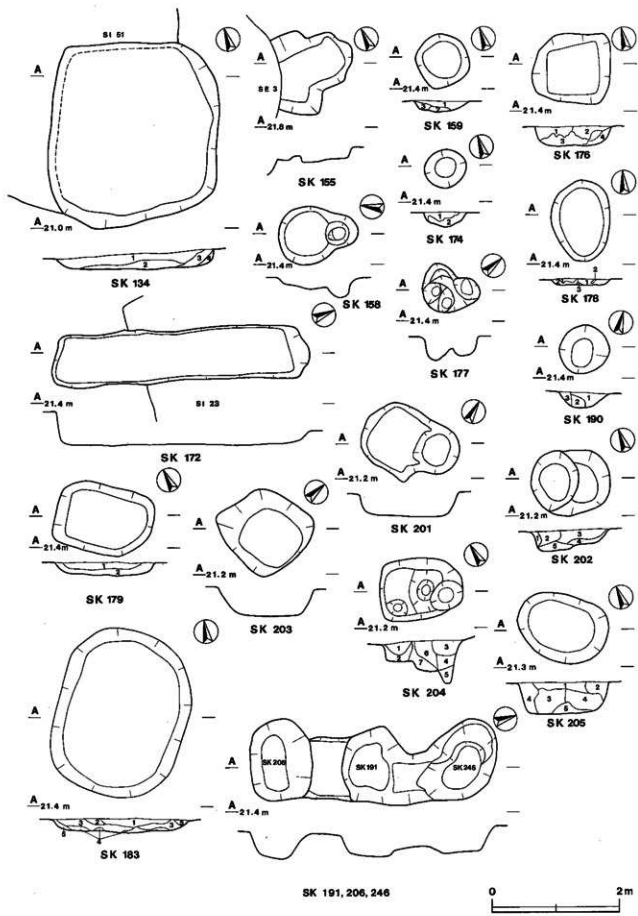
(7) その他の土坑…112基(第200~204図)



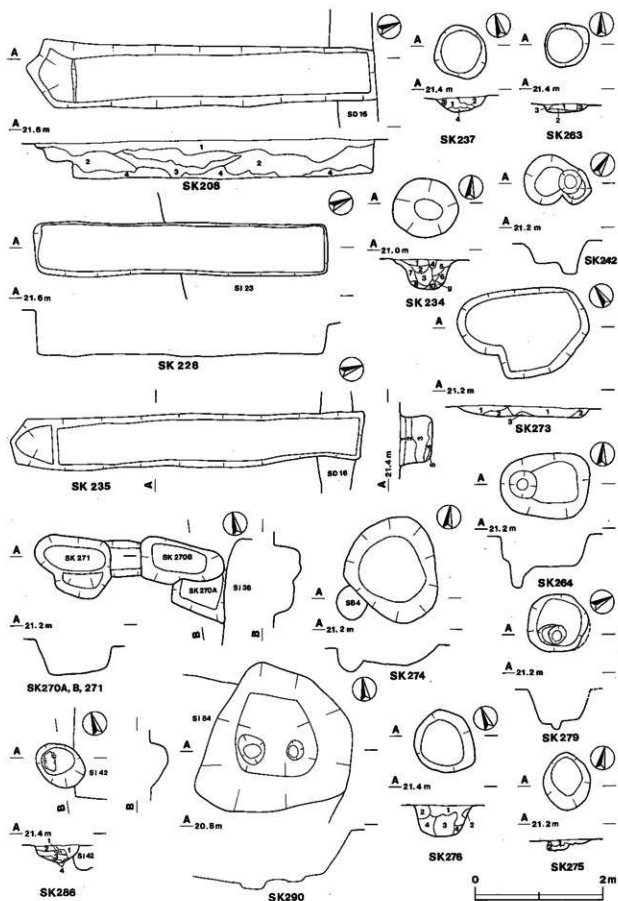
第 200 図 その他の土坑実測図(1)



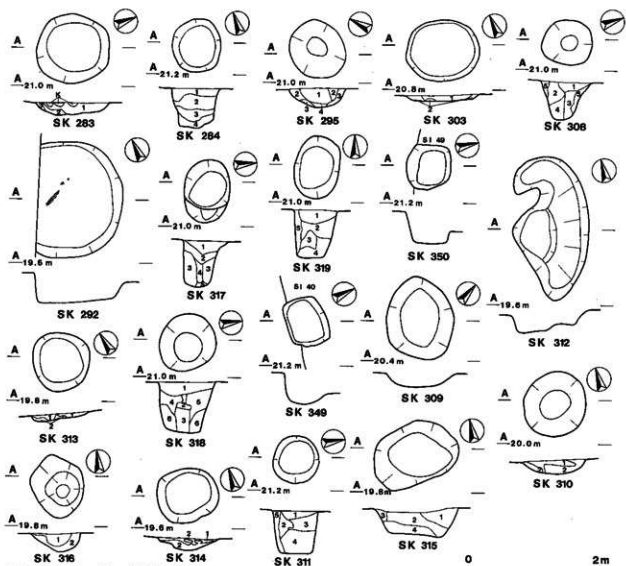
第 201 図 その他の土坑実測図(2)



第 202 図 その他の土坑実測図(3)



第 203 図 その他の土坑実測図(4)



第204図 その他の土坑実測図(5)

第4号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック・炭土粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック中量
- 3 褐色 ローム中ブロック中量
- 4 明褐色 ローム中・大ブロック中量
- 5 褐色 ローム粒子多量, 炭土粒子中量

第25号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第35号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック多量

第49号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック中量
- 3 明褐色 ハードローム中・大ブロック多量
- 4 明褐色 ハードローム中・大ブロック中量
- 5 褐色 ローム小・中ブロック多量, 暗褐色土中量

第54号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム小・中ブロック多量
- 2 明褐色 ローム小・中ブロック多量
- 3 暗褐色 ローム中・大ブロック多量, 褐色土中量
- 4 褐色 ローム中・大ブロック多量, 暗褐色土中量

第57号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック中量, 褐色土少量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子多量, 小・中ブロック中量
- 4 明褐色 ローム中ブロック多量

第79号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量

第 80 号土状土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量

第 120 A 号土状土層解説 (第 186 図)

- 1 黒色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 黒色 ローム粒子・焼土粒子少量, 粘土小ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 褐色土少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量, 粘土小ブロック少量
- 5 褐色 粘土中ブロック多量
- 6 褐色 粘土中ブロック多量, 明褐色土中量
- 7 灰褐色 粘土

第 121 号土状土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック中量, 焼土粒子少量
- 3 褐色 ローム小ブロック・焼土粒子少量

第 122 号土状土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 硬く締まっている
- 2 褐色 ローム粒子少量, 柔らかい
- 3 褐色 ローム粒子少量, 硬く締まっている
- 4 褐色 ローム粒子少量, 粘土質で硬く締まっている

第 125 号土状土層解説 (第 186 図)

- 1 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム小・中ブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子多量
- 5 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック中量

第 126 号土状土層解説 (第 186 図)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ソフトローム中ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ソフトローム中ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子・ソフトローム小・中ブロック多量
- 4 褐色 ローム粒子多量, ハードローム中ブロック中量

第 128 号土状土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子多量, ソフトローム小・中ブロック中量
- 4 褐色 ローム粒子多量, ソフトローム中・大ブロック中量

第 129 号土状土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム大ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子・ローム中・大ブロック少量

第 132 号土状土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・砂少量, 硬く締まっている
- 2 褐色 ローム粒子・砂少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量, 締まっている
- 4 暗褐色 ローム粒子・黒褐色土少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量, 柔らかい

第 134 号土状土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 褐色 ローム粒子多量, 砂中量

第 140 号土状土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量

第 150 号土状土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ソフトローム小・中ブロック中量
- 2 褐色 ローム粒子中量, ハードローム中・大ブロック多量
- 3 褐色 ローム粒子中量, ソフトローム中ブロック少量

第 174 号土状土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子・黒褐色土少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量, ローム大ブロック・黒褐色土少量

第 176 号土状土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム大ブロック少量, ローム小ブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, ローム小ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子・粘土少量, ローム小ブロック中量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量

第 178 号土状土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量
- 3 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量

第 179 号土状土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック少量

第 183 号土状土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・粘土小ブロック少量, 炭化粒子多量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック・焼土小ブロック中量
- 4 褐色 ローム粒子・ローム中・大ブロック多量
- 5 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量

第 188 号土状土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム中・大ブロック多量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム中・大ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

第 202 号土状土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・砂・黒褐色土少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・砂・黒褐色土少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・砂少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量, 粘性有り

第 204 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂少量、硬く締まる
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・粘土小ブロック・砂少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・砂少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子・粘土小・中ブロック少量
- 7 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量

第 205 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・粘土中ブロック中量
- 2 褐色 粘土大ブロック多量
- 3 褐色 ローム粒子・焼土粒子多量、焼土小ブロック・粘土中ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子・焼土粒子多量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

第 208 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・ローム大ブロック・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子・ローム小・中・大ブロック多量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム大ブロック・褐色土多量
- 4 暗褐色 ローム粒子・ローム大ブロック・粘土大ブロック中量

第 210 A 号土坑土層解説 (第 188 図)

- 1 黒色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子・ローム中ブロック中量

第 214 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量、粘土質
- 3 暗褐色 ローム粒子・粘土小ブロック少量、粘土質
- 4 灰褐色 ローム粒子・粘土小ブロック少量
- 5 灰黄褐色 におい黄褐色の粘土中量
- 6 灰黄褐色 におい黄褐色の粘土多量
- 7 暗褐色 ローム粒子・粘土大ブロック少量、粘土質
- 8 暗褐色 ローム粒子・粘土小ブロック少量、粘土質
- 9 暗褐色 粘土小ブロック中量、粘土質
- 10 暗褐色 粘土小ブロック少量、粘土質

第 215 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、硬く締まっている
- 2 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、ぼろぼろしている
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック中量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック中量、暗褐色土少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック少量

第 217 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量、硬く締まっている
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック少量、粘土質

第 203 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 明褐色 ローム中・大ブロック多量、褐色土中量

第 213 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック中量、焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小・中ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子多量、粘土質

第 215 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、砂少量
- 2 灰褐色 ローム小ブロック少量、粘土質

第 218 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、粘土粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子・ローム中・大ブロック多量
- 3 暗褐色 粘土小・中ブロック中量
- 4 暗褐色 ローム中・大ブロック中量、焼土粒子少量

第 202 号土坑土層解説 (第 187 図)

- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック中量

第 203 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子少量

第 204 号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子・砂少量
- 2 灰褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・砂少量
- 3 におい黄褐色 粘土中量、酸化鉄少量
- 4 灰褐色 ローム小・中ブロック少量、粘土質

第 208 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、硬く締まっている
- 3 褐色 ローム粒子中量、焼土小・中・大ブロック多量
- 4 褐色 ローム粒子・ローム中・大ブロック多量

第 205 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量
- 3 褐色 暗褐色土中量
- 4 暗褐色 ローム小・中ブロック多量、焼土粒子少量

第 202 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子少量、ローム小・中ブロック中量

第308号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小・中ブロック中量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・粘土小ブロック少量、硬く締まる
- 5 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量、硬く締まる

第310号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第311号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・粘土小ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、粘土質
- 5 灰褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック少量

第313号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック・粘土粒子少量

第314号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・砂少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック・焼土粒子・砂少量

第315号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック・砂少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・砂少量
- 3 灰褐色 ローム粒子少量、砂多量
- 4 褐色 ローム粒子・粘土小ブロック・砂少量

第316号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、砂中量
- 2 灰褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・砂中量

第317号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、粘土小・中ブロック中量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック少量

第318号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子・焼土粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、粘土小・中ブロック中量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 6 灰褐色 ローム粒子・ローム中ブロック・粘土小ブロック少量

第319号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム中ブロック・粘土小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック少量
- 3 灰黄褐色 ローム粒子少量、粘土小・中ブロック多量
- 4 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量

第81号土坑出土遺物観察表

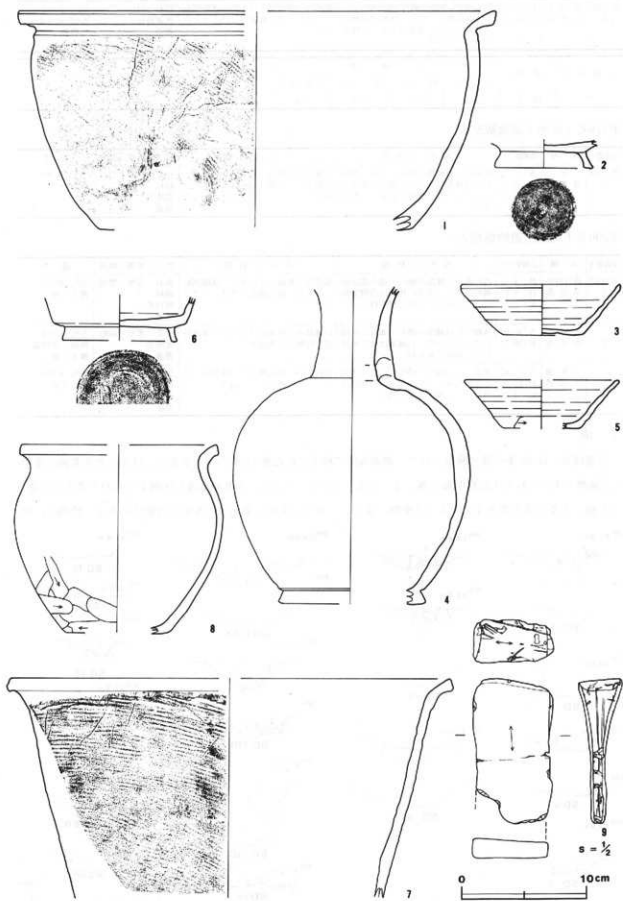
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第205図 1	鉢 須恵器	A [37.6] B 17.5 C [24.8]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、上位に縁を持つ。口縁部は強く外反して、中位に縁を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面平行叩き、下位へラ削り。内面ナデ。底部ナデ。	灰石 雲母 砂粒 褐色 普通	40% P343 覆土中

第89号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第205図 2	高台付環 須恵器	B (2.3) D 7.9 E 1.3	高台部から底部の破片。高台部は、「ハ」の字状に開く。平底。	底部回転へラ削り。高台部貼り付け、ロクロナデ。	灰石 砂粒 外面灰色 内面黄灰色 普通	20% P345 覆土中

第134号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第205図 3	環 須恵器	A 12.6 B 4.1 C 6.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転へラ削り後、ナデ。	灰石 雲母 砂粒 によい褐色 普通	50% P249 覆土中



第 205 図 その他の土坑出土遺物実測図

第205図 4	長頸壺 須恵器	B (25.3) C [10.7]	高台部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反して立ち上がる。	体部内・外面ロコナテ。底部回転へラ削り。高台部貼り付け、ロコナテ。	長石 砂粒 灰黄褐色 普通	40% P251 体部外面、胴部内面 自然熱 覆土中
------------	------------	----------------------	--	-----------------------------------	---------------------	-------------------------------------

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
9	磁石	(7.7)	(4.2)	(2.2)	(63)	凝灰岩	覆土中	Q14

第276号土坑出土遺物観察表

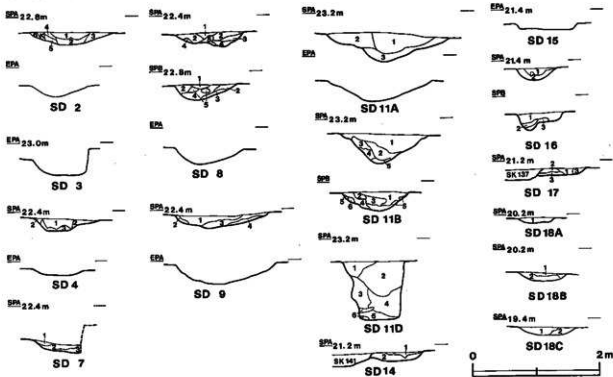
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第205図 5	坏 須恵器	A [12.2] B 3.9 C [6.2]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロコナテ。外面下位へラ削り。底部手持ちへラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 褐灰色 普通	20% P369 覆土中

第290号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第205図 6	高台付坏 須恵器	B (4.1) D [9.0] E 1.2	高台部から体部の破片。高台部は直線的に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、下位に稜を持つ。	体部内・外面ロコナテ。底部回転へラ削り。高台部貼り付け、ロコナテ。	長石 石英 雲母 砂粒 灰白色 普通	20% P257 覆土下層
7	坏 須恵器	A [25.0] B (16.5)	体部から口縁部の破片。体部は外傾して立ち上がる。口縁部は強く外反して、中位に稜を持つ。	口縁部内・外面ロコナテ。体部外面平行叩き、内面ナテ。	石英 雲母 砂粒 黄灰色 普通	5% P261 外面スス付着 覆土下層
8	小形甕 土器	A [15.6] B 15.1 C [8.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反して、中位に稜を持つ。	口縁部内・外面ナテ。体部内・外面ナテ。外面下位へラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 赤褐色 普通	20% P260 覆土下層

7 溝

当遺跡からは20条の溝が検出された。調査A区で検出された溝11条のうち7条は、ほとんどが北側に集中し、墓塚と考えられる土坑群を取り巻くように巡っていることから、中世の墓域を区画するものと考えられる。また他の4条の溝も調査A区中央より東側に集中しており、墓域に関連した性格の可能性がある。時期は、中



第206図 溝土層断面図

世の築研堀に掘り込まれていることから、中世あるいはそれ以前と考えられる。

調査B区で検出した溝9条は、覆土が薄く、出土遺物がほとんどないことから、性格や時期を判断するには不明な点が多いが、そのいくつかが円形の墓壇に掘り込まれていることから、中世あるいはそれ以前と考えられる。

検出された溝(付図、第206図)の特徴や遺物については、一覧表に記載する。

第1号溝(SD-2) 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック中量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム粒子微量

第8号溝(SD-11B) SPB土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量、硬く締まっている
- 3 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 5 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量、硬い
- 6 褐色 ローム粒子少量

第3号溝(SD-4) 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム小・中ブロック中量
- 2 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 3 明褐色 ローム小・中ブロック少量

第10号溝(SD-11D) 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・ローム中・大ブロック多量
- 2 褐色 ローム粒子・ローム大ブロック多量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム大ブロック中量
- 4 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量、褐色土中量
- 5 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック少量
- 6 明褐色 ローム大ブロック多量

第4号溝(SD-7) 土層解説

- 1 明褐色 ローム小・中ブロック多量
- 2 褐色 ローム小・中ブロック多量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量

第14号溝(SD-14) 土層解説

- 1 暗褐色 褐色土・黒色土中量
- 2 褐色 暗褐色土中量

第5号溝(SD-8) SPA土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量、ローム小・中ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小・中ブロック中量
- 4 褐色 ローム粒子・ローム中ブロック中量
- 5 明褐色 ローム大ブロック

第18号溝(SD-18) SPA土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム大ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第6号溝(SD-8) SPB土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、炭土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量
- 4 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック多量
- 5 明褐色 ローム大ブロック

第16号溝(SD-16) SPB土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック少量、ローム大ブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小・中ブロック中量
- 3 褐色 ローム中ブロック少量

第9号溝(SD-9) 土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量、締まり有り
- 4 褐色 ローム粒子少量

第17号溝(SD-17) 土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子・砂少量
- 2 灰褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子少量

第7号溝(SD-11A) 土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック多量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム小・中ブロック中量

第19号溝(SD-19A) 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量

第2号溝(SD-11B) SPA土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量、締まり有り
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム中ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量

第15号溝(SD-15B) 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・粘土中ブロック中量

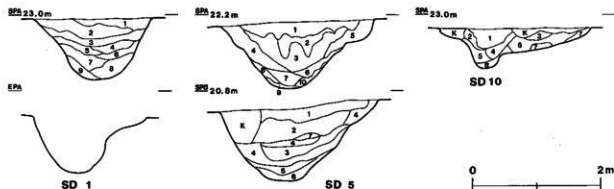
第20号溝(SD-11C) 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・砂少量、粘土小ブロック中量

8 堀

当遺跡からは、調査A区から3条の堀が検出された。付近に所在したといわれている菟間城に関連する施設の可能性が高い。遺物は土師質土器（皿、内耳鍋など）、陶磁器片が出土している。しかし、現代になってゴミ捨て場で使用されていたこともあり、現代の陶磁器類などの混入したのも多数あった。時期は、地下式堀を掘り放していることから、中世以降と考えられ、菟間城の時期と一致する。

検出された堀（付図、第207図）の特徴や遺物については、一覧表に記載する。



第207図 堀土層断面図

第1号堀 (SD-1) 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 2 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム小・中ブロック中量
- 4 褐色 ローム中ブロック多量
- 5 暗褐色 ローム中ブロック・褐色土中量
- 6 褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック多量
- 7 褐色 ローム粒子・ローム中ブロック多量
- 8 褐色 ローム小・中ブロック多量
- 9 明褐色 ローム中ブロック多量

第2号堀 (SD-5) SPB土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子少量、砂中量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム小・中ブロック中量
- 5 暗褐色 ローム小・中ブロック多量、焼土粒子少量
- 6 褐色 粘土中ブロック多量
- 7 黒色 炭化材

第2号堀 (SD-4) SPA土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量、締まり有り
- 3 暗褐色 褐色土中量
- 4 暗褐色 褐色土少量
- 5 褐色 ローム粒子少量
- 6 暗褐色 締まり有り
- 7 暗褐色 ローム粒子少量
- 8 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 9 暗褐色 ローム粒子少量、締まり有り
- 10 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量

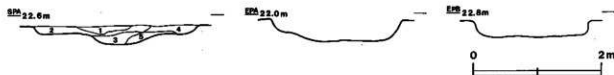
第3号堀 (SD-10) 土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子・砂少量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量、締まり有り
- 7 暗褐色 ローム小ブロック少量、柔らかい
- 8 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量

9 道路状遺構

当遺跡からは1条の道路状遺構が、調査A区から検出された。性格や時期は、不明な点が多く判断は困難である。しかし、第1号堀の覆土上に硬化面が確認されたことから、第1号堀よりも新しいと考えられる。

検出された第1号道路状遺構（付図、第208図）の特徴や遺物について、一覧表に記載する。



第208図 第1号道路状遺構土層断面図

第1号道路状遺構土層解説

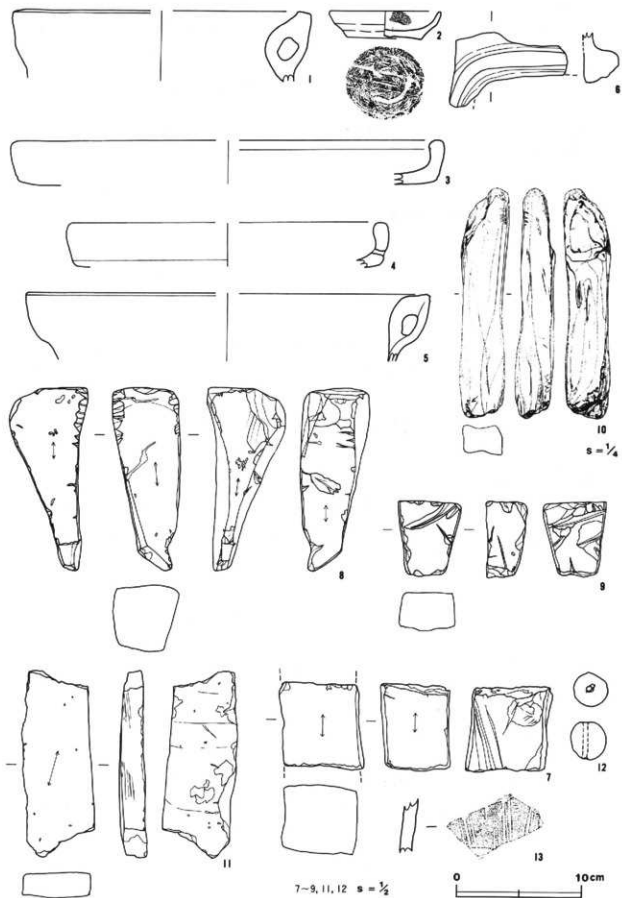
- | | | | | | |
|---|-----|-----------------------|---|----|--------------------|
| 1 | 褐色 | ローム粒子・ローム小・中ブロック多量 | 4 | 褐色 | ローム粒子多量、暗褐色土中量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子多量、ローム小・中ブロック中量 | 5 | 褐色 | ローム粒子多量、ローム中ブロック中量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム小・中ブロック中量、硬く締まっている | | | |

溝、堀、道路状遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第209図 1	内耳鍋 土師質土器	A[23.6] B(5.6)	体部から口縁部の破片。口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部は厚みを増す。口唇部はほぼ平坦。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	雲母 砂粒 に上い黄褐色 普通	5% P385 外面スス付着 SD-1覆土中
2	皿 土師質土器	A 8.8 B 2.3 C 5.9	体部、口縁部一部欠損。底部は平底で、突出気味。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がり、中に縦筋を持つ。	水抜き成形。底部回転へラ削り。	砂粒 に上い橙色 普通	95% P386 内面刺刺 口縁部施土層付着 SD-5覆土中
3	焙烙鍋 土師質土器	A[32.6] B 3.5 C[33.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部は直線的に立ち上がる。口縁部は外傾し、端部はわずかに内彎する。	口縁部、体部、底部内・外面横ナデ。	砂粒 スコア オリーブ黒色 普通	5% P387 外面スス付着 SD-5覆土中
4	焙烙鍋 土師質土器	A[24.6] B 3.5 C[24.2]	底部から口縁部の破片。体部は直線的に立ち上がる。外面下位穿孔有り。口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部は厚みを増す。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 灰褐色 普通	5% P390 外面スス付着 SD-10覆土中
5	内耳鍋 土師質土器	A[32.0] B(5.4)	体部から口縁部の破片。口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部は厚みを増す。口唇部はほぼ平坦。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石 雲母 砂粒 明赤褐色 普通	5% P393 SF-1覆土中
6	覆き壺		破片。	内・外面ナデ。	長石 石英 に上い赤褐色 普通	5% P394 SF-1覆土中

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
7	礫石	(4.6)	(4.6)	(3.8)	(133)	凝灰岩	SD-1覆土中	Q21
8	礫石	(7.7)	(3.6)	(4.2)	(125)	凝灰岩	SD-1覆土中	Q22
9	礫石	(4.0)	(3.4)	(2.2)	(40)	凝灰岩	SD-1覆土中	Q23
10	礫石	(24.0)	(5.1)	(4.1)	(601)	緑部片岩	SD-11A床面直上	Q24
11	礫石	(10.0)	(3.9)	(1.4)	(70)	凝灰岩	SD-11A覆土中	Q25

図版番号	器種	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
12	土玉	2.0	1.8	2.0	0.3	10	SD-16覆土中	D P22 100%



第 209 图 沟, 堀, 道路状遺構出土遺物実測図

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考
第209図 13	罎 土質土器	鉢 体部	体部外面ナデ。内面に4本単位の罫目が施される。	T P 20 SD-1覆土中

10 不明遺構

調査B区の南端に黒褐色の堆積土が広がっていたことから、土層ベルトを設定して調査した結果、不明遺構1基を検出した。以下、その特徴について解説する。

第1号不明遺構（付図，第210図）

位置 調査B区南部，D3f₁区。

規模と平面形 34か所のピットを確認した（P₁～P₃₄）。ピットは、径12～26cmの円形のもの、長径20～35cm、短径15～30cmの楕円形のものがあり、深さは9～43cmで、ほぼ同心円上に並んでいるピットが多く確認された。柱間距離はほとんどが1.0～2.5mである。いずれも性格は不明である。

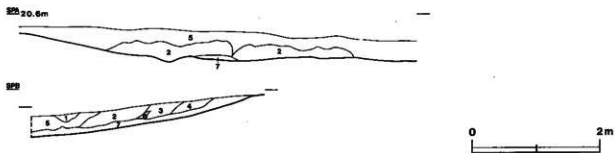
覆土 8層からなり、自然堆積と思われる。

覆土土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量，締まっている | 5 黒色 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量，硬く締まっている |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量，硬く締まっている | 6 暗褐色 | ローム小ブロック中量，硬く締まっている |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量，粘性有り | 7 灰褐色 | ローム中ブロック少量，硬く締まって粘性有り |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量，硬く締まっている | | |

遺物 出土遺物はなかった。

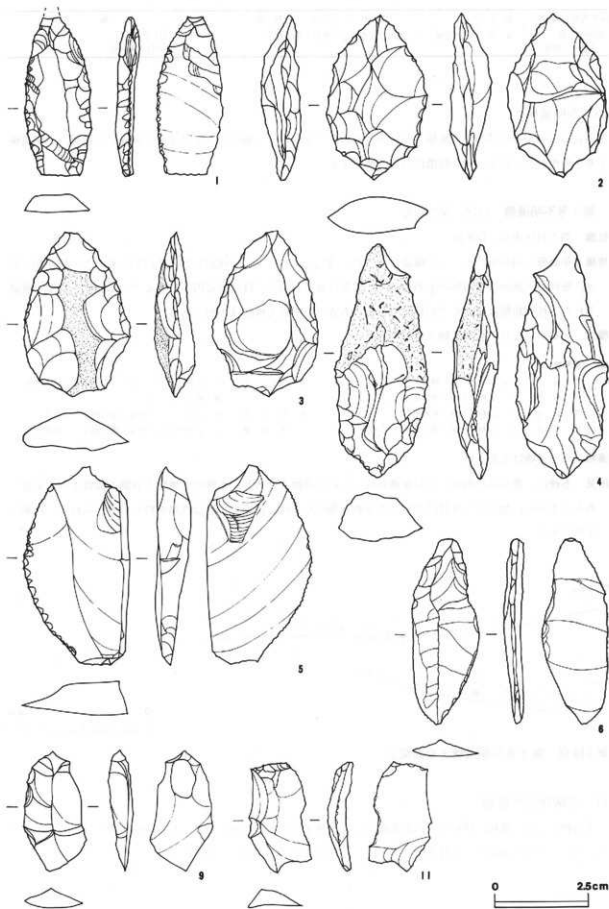
所見 本跡は、運沼川に向かって谷が落ち込んでいく斜面上にあり、本跡の台地側と谷側の高低差が1m近くあることから、物をくくり付けてつなぎ止める為のものか、櫛列のような性格を持つと考えられる。時期は不明である。



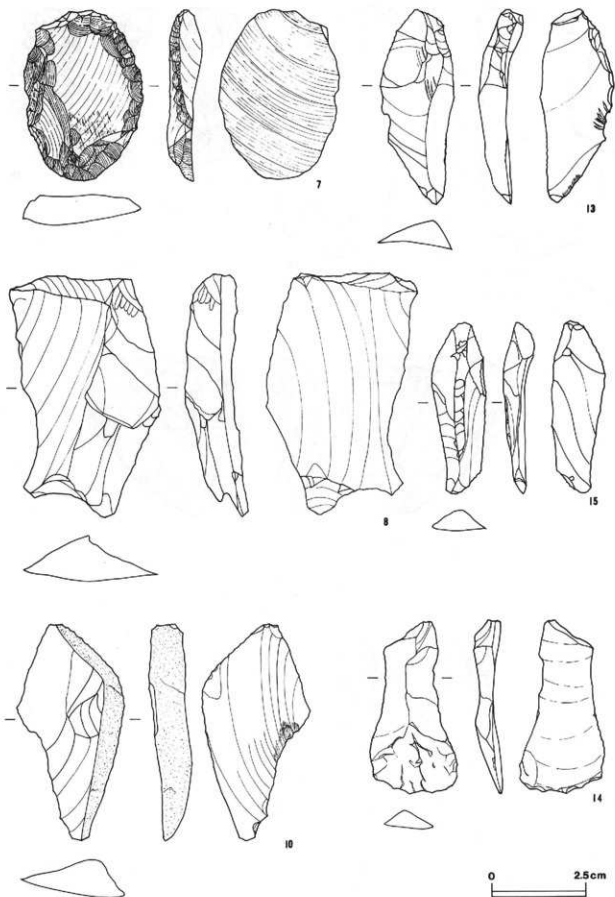
第210図 第1号不明遺構土層断面図

11 遺構外出土遺物

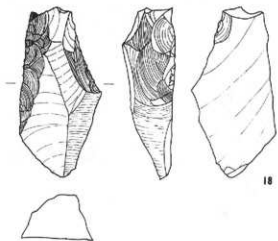
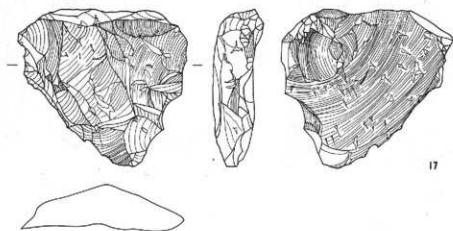
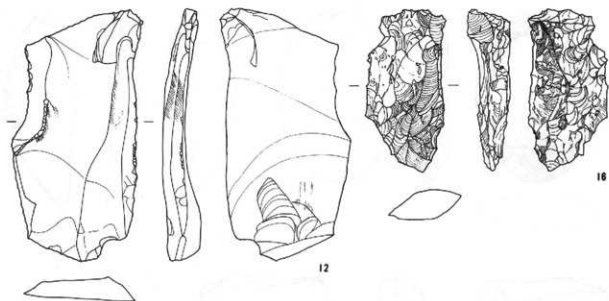
当遺跡からは、遺構に伴わない旧石器時代から近世までの土器片や土製品、石器等が出土している。ここでは、これらの出土遺物のうち特徴的なものについて掲載する。（第211～219図）



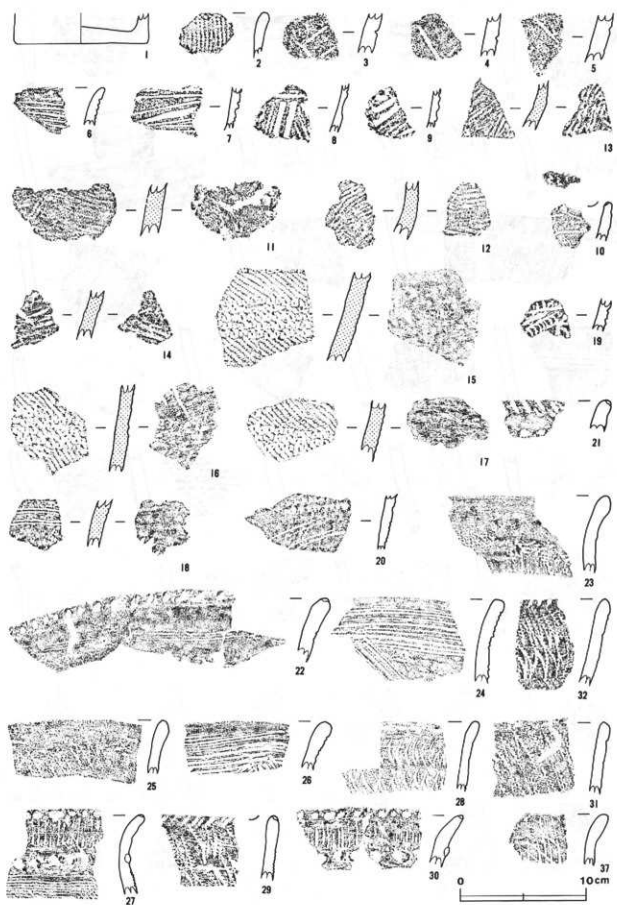
第 211 図 遠構外出土遺物実測図(1) (旧石器時代)



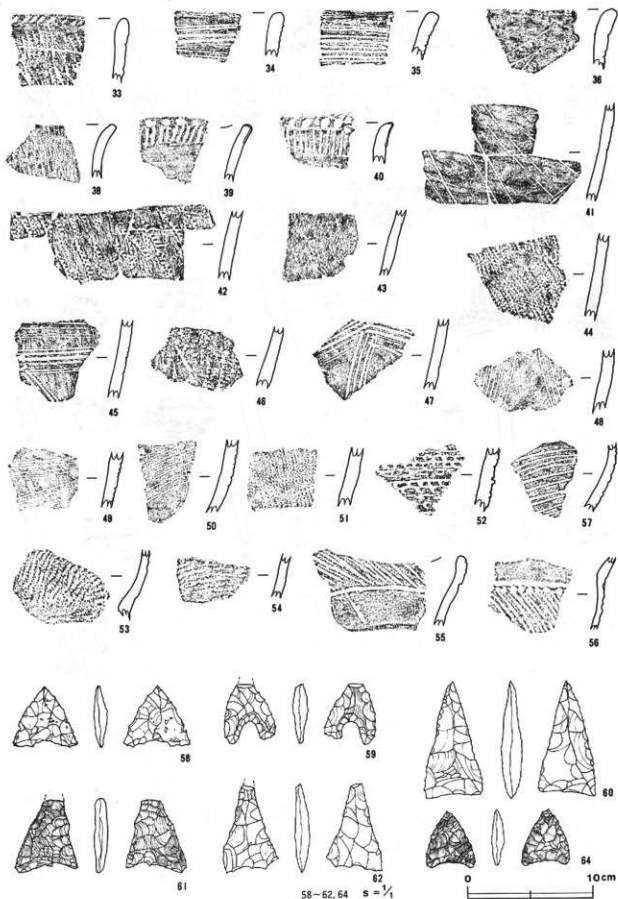
第 212 图 遺構外出土遺物実測図(2) (旧石器時代)



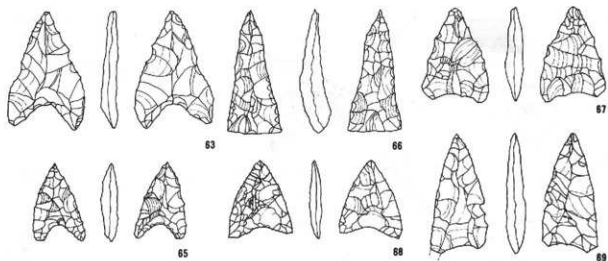
第 213 図 遠構外出土遺物実測図(3) (旧石器時代)



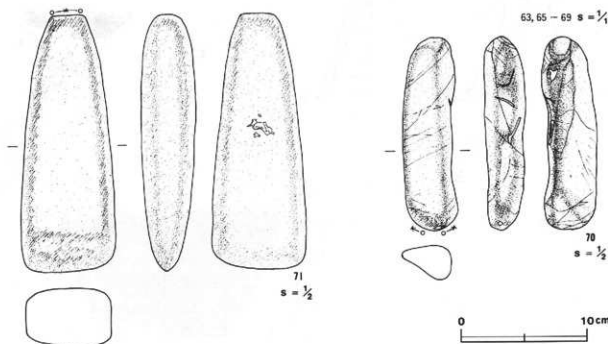
第 214 图 遺構外出土遺物実測図(4) (縄文時代)



第 215 圖 遺構外出土遺物実測図(5) (縄文時代)



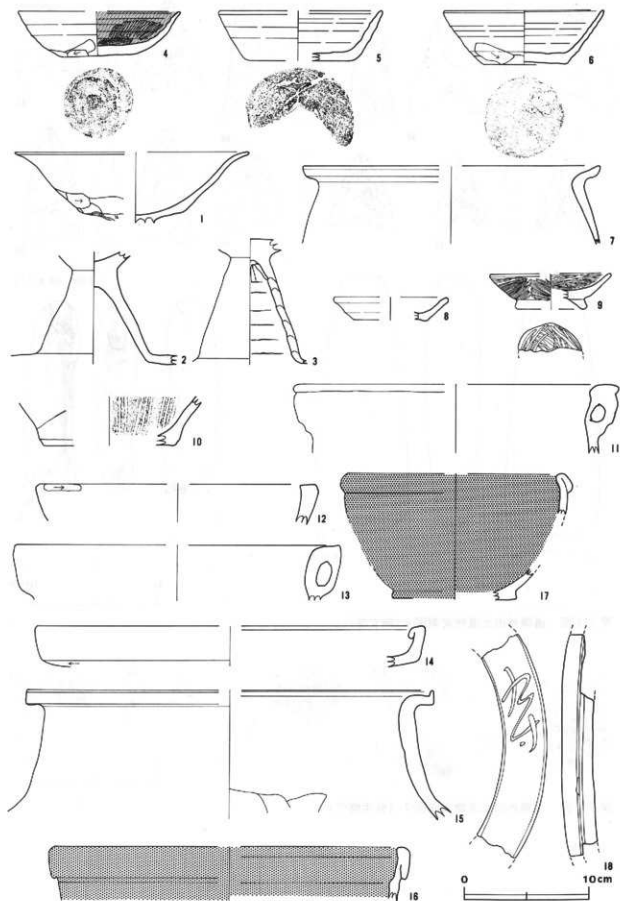
63, 65 - 69 $s = \frac{1}{2}$



第 216 图 遺構外出土遺物実測図(6)(縄文時代)



第 217 图 遺構外出土遺物実測図(7)(弥生時代)



第 218 图 遺構外出土遺物実測図(8) (古墳時代~近世)



第 219 图 遺構外出土遺物実測図(9) (古墳時代～近世)

遺構外出土石器一覧表(旧石器時代)(第211~213図)

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
1	尖頭器	4.2	1.8	0.6	(4)	珪質頁岩	A区表採	Q59 95%
2	尖頭器	4.4	2.7	1.1	10	安山岩	SI-51覆土中	Q16 100%
3	尖頭器	4.5	2.9	1.1	11	安山岩	SK-134覆土中	Q17 100%
4	尖頭器	6.2	2.4	1.2	16	安山岩	SI-65覆土中	Q51 100%
5	ナイフ形石器	5.3	2.8	0.9	13	頁岩	A区旧石器調査地点	Q30 100%
6	ナイフ形石器	4.9	1.8	0.5	3	チャート	A区表採	Q36 100%
7	スタレイバー	4.5	3.1	0.9	11	黒曜石	A区表採	Q37 100%
8	剥片	6.4	4.0	1.7	27	頁岩	A区旧石器調査地点	Q27
9	剥片	3.2	1.7	0.6	2	頁岩	A区旧石器調査地点	Q29
10	剥片	5.2	2.8	1.1	12	頁岩	A区旧石器調査地点	Q31
11	剥片	2.9	1.7	0.6	2	頁岩	A区旧石器調査地点	Q32
12	剥片	6.7	3.4	1.0	18	頁岩	A区表採	Q38
13	ナイフ形石器	5.1	2.0	1.1	6	頁岩	A区表採	Q39
14	剥片	4.6	2.3	0.8	4	頁岩	A区表採	Q40
15	剥片	4.6	1.4	0.8	4	黒色頁岩	A区表採	Q41
16	剥片	4.3	2.1	1.1	8	黒曜石	A区旧石器調査地点	Q28
17	剥片	4.2	4.5	1.3	16	黒曜石	SI-57覆土中	Q18
18	剥片	4.5	2.2	1.4	11	黒曜石	B区表採	Q52

遺構外出土遺物観察表(縄文時代)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第214図 1	深鉢形土器 縄文土器	B(2.5) C 10.7	底部の破片。平底。円筒形で、直立する。	砂粒 に多い黄褐色 普通	5% P398 縄文前期末 A区表採

遺構外出土遺物拓影図表(縄文時代)(第214, 215図)

群	時期	型式	図版番号	器種・部分	器形の特徴及び文様	備考
I	早期 前葉	夏島 (田戸下層 の前段階)	2	深鉢形土器口縁部	2は単純LRの縄文が施されている。	T P22 SI-71覆土中
			3~5	深鉢形土器胴部	3~5は沈線文が施されている。	T P24, 27, 38 A区表採
II	早期 中葉	田戸下層	6, 7	深鉢形土器口縁部	6, 7は沈線文が施されている。	T P29, 31 A区表採
			8, 9	深鉢形土器胴部	8, 9は縦帯に幅の広い沈線文が走り、その間に貝殻模様の文が施されている。	T P32, 33 SI-47覆土中
III	早期 後葉	茅山下層	10	深鉢形土器口縁部	10は口唇部に貝殻押捺による刻みを持つ。外面は沈線文が施されている。	T P35 SI-9覆土中
			11~14	深鉢形土器胴部	11~14は表裏ともに象嵌文が残る。胎土に繊維が含まれる。	T P37, 38, 39, 40 A区表採
IV	前期 前葉	関山	15~17	深鉢形土器胴部	15~17は3~5条のループ文が施されている。胎土に繊維が含まれる。	T P44, 45, 46 A区試掘グリッド
			18	深鉢形土器胴部	18は棒状工具による平行沈線文と刺突文が施されている。胎土に繊維が含まれている。	T P49 SI-47覆土中
V	前期 後葉	浮島II	19	深鉢形土器胴部	19は木葉文が施されている。	T P162 A区表採
			20	深鉢形土器胴部	20は菱形爪文が横に走り、棒状工具による平行沈線文が斜めに施されている。	T P50 SI-17覆土中
		浮島III	21	深鉢形土器口縁部	21は口唇部に斜位の刻みが押捺されている。	T P51 SK-271覆土中

V	前期 後集	興津	22~40	深鉢形土器口縁部	22~28は棒状工具による平行沈線文が施され、特に22は口縁部に斜位の刻みが押捺されている。29~36は貝殻波状文が施され、特に32, 34, 35は口唇部に斜位の刻みが押捺されている。37~40は口唇部に斜位の刻みの押捺が、直下に沈線文が施らされている。また、38と39は頸部に刺突文が施り、さらに39は平行沈線文が施されている。	T P 56-68, 71, 74, 75, 79, 82 A区表採
			41~52	深鉢形土器胴部	41~46は棒状工具による平行沈線文が施されている。47~51は貝殻波状文が施されている。52は半粒竹管の刺突文と、棒状工具による沈線文と刺突文が施されている。	T P 99-102, 104, 105, 107-111 A区表採 T P 148 SI-43覆土中
	葉島台		53, 54	深鉢形土器胴部	53は短節の縄文の圧痕が残る。54は草節 R L の縄文が施されている。	T P 163 A区試掘グリッド T P 164 A区表採
VI	後期 中葉	加曾井B II	55	深鉢形土器口縁部	55は頸部から斜位の沈線文が、また直下に棒状工具による横走りする沈線文が施されている。	T P 170 SI-58覆土中
			56, 57	深鉢形土器胴部	56は頸部に幅の広い沈線文を横に施らし、その直下に刺突文を施している。またその下に棒状工具による平行沈線文を施している。57は棒状工具による平行沈線文を施している。	T P 171, 172 SI-58覆土中

遺構外出土石器一覧表（縄文時代）(第215, 216図)

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
58	石鏃	1.6	1.7	0.4	1	安山岩	SI-12覆土中	Q60 100%
59	石鏃	(1.6)	1.3	0.4	(1)	チャート	A区旧石器調査地点	Q34 90%
60	石鏃	3.1	1.6	0.5	2	安山岩	A区旧石器調査地点	Q35 100%
61	石鏃	(1.9)	1.6	0.3	(1)	黒曜石	A区表採	Q42 90%
62	石鏃	(2.3)	1.4	0.4	(1)	チャート	A区表採	Q43 95%
63	石鏃	3.1	2.0	0.4	2	チャート	A区試掘グリッド	Q44 100%
64	石鏃	1.5	1.3	0.3	1	黒曜石	A区表採	Q45 100%
65	石鏃	2.0	1.4	0.4	1	チャート	SI-29覆土中	Q 5 100%
66	石鏃	3.3	1.5	0.7	2	チャート	SI-47覆土中	Q10 100%
67	石鏃	2.5	1.7	0.5	2	チャート	B区表採	Q53 100%
68	石鏃	2.0	1.6	0.3	1	チャート	B区表採	Q54 100%
69	石鏃	3.2	1.5	0.5	(2)	チャート	B区表採	Q55 95%
70	磨石	10.2	2.9	2.2	86	泥岩	A区旧石器調査地点	Q33 100%
71	石斧	13.5	5.0	2.9	323	砂岩	SI-32覆土中	Q 7 100%

遺構外出土遺物拓影図表（弥生時代）(第217図)

図版番号	器種・部分	器形の特徴及び文様	備考
1	壺・口縁部	1は折り返し口縁。口唇部に縄文原体が押圧されている。	T P 187 A区表採
2	壺・頸部	2は帯描文が施されている。	T P 188 A区表採
3~5	壺・胴部	3は竹管による刺突文が施されている。内面刻線。	T P 184 SI-14A覆土中
		4は帯描文が施されている。	T P 189 A区試掘グリッド
		5は縄文原体が押圧されている。	T P 185 SI-14A覆土中 外面赤彩
6	壺・胴部	6は附加条1種（附加2条）の縄文と結束文が施されている。	T P 186 SI-14A覆土中 外面赤彩 南関東系

遺構外出土遺物観察表 (古墳時代~近世)

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第218図 1	高坏土師器	A[18.8] B(5.7)	坏部の破片。丸みを持った平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。端部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。外面下位へラ削り。底部外面手持ちへラ削り。内面ナデ。	長石 石英 砂粒 赤褐色 普通	40% P337 SK-38覆土中
2	高坏土師器	B(9.0)	脚部の破片。脚部は太く、裾部はラッパ状に開く。	脚部外面横ナデ。内面へラナデ。	砂粒 赤褐色 普通	30% P396 A区表採
3	高坏土師器	B(10.0)	脚部の破片。脚部は太く、裾部はラッパ状に開く。	脚部外面横ナデ。内面輪轆直有り。	砂粒 赤褐色 普通	30% P397 A区表採
4	坏土師器	A[13.0] B 12-19 C 5-8	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部。体部内・外面クロコナテ。外面下位へラ削り。内面へラ磨き。底部回転へラ削り。	雲母 砂粒 スコリア 褐色 普通	45% P395 内面黒色処理 A区表採
5	坏土師器	A[13.1] B 4.0 C[8.5]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾し立ち上がる。	口縁部。体部内・外面クロコナテ。底部手持ちへラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 赤褐色 普通	35% P15 SI-5覆土中
6	坏土師器	A 12.7 B 4.3 C 6.6	体部。口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部。体部内・外面クロコナテ。外面下位へラ削り。底部手持ちへラ削り。	長石 雲母 砂粒 スコリア 褐色 普通	85% P401 B区表採
7	土師器	A[23.6] B(6.3)	体部から口縁部の破片。体部は外傾して立ち上がる。口縁部は外反して中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石 石英 砂粒 明赤褐色 普通	5% P402 B区表採
8	土師器	A[9.0] B 1.9 C[6.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。	水挽き成形。	砂粒 褐色 普通	10% P328 SI-71覆土中
9	高台付皿土師器	A[9.6] B 2.8 D[5.6] E 0.9	高台部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面。底部へラ磨き。高台部貼り付け横ナデ。	砂粒 赤褐色 普通	45% P382 SE-3覆土中
10	土師器	B(3.9) C[10.6]	底部から体部の破片。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	体部外面ナデ。下位へラナデ。内面8本単位の櫛目が施される。底部へラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 赤褐色 普通	5% P52 SI-11覆土中
11	内耳鉢土師器	A[23.6] B(5.5)	口縁部の破片。口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部は厚みを増す。口唇部は平底。	口縁部内・外面ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 赤褐色 普通	5% P399 A区表採
12	内耳鉢土師器	A[22.0] B(3.2)	口縁部の破片。口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部は厚みを増す。口唇部は平底。	口縁部内・外面横ナデ。外面上位へラ削り。	長石 雲母 砂粒 赤褐色 普通	5% P121 SI-24覆土中
13	内耳鉢土師器	A[26.0] B(4.4)	口縁部の破片。口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部は厚みを増す。口唇部は平底。	口縁部内・外面ナデ。	雲母 砂粒 明赤褐色 普通	5% P403 B区表採
14	土師器	A[30.6] B(3.4)	底部から口縁部の破片。平底。体部は直線的に立ち上がり。下位に稜を持つ。口縁部は外傾して、端部は内側に折り返されている。	口縁部。体部内・外面横ナデ。底部へラ削り。	長石 雲母 砂粒 赤褐色 普通	5% P96 外面スズ付素 SI-15覆土中
15	土師器	A[32.4] B(10.3)	口縁部の破片。口縁部は強く外反して、中位に稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	水挽き成形。	長石 砂粒 外面褐色 内面灰褐色 普通	5% P404 内外面自然焼 常滑産(13C初) SB-2,3備付
16	土師器	A[27.7] B(4.4)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。折り返し口縁。	水挽き成形。	長石 砂粒 灰赤褐色 黒褐色(輪) 普通	5% P175 瀬戸・美濃系 (18C) SI-34壁溝

第218図	煉土製土器	体部 A [17.4] B (5.8) C [10.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ、内彎して立ち上がり、端部は外反する。折り返し口縁。	水筒き成形。底部回転へう閉り後、ナデ。	砂粒 灰黄色 灰青褐色 灰オリーブ色(稀) 良好	20% P400 北関東系(18C) SI-11覆土中 良好
18	羽釜 土製土器	B (2.7)	破片。断面形は「L」字状。	内・外面横ナデ。	長石 石英 砂粒 黒褐色 普通	5% P388 内・外面スチ付着 刻書「九寸」 SD-5覆土中

遺構外出土石製品一覧表(古墳時代～近世)(第219図)

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
19	砾石	(7.3)	2.8	2.8	(75)	凝灰岩	A区表採	Q46
20	砾石	(5.6)	4.1	2.2	(78)	凝灰岩	A区表採	Q48
21	砾石	9.4	2.7	2.3	73	凝灰岩	A区表採	Q49
22	砾石	5.2	2.8	2.4	38	凝灰岩	A区表採	Q50
23	砾石	(9.4)	3.8	3.0	(104)	凝灰岩	B区表採	Q56
24	砾石	(3.8)	3.4	1.1	(21)	凝灰岩	B区表採	Q58 表裏穿孔痕
25	砾石	4.0	3.3	1.5	25	頁岩	B区表採	Q57

遺構外出土土製品一覧表(古墳時代～近世)(第219図)

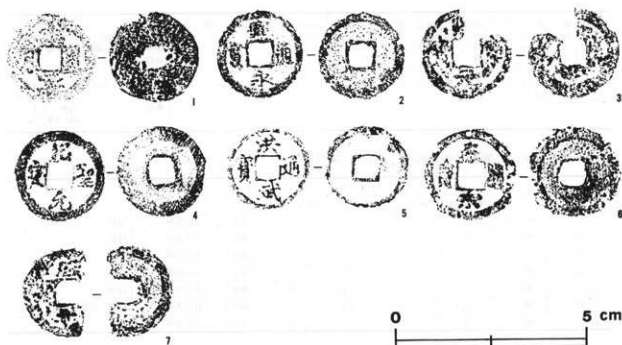
図版番号	器種	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
26	土玉	2.4	2.6	2.4	0.5	15	A区表採	D P23 100%
27	紡錘車	径径4.4		2.1	1.2	36	SD-10覆土中	D P 8 100%
28	土玉	2.1	1.9	2.1	0.4~0.5	6	B区試掘グリッド	D P25 100%

遺構外出土金属製品一覧表(古墳時代～近世)(第219図)

図版番号	器種	計測値		石質	出土地点	備考
		最大径(cm)	重量(g)			
29	火属銃の弾	1.3	11	鉛	A区表採	M20 100%
30	火属銃の弾	1.1	8	鉛	A区表採	M21 100%
31	火属銃の弾	1.2	9	鉛	A区表採	M22 100%

遺構外出土遺物拓影図表(古墳時代～近世)(第219図)

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考
32	壺 須恵器	口縁部	折り返し口縁。口縁部内・外面クロナデ。外面に6本磨歯による横走波状文が施されている。	T P21 SD-8覆土中
33	播鉢 土師製土器	口縁部 一休部	体部から口縁部にかけわずかに外反して立ち上がる。端部は厚みを増し、口唇部は平坦である。体部外面ナデ。内面に3本単位の磨目か施される。	T P192 A区試掘グリッド
34	火舎 瓦質土器	体部	体部は内彎気味に立ち上がる。外面中位に桜花文が刻印されている。	T P193 SI-31覆土中



第 220 図 古銭拓影図

表 2 古銭一覧表 (第 220 図)

図版 番号	銭名	初鋳年	鑄造地名	出土地点	備考
		西暦			
1	相豊元寶	1341	蘭	SK-37	M 11
2	寛永通寶	1624	日本	A区表探	M 16
3	〇〇元寶	-	-	SK-165	M 14
4	紹聖元寶	1094	北宋	B区表探 (SK-275 輪)	M 15
5	洪武通寶	1368	明	B区表探	M 17
6	皇宋通寶	1038	北宋	B区表探	M 18
7	成〇元寶	-	-	B区表探	M 19 咸康元寶(925) 咸平元寶(998) 咸淳元寶(1265)

神田遺跡遺構一覽表

表3 住居跡一覽表

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	面積 (m ²) (長×幅)	壁高 (cm)	床面	内 部 施 設					覆 土	出 土 遺 物	備 考 附録(注-頁)	
							壁溝	土柱穴	貯蔵穴	ピット	入口				炉
1	F2a	N-9°-E	隅丸方形	5.11×5.00	40~60	平坦	-	4	-	-	1	甌	人海	土師器36, 須恵器13, 支脚1	SI-2→本跡
2	F3a	不明	不明	(3.45×-)	20	平坦	-	-	-	-	-	炉	人海	土師器15, 須恵器1	本跡→SI-1
3	F3b	N-9°-E	方形	3.65×3.55	16~30	平坦	-	2	-	3	-	甌	人海	土師器36, 須恵器11	
4	G3a	N-12°-E	隅丸方形	4.90×4.72	30~55	平坦	-	4	-	3	1	甌	人海	土師器16A, 須恵器4, 陶器2, 磁器1	
5	G4a	N-38°-W	隅丸方形	6.60×6.30	55~65	平坦	-	4	-	2	1	炉	2人海	土師器29A, 須恵器78	焼土家屋 本跡→SD-5
6	F3c	N-4°-E	長方形	3.30×3.02	40~48	平坦	-	-	-	5	-	甌	人海	土師器63, 須恵器43	
7	E3a	N-18°-E	隅丸方形	4.15×4.11	23~33	凹凸	半周	4	-	-	-	甌	人海	土師器108, 須恵器7, 支脚2	
8	E3a	N-12°-E	隅丸方形	4.65×4.40	14~26	平坦	全周	4	-	-	1	甌	人海	土師器29, 須恵器151	
9	E3a	N-19°-W	隅丸方形	4.50×4.50	25~30	平坦	-	3	-	1	-	炉	人海	土師器100, 須恵器13, 縄文土師3	焼土家屋 本跡→SD-8
10	E4a	N-48°-W	隅丸方形	5.54×5.43	32~38	平坦	-	2	1	6	1	炉	人海	土師器156, 須恵器13, 磁石1	焼土家屋 本跡→SD-8
11	F5a	N-20°-W	方形	6.54×6.32	33	平坦	-	3	1	1	-	炉	人海	土師器24, 須恵器45, 土土瓦, 陶器4, 磁器1	焼土家屋 本跡→SD-1
12	E4a	N-32°-W	方形	6.50×6.40	28~38	平坦	-	4	1	1	-	炉	人海	土師器13A, 須恵器9, ガラス玉1	焼土家屋 本跡→SD-1 SC-17 F, SD-1
13	E4a	N-8°-E	隅丸方形	3.17×3.19	29~35	平坦	-	-	-	-	-	甌	自然	土師器6, 須恵器4	
14A	F4b	N-50°-W	隅丸方形	5.38×4.50	27	平坦	全周	3	-	-	1	炉	人海	土師器190, 須恵器9, 磁石1, 陶器3, 骨土師1, 陶器1	焼土家屋 本跡→SD-11 E
14B	F4a	N-32°-W	[方形]	[5.72×5.02]	40~50	平坦	-	3	-	10	-	炉	2人海	土師器128	焼土家屋 本跡→SD-11 A
15	F3a	N-8°-E	隅丸方形	5.30×5.04	55	平坦	一部	4	-	-	-	甌	人海	土師器74, 須恵器7, 土師質土師1, 陶器3	SD-11 B 本跡→SD-10
16	C3b	N-5°-E	隅丸方形	5.45×5.38	10~20	平坦	-	4	1	-	1	甌	人海	土師器94, 須恵器4, 陶器2	
17	D3a	N-8°-E	方形	3.58×3.50	4~20	凹凸	全周	-	-	3	1	甌	人海	土師器54, 須恵器15, 縄文土師1, 陶器1	焼土家屋
18	D3a	N-8°-E	[方形]	[3.35×2.90]	4~12	凹凸	-	-	-	7	-	甌	人海	土師器48, 須恵器15, 陶器1, 磁器1	
19	D3c	N-1°-E	方形	3.55×3.51	1~9	凹凸	半周	3	-	2	1	甌	自然	土師器24, 須恵器4, 陶器1	
20	D3a	N-22°-E	長方形	4.62×4.37	8~24	平坦	-	4	-	4	1	甌	人海	土師器78, 須恵器1	
21	D3a	N-12°-E	長方形	3.90×3.02	8~18	平坦	全周	4	-	-	1	甌	人海	土師器40, 須恵器12	
22	C3a	N-1°-E	長方形	7.18×6.58	1~15	平坦	全周	5	-	1	4	甌	人海	土師器30A, 須恵器54, 磁石1, 陶器4, 磁器2	SK-104, 本跡→ SK-172, 228
24	C4a	N-12°-E	[方形]	[4.75×4.65]	不明	平坦	-	4	-	-	1	甌	不明	土師器8, 須恵器1, 土師質土師1	
25	C4a	N-15°-E	方形	3.78×3.48	24~28	平坦	半周	4	-	1	1	甌	人海	土師器32, 須恵器12	本跡→SK-219, 225, 221, 222
26	C3a	N-5°-E	隅丸方形	3.84×2.86	6~12	平坦	-	-	-	-	-	甌	人海	土師器34, 須恵器11	
27	C3a	N-20°-E	隅丸方形	3.76×3.68	15~21	平坦	-	-	-	-	-	甌	自然 人海	土師器35A, 須恵器43, 磁石1	
28	C3a	N-18°-E	隅丸方形	3.87×3.86	58~66	平坦	一部	4	-	3	1	甌	人海	土師器30B, 須恵器27, 支脚1	
29	C3a	N-0°	方形	4.38×4.26	6~10	平坦	-	4	-	-	-	甌	自然	土師器104, 須恵器8, 石楯3	本跡→SI-73
30	C3a	N-19°-E	隅丸方形	2.76×2.69	10~20	平坦	全周	-	-	-	-	甌	人海	土師器184, 須恵器74	
31	C3a	N-15°-E	方形	3.44×3.53	15~25	平坦	全周	-	-	-	-	甌	人海	土師器63, 須恵器46, 磁石1, 支脚1, 土師1	
32	C3a	N-1°-E	長方形	3.43×3.46	17~28	平坦	全周	-	-	-	1	甌	人海	土師器17, 須恵器4, 石押1	焼土家屋
33	C4a	N-1°-E	方形	2.98×2.84	32	平坦	全周	-	-	-	1	甌	人海	土師器41, 須恵器29, 刀子1	本跡→SK-168
34	B3a	N-10°-W	方形	5.17×5.10	25~30	平坦	全周	4	-	-	1	甌	人海	土師器105, 須恵器22, 陶器2	本跡→SK-148, 149, 150, 151, 152
35	B3a	N-18°-E	方形	5.60×5.54	20~30	平坦	全周	4	-	-	1	甌	自然	土師器108, 須恵器22A, 磁石1, 陶器1	本跡→SK-138, 136, 135-6
36	B3a	N-18°-E	方形	3.92×3.65	27~30	平坦	全周	4	-	1	1	甌	人海	土師器132, 須恵器16	本跡→SK-164, 167, 273 A
37	B3a	N-19°-E	方形	3.78×2.54	2~10	平坦	-	2	-	3	1	甌	人海	土師器33	
38	B2a	N-29°-E	長方形	2.88×3.48	8~17	平坦	全周	3	-	-	1	甌	人海	土師器28, 須恵器12	

住居番号	位置	主軸方向	平面形	面積 (m) (狭小×縦)	壁高 (cm)	床面	内部施設				覆土	出土遺物	備考 新田園跡(古-新)		
							壁溝	主柱穴	副柱穴	ヒツ				入口	扉・竈
39 A	B4b	N-29°-E	【隅丸方形】	[3.18×2.84]	26~28	平 沢	全周	-	-	3	2	竈	人為	土層部 257, 須磨部 177, 礎石 2, 穴石 5 基 1, 瓦質土層 1, 陶器 1	本跡-SI-39 B
39 B			方 形	3.46×3.42											SI-39 A→本跡
40	B3f	N-17°-E	方 形	4.25×4.02	28~34	平 沢	全周	-	-	1	2	竈	人為	土層部 62, 須磨部 18, 礎石 1	本跡-SB-14, SK-349, 350
41	B3g	N-27°-E	方 形	3.95×3.50	36~38	平 沢	全周	3	-	-	1	竈	自然・人為	土層部 145, 須磨部 21, 土層部 62	本跡-SB-8
42	B4i	N-18°-E	方 形	4.94×4.78	34~37	平 沢	全周	4	-	2	1	竈	人為	土層部 193, 須磨部 194, 支脚 1, 刀子 1	本跡-SK-286
43	B4h	N-33°-E	方 形	4.13×2.94	22~26	平 沢	-	-	-	-	1	竈	自然	土層部 155, 須磨部 147, 支脚 4, 刀子 1, 瓦質土層 1	
44	B4e	N-14°-E	長方形	3.83×3.41	12~15	平 沢	全周	-	-	-	1	竈	人為	土層部 98, 須磨部 70	
45	B4c	N-9°-E	方 形	4.23×4.16	12~14	平 沢	全周	3	-	-	-	竈	人為	土層部 35, 須磨部 14	本跡-SK-298
46	B4c	N-21°-E	方 形	3.90×3.82	4~8	平 沢	一部	3	-	3	1	竈	自然	土層部 176, 須磨部 31	本跡-SK-291
47	B4a	N-17°-E	方 形	3.48×3.32	40~42	平 沢	全周	-	-	-	1	竈	人為	土層部 136, 須磨部 65, 礎石 1, 瓦質土層 4	
48	B3e	N-13°-E	方 形	4.45×4.40	34~36	平 沢	全周	-	-	4	-	竈	人為	土層部 284, 須磨部 151, 支脚 4	
49	B3b	N-7°-E	方 形	4.86×4.38	34~40	平 沢	-	4	-	1	1	竈	人為	土層部 221, 須磨部 162, 礎石 1, 支脚 3, 刀子 1, 瓦質土層 1	本跡-SB-9
50	B3c	N-20°-E	隅丸方形	3.45×3.33	24~26	平 沢	半周	2	-	-	1	竈	人為	土層部 77, 須磨部 31, 礎石 2, 支脚 2, 土玉 1	
51	B3d	N-7°-E	【長方形】	4.80×3.70	20~24	平 沢	-	-	-	-	-	竈	自然	土層部 204, 須磨部 184, 礎石 2, 刀子 1, 種子灰化層, 矢筈 1, 瓦質土層 1	本跡-SK-134
52	B3a	N-17°-E	方 形	4.80×4.53	10~24	平 沢	全周	4	-	-	1	竈	人為	土層部 66, 須磨部 15, 支脚 1	
53	B4d	N-23°-E	長方形	3.48×2.58	4~8	平 沢	-	-	-	2	-	一	人為	土層部 37, 須磨部 4, 礎石 1	
54	B3r	N-20°-E	【隅丸方形】	3.68×3.60	46	平 沢	-	-	-	2	0	一	人為	土層部 122, 須磨部 70	本跡-SK-290
55	A3j	N-16°-E	方 形	4.75×4.70	34~40	平 沢	全周	4	-	-	1	竈	人為	土層部 56, 須磨部 30	
56	A3g	N-23°-E	隅丸方形	3.01×2.94	40~52	平 沢	全周	4	-	-	2	竈	人為	土層部 126, 須磨部 59, 支脚 1, 刀子 1	
57	A3h	N-31°-E	長方形	2.95×2.58	2~4	平 沢	-	-	-	-	-	竈	自然・人為	土層部 25, 須磨部 15, 礎石 1	
58	A3a	N-9°-E	隅丸方形	5.50×3.38	34~39	平 沢	全周	4	-	-	1	竈	人為	土層部 123, 須磨部 34, 瓦質土層 4, 陶器 1	
59	A4g	N-13°-E	【長方形】	[4.07×3.72]	48~56	平 沢	半周	2	-	-	-	不明	人為	土層部 34, 須磨部 29	
60	B4e	N-8°-E	方 形	3.10×3.05	42	平 沢	-	3	-	2	-	竈	人為	土層部 48, 須磨部 29	本跡-SB-9
61	A4h	N-6°-E	【長方形】	[3.60×3.20]	3	平 沢	-	-	-	-	-	竈	不明	土層部 14, 須磨部 5	焼失家屋
62	A4f	N-25°-E	長方形	4.50×3.85	5	平 沢	半周	4	-	-	1	竈	不明	土層部 22, 須磨部 2	
63	A4i	N-20°-E	隅丸方形	6.24×5.54	5	平 沢	全周	4	-	1	1	竈	自然	土層部 135, 須磨部 88, 陶器 1	
64	A4j	N-7°-E	方 形	3.95×3.27	2	平 沢	全周	-	-	3	1	竈	不明	土玉 1	
65	B2e	N-28°-E	長方形	3.75×3.35	14~36	平 沢	全周	4	-	2	1	竈	自然	土層部 178, 須磨部 65, 礎石 1	
66	B2b	N-25°-E	【方形】	[3.22×3.75]	38~55	平 沢	-	-	-	-	1	竈	人為	土層部 57, 須磨部 19, 礎石 1, 支脚 1, 瓦質土層 3	
67	C3c	N-18°-E	隅丸方形	3.27×2.97	22	平 沢	全周	-	-	3	1	竈	人為	土層部 145, 須磨部 34, 土層部 68	
68	C3b	N-5°-E	長方形	3.17×2.60	14~19	平 沢	-	-	-	4	1	竈	人為	土層部 167, 須磨部 45	本跡-SK-233
69	B4b	N-10°-W	方 形	3.41×3.34	41~46	平 沢	全周	4	-	1	-	竈	人為	土層部 60, 須磨部 212, 刀子 1	焼失家屋
70	B4j	N-24°-E	隅丸方形	2.82×2.45	17~21	平 沢	半周	-	-	1	-	竈	人為	土層部 44, 須磨部 21	本跡-SK-244, 307
71	B3h	N-23°-E	方 形	3.30×3.24	40~42	平 沢	全周	-	-	3	1	竈	自然	土層部 95, 須磨部 52, 石製陶器 1, 瓦質土層 1, 土層部 13, 土層部 23, 粘土層部 1 の可能性	焼失家屋, 本跡-SI-29 A, B, 27, 28
72	B2f	N-6°-W	隅丸方形	3.09×2.02	18~32	平 沢	-	-	-	2	-	-	不明	土層部 16, 須磨部 2	
73	C3c	N-18°-E	長方形	2.96×2.29	8~13	平 沢	-	-	-	-	-	竈	自然	土層部 53, 須磨部 1, 土層部 13	SI-29→本跡
75	A3j	N-34°-E	方 形	2.24×2.18	6~16	平 沢	一部	2	-	-	1	竈	人為	土層部 33, 須磨部 9	
77	A3u	N-58°-W	長方形	3.40×3.12	10~30	平 沢	-	4	-	-	-	竈	人為	土層部 65, 須磨部 45	

表4 掘立柱建物跡一覽表

掘立柱建物番号	位置	長短方向	規模 (長さの単位はすべてm)					柱 穴 (長さの単位はすべてcm)					覆土	出土遺物	備 考 (遺構番号) 新田開係(古→新)				
			東西 距離	南北 距離	幅員間隔	開口間隔	間隔(m)	構造	柱大	平面形	縦深	幅員				間 隔	断面形	柱径	
1	D3cs	N-15°-E	1期	2.90	3.00	1.5-1.8	1.8-3.0	12.47	2列	7	長方形・円形	35-42	25-35	15-46	複合形	14-20	人	土師器5, 須恵器1	
2	C4cs	N-20°-E	4期	5.84	3.00	1.7-1.8	1.5-2.0	-	覆柱	8	円形・楕円形	36-83	32-56	10-66	複合形	10-18	人	土師器2	SB-3
3	C4da	-	-	3.00	3.70	1.1-1.4	-	-	-	4	円形・楕円形	40-70	25-48	14-34	複合形	10-14	不明	土師器5, 須恵器2	SB-2
4	C3bs	N-5°-W	2期	3.75	3.00	1.8-2.3	1.7-2.9	24.19	覆柱	10	円形・楕円形	36-75	30-74	22-55	複合形	10-14	人	土師器2, 須恵器1	本跡→SK-131, 274
5	B3ps	N-20°-E	2期	3.50	3.00	1.5-2.0	1.6-1.8	18.73	覆柱	10	円形・楕円形	33-86	30-70	12-35	複合形	14-24	人	土師器5, 須恵器2	本跡→SD-6
6	B3es	N-20°-E	2期	4.90	3.00	1.8-2.1	1.4-1.4	30.38	覆柱	10	円形・楕円形	30-83	44-79	34-48	複合形	15	人	土師器12, 須恵器1, 縄文土器2	SB-5→本跡, SB-7
7	B3es	N-17°-E	1期	3.15	3.00	1.4-1.7	1.2-1.3	13.86	2列	8	円形・楕円形	35-40	32-35	16-30	複合形	-	不明	土師器8, 須恵器2	SB-6
8	B3fs	N-10°-E	3期	6.20	3.00	2.2	2.1	[R.3]	覆柱	8	円形・楕円形	65-124	65-78	34-50	複合形	12-22	人	土師器13, 須恵器2	SI-41→本跡
9	B4ds	N-10°-E	2期	4.30	3.00	1.8-2.1	1.1-1.3	26.65	覆柱	10	長方形	86-115	70-85	58-76	複合形	14-20	人	土師器15, 須恵器1	SI-49, 60→本跡
10	B4bs	N-10°-E	2期	3.60	3.00	1.5	1.5-1.7	11.52	覆柱	7	円形・楕円形	50-78	42-60	26-47	複合形	10-20	人	土師器3, 須恵器2	
11	A3bs	N-30°-E	1期	4.00	3.00	1.7-2.3	4.6	24.00	2列	8	円形	60-73	-	48-62	複合形	18-22	人	土師器1	
12	A3ps	N-10°-E	1期	2.00	2.00	1.8-2.1	2.2	8.00	2列	5	円形	55-74	-	25-53	複合形	12	人	土師器1	
13	A4ps	N-10°-E	2期	3.80	2.00	1.5-2.3	1.3-1.2	13.30	覆柱	8	円形・楕円形	39-56	35-53	13-53	複合形	14	人		
14	B3fs	N-10°-E	3期	4.60	3.00	1.4-1.8	1.5-1.2	[L.20]	覆柱	9	円形・楕円形	37-80	35-63	12-48	複合形	17-20	人	土師器2, 須恵器5	SI-40→本跡

表5 地下式竈一覽表

地下式遺構番号	位置	長短方向 (長短方向)	平面形と規模 (m)				壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 (遺構番号) 新田開係(古→新)		
			上面		底面							深さ	
			平面形	長さ(m)×幅員(m)	平面形	長さ(m)×幅員(m)							
1	F4a1	N-38°-E	竈坑	円形	1.54	楕円形	1.10×0.92	1.38	垂直	平坦	人	土師器3, 礫1	(SK-38) 本跡→SD-1,8
			主室			長方形	2.55×1.55	1.60	垂直	平坦			
2	E4c1	N-38°-E	竈坑	楕円形	1.15×0.90	楕円形	0.85×0.60	0.95	垂直	平坦	人	須恵器1, 土師質土器1, 礫1	(SK-47)
			主室			長方形	2.20×1.35	0.92	77.1.1	平坦			
3	E4e1	N-10°-E	竈坑	不定形	2.20×1.65	長方形	1.28×0.60	0.46	外傾	平坦	人	土師器7, 須恵器2, 陶器2	(SK-61) 本跡→SD-9
			主室			長方形	2.90×1.70	0.84	垂直	平坦			
4	E4e0	N-86°-E	竈坑	円形	1.40	不定形	0.80×0.67	0.67	外傾	平坦	人	土師器3, 須恵器1, 土師質土器1	(SK-63) 本跡→SD-9
			主室			長方形	2.72×1.70	0.85	垂直	平坦			

表6 井戸一覽表

井戸番号	位置	長短方向	平面形	規 模		深さ(m)	断面	底面	覆土	出土遺物	備 考 (遺構番号) 新田開係(古→新)	
				長径(軸)×短径(軸) (単位はm)	上面 底面							
1	E4fs	N-7°-E	楕円形	3.35×2.35	0.98×0.90		(2.90)	楕円・円筒	-	人	土師器7, 須恵器3, 土師質土器1	(SE-1)
2	C4gs	N-27°-E	(円形)	1.38×1.23	0.88×0.80		(0.80)	円筒	-	人	土師器3, 須恵器2	(SE-4)
3	C3er	N-80°-E	楕円形	2.20×1.40	0.88×0.78		(1.90)	楕円・円筒	-	人	土師器32, 須恵器10, 陶器6, 礫20, 礫石1	(SE-5)
4	B3js	N-40°-W	楕円形	1.87×1.65	1.20×0.86		(1.90)	楕円・円筒	-	人		SI-35 →本跡(SE-6)

表7 大形整穴状遺構一覽表

大形整穴番号	位置	長径方向	平面形	規 模			深さ(m)	断面	底面	覆土	出土遺物	備 考 (遺構番号) 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸) (単位:m)		面積(m ²)						
				上 面	底 面							
1	E3dr	N-38°W	楕円形	2.60×2.30	1.76×1.45	0.30×0.30	1.52	楕円	平坦	人為	土師器12, 須恵器2, 土師質土器1	(SE-2) 本跡→SD-8
2	C4iz	N-0°	円形	3.70×3.65	2.45×2.38	0.70×0.70	1.78	楕円	平坦	人為	土師器78, 須恵器50, 土師質土器6, 罐1	(SE-3) *新→SK-118, 115, 117

表8 楕円形で墓塚と考えられる土坑一覽表 (第182, 183 図)

◎印は本文中に記述

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	面積(m ²)					
1	E4jz	N-56°W	楕円形	1.77×1.04	28	緩斜	平坦	人為	土師器6	
11	E4js	N-72°W	楕円形	1.88×1.24	16	緩斜	平坦	人為		
16	E4ia	N-57°W	楕円形	1.86×0.78	13	緩斜	平坦	人為		
17A	E4ha	N-12°E	楕円形	1.90×0.94	12	緩斜	平坦	人為		
◎17B	E4hb	N-23°E	楕円形	1.76×0.86	20	緩斜	平坦	人為		
19	E3db	N-83°W	不整楕円形	2.09×0.96	24	外傾	平坦	人為		
22	E4ir	N-12°E	楕円形	2.06×1.48	28	緩斜	平坦	人為		
23	E4is	N-20°E	楕円形	1.53×1.00	17	外傾	平坦	人為		
28	E4gr	N-75°W	不整楕円形	2.16×1.04	10	外傾	平坦	人為	土師器1, 陶器1	
29	E4gr	N-33°E	不整楕円形	1.38×1.32	19	緩斜	平坦	人為		SK-30
30	E4gr	N-0°	不整楕円形	1.83×1.04	12	緩斜	平坦	人為		SK-29
31	E4ia	N-49°W	不整楕円形	1.59×1.00	34	外傾	平坦	人為	土師器2	
33	E4fs	N-24°E	楕円形	1.41×0.93	41	外傾	平坦	人為		
34	E4fs	N-28°E	不整楕円形	2.98×1.73	13	緩斜	平坦	人為		
◎37	E4es	N-80°W	楕円形	1.42×0.77	8	緩斜	平坦	人為	古銭1	
43	E4es	N-15°E	楕円形	1.42×0.83	42	外傾	平坦	人為		
45	E4er	N-22°E	不整楕円形	1.63×0.92	24	外傾	平坦	人為	土師器7, 須恵器4	
46	E4en	N-71°W	[楕円形]	[1.58×0.81]	26	外傾	自然			本跡→SD-2
48	E4es	N-66°W	楕円形	2.28×1.40	20	緩斜	平坦	人為	土師器3	
51	E4ez	N-7°E	[楕円形]	[2.38×1.78]	26	外傾	平坦	人為	土師器3, 須恵器3	SK-53→本跡
53	E4dz	N-14°E	[楕円形]	[1.76×1.32]	26	外傾	平坦	人為		本跡→SK-51
56	E3es	N-3°W	不整楕円形	1.64×0.82	18	外傾	自然	土師器10, 須恵器4		
58	E3cs	N-15°E	楕円形	1.60×0.70	9	緩斜	平坦	人為	土師器4	
◎60	E3da	N-11°W	不整楕円形	2.18×1.84	60	外傾	平坦	人為	土師器1, 土師器5, 須恵器1, 礫石1, 人骨, 骨片	
62	E3es	N-3°W	不整楕円形	2.70×1.02	38	緩斜	皿状	人為	土師器5, 須恵器1, 獸骨	

表9 円形で墓塚と考えられる土坑一覽表 (第185~190 図)

◎印は本文中に記述

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	面積(m ²)					
6	F4az	N-10°E	楕円形	1.00×0.87	18	緩斜	平坦	人為		
◎10	E4jz	N-72°W	不整円形	1.24×1.13	31	垂直	平坦	人為		SK-9→本跡

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 重複関係 新旧関係(古-新)
				長径(m)×短径(m)	高さ(m)					
17D	E4i ₁	N-47°-E	円形	0.85×0.78	19	垂直	平坦	人海	土師器1, 陶器1	
17E	E4h ₂	N-82°-W	円形	1.08×1.04	12	緩斜	平坦	人海		
17G	E4j ₄	N-38°-E	円形	1.01×0.93	33	垂直	平坦	人海	土師器2, 須恵器1	
17H	E4j ₄	N-38°-W	円形	0.95×0.88	36	垂直	平坦	人海	土師器2, 須恵器2	
52	E4g ₃	N-14°-E	[不整形円形]	[1.16×0.98]	15	緩斜	平坦	人海	土師器4, 須恵器2	本跡→SK-20
◎83	D3i ₇	N-37°-E	不整形円形	1.22×1.11	24	外傾	平坦	人海	土師器2, 鉄釘3	
91	D4a ₃	N-29°-E	円形	1.36×1.24	20	緩斜	皿状	人海	土師器6, 須恵器1	
92	C4i ₁	N-0°	円形	0.71×0.70	22	緩斜	平坦	人海	土師器11	
93	C4h ₁	N-0°	[円形]	[1.30×1.20]	16	緩斜	平坦	人海		本跡→SK-94 A
94A	C4h ₃	N-31°-W	[円形]	[1.14×1.12]	20	緩斜	平坦	不明		SK-93→本跡, SK-94 B
94B	C4h ₃	N-31°-W	[円形]	[1.28×1.20]	24	緩斜	平坦	人海		SK-94 A
96	C3h ₁	N-0°	[円形]	[1.20×1.08]	18	緩斜	平坦	人海		本跡→SK-95
98	C3g ₁	N-40°-W	円形	1.35×1.33	58	外傾	平坦	人海		
100B	C4h ₃	N-80°-E	[楕円形]	[1.23×1.11]	20	外傾	平坦	人海	--	本跡→SK-100 A
101A	C4g ₂	N-73°-W	[楕円形]	[1.56×1.30]	21	外傾	平坦	人海	--	本跡→SK-101 B
102	C3g ₉	N-37°-E	円形	1.09×1.04	14	外傾	平坦	人海	土師器4, 須恵器2	
103	C4g ₃	N-90°-W	円形	1.18×1.10	20	垂直	平坦	人海		
105	C4g ₃	N-51°-W	[円形]	1.26×1.25	17	外傾	平坦	人海		SD-13→本跡 →SK-171
106	C4e ₁	N-46°-E	楕円形	0.97×0.85	9	外傾	平坦	人海	土師器2	
107A	C4f ₂	N-62°-W	円形	1.24×1.20	33	外傾	平坦	人海	土師器2, 須恵器1	SK-107B→本跡
107B	C4g ₂	N-79°-W	[円形]	[1.30×1.30]	19	緩斜	平坦	人海	--	本跡 →SK-107A, 108
108	C4f ₂	N-80°-E	円形	1.08×1.00	34	外傾	平坦	人海	土師器1	SK-107B→本跡
109	C4f ₁	N-27°-W	円形	1.19×1.13	36	外傾	平坦	人海	土師器2, 須恵器3	
110	C4f ₁	N-71°-W	円形	0.83×0.76	14	緩斜	平坦	人海	須恵器2	
113	C3d ₂	N-10°-W	円形	1.42×1.35	10	緩斜	平坦	人海	土師器2, 須恵器2	
114	C3d ₃	N-42°-W	不整形円形	1.25×1.17	26	外傾	平坦	人海		
120B	C3e ₅	N-13°-E	[不整形円形]	0.95×0.95	19	外傾	平坦	人海		SK-120 A
127	C3e ₅	N-24°-E	[円形]	[1.35×1.27]	14	緩斜	平坦	人海	土師器3, 須恵器4	本跡→SK-126
130	C3b ₅	N-0°	円形	1.06×1.02	21	外傾	平坦	人海	土師器2, 須恵器1	
135	C3a ₅	N-0°	円形	1.60×1.50	18	緩斜	平坦	人海	須恵器3	
137	C3b ₆	N-25°-E	[円形]	[1.36×1.32]	16	緩斜	平坦	人海		SD-17→本跡
138	B3j ₆	N-0°	[円形]	[1.04×1.01]	24	外傾	平坦	不明		SI-35→本跡
141	C3c ₇	N-0°	[円形]	[1.12×1.08]	18	緩斜	平坦	人海		SD-14→本跡
142	C3b ₆	N-58°-E	楕円形	1.40×1.14	32	外傾	平坦	人海	土師器8, 須恵器3	
143	C3a ₁	N-0°	[円形]	[1.30×1.30]	25	緩斜	平坦	人海		本跡→SK-156
144	C3b ₆	N-30°-W	不整形円形	1.58×1.47	47	外傾	平坦	人海	土師器16, 須恵器8	
145A	C3a ₀	N-66°-E	[不整形円形]	[1.59×1.53]	31	外傾	平坦	人海	--	本跡→SK-145 B
146	B3j ₆	N-0°	[円形]	1.20×1.14	22	垂直	平坦	人海	土師器9, 須恵器3	SI-34, SK-147 →本跡
147	B3j ₇	N-0°	[円形]	[1.26×1.18]	43	緩斜	平坦	人海	土師器8, 須恵器6	SI-34→本跡 →SK-146, 218
149	C3a ₃	N-0°	不整形円形	1.54×1.52	37	外傾	平坦	人海	土師器8, 須恵器2	

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係 新旧関係(古→新)
				経(南)×横(北)(m)	厚(m)					
150	C3c	N-72°-E	不整形	1.25×1.17	26	外傾	平坦	人海	土師器9, 須惠器3	
151A	C3aa	N-60°-W	[横円形]	[1.42×1.14]	27	外傾	平坦	人海	土師器17, 須惠器3	SK-151 B
152	C3aa	N-51°-W	横円形	1.45×1.20	30	外傾	平坦	人海	土師器12, 須惠器4	
153A	B3ja	N-52°-W	[横円形]	[1.16×1.04]	32	外傾	平坦	人海	土師器4, 須惠器1	SI-34, SK-153B →本跡
153B	B3je	N-50°-E	[横円形]	(1.16×0.91)	33	緩斜	平坦	不明		SI-34→本跡→ SK-153 A
154	B3je	N-55°-W	円形	1.12×1.06	33	緩斜	平坦	人海	土師器2	SI-34→本跡
156	C3aa	N-35°-E	[円形]	[1.60×1.46]	6	緩斜	平坦	人海	土師器6	SI-34, SK-143 →本跡
157	B3js	N-36°-W	不整形	1.39×1.10	23	外傾	平坦	人海	土師器6, 須惠器3	
160	B4gz	N-18°-W	円形	1.28×1.28	12	緩斜	平坦	人海	土師器11, 須惠器3, 土師質土器1	
161	B3ea	N-16°-E	横円形	1.16×1.01	24	外傾	平坦	人海	土師器2, 須惠器3	
162A	C3aa	N-60°-E	[横円形]	[1.20×1.00]	38	緩斜	平坦	人海	土師器4, 須惠器3	SK-162B→本跡
162B	C3aa	N-0°	[不整形]	[1.00×1.00]	12	緩斜	平坦	人海		本跡→SK-162 A
163	C4a1	N-42°-W	横円形	1.88×1.44	21	緩斜	平坦	人海	土師器12, 須惠器3	
164	B3hr	N-19°-E	横円形	0.89×0.75	53	垂直	平坦	人海		SI-36→本跡→ SK-197
◎165	B3ie	N-50°-E	円形	1.25×1.19	30	外傾	平坦	人海	土師器2, 古銭1	SK-193, 261, 282
166	C3ba	N-26°-W	横円形	1.83×1.51	34	外傾	平坦	人海	土師器27, 須惠器5	
168	C4d	N-40°-W	横円形	1.17×1.03	10	外傾	平坦	人海	土師器6, 須惠器1	SI-33→本跡
169	C3is	N-0°	円形	1.09×1.08	12	外傾	平坦	人海	土師器1, 磁器1	
171	C4gs	N-54°-E	円形	1.20×1.15	31	緩斜	平坦	人海		SK-105→本跡
◎173	B3is	N-0°	円形	1.60×1.42	44	外傾	平坦	人海	土師器5, 土師質土器1	SK-226, 282 →本跡
◎175	C4dz	N-0°	円形	1.29×1.29	51	外傾	平坦	人海	土師器8, 須惠器10, 土師質土器1	
181	C4dz	N-0°	円形	1.14×1.09	36	外傾	平坦	人海	土師器10, 須惠器5	
182	B4gs	N-0°	円形	1.22×1.21	31	外傾	平坦	人海	土師器4	
185	C4a1	N-48°-W	不整形	1.25×1.14	15	緩斜	平坦	人海	土師器3, 須惠器4	
187	B3is	N-0°	円形	0.99×0.92	21	外傾	平坦	人海		
188	B4hs	N-0°	円形	1.15×1.12	18	緩斜	平坦	人海	土師器3, 須惠器4	
189	B4i1	N-0°	円形	1.31×1.29	35	緩斜	平坦	人海	土師器29, 須惠器18, 土師質土器1, 海部3, 磁器1, 鉄製品1, 古銭1	
192	B3ha	N-32°-E	横円形	1.27×1.15	45	外傾	平坦	人海	土師器4, 須惠器3, 土師質土器2	
193	B3jr	N-15°-E	円形	1.28×1.20	44	垂直	平坦	人海		SK-165
194	B3jr	N-59°-E	円形	1.10×1.03	48	垂直	平坦	人海		
196	B3ie	N-39°-W	円形	1.10×1.08	24	外傾	平坦	人海	土師器17, 陶器1	
209	C4iz	N-26°-E	円形	1.55×1.44	21	緩斜	平坦	人海	土師器6, 須惠器2	
210B	C3fs	N-28°-E	円形	0.88×0.86	41	垂直	平坦	人海	-	SK-210 A
211	C4ds	N-82°-E	不整形	1.25×1.17	34	外傾	凹凸	人海	土師器2, 須惠器5	
212	C4ds	N-23°-W	円形	1.36×1.34	52	外傾	平坦	人海	土師器11, 須惠器6, 鉄製品1	
213	C4ea	N-16°-W	円形	1.00×0.96	16	外傾	平坦	人海		
215	C4gs	N-0°	[円形]	[1.05×1.03]	20	緩斜	平坦	人海		本跡→SK-101 B
216	C4hz	N-0°	[円形]	[1.42×1.32]	33	垂直	平坦	人海	土師器6, 須惠器3, 土師質土器1	SE-3→本跡
217	C4hs	N-67°-E	[横円形]	[1.19×1.01]	18	外傾	平坦	人海	土師器8, 須惠器1	SE-3→本跡
218	B3jr	N-0°	横円形	1.08×0.98	28	緩斜	平坦	人海	土師器6	SI-34, SK-147, 255→本跡

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 直接関係 箇所関係(古-新)
				長径(幅)×短径(幅)(m)	高さ(m)					
219	C4e	N-0°	[円形]	[1.38×1.26]	48	外傾	平坦	人海	土師器4, 須恵器1	SI-25→本跡
220	C4e	N-0°	円形	1.04×0.98	28	外傾	平坦	人海	土師器2	SI-25→本跡
221	C4f	N-30°-E	[円形]	[0.98×0.96]	29	緩斜	凹凸	人海		SI-25→本跡
222	C4f	N-28°-E	[円形]	[1.04×1.01]	20	緩斜	平坦	人海	土師器3	SI-25→本跡
224	B3j	N-0°	円形	1.52×1.48	51	外傾	平坦	人海	土師器7, 須恵器4	SI-34→本跡
225	B3j	N-0°	[円形]	[1.14×1.12]	34	外傾	平坦	人海	土師器4, 須恵器5	SI-34→本跡
226	B3is	N-0°	[楕円形]	[1.27×1.04]	44	外傾	平坦	人海		本跡→SK-173
227	C3aa	N-33°-W	楕円形	1.34×1.06	4	緩斜	平坦	人海		SI-34→本跡
229	C4ga	N-0°	[円形]	(1.10×0.25)	24	緩斜	皿状	人海		本跡→SK-100 A
231	B4fs	N-0°	円形	1.30×1.22	32	外傾	平坦	人海	土師器2, 須恵器4	
232	C3ba	N-11°-W	円形	1.16×1.15	18	緩斜	平坦	人海	土師器8, 須恵器4	
233	C3ba	N-0°	円形	1.23×1.13	21	緩斜	平坦	人海	土師器6, 須恵器4	SI-68→本跡
236	C3br	N-25°-E	楕円形	0.78×0.68	15	緩斜	皿状	不明	土師器2	SD-14→本跡
239	C4ez	N-6°-W	楕円形	1.13×0.90	33	外傾	平坦	人海	土師器12, 須恵器3	
240	C3ba	N-0°	円形	1.30×1.30	35	外傾	平坦	人海	土師器11, 須恵器12	SK-249, 250 →本跡
241A	C3ba	N-0°	[円形]	[1.40×1.40]	45	外傾	平坦	人海	土師器44, 須恵器10, 陶器1	SK-241B, 248 C
241B	C3ba	N-54°-E	[円形]	[1.30×1.20]	45	外傾	平坦	人海	土師器14, 須恵器1	SK-241A, 254
244	B4j	N-9°-W	[円形]	[1.07×1.02]	22	垂直	平坦	人海	土師器15, 須恵器1	SI-70→本跡
245	C3aa	N-0°	不整形円形	1.34×1.27	34	外傾	平坦	人海	土師器15, 須恵器2	
◎247	B3da	N-52°-W	円形	1.50×1.42	16	緩斜	平坦	人海	土師器1, 須恵器1, 土師土器1	
248A	C3ba	N-70°-E	[楕円形]	[1.58×1.30]	29	緩斜	平坦	人海	土師器22, 須恵器2	SK-248B→本跡
248B	C3ba	N-16°-W	[楕円形]	[1.24×1.10]	30	緩斜	平坦	人海		SK-248C, 本跡 →SK-248 A
248C	C3ba	N-27°-W	[楕円形]	[1.40×1.20]	28	緩斜	平坦	人海		SK-248B, 本跡 →SK-241A, 249
249	C3ba	N-24°-W	[楕円形]	[1.62×1.36]	40	緩斜	平坦	人海	土師器18, 須恵器1	SK-248C, 250→本跡 →SK-240
250	C3ba	N-40°-W	[円形]	[1.12×1.10]	12	緩斜	平坦	人海	土師器9, 須恵器1	本跡 →SK-240, 249
251	C3aa	N-31°-E	円形	1.34×1.30	36	緩斜	平坦	人海		
252	C3aa	N-76°-W	円形	1.30×1.28	38	外傾	平坦	人海	土師器2	SK-253→本跡
253	C3aa	N-26°-E	[円形]	[1.16×1.08]	43	外傾	平坦	人海	土師器7	SK-254, 本跡 →SK-252
254	C3aa	N-32°-W	[円形]	[1.20×1.12]	27	外傾	平坦	人海	土師器15, 須恵器6, 陶器1	SK-241B, 253
255	B3j	N-44°-W	[円形]	[1.38×1.26]	42	緩斜	平坦	人海	土師器4, 須恵器6	本跡→SK-218
256	B3j	N-0°	円形	1.09×1.07	51	垂直	平坦	人海	土師器5, 須恵器6	
257	B4gs	N-0°	円形	1.01×0.96	14	緩斜	平坦	人海	土師器2, 須恵器2	
258A	B3is	N-37°-E	[円形]	[1.11×1.10]	21	緩斜	平坦	不明	-	SI-71→本跡 →SK-258 B
259	B4ei	N-0°	円形	1.02×0.98	26	外傾	平坦	人海	土師器6, 須恵器2	
260	B3ba	N-0°	[円形]	[1.19×1.14]	45	垂直	平坦	人海	土師器4	
261	B3is	N-0°	円形	1.40×1.31	55	外傾	平坦	人海	須恵器2	SK-165
262	B3ba	N-27°-E	楕円形	0.82×0.73	24	緩斜	皿状	人海	土師器4, 須恵器1	
265	B3ba	N-26°-E	円形	1.06×1.08	33	外傾	平坦	人海	土師器8, 須恵器5	
267	B4ez	N-90°-W	円形	1.10×1.08	23	緩斜	平坦	人海	須恵器1	
268	B3ba	N-53°-W	円形	1.33×1.30	50	外傾	平坦	人海	礎7	

土坑 番号	位置 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 重複関係 新旧関係(古→新)
			長径(m)×短径(m)	深さ(m)					
269	B3gs	N-90°-W	円 形	1.21×1.17	48	外傾	平坦	人為	土師器2, 須恵器 6
272	C3bs	N-68°-W	円 形	1.13×1.10	20	外傾	平坦	人為	土師器5, 須恵器 3
277	B3hs	N-81°-W	[楕 円 形]	(0.74×0.63)	50	外傾	平坦	不明	SI-71→本跡, SK-278
278	B3is	N-80°-W	[楕 円 形]	(0.91×0.57)	50	外傾	平坦	人為	SI-71→本跡, SK-277
281	B3hs	N-76°-W	円 形	1.26×1.20	32	外傾	平坦	人為	
285	B4gs	N-65°-W	円 形	1.00×0.93	21	外傾	平坦	人為	土師器4, 須恵器 5
287A	B4gs	N-62°-E	[楕 円 形]	[1.23×0.98]	16	緩斜	平坦	人為	須恵器 2
287B	B4gs	N-31°-E	円 形	1.20×1.20	35	外傾	平坦	人為	— SK-287A, 299 →本跡
288	B4gs	N-15°-W	円 形	1.16×1.10	21	外傾	平坦	人為	土師器11, 須恵器 3
291	B4es	N-57°-W	円 形	0.80×0.74	19	外傾	平坦	人為	土師器2, 須恵器 3
299	B4fs	N-53°-W	[楕 円 形]	[1.29×1.07]	16	緩斜	平坦	人為	土師器4, 須恵器 2
300	B4fs	N-53°-W	円 形	1.20×1.18	18	緩斜	平坦	人為	土師器3, 須恵器 2
301	B4fs	N-43°-W	楕 円 形	0.98×0.88	16	緩斜	平坦	人為	土師器2, 須恵器 2
302	B4is	N-45°-E	円 形	1.08×1.02	18	緩斜	平坦	人為	土師器6, 須恵器 2
307	C4as	N-33°-W	楕 円 形	1.04×0.94	20	緩斜	平坦	人為	土師器3, 須恵器 1
321	D3is	N-67°-W	円 形	1.50×1.42	22	外傾	平坦	人為	—
322	D3is	N-66°-W	円 形	1.00×0.82	36	外傾	平坦	人為	—
324	D3is	N-63°-W	円 形	0.78×0.76	30	緩斜	平坦	人為	—

表10 方形竪穴状遺構一覽表

◎印は本文中に記述

方形 竪穴 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 (遺跡番号)
				長径(m)×短径(m)	深さ(m)					
◎1	E4fs	N-6°-E	不整形方形	2.07×1.88	51	外傾	平坦	人為	土師器12, 須恵器 8	(SK-39)
◎2	E4fs	N-71°-W	不整形方形	2.04×1.98	35	外傾	平坦	自然	骨粉	(SK-72)

表11 火葬施設一覽表

◎印は本文中に記述

火葬 施設 番号	位置	種 類	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 (遺跡番号)
					長径(m)×短径(m)	深さ(m)					
◎1	E4fs	灰 気 坑	N-71°-W	楕 円 形	0.75×0.60	11	緩斜	凹状	人為	人骨	(SK-18)
		煮 炭 坑	N-0°	円 形	0.62×0.60	5	緩斜	凹状	人為		

表12 方形土坑一覽表(第194~196図)

◎印は本文中に記述

土坑 番号	位置 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 重複関係 新旧関係(古→新)
			長径(m)×短径(m)	深さ(m)					
2	E4js	N-38°-E	不整形方形	1.49×1.41	37	緩斜	平坦	人為	土師器2, 磁器1, 石器 1
◎3	F4as	N-56°-W	長 方 形	2.27×0.83	36	垂直	平坦	人為	土師器2, 土師貫土器 2
◎9	E4js	N-4°-E	[長 方 形]	1.80×0.84	[28]	垂直	平坦	人為	本跡→SK-10
14A	E4is	N-10°-E	長 方 形	2.70×1.07	21	緩斜	平坦	人為	SK-14B→本跡
14B	E4js	N-78°-W	[長 方 形]	[1.98×0.95]	21	外傾	平坦	不明	本跡→SK-14A
17C	E4hs	N-20°-E	長 方 形	1.23×0.69	15	緩斜	平坦	人為	
17F	E4is	N-11°-E	[長 方 形]	[1.90×0.83]	13	外傾	平坦	人為	SI-12→本跡

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係 新旧関係(古→新)
				長径(m)	短径(m)					
20	E4gs	N-14°-E	長方形	2.30×0.98	41	外傾	平坦	人為		SK-52→本跡
21	E4hs	N-72°-E	不整形円形	1.59×1.30	66	垂直	平坦	人為		
27	E4gs	N-8°-E	長方形	1.72×0.92	8	外傾	平坦	人為	土葬器4, 須恵器2	
32	E4fs	N-2°-W	長方形	2.27×0.68	12	緩斜	平坦	人為		
41	E4gs	N-21°-E	長方形	2.60×1.09	22	外傾	平坦	人為	土葬器1, 須恵器1	
◎44	E4fs	N-27°-E	長方形	2.61×1.20	13	外傾	平坦	人為	土葬器1, 陶器1	
82	D3is	N-80°-W	長方形	1.90×0.76	13	緩斜	凹凸	人為	土葬器1, 須恵器1	
85	D3is	N-27°-E	長方形	2.00×0.78	38	垂直	平坦	人為	土葬器4, 須恵器1, 磁器1	
86	D3hs	N-23°-E	長方形	2.04×0.80	44	垂直	平坦	人為	土葬器2, 瓦質土器1	
87	D3gs	N-23°-E	長方形	3.88×0.90	48	垂直	平坦	人為	土葬器10, 須恵器7, 陶器3, 磁器3, 鉄製品1	
◎88	D3es	N-24°-E	長方形	5.60×0.86	44	垂直	平坦	人為	土葬器7, 須恵器5, 陶器1, 磁器1, 瓦質土器2, 鉄製品5	
90	D4hs	N-20°-E	長方形	1.42×0.88	30	垂直	平坦	人為	土葬器3, 須恵器1, 陶器3	
95	C3hs	N-80°-W	[長方形]	[1.86×0.88]	24	垂直	平坦	人為	土葬器2, 須恵器1	SK-96→本跡
99	C4gs	N-77°-W	[長方形]	[1.77×0.98]	26	外傾	平坦	人為		
100A	C4hs	N-77°-W	[長方形]	[2.18×0.99]	54	外傾	平坦	人為	土葬器14, 須恵器4, 陶器3	SK-100B, 229 →本跡
◎101B	C4gs	N-74°-W	[長方形]	4.40×0.90	25	外傾	平坦	人為	土葬器10, 須恵器3, 陶器1, 鉄製品1	SK-101A, 215 →本跡
116	C3fs	N-76°-W	長方形	3.01×0.74	15	外傾	平坦	人為	土葬器5, 陶器1	SK-119→本跡
117	C3fs	N-11°-E	[長方形]	[2.62×0.59]	25	外傾	平坦	人為	土葬器3	本跡→SK-119
119	C3fs	N-13°-E	[長方形]	[3.62×0.72]	38	外傾	平坦	人為	土葬器3, 須恵器1, 陶器1	SK-117→本跡 →SK-116
◎124	D3cs	N-19°-E	長方形	4.94×0.83	42	垂直	平坦	人為	土葬器55, 須恵器12, 土質土器1, 鉄製品8, かんざし1, 土製品1	陶器9, 磁器5, 鉄製品1
133	B3jt	N-75°-W	長方形	1.84×0.96	15	外傾	平坦	人為	須恵器2	
170	C4ht	N-21°-E	長方形	1.64×0.66	24	垂直	平坦	人為	土葬器20, 須恵器1, 土質土器1, 陶器1, 鉄製品1, 磁器1	
184	C4hs	N-25°-E	方形	1.31×1.27	39	外傾	平坦	人為	土葬器12, 須恵器10	
196	B3ie	N-20°-E	[長方形]	[2.16×1.04]	35	外傾	平坦	人為	土葬器9, 須恵器5, 磁器2, 鉄製品3	SI-35→本跡
197	B3hr	N-16°-E	[長方形]	[2.33×1.31]	39	外傾	平坦	人為	土葬器8, 須恵器8, 陶器1, 磁器2	SI-36, SK-164 →本跡
198	B3hr	N-15°-E	長方形	3.87×0.86	21	垂直	平坦	人為		
199	B3ie	N-18°-E	長方形	4.17×1.01	22	垂直	平坦	人為	土葬器5, 陶器1	
200	B3ie	N-75°-W	長方形	1.89×0.91	17	外傾	平坦	人為		
207	B3hs	N-17°-E	長方形	2.65×0.71	34	垂直	平坦	人為		
223	C4is	N-23°-E	長方形	1.58×0.78	32	外傾	平坦	人為	土葬器2, 須恵器1, 陶器1	
238	C3ds	N-16°-W	[長方形]	[2.13×1.10]	20	外傾	平坦	人為	土葬器8	SK-243→本跡
298	B4br	N-26°-E	[長方形]	[2.00×1.08]	6	外傾	平坦	人為	土葬器4, 須恵器2	SI-45→本跡
320	D3is	N-21°-E	[長方形]	[2.86×0.90]	35	垂直	平坦	人為	土葬器19, 須恵器10, 陶器4,	SK-325→本跡
323	D3is	N-67°-W	長方形	2.10×0.78	24	垂直	平坦	人為	磁器2, 鉄製品2	SK-322
325	D3is	N-21°-E	[長方形]	[1.22×0.84]	31	垂直	平坦	人為		本跡 →SK-320, 326
326	D3hs	N-21°-E	[長方形]	[1.54×0.96]	29	垂直	平坦	人為		SK-325→本跡 →SK-327
327	D3hs	N-21°-E	[長方形]	[1.76×0.52]	30	垂直	平坦	人為		SK-326, 331 →本跡
328	D3hs	N-21°-E	[長方形]	[2.06×0.54]	34	垂直	平坦	人為		SK-329→本跡, SK-330
329	D3hs	N-21°-E	[長方形]	[1.44×0.66]	-	垂直	平坦	人為		SK-330, 本跡 →SK-328
330	D3hs	N-64°-W	[長方形]	[1.14×0.84]	36	垂直	平坦	人為		SK-333→本跡, SK-328, 329

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係 新旧関係(古-新)
				長径(m)×短径(m)(a)	厚さ(m)					
331	D3hs	N-21°-E	[長方形]	(2.00×0.80)	33	垂直	平坦	人為		SK-334, 335, 本跡 →SK-327
332	D3hs	N-21°-E	[長方形]	(1.90×0.64)	41	垂直	平坦	人為		SK-333, 336 →本跡
333	D3hs	N-21°-E	[長方形]	(1.22×0.44)	—	垂直	平坦	人為		本跡 →SK-330, 332
334	D3hs	N-21°-E	[長方形]	(2.76×0.52)	—	垂直	平坦	人為		SK-331, 本跡 →SK-335, 337
335	D3hs	N-21°-E	[長方形]	(1.98×0.56)	39	垂直	平坦	人為		SK-334→本跡, SK-331, 337
336	D3gs	N-21°-E	[長方形]	(0.78×0.56)	41	垂直	平坦	人為		本跡 →SK-332, 339
337	D3gs	N-21°-E	[長方形]	(1.18×0.58)	66	垂直	平坦	人為		SK-334→SK-335, 本跡→SK-341
338	D3gs	N-21°-E	[長方形]	(1.42×0.32)	—	垂直	平坦	人為		SK-336→本跡 →SK-339
339	D3gs	N-21°-E	長方形	2.40×0.66	82	垂直	平坦	人為		SK-336, 339, 340→本跡
340	D3gs	N-21°-E	[長方形]	(1.84×1.18)	33	垂直	平坦	人為		本跡→SK-339
341	D3gs	N-21°-E	[長方形]	(2.96×0.92)	88	垂直	平坦	人為		SK-337, 343 →本跡
342	D3fs	N-21°-E	長方形	2.22×0.88	66	垂直	平坦	人為		SK-343→本跡
343	D3fs	N-65°-W	[不整形長方形]	(1.56×0.64)	52	垂直	平坦	人為		本跡 →SK-341, 342
344	D3fs	N-21°-E	[長方形]	(2.48×0.94)	81	垂直	平坦	人為		SK-345→本跡
345	D3fs	N-21°-E	[長方形]	(2.38×0.52)	84	垂直	平坦	人為		SK-346, 本跡 →SK-344
346	D3fs	N-60°-W	[不整形長方形]	(1.62×0.86)	85	外傾	凹凸	人為		SK-345, 本跡 →SK-347, 348
347	D3es	N-6°-W	[不整形長方形]	(2.00×1.40)	56	垂直	平坦	人為		SK-346→本跡
348	D3es	N-63°-W	長方形	1.54×0.68	37	垂直	平坦	人為		SK-346→本跡

表13 粘土採掘坑, 粘土貯蔵土坑一覽表(第198図)

◎印は本文中に記述

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係 新旧関係(古-新)
				長径(m)×短径(m)(a)	厚さ(m)					
136	C3bs	N-81°-W	楕円形	2.78×1.30	—	—	—	人為	土罫器2, 須恵器1	SD-17→本跡
◎139	B3ds	N-35°-W	不定形	6.88×5.08	98	外傾	平坦	人為	土罫器180, 須恵器117	
◎186	C4as	N-80°-E	不定形	2.64×1.32	65	外傾	凹凸	人為	土罫器4, 須恵器4	
305	B3ds	N-79°-E	楕円形	1.96×0.98	—	—	—	人為		
◎306	A3bs	N-52°-E	不定形	(3.66×2.47)	80	外傾	平坦	人為	土罫器111, 須恵器49	

表14 その他の土坑一覽表(第200-204図)

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係 新旧関係(古-新)
				長径(m)×短径(m)(a)	厚さ(m)					
4	E4gs	N-53°-W	楕円形	0.75×0.55	50	緩斜	皿状	人為		
5	E4es	N-75°-E	楕円形	0.82×0.61	22	外傾	凹凸	人為	土罫器5, 陶器1	SK-8
7	F4ar	N-12°-W	楕円形	1.01×0.78	26	緩斜	凹凸	人為		
8	E4es	N-52°-W	楕円形	0.79×0.66	16	緩斜	平坦	人為		SK-5
12	E4js	N-41°-E	楕円形	1.01×0.75	45	緩斜	皿状	人為		
13	E4is	N-62°-W	不整形楕円形	1.05×0.78	40	緩斜	皿状	人為		
15	E4hs	N-11°-W	不整形楕円形	2.35×1.38	19	外傾	平坦	人為		
24	E4hr	N-15°-E	不定形	1.63×0.97	37	緩斜	凹凸	人為		
25	E4gr	N-29°-E	楕円形	0.77×0.63	11	外傾	平坦	人為		
26	E4hs	N-46°-W	不整形楕円形	1.35×1.14	11	外傾	平坦	不明		

土坑 番号	位置	長短方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係 新旧関係(古→新)
				長径(m)×短径(m)	高さ(m)					
35	E4js	N-96°-W	[不整楕円形]	[0.72×0.66]	86	緩斜	皿状	人海	土師器1, 須恵器1, 鉄滓	
36	F4bs	N-39°-E	不整楕円形	1.46×1.04	100	外傾	平坦	人海		SD-1, 11B →本誌
40	E4js	N-78°-E	楕円形	1.46×1.25	81	外傾	平坦	人海	土師器2	
49	E4ds	N-65°-W	[楕円形]	[1.75×1.50]	38	緩斜	平坦	人海		
50	E4es	N-59°-W	不整楕円形	0.98×0.67	74	垂直	平坦	人海	土師器3, 須恵器2, 陶器5	本誌→SD-3
54	E4cs	N-77°-W	[隅丸長方形]	[1.22×0.96]	58	緩斜	皿状	人海		
57	E3ds	N-0°	円形	0.70×0.70	24	緩斜	皿状	人海	土師器1	
65	F3as	N-84°-E	楕円形	0.82×0.58	21	外傾	平坦	人海		
66	F2es	N-4°-W	円形	0.78×0.78	21	緩斜	平坦	自然	土師器6	
67	F2es	N-15°-W	円形	0.82×0.76	26	緩斜	皿状	人海		
68	F2fr	N-0°	不整楕円形	0.82×0.72	56	外傾	平坦	人海	土師器3	
69	F2es	N-74°-W	楕円形	1.12×0.92	60	外傾	平坦	人海	土師器3	
70	F2es	N-52°-E	不整楕円形	0.85×0.76	26	外傾	皿状	人海		
71	F2ca	N-78°-W	楕円形	1.34×1.14	42	緩斜	皿状	人海	土師器3	
72	F2ca	N-10°-W	不整楕円形	0.84×0.78	32	緩斜	皿状	人海		
73	F2cs	N-42°-W	楕円形	3.60×2.68	96	外傾	平坦	人海	土師器3, 縄文土器102	
75	E2js	N-85°-W	楕円形	0.68×0.44	35	緩斜	皿状	人海		
76	F2as	N-50°-E	楕円形	1.66×1.14	25	外傾	平坦	人海	土師器3	
77	E2js	N-68°-E	楕円形	1.50×1.18	30	外傾	平坦	人海	土師器12, 縄文土器9	
79	G3ca	N-12°-E	楕円形	0.64×0.57	22	緩斜	皿状	自然	土師器2	
80	G3cs	N-26°-E	円形	0.88×0.80	30	緩斜	皿状	人海		
81	F2gr	N-83°-E	不整楕円形	1.46×1.27	29	外傾	平坦	自然	土師器3, 須恵器18	
89	D4cs	N-25°-E	不定形	(3.67×1.50)	27	緩斜	凹凸	人海	須恵器1	
104	C3he	N-16°-E	不定形	(2.96×1.19)	24	外傾	平坦	人海	土師器11, 須恵器1, 土師質土器1, 磁器2	SI-23
111	C4es	N-25°-W	不整楕円形	1.81×1.48	33	緩斜	平坦	人海	土師器7, 須恵器6	
112	C3es	N-33°-E	楕円形	1.56×0.98	35	外傾	平坦	人海	土師器14, 須恵器1	
118	C4is	N-14°-E	[不整楕円形]	[2.08×1.04]	12	緩斜	平坦	人海	土師器5, 須恵器2, 磁器1	SE-3
120A	C3es	N-87°-E	円形	0.65×0.61	30	外傾	平坦	人海	土師器1, 須恵器1	SK-120 B
121	C3es	N-13°-E	不整長方形	1.88×0.97	16	緩斜	凹凸	人海	須恵器1, 土師質土器1, 陶器1	
122	C3fs	N-25°-W	不整長方形	1.20×0.97	20	外傾	平坦	人海	土師器2	
123	C3fs	N-0°	円形	1.24×1.24	22	緩斜	凹凸	人海	土師器2, 須恵器2, 陶器1	
125	C3ca	N-16°-E	[不整楕円形]	[1.50×1.20]	35	外傾	平坦	人海	土師器5, 須恵器2, 土師質土器1	本誌→SK-126
126	C3ca	N-63°-W	[不整楕円形]	[2.50×1.50]	16	緩斜	平坦	人海	土師器14, 須恵器4	SK-125, 127 →本誌
128	C3bs	N-46°-W	楕円形	2.06×1.73	27	緩斜	平坦	人海	土師器7, 須恵器2	
129	C3bs	N-41°-W	不整楕円形	1.44×1.18	32	緩斜	皿状	人海	土師器4, 須恵器1, 土師質土器1, 磁器2	
131	C3bs	N-76°-E	[楕円形]	[1.34×1.19]	19	緩斜	平坦	人海		SB-4→本誌
132	B3gs	N-70°-W	楕円形	1.02×0.92	44	緩斜	皿状	人海	土師器5	
134	B3cs	N-21°-W	[不整楕円形]	[3.70×3.28]	20~24	垂直	平坦	人海	土師器1, 須恵器1, 磁器1, 尖頭器1	SI-51→本誌
140	C3cr	N-12°-E	不定形	0.94×0.64	17	緩斜	皿状	人海		
145 B	C3ae	N-49°-W	円形	0.83×0.82	38	外傾	平坦	人海	土師器11, 須恵器2	SK-145A→本誌

土坑 番号	位置	長短方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 重複關係 新旧關係(古→新)
				長さ(幅)×高さ(深)(m)	厚さ(m)					
148	C4c	N-68°-W	楕 円 形	1.20×0.60	22	外傾	凹凸	人海		
151B	C3aa	N-60°-W	[円 形]	[1.14×1.06]	30	緩斜	平坦	不明	-	本跡→SK-151 A
155	C4ia	N-87°-W	不 定 形	(1.22×0.85)	18	外傾	凹凸	人海	土師器3、土師質土器2、陶器1	SE-3
158	B3ga	N-11°-W	楕 円 形	1.28×0.89	18	緩斜	凹凸	人海	土師器6、須惠器1	
159	B3ja	N-59°-W	円 形	0.88×0.85	16	緩斜	皿状	人海		
172	C3ba	N-19°-E	長 方 形	4.03×0.86	50	外傾	平坦	人海	土師器3、須惠器4、陶器1、 磁器2	SI-23→本跡
174	C4ca	N-0°	円 形	0.67×0.61	24	緩斜	皿状	人海	土師器2	
176	C4ba	N-68°-E	不 整 長 方 形	1.41×1.29	29	緩斜	平坦	人海	土師器8、須惠器3	
177	C4aa	N-41°-E	不 定 形	0.91×0.49	36	外傾	凹凸	人海	土師器2、須惠器1	
178	C4aa	N-1°-W	楕 円 形	1.30×0.92	9	緩斜	平坦	人海	土師器4、須惠器1	
179	C4aa	N-50°-W	不 整 長 方 形	1.54×1.09	20	緩斜	平坦	人海	土師器8、須惠器2	
183	C4aa	N-28°-E	楕 円 形	2.64×2.07	21	緩斜	平坦	人海	土師器28、須惠器20、土師質 土器5	
190	B3ie	N-41°-E	円 形	0.78×0.75	24	緩斜	皿状	人海		
191	B3gr	N-55°-W	不 整 長 方 形	1.21×0.83	45	外傾	平坦	人海	土師器5、須惠器5	SK-206,246
201	B3ga	N-67°-E	不 定 形	1.57×1.40	35	外傾	平坦	人海	土師器2、須惠器2	
202	B3gs	N-45°-W	楕 円 形	1.25×1.15	32	緩斜	平坦	人海		
203	B3gs	N-54°-E	不 整 長 方 形	1.30×1.23	45	緩斜	平坦	人海	土師器5	
204	B3gs	N-61°-W	不 整 長 方 形	1.31×0.96	70	垂直	凹凸	人海	土師器1、須惠器1	
205	B3he	N-54°-W	楕 円 形	1.45×1.06	50	外傾	平坦	人海	土師器13、須惠器2	
206	B3hr	N-65°-W	不 整 楕 円 形	1.31×1.00	44	外傾	平坦	人海		SK-191
208	C3je	N-23°-E	長 方 形	2.49×0.41	60	垂直	平坦	人海	土師器11、須惠器11、陶器3、 磁器2、鉄製品2	SD-16→本跡
210A	C3fs	N-44°-E	円 形	0.77×0.74	41	緩斜	皿状	人海	土師器8、須惠器5	SK-210 B
228	C3ie	N-25°-E	長 方 形	4.66×0.83	71	外傾	平坦	人海	土師器25、須惠器8、陶器7、 磁器5	SI-23→本跡
234	C3ea	N-90°-W	円 形	1.00×0.94	46	緩斜	皿状	人海	土師器4	
235	C3je	N-16°-E	長 方 形	2.57×0.43	51	外傾	平坦	人海	土師器17、須惠器4、陶器4	SD-16→本跡
237	C4ca	N-0°	円 形	0.88×0.84	22	緩斜	皿状	人海	土師器1	
242	B3fs	N-77°-E	不 定 形	1.09×0.77	31	緩斜	平坦	人海	土師器4、須惠器2	
243	C3ca	N-25°-E	[不 整 楕 円 形]	[2.17×1.82]	20	緩斜	平坦	人海	土師器10、須惠器6	本跡→SK-238
246	B3gr	N-41°-W	[不 整 楕 円 形]	[1.33×1.03]	42	緩斜	平坦	人海	土師器6、須惠器3	SK-191
258B	B3ie	N-37°-W	[円 形]	[0.67×0.65]	42	緩斜	平坦	不明	土師器1、須惠器1	SI-71, SK-258A →本跡
263	B4jt	N-0°	円 形	0.68×0.68	13	外傾	平坦	人海	土師器2	
264	B3fr	N-62°-E	楕 円 形	1.44×1.17	50	外傾	平坦	人海	土師器2、須惠器5	
270A	B3ha	N-63°-W	[方 形]	[0.88×0.80]	32	外傾	平坦	人海	土師器3、須惠器4	SI-36→本跡, SK-270B
270B	B3ha	N-68°-W	[不 整 長 方 形]	[1.35×0.70]	41	外傾	平坦	人海		SK-270A, 271
271	B3ha	N-70°-W	不 整 楕 円 形	1.22×0.92	54	外傾	平坦	人海	土師器2、須惠器1	SK-270 B
273	C3ar	N-63°-W	不 定 形	2.05×1.40	16	緩斜	平坦	人海	土師器1	
274	C3ba	N-13°-W	[不 整 楕 円 形]	[1.64×1.46]	30	緩斜	平坦	人海	土師器3、須惠器4、縄文土器2	SB-4→本跡
275	C3ca	N-38°-W	楕 円 形	0.94×0.75	15	緩斜	凹凸	人海	土師器2、陶器1	
276	B3gr	N-30°-W	円 形	1.05×0.96	50	外傾	皿状	人海	須惠器1	
279	B3is	N-0°	円 形	0.98×0.93	55	外傾	凹凸	人海	土師器3、須惠器3	

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	掘 横		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 重複関係 新田陶器(古→新)
				長径(m)	掘深(m)					
282	B3la	N-3°-E	[不整槽円形]	[0.98×0.68]	29	垂直	皿状	人為		SK-165, 本跡 →SK-173
283	B3da	N-14°-W	円 形	1.20×1.10	19	緩斜	皿状	人為		
284	B3da	N-26°-E	槽 円 形	0.85×0.76	61	垂直	凹凸	人為		
286	B4j	N-12°-W	槽 円 形	0.82×0.63	27	緩斜	皿状	人為	焼けて赤変した雲母片岩 1	SI-42→本跡
290	B3ar	N-61°-E	不 定 形	[2.25×1.95]	68	外傾	凹凸	不明	土師器7, 須恵器 6	SI-54→本跡
292	B2je	N-34°-E	[槽 円 形]	(1.82×1.39)	46	外傾	平坦	人為	土師器11	
295	B4a1	N-18°-E	槽 円 形	0.94×0.85	30	緩斜	皿状	人為		
303	B3da	N-58°-W	槽 円 形	1.16×0.98	10	緩斜	平坦	人為		
308	B3ba	N-5°-W	円 形	0.82×0.75	60	外傾	皿状	人為	土師器2, 須恵器 1	
309	A3ba	N-60°-W	槽 円 形	1.34×1.05	22	緩斜	平坦	人為		
310	A3gr	N-44°-E	槽 円 形	1.08×0.98	21	緩斜	平坦	人為		
311	B3ca	N-48°-W	円 形	0.76×0.74	68	外傾	平坦	人為		
312	A3ea	N-10°-E	不 定 形	2.28×0.69	30	外傾	平坦	人為		
313	A3ea	N-0°	円 形	0.95×0.92	10	緩斜	平坦	人為		
314	A3da	N-90°-W	円 形	1.00×0.94	18	緩斜	皿状	人為	土師器 1	
315	A4dr	N-47°-E	不整槽円形	1.30×1.07	45	緩斜	平坦	人為		
316	A4ea	N-8°-W	不整槽円形	1.25×0.84	27	緩斜	皿状	人為		
317	B3da	N-68°-W	不整槽円形	1.01×0.75	73	垂直	平坦	人為		
318	B3ca	N-49°-W	円 形	0.96×0.88	81	垂直	平坦	人為		
319	B3ca	N-1°-E	槽 円 形	0.99×0.73	76	垂直	平坦	人為		
349	B3fr	N-72°-W	長 方 形	0.77×0.64	47	外傾	平坦	不明		SI-40→本跡
350	B3fa	N-0°	方 形	0.70×0.70	51	外傾	平坦	不明		SI-40→本跡

表15 溝一覧表 (付図, 第206図)

溝番号	中心位置	主軸方向	掘 横				壁面	断面	覆土	出土遺物	備 考 遺構番号 重複関係 新田陶器(古→新)
			長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)					
1	E4dr	N-73°-W	15.37	0.5~1.3	0.2~1.0	13~20	緩斜	∩	人為		SD-2 SK-46
2	E4ea	N-69°-W	(5.99)	(0.2~1.0)	(0.1~0.7)	(25)	緩斜	∩	不明		SD-3 SK-50
3	E4ca	N-77°-W	7.66	0.7~1.1	0.3~0.6	8~18	緩斜	∩	人為		SD-4
4	E3ba	N-80°-W	14.40	(0.4~1.0)	0.3~0.9	24~40	緩斜 垂直	∩ L	自然	土師器2, 須恵器1, 磁器1	SD-7
5	E3ga	N-2°-W N-7°-W N-23°-W N-29°-W N-54°-W	[35.00]	(0.8~1.6)	(0.1~0.8)	(7~20)	緩斜	∩	人為	土師器30, 須恵器10, 土師質土器1, 陶器5	SD-8 SI-9, 10, SE-2, SK-38→本跡 →SD-1
6	E4di	N-8°-E	(11.64)	1.1~1.9	0.7~1.3	21~30	緩斜	∩	人為		SD-9 SK-61, 63
7	F4ca	N-66°-W	(21.40)	1.6~2.0	0.3~0.6	30~46	緩斜	∩	自然	土師器12, 須恵器4, 磁石1, 陶器1, 磁器1	SD-11A SD-11B, 11C, SI-14B→本跡
8	F4dr	N-73°-W N-28°-E	(40.08)	0.7~1.4	0.2~0.6	15~45	緩斜	∩	人為		SD-11B SK-36, SD-11A, 11E, 本跡→SD-1

溝番号	中心位置	主軸方向	規 模				壁面	断面	覆土	出土遺物	備 考	
			長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					遺構番号	重複関係 新旧関係(古→新)
9	F4dz	N-76°W N-10°E	(28.00)	0.5~1.6	0.2~0.6	-	緩斜	∪	不明		SD-11C	SD-11A, 11E, 本跡→SD-10
10	F4dz	N-11°E	(19.32)	0.7~1.3	0.6~0.9	92	外傾	∪	人為	土師器2	SD-11D	SD-11E, 本跡→SD-10
11	F4fs	N-64°W N-81°W	[27.10]	0.7~1.5	0.4~0.9	-	外傾	∪	不明		SD-11E	SD-11B, 11C, 11D, SF-14A, 15 →本跡
12	D3ec	N-70°W	9.54	0.3~0.7	0.1~0.3	4	緩斜	∪	不明		SD-12	
13	C4gt	N-73°W	(2.88)	0.3~0.4	0.1~0.2	4	緩斜	∪	不明		SD-13	SK-105
14	C3cr	N-13°E	5.57	(0.8~1.1)	0.7~1.0	5~14	緩斜	∪	人為		SD-14	本跡 →SK-141, 236
15	C3fs	N-9°W	3.96	0.5~1.2	0.1~1.1	12~20	緩斜	∪	人為		SD-15	
16	C3iz	N-75°W	18.30	(0.4~0.7)	0.2~0.4	17~25	緩斜	∪	自然	土師器26, 須 恵器11, 漆1, 磁器2, 鉄製 品1, 土玉1	SD-16	本跡 →SK-208, 235
17	C3bs	N-50°E	9.80	(0.7~1.8)	0.4~1.7	8~17	緩斜	∪	人為	土師器1, 須恵器2	SD-17	本跡 →SK-136, 137
18	B3m4	N-70°W	2.28	0.4~0.9	0.3~0.4	7	緩斜	∪	不明		SD-18A	
19	A3js	N-71°W	5.42	0.4~0.9	0.2~0.4	13	緩斜	∪	人為	土師器1	SD-18B	
20	A3ji	N-71°W	(3.00)	(0.8~0.9)	(0.5)	(14)	緩斜	∪	人為		SD-18C	

表16 堀一覽表(付図, 第207図)

堀番号	中心位置	主軸方向	規 模				壁面	断面	覆土	出土遺物	備 考	
			長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					遺構番号	重複関係 新旧関係(古→新)
1	F4az	N-88°W	(55.48)	1.6~2.4	0.2~0.7	90~120	外傾	∪	人為	土師器110, 須 恵器77, 土師 黄土器1, 陶器 2, 磁石1	SD-1	SI-11, SK-38, SD-8, 11B, 11C→本跡→ SK-36, SF-1
2	G3br	N-23°E N-75°E N-78°W	(77.40)	1.9~2.6	0.4~1.8	94~124	外傾	∪	人為	土師器110, 須恵器51, 土師黄土器 19, 瓦葺土 器1, 陶器1, 縄文土器1	SD-5	SI-5→本跡
3	F4gt	N-61°W N-81°W	(34.12)	0.9~0.7	0.2~0.5	60~105	外傾	∪	人為	土師器12, 須 恵器3, 土師黄 土器2, 陶器2, 土師粉押車1	SD-10	SI-15, SD-11C, 11D→本跡

表17 道路状況遺構一覽表(付図, 第208図)

道路番号	中心位置	主軸方向	規 模				壁面	断面	覆土	出土遺物	備 考	
			長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					遺構番号	重複関係 新旧関係(古→新)
1	F3js	N-7°W N-18°W N-25°W	(41.80)	1.6~2.7	0.3~0.5	30~32	緩斜 外傾	∪	人為	人骨(骨)1, 漆骨, 土師器47, 須 恵器25, 土師黄土 器5, 瓦葺土 器4, 磁器2	SF-1	SD-1→本跡

第4節 まとめ

当遺跡からは、旧石器時代から近世までの遺構と遺物が検出され、これまでの先人の生活の一端について少なからず解明することができた。ここでは、時代ごとに調査の結果を記述し、まとめとする。

1 旧石器時代から弥生時代までの遺物について

当遺跡からは、旧石器時代の石器（ナイフ形石器、尖頭器、スクレイパー、剥片）、縄文時代の土器片と石器（石鏃、石斧、磨石）、弥生時代の土器片が出土していることから、当遺跡は長い時代を通じて、人々の生活と何らかのかかわりのあった場所であることがうかがえる。これらの遺物は、表採または他の時代の遺構に混入していたもので、この時代の遺構は確認できなかった。また、これらの遺物は調査A区から数多く出土したもので、特に調査A区中央部から西側の谷に向う斜面部で顕著であった。

この斜面の一部で、旧石器時代の石器採集地点の調査（付図参照）を行ったものの、ナイフ形石器1点と数点の剥片以外は縄文土器片が出土したのみで、遺構確認面から1m以上掘り下げた褐色土の中から縄文土器片が出土することから、石器類はこの西側斜面部一帯に流れ込んでいたと考えられる。

縄文土器片は、縄文時代早期から後期までのものが出土している²¹。特に、調査A区の旧石器の調査地点や西側の斜面部からは、前期後葉の興津式土器片が多量に出土していることから、遺構が存在した可能性もあるが、耕作等による擾乱のため確認することができなかった。第73、75号土坑からは興津式土器片が出土したが、覆土下層から土器片も一緒に出土している。

弥生土器片は、細片が数点出土しているだけで、遺構の確認はできなかったが、出土地点が縄文土器片の出土した場所より東側の台地上の奥に位置することから、生活圏が変化していたことも考えられる。なかでも第14A号竪穴住居跡（古墳時代前期）の覆土中から出土した弥生土器片のうちの一片は、南関東系の壺の胴部片である。この竪穴住居跡から出土しているいくつかの土器器変が、南関東系の土器であることから、関連性があるものと思われ、当時の人々の交流や影響力が広範囲に及んでいたことが推測される。

2 古墳時代から平安時代までの集落変遷（第221、222図）

当遺跡からは、古墳時代の竪穴住居跡17軒、奈良時代の竪穴住居跡29軒、平安時代の竪穴住居跡26軒、奈良から平安時代と思われる竪穴住居跡4軒を検出した。そこで、出土遺物と住居跡の重複関係をもとに、時期の明確な72軒を4期に区分して、各期ごとの集落の変遷について検討することにする。

○I期 古墳時代前期・中期（4世紀～5世紀）

第2、5、9、10、11、12、14A、14B号竪穴住居跡で、ほとんど調査A区中央部のやや北側から東側にかけて検出されている。住居跡の主軸方向はN-10°-50°-Wの範囲であるが、特にN-30°-50°-Wの範囲の竪穴住居跡が多く、若干の規則性がある。平面形は方形または隅丸方形がほとんどで、規模は第11号竪穴住居跡の48㎡を最大として、大・中形の住居跡である²²。第9、10、11、12号のように、大形住居跡2軒と中形住居跡2軒が1単位と考えられる。

○II期 古墳時代後期（6世紀～7世紀）

第15、16、20、23、25、29、32、37、73号竪穴住居跡で、ほとんど調査B区の南部から検出されている。住居跡の主軸方向はN-0°-23°-Eの範囲で、東寄りの主軸を持っており、若干の規則性が認められる。平面形は長方形または隅丸長方形がほとんどで、規模は第23号竪穴住居跡の46㎡を最大とするが、第20、25、

29, 32, 37, 73号竪穴住居跡のような小形の住居跡が中心で、前期よりも小形化が進んでいることがわかる。

○III期 奈良時代（8世紀）

第3, 4, 8, 17, 19, 21, 26, 28, 31, 33-36, 38, 40, 42, 44, 45, 47, 50, 52, 54-56, 58, 63, 66, 69, 75号竪穴住居跡は、3軒を除いて、調査B区の全域から検出されている。人口の増加によって住居跡の数も増加していると考えられる。特に、8世紀中葉の第36, 38, 40, 47, 52, 56, 58, 63号竪穴住居跡は調査B区の北側に検出され、住居跡が集中していることがわかる。住居跡の主軸方向はN-10°-W～N-34°-Eの範囲で、2軒を除いて東寄りの主軸を持っている。特に、N-0°-20°-Eの範囲に23軒の住居跡が主軸を持っていることから、規則性が認められる。平面形は方形または隅丸方形がほとんどで、規模は第35, 58, 63号竪穴住居跡の30㎡を最大とするが、69%が小形の住居跡である。そのうち、規模が小さい11-15㎡の住居跡が14軒あり、この時期の48%を占めていることから、前期よりも一層小形化が進んでいることがわかる。さらに、8世紀中葉から後葉にかけては、第19, 21号竪穴住居跡のような小形同士の住居跡、または第56, 58号竪穴住居跡のような小形と大形の住居跡といった、2軒を1単位とする配置が考えられる。

○IV期 平安時代（9世紀～10世紀前葉）

第1, 6, 7, 18, 27, 30, 39A, 39B, 41, 43, 46, 48, 49, 51, 53, 57, 59, 60, 61, 62, 65, 67, 68, 70, 71, 77号竪穴住居跡のうち、調査A区の中央西部寄りから3軒、調査B区の全域から23軒が検出されている。特に、9世紀前葉の第48, 49, 57, 59, 60, 62, 65, 71, 77号竪穴住居跡や、中葉の第39A, 39B, 41, 43, 51, 70号竪穴住居跡は、調査B区の中央部から北部に集中している。また、後葉の第18, 27, 46, 61, 67号竪穴住居跡は東寄りに南北に広く分散している。住居跡の主軸方向はN-58°-W～N-33°-Eの範囲で、1軒を除いて東寄りの主軸を持っている。特に、N-4°-29°-Eの範囲に20軒の住居跡が主軸を持っていることから、若干の規則性が認められる。平面形は方形または隅丸方形が約70%で、規模は第1号竪穴住居跡の26㎡を最大とするが、85%が小形の住居跡である。小形化はさらに進んでいる。

以上のように、当遺跡の集落は、4世紀初めに形成され、8世紀中葉から9世紀中葉の間にそのピークを迎え、後に分散していく傾向がうかがえる。10世紀前葉以降の集落の変遷については、資料が乏しいことから、今後の調査に期待したい。

3 中世から近世までの変遷について

当遺跡は、中世から近世にかけては、主に中・近世の墓域、中世城郭の関連施設としての役割を担っていたと考えられる。ここでは調査結果から、その視点を述べることにする。

①調査区内の墓域について

調査A区の北側に広がる、7条の溝で区画された地域からは、墓域と考えられる土坑45基、地下式墳4基、火葬施設1基、方形竪穴状遺構2基、井戸1基を検出している。遺物は、遺構に伴わないものも含めると、陶磁器片（常滑、瀬戸・美濃系の擂鉢等の陶器、北関東系の磁器、中国陶器等）、土師質土器（皿、擂鉢等）、古銭。人骨片等が出土している。

墓域と考えられる土坑は、墓域の中央部南側に多くが集中している。形態としては、楕円形を呈する土坑（25基）、円形を呈する土坑（7基）、方形を呈する土坑（13基）である。土坑からは人骨は出しておらず、遺物も少ないため、時期判断は困難である。しかし、第37号土坑から古銭（紹豊元寶）が、第44号土坑から常滑片が、第60号土坑から骨片が出土しており、中世から近世の墓域の可能性が高い。また、第17B号土坑や第17E号土坑のように、北側にピットを伴う土坑も確認されており、このピットは墓標を建てるためのものではない

かと考えられる。

地下式墳は、墓域を区画する溝に沿って、東側、南側、西側からそれぞれ検出された。遺物は少なく、時期判断は難しいが、土師質土器片（皿）、常滑片が出土している。さらに、隣接した場所に火葬施設が位置していることもあり、貯蔵庫として使用されたのではなく、埋葬を目的としたものと考えられる。

火葬施設は、墓域の中央部や北側から、地下式墳に隣接して検出された。これまでの茨城県の場合では、当財団で調査、報告された柴崎遺跡⁹³、三本松遺跡⁹⁴などにみられる。これは、千葉県北部地域においては「T字状（形）火葬墓（施設）」と呼称されているものであり、千葉県印旛都市文化財センターの林田利之氏によって、「燃焼坑転用墓」の名称で報告されている⁹⁵ものと同様の遺構である。いずれも人骨、多量の焼土、炭化材が出土しており、古銭等の副葬品と考えられる遺物を伴う例も見られる⁹⁶。当遺跡の例は、小規模のものであり、複数回の使用はなされていない。

このように、地下式墳と火葬施設が隣接していること、土坑群とは少し離れた位置に構築されていることから、この地域は墓域として意図的、機能的に配置されていると考えられる。笹生衛氏によれば、東国においては14～15世紀にかけて、「土坑墓が中心となり、火葬土坑・地下式墳が一部で伴う」土豪層主導型墓域。または同施設を伴う上層農民主導型集団墓が形成されるとしている⁹⁷。当遺跡では、石塔や板碑は出土していないが、隣接した墓域には16世紀頃の五輪塔がいくつか集められている。また、「常陸国筑波郡酒丸村田野井村与新治郡苧間村并同郡平塚村三方野論且筑波郡高田村酒丸村訴訟裁許之條々」の判決絵図（貞享5年、1688年）（第223図）⁹⁸によると、今回の調査A区隣りにお堂（祠や社の可能性もある）の印が描かれており、これらの事象は当遺跡の墓域と関連があるものと推測される。

また、調査B区では、直径約1mほどの円形の土坑群が広がっており、陶磁器片や古銭（紹聖元寶）が出土している。土坑は第16号溝の北側中央部に特に集中しており、さらに東側に広がっている。土坑の形態や出土遺物から、座棺による埋葬をした墓域の存在が裏付けられると思う。

②苧間城の関連施設

当遺跡では、中世の薬研堀と考えられる堀を3条ほど調査A区から検出している。遺物は、土師質土器片（皿、内耳鍋、焙烙鍋）が出土している。これは、中世末期に当地に所在したといわれている、苧間城の施設の一部ではないかと思われる。前述した「貞享5年の古地図」には、当遺跡北側約50mと南側約20mの地に「本屋敷」という地名が書かれており、双方に中世城郭の方形区画のような堀が巡っている。そして、二つの「本屋敷」の間には当遺跡の所在する台地があり、水田が入り込んで北側の本屋敷と2分されている。このような離れた台地上を利用した中世城郭としては、つくば市寺具にある本多陣屋にその跡が残っている⁹⁹。

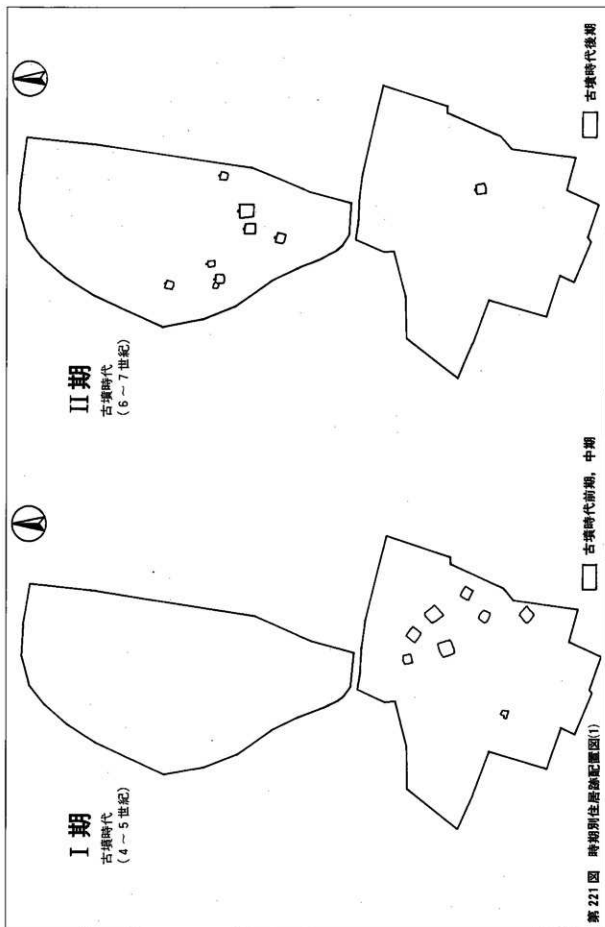
また、掘立柱建物跡の配置状況を考えてみると、8棟は調査B区の台地縁部に位置し、うち5棟は台地から斜面を望むような形で、南北1列に並んでいる。これは古地図には記載されていない。よって、構築時期は、8棟すべてが同時期であるかどうかは不明であるが、平安時代以降、特に中世に構築された可能性が高く、その一部は苧間城に関連した施設ではないか考えられる。

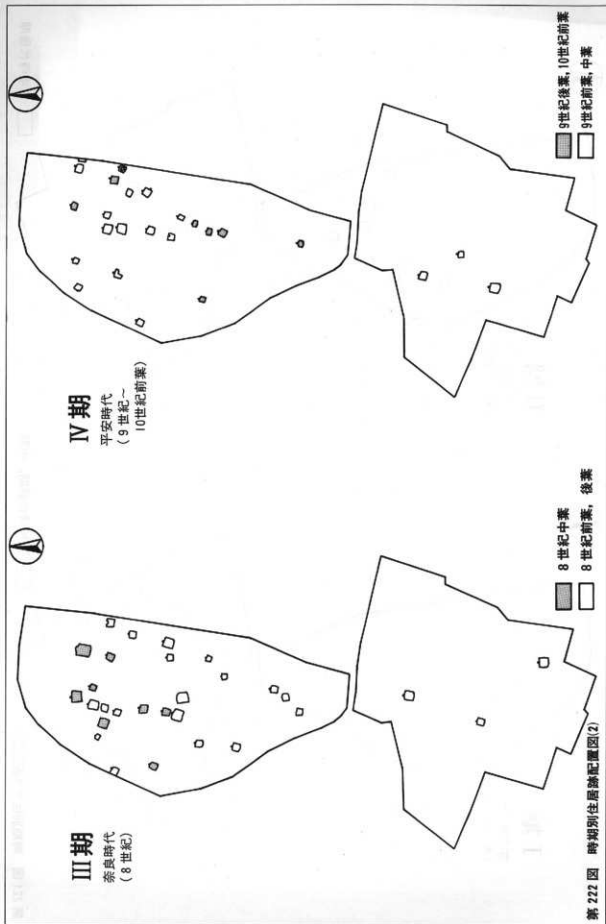
今回の調査で、今まであまり明らかにされてこなかった当地の変遷について、具体的な資料の収集と検討がなされることとなった。しかし、神田遺跡の全容については、未だ不明な点が多く、資料の裏付けについても不十分な点が多い。今後の資料や類例の増加、周辺遺跡の調査の結果に期待し、改めて考えていかなければならないと思われる。

註・参考文献

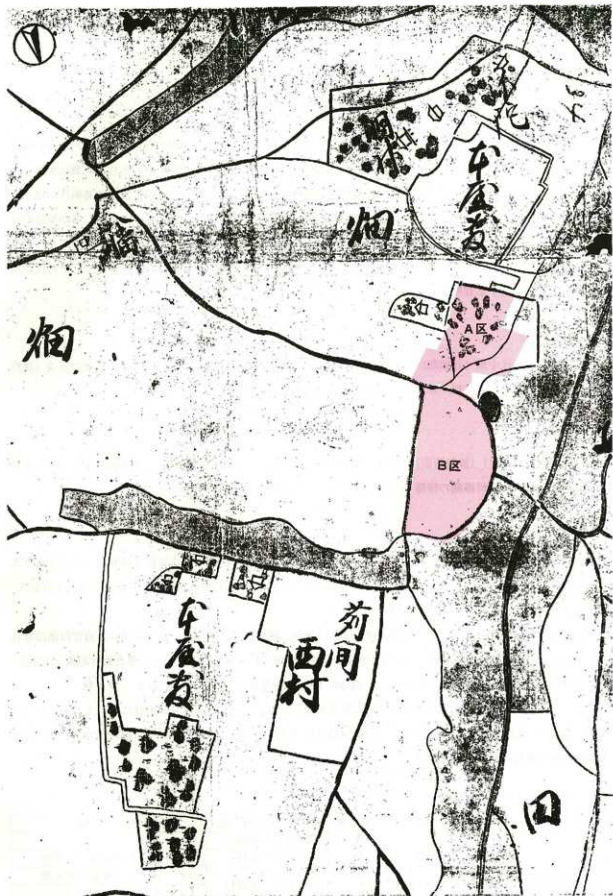
- (1) 茨城県立歴史館の斎藤弘道氏の土器編年による。
- (2) 竪穴住居跡の大きさを、30㎡以上を大形、30㎡未満20㎡以上を中形、20㎡未満を小形とした。
- (3) 茨城県教育財団 「研究学園都市計画桜葉崎土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 (IV) 桜葉遺跡」
『茨城県教育財団文化財調査報告第93集』 1994年9月
- (4) 茨城県教育財団 「一般国道354号(水海道バイパス)道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 三本松遺跡ほか」
『茨城県教育財団文化財調査報告第114集』 1996年6月
- (5) 東都自動車株式会社、財団法人印旛都市文化財センター 「駒井野荒迫遺跡」 「財団法人印旛都市文化財センター発掘調査報告書 第64集」 1992年3月
- (6) 千葉県成田市野毛平高台遺跡、同四街道市和良比遺跡。
- (7) 千葉県教育庁文化課の笹生衛氏から、『東国中世墓城の類型と変遷』についての御指導と、本墓城の土壌墓、地下式墳、火葬施設の形成時期について御教示を戴いた。
- (8) つくば市高田の根本寛氏、同西平塚の中島耕太郎氏所有。地図に関する資料は、つくば市教育委員会社会教育部文化財課の中根正明氏に御協力を戴いた。
- (9) 筑波町史編纂専門委員会 『筑波町史 上巻』 1988年9月

- ・浅井哲也 「茨城県内における奈良・平安時代の土器 (I)」 『研究ノート 創刊号』 茨城県教育財団 1992年7月
- ・浅井哲也 「茨城県内における奈良・平安時代の土器 (II)」 『研究ノート 2号』 茨城県教育財団 1993年7月
- ・櫻村直行 「茨城県南部の鬼高式土器について」 『研究ノート 2号』 茨城県教育財団 1993年7月
- ・斎藤 弘 「中世墓地景観の一事例」 『研究紀要 第2号』 栃木県文化振興事業団 埋蔵文化財センター 1994年3月
- ・龍ヶ崎市教育委員会 「龍ヶ崎の中世城郭跡」 1987年3月
- ・千勝義重 「葛城村史」 1912年5月 (復刻版1990年3月)





第222圖 時期別住居跡配置圖(2)



第 223 図 『常陸国筑波郡酒丸村面野井村与新治郡刈間村并同郡平塚村三方野論且筑波郡高田村酒丸村
 訴論裁許之條々』の判決絵図

付 章

神田遺跡から出土した炭化材の樹種

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

茨城県では、これまでに多くの遺跡で古墳時代の住居構築材について樹種同定が行われてきた。その結果、つくば市・牛久市・岩井市・水海道市と茨城町の各遺跡ではクヌギ節・コナラ節を中心とした落葉広葉樹が多く認められている。一方、北浦北岸にあたる銚田町の遺跡ではアカガシ亜属等の暖温帯常緑広葉樹林の構成種が確認されている。この結果から、沿海地と内陸部で樹種構成が異なっていた可能性があるが、その境界地域などに関する詳細は不明である。

本報告では、神田遺跡から出土した古墳時代中期（五領期）の住居構築材の樹種を明らかにし、その住居構築材の用材選択に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、古墳時代中期（五領期）の第14 A号住居跡から出土した住居構築材と考えられる炭化材5点（試料番号A～E）である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

2. 方法

木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作成し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。試料番号Cには2種類が認められた。試料は、広葉樹2種類（ハンノキ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節）とイネ科タケ亜科に同定された（表1）。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・ハンノキ属（*Alnus* sp.） カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に2～4個が複合または単独、横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は密に対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1～30細胞高のもの集合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.） ブナ科

環孔材で孔圍部は1～3列、孔圍外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のもの複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。

表1 炭化材の樹種同定結果

遺構名	時代・時期	試料番号	出土位置	用途	樹種
第14 A号住居跡	古墳時代（五領期）	A	住居中央部	柱材	ハンノキ種
		B	住居東部	柱材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C	住居北部	屋根材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節 イネ科タケ亜科
		D	住居西部	柱材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		E	住居南部	柱材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

・イネ科タケ亜科 (Gramineae subfam. Bambusoideae sp.)

織管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱をもつ。

タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

4. 考察

柱材と考えられる炭化材4点はクヌギ節3点、ハンノキ属1点であった。また屋根材は、クヌギ節とタケ亜科であった。このことから、柱材はクヌギ節を中心とし、ハンノキ属も少数使用されていたことがうかがえる。屋根材とされる試料番号Cにはクヌギ節とタケ亜科の2種類が確認されたが、本住居跡ではクヌギ節が主に柱材に使用されていることなどを考慮すれば、構築材の一部が混じったと考えられる。屋根材には、基本的にタケ亜科を使用していたことが推定される。

古墳時代の住居構築材については、県内でも多くの遺跡で樹種同定が行われている（バリノ・サーヴェイ株式会社, 1986 a, 1986 b; 未公表資料）。これらの結果では、つくば市・牛久市・岩井市・水海道市や茨城町等の台地上に位置する遺跡でクヌギ節・コナラ節が多い。その点では、今回の結果はこれまで得られてきた結果と調和的である。一方沿海地では、古墳時代の資料は少ないが、アカガシ亜属などの暖温帯常緑広葉樹林の構成種が比較的多い。同様の傾向は、千葉県や神奈川県沿海地と内陸部の遺跡でも確認されている。この背景には、花粉分析結果などとの比較から植生の違いがあったと考えられている（高橋・植木, 1994）。茨城県では、炭化材の同定結果から種類構成の違いを明らかにしてはいるが、花粉分析などによる古植生の調査を行った例は少ない。今後は花粉分析などによる古植生復元もあわせて行っていく必要がある。

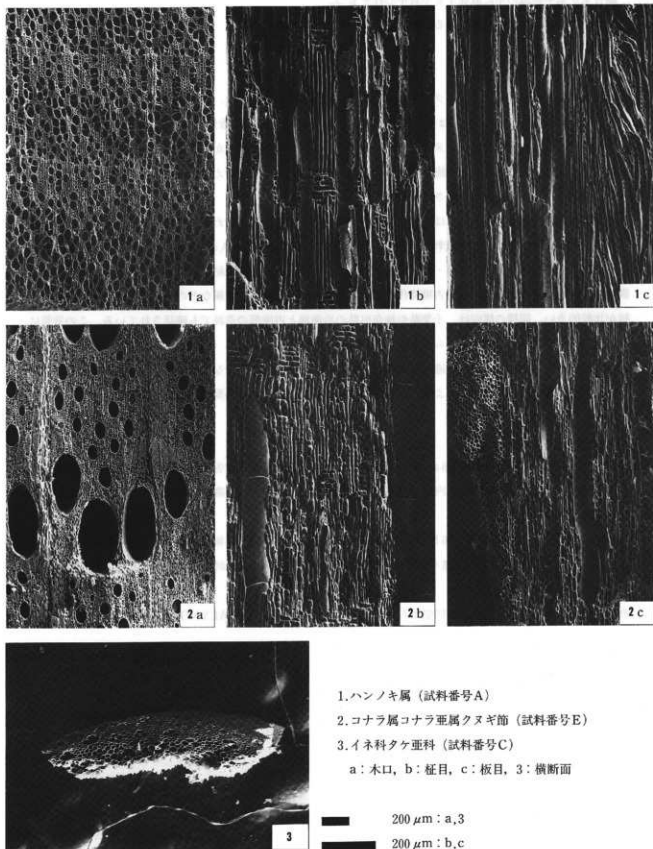
<引用文献>

バリノ・サーヴェイ株式会社 (1986 a) 奥山A遺跡出土試料 炭化材同定報告。茨城県教育財団文化財調査報告第31集「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2」, p.239-240, 財団法人茨城県教育財団。

バリノ・サーヴェイ株式会社 (1986 b) 西原遺跡出土試料 種子及び材同定報告。茨城県教育財団文化財調査報告第31集「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2」, p.241-243, 財団法人茨城県教育財団。

高橋 敦・植木真吾 (1494) 樹種同定からみた住居構築材の用材選択。PALYNO, 2, p.5-18.

図版1 炭化材



1. ハンノキ属 (試料番号A)
2. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (試料番号E)
3. イネ科タケ亜科 (試料番号C)

a : 木口, b : 柁目, c : 板目, 3 : 横断面

200 μm : a, 3
200 μm : b, c